

† ボンゴレ雲の守護者 † 雲雀さん（憑依）

ふあもにか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、↑孤高の浮き雲↑こと雲雀恭弥さんに凡人が憑依したことで始まる物語。

原作を良く知る凡人が憑依した雲雀さんの心情と表面との落差を楽しむ系の物語。

見た目や実力は強キャラ感が凄まじいけれど、中身は凡人の憑依者ってノリです。

## 目次

日常編を咬み殺す

風紀1. †方針を決めて風紀を守ろう† | 1

風紀2. †料理を学んで風紀を守ろう† | 7

風紀3. †すやすやお昼寝で風紀を守ろう† | 15

風紀4. †誕生日を祝って風紀を守ろう† | 22

風紀5. †毒を喰らって風紀を守ろう† | 30

風紀6. †爆破オチでも風紀を守ろう† | 36

風紀7. †総大将を逃がして風紀を守ろう† | 46

風紀8. †誕生会に出席して風紀を守ろう† | 54

風紀9. †唐突に入院して風紀を守ろう† | 63

風紀10. †変質者から逃げて風紀を守ろう† | 71

風紀11. †桜舞い散る中で風紀を守ろう† | 80

風紀12. †海を満喫して風紀を守ろう† | 88

黒曜編を咬み殺す

風紀13. †Re：方針を決めて風紀を守ろう† | 96

風紀14. †堂々たる殴り込みで風紀を守ろう† | 103

風紀15. †会話フェイズで風紀を守ろう† | 110

風紀16. †幻想殺して風紀を守ろう† | 117

風紀17. †運命的な邂逅で風紀を守ろう† | 126

V S ヴァリアー編を咬み殺す

風紀18. †家庭教師と対面して風紀を守ろう† | 133

風紀19. †ダイジェストな修行で風紀を守ろう† | 142

風紀20. †混乱中の思考でも風紀を守ろう† | 150

風紀21. †手合わせをして風紀を守ろう† | 157

風紀 2 2. †後を託されて風紀を守ろう† | 166

風紀 2 3. †夜の語りいで風紀を守ろう† | 173

風紀 2 4. †心の守護者として風紀を守ろう† | 180

風紀 2 5. †過剰暴力で風紀を守ろう† | 186

風紀 2 6. †強者の論理で風紀を守ろう† | 195

風紀 2 7. †猛毒に抗って風紀を守ろう† | 201

風紀 2 8. †自力本願で風紀を守ろう† | 208

風紀 2 9. †運を味方に風紀を守ろう† | 215

風紀 3 0. †キング・クリムゾンで風紀を守ろう† | 224

未来編を咬み殺す

風紀 3 1. †思考を整理して風紀を守ろう† | 232

風紀 3 2. †匣兵器ラツシュで風紀を守ろう† | 240

風紀 3 3. †人を焚きつけて風紀を守ろう† | 247

風紀 3 4. †希望を見せて風紀を守ろう† | 255

風紀 3 5. †先は長くても風紀を守ろう† | 266

風紀 3 6. †アドバイスを受けて風紀を守ろう† | 276

風紀 3 7. †誰がための罫で風紀を守ろう† | 285

風紀 3 8. †心慌ただしく意乱れても風紀を守ろう† | 292

風紀 3 9. †メローネ基地に乗り込んで風紀を守ろう† | 300

風紀 4 0. †術士を嵌めて風紀を守ろう† | 309

風紀 4 1. †原作知識のない相手でも風紀を守ろう† | 321

風紀 4 2. †REBORN† | 332

風紀 4 3. †憧れへの第一歩で風紀を守ろう† | 346

風紀 4 4. †気力を振り絞って風紀を守ろう† | 357

風紀 4 5. †風紀財団のアジトで風紀を守ろう† | 365

日常編を咬み殺す

風紀1・†方針を決めて風紀を守ろう†

並盛中学校の応接室にて。

この度、僕は改めて姿見の前に立ってみた。

ムスツとした顔。ボサボサの黒髪。肩に羽織った学ラン。『風紀』と書かれた左腕の腕章。

ああ、これは間違いない。間違いようがない。

どうやら僕は†孤高の浮き雲†こと雲雀恭弥に憑依してしまったらしい。マジかよ。

雲雀恭弥とは、漫画『家庭教師ヒットマンREBORN!』の登場人物である。主人公・沢田綱吉（ツナ）が通う並盛中学校の風紀委員長兼不良であり、ボンゴレファミリー10代目の雲の守護者。集団でいることや束縛を嫌う性格で、気に入らない者や群れる「草食動物」は仕込みトンファーでめった打ちにする。初期は主人公の味方とは言えなかったが、沢田綱吉の家庭教師リボンの策略によりマフィアの世界へと巻き込まれていくうちに主人公に協力することが増えてきている傾向にある。この作品屈指の人気キャラクターであり、全アニメキャラを対象とした人気調査などでも上位の常連である。また公式の人気投票でも主人公のツナを差し置いて1位を取ることも多い。

y.ピク○ブ

僕の知る雲雀さんの基本的情報はザッとこんな感じだ。

僕自身、厨二病時代にリボンにハマり、貪るように漫画を読みふけていたので、原作での雲雀さんの行動スタンスも大体覚えていた。しかし、原因が全く分からない。どうして僕が漫画のキャラクターの体に憑依したのか。どうして僕の憑依先がああ雲雀恭弥なのか。



そうして。2時間後。机や本棚を漁り、色々と資料を読み込んだ結果、今僕が憑依した体の本名は雲雀恭華（きょうか）であり、この恭華さんがなぜか自身を雲雀恭弥と偽り、男装した上で並盛中の風紀委員長に君臨していることがわかった。要するに、この恭華さんは雲雀恭弥の妹でも姉でもなく、この世界における雲雀恭弥ポジションだということだ。

え、ええええええええー。

なんで恭華さんつてば偽名&男装しちゃってるの？

並盛の風紀を守るためには男だと思われた方が都合がいいとかそんな感じ？

性同一性障害とか、過去に男に性的に襲われたトラウマとか、そういう可能性もありますかね？

教えて！ わかる人！ 神様でも何でもいいから事情を教えてください！

……

……

反応ないな。それもそうか。

にしても、この状況。どうしようか。

せっかく雲雀さんに憑依したんだから、俺TUEEEでもやってみる？

どうせ今の僕、雲雀さんに憑依した夢を見てるとかそういう展開だろうし。

く妄想中く

僕「うえーいwww雲雀さんの体操れるとか超楽しいんですけどおーwwwマジうけるwww。せっかく雲雀さんの体をゲットしたんだし、面白愉快地に並盛支配しとこつと。あああ、王様気分はとっても気持ちよくて楽しいんじゃないやあ〜！」

雲雀さん「やあ、僕の体を無断で使って、随分愉快なことをしてくれたみたいだね」

特に武術の嗜みのない凡人な僕「＼（^o^）／オワタ」

く妄想終わりく

あ、ダメだ。夢だろうと関係ない。

雲雀さんの体でハチャメチャやらかしたら、後々雲雀さんに殺される。

いつまでも雲雀さんの体に憑依してるわけじゃないだろうし、いずれ本物の雲雀さんの意識が帰ってくるだろうし、ハチャメチャはやらないのが賢明だ、うん。間違いない。

でも、もしも僕が普通に凡人なりア充生活をしたらそれはそれで雲雀さんのキャラ崩壊になっちゃうよね。それってかなりマズいよね。

俺TUEEEもダメ、凡人生活もダメ。

となると、なるべく今までの雲雀さんの言動を模倣するのが良さそうなのかな。

どうせ雲雀さんの意識が戻ったら僕は速攻で咬み殺されるだろうけど、咬みっぷりが肉を引きちぎる残虐レベルなのと、甘噛みレベルなのでは大違いだからね。

でも、僕のアイデンティティを完全に潰してまで雲雀さんに徹しようとも思えない。

僕はそんなに自己犠牲精神にあふれた、凄まじい人間力を持った聖人じゃないからね。

だから、僕は僕らしく、雲雀さんで在り続けよう。適度に雲雀さんのイメージを保つていよう。

方針は決まった。ならば、始めよう。†孤高の浮き雲†とか言われながらも、何だかんだで色々人付き合いのある雲雀さんライフを。

◇◇◇

最近、雲雀さんの態度が軟化した。

風紀委員の副委員長として雲雀恭弥の下で働く草壁哲矢は切に思う。

これまでの雲雀さんは暴力に物を言わせた強権っぷりを見せていた。

自身が他者と慣れ合うことを酷く嫌い、その心情を他者に押し付け



る。

気に入らないことがあれば、ムカつきとともに誰だろうとトンファーを振るう。

並盛中の生徒だろうと風紀委員だろうと教師だろうと他校の生徒だろうと。

結果、並盛は雲雀さんによる恐怖支配状態が続いていた。

が、ここ最近では雲雀さんが理不尽な暴力沙汰を起こさなくなったのだ。

例えば不良のカツアゲ現場を制圧したり、引つたくりや食い逃げ犯を咬み殺したりと、私情でなく、真に風紀を守るためにその手に持つトンファーを振る始めたのだ。

当の本人は、「今日はトンファーを振るう気分じゃない」とか「群れることしかできない哀れな小動物を咬み殺しても時間の無駄だから」などと主張している。

が、単なる気まぐれではなく、明確に雲雀さんの中で心境の変化があったのだと草壁は確信した。そして、これは嬉しい変化だと草壁は考える。当然だ、草壁は決してMではない。所構わずトンファーを振りかざしてくる、いつ爆発するかわからない爆弾のような雲雀恭弥よりも、速攻で暴力的手段に任せようとしないう雲雀恭弥の方がいいに決まっている。

それに、雲雀さんは決して腑抜けたわけではない。

並盛町の住民に危害を加えようものなら、例え他校の不良だろうと銃を持った凶悪犯罪者だろうと容赦なくトンファーで殴りつけ、無力化してくれる。

その影響で、一部では雲雀さんを好む生徒や並盛町民も生まれてきている。

草壁は嬉しかった。雲雀さんはやり方こそ暴力的だが、並盛町のために身を尽くしていることをよく知っているからだ。

大抵の人にとって、今の雲雀さんのイメージは未だ横暴な独裁者だろう。

しかし、雲雀さんの心境の変化がこのまま持続すれば、いずれは並

盛の守護神として尊敬される立場になってくれるかもしれない。いや、そうなるのは時間の問題だ。

草壁は確かな確信を抱く。そして、何か雲雀から仕事をもらえないかと、雲雀のいるであろう応接室へ向かおうとすると、当の雲雀が下駄箱で靴を履き替えている姿を偶然目撃した。

「委員長。どこへ行かれるのですか？」

「パトロール。並盛町の風紀を乱す不届き者がいないか、学校の外を見てくるよ。ああ、今日分の書類はもう済ませたよ。応接室に置いてるから」

「はッー！」

雲雀は草壁の返事などどうでもいいと言わんばかりに玄関から外へと出立する。

草壁はその後ろ姿を見て、雲雀から神々しい後光が差し込んでいるように感じるのだった。

## 風紀2. †料理を学んで風紀を守ろう†

雲一つない青空が広がり、穏やかな日差しが差し込む並盛中の応接室にて。

この世界の女の子な雲雀さんに憑依した僕は今、ソファ―に腰かけてとある本を読んでいる。

姿見に映った今の僕は中々に絵になっているのではなからうか。

え、ナルシストだつて？ 別にいいじゃん、恭華さんかわいいって思ってるだけだしね。

今は午前10時であり、本来なら学生は授業に出席しないといけない。

しかし、雲雀さんは風紀委員長として築き上げてきた強権により、授業参加を本人の意思に任されているため、わざわざ授業を受けなくていいことになっている。

そもそも僕は大学生で、今さら中学生を対象にした簡単な授業は暇すぎて受けたくない。

雲雀さんは優秀なので、中学生レベルの授業なんて雑魚すぎて相手にならない。

僕も雲雀さんも授業を受ける理由がないため、こうして当然のようにサボっているのだ。

中学生を何度も繰り返すエヴァンジェリンさんがサボり常習犯になった気持ちは今ならわかる。

しかし、雲雀さんって本当は何歳なのだろうか。

Wikiでは年齢不詳となっていたが、平然とバイクを乗りこなす辺り、最低でも16歳は超えているのかな。でも、どうしてずっと並盛中に留まっているんだろう。

並盛でもっと独裁を振りたいのなら、どこかの高校や大学で再び権力を構築すればいいのに。

雲雀さんなら簡単にトップに君臨できるだろうに。

つとと、思考が脱線しちゃった。今はこの本を集中して読む時間帯

だから、集中集中。

僕は手元の本に視線を落とす。今、僕が読んでいるのは料理のレシピ本だ。

『目指せ、お菓子職人！ オリジナリティあふれる最強レシピ200選！』とのタイトルを掲げたこの本には、たくさんの写真と平易な文章でレシピをわかりやすく紹介している。

さて、なぜ僕がお菓子作りの勉強をしているのか。

答えは簡単、僕が憑依した雲雀さんが女の子だから。この一言に尽きる。

雲雀さんが女の子だとわかった以上、この手の勉強も必要だろう。

偽名&男装を施した上で並盛を支配するスタンスな、この世界のおにやのこな恭華さんに女の子らしい特技があるとは思えないしね。

今は↑孤高の浮き雲↑スタンスを貫いているけど、人生は何が起くるかわからない。

唐突に出くわしたイケメンに一目惚れして、一気に乙女になっちゃう可能性も否めないのだ。

恋に恋して夢を見るのが女の子だったかの偉大なLM・Cさんもそう言ってたし。

雲雀さんだって恭華さんで、一応は女の子なのだからきつと例外ではないと思われる。

なので、いざそんな状況に陥った時に、イケメンに手料理を振舞えないのは不利だろう。

男を籠絡する手段として、胃袋を掴むのは非常に有効だからね。

そんなわけで、僕が憑依している内に、まずはお菓子作りの勉強をしているのだ。

要するに、ただのおせっかいだ。雲雀さんの意識がない時にそんなことをしても意味がないのではないかと考えはしたが、今は無駄じゃないとの結論に至っている。

なぜなら。特に何の武術の嗜みもない僕が、雲雀さんと同様に敵を咬み殺せるからだ。

それは、雲雀さんの体は意識がなくても適切な動かし方を覚えてい

ることを意味している。

戦闘技術が体に染みついていいるのなら、料理の知識や経験も体に覚えさせられるはずだ。

体にお菓子作りの極意を叩き込みさえすれば、そこに雲雀さんの意識の有無は関係ないはずだ。

……何か表現がエツチくなつたけど、気にしたら負けかなと思つてる。

こんなことをしていたら雲雀さんの精神が帰ってきた時によりポッコボコにされそうで怖いけど、それでも雲雀さんのために何かをしておきたいという僕の衝動は止められない。

どうせ雲雀さんの体に憑依した時点でいずれ咬み殺されるのは確定なんだし、多少はね。

まあ、雲雀さんは群れることを嫌う人だから、何でも一人でできるようにするのは悪いことではないはず。うん、そのはず。理論武装完了。

それにしても、勉強するのって楽しいなあ。

なんて言ってみただけど、実を言うと、僕自身はあまり勉強は好きじゃない。

でも、この雲雀さんの体のおかげか、知識がどんどん吸収されていくから凄く楽しい。

1の努力で10の結果が伴ってくるとか、ある種の快感だよ。病みつきだよ。

元の僕の体の、1の努力で0.5の結果しか返せない状態を知つてるとなおさらねえ。

さすがは雲雀さんボディ。雲雀さんってば天才型っぽいからね。

努力を積み重ねていく姿とか似合わないし、ホント雲雀さんってさすひばだよ、さすひば。

うん、うん。よし、このレシピ本の大体の知識は詰め込んだし、後は実践だね。

思い立ったが吉日、適当にスーパーで食材を買い込んで、色々なお菓子を作ってみよう。

どうせなら並盛の新名物になり得る、特産品チックな独自のお菓子に挑戦してもいいかもね。

さてさて、どんな結果になるのやら。レッツ、ポイ——クッキング。……危ない危ない。思わず勢いでポイズンクッキングって言っちゃいそうになったよ。

これ、食中毒でぶっ倒れるフラグだったりしないよね？

今のリボン世界はまだギャグ路線だから、補正で死なずに済むよね？ ね？

◇◇◇

並盛中の風紀委員は、風紀委員長である雲雀恭弥によって統率されている。

雲雀の意に背く行いをした者は速攻で咬み殺されるため、逆らう者は存在しない。

しかし、例え雲雀に従順だろうと、雲雀の虫の居所が悪ければ理不尽に咬み殺されるため、ほとんどの風紀委員は雲雀恭弥を恐怖の権化とみなし、恐れていた。

しかし、雲雀を全く恐れていない風紀委員の中には存在する。

秋田勝。並盛中の生徒になってからは諸事情により不登校だったものの、とあるきっかけで再び並盛中に通い始めた生徒だ。秋田がなぜ雲雀を怖がらないのか。理由は簡単、かの凡人が憑依した後の雲雀しか知らないからだ。

日頃は大概家に引きこもっていた秋田は、ある時ふと気分転換に外へと出かけた。

昼夜逆転生活を行っていたため、外出したのは午後10時である。その時、秋田は運悪く、古典的な当たり屋と接触してしまったのだ。肩甲骨が骨折したと声高に喚く、秋田よりも遥かにガタイの良い全身刺青男。

ヤバいと思った時はもうとつくに手遅れだった。

全身刺青男の絶叫を待ちかねたようにわらわらと秋田を取り囲む

人相の悪い男たち。

全員が全員、日本刀を帯刀していることから、秋田は理解した。

眼前の男たちが、並盛町を拠点に活動している武闘派のヤクザ：  
桃巨会ももぎょかいの連中であると。

日本刀を抜刀され、殺気まみれの眼光で睨まれ、ドスの利いた声で脅され。

秋田の精神状態は極限にまで追い詰められていた。

どのような言動が最善かわからず、ただ震えることしかできない。

今、自分が持つている全財産を差し出せば危機を回避できると頭の中の冷静な部分ではわかっている。体が一切、自分の言うことを聞いてくれない。

自分の無力さを呪うことしかできず。

うっかり夜に外出した自分のうかつさを憎むことしかできず。

リーダー格のヤクザが痺れを切らして日本刀を振り上げた時、秋田は心から願った。

——誰か、助けて。

神様の気まぐれの恩恵か、秋田の願いは叶えられた。

今まさに秋田を斬りつけようとしていたリーダー格のヤクザがト  
ンファーで殴られ、十数メートル後方へと吹っ飛ばされたからだ。

「やあ、桃巨会の諸君。元気そうだね。さて、今こうして徒党を組んで群れているだけでも問題だけど……派手に風紀を乱してくれたようだね？」

リーダー格のヤクザが泡を吹いて気絶し、配下のヤクザたちが動揺を顕わにする中。

ボサボサの黒髪に学ランを羽織った姿が特徴的な人物が淡々と言葉を紡ぐ。

後ろ姿だけだったが、秋田は誰が自分の目の前に割って入って来たかがわかった。

あれだけ並盛中で悪名高い人物だ、わからないわけがない。

「君たちヤクザの役割は理解している。だから、僕は君たちを潰さずに泳がせている。でも、みだりに風紀を乱す不届き者は並盛町にはいない。よって、君たち全員——咬み殺す」

後は一方的な蹂躪劇が残されるのみだった。あつという間に桃巨会のヤクザたちをぶちのめしてみせる雲雀恭弥。

秋田は呆然と、雲雀による圧倒的な肅清シーンを眺めていた。すると、ヤクザたちの死屍累々を築き上げた雲雀が、ふと振り向いた。

「秋田勝。怪我はないかい？」

「は、はい！」

「そッ。じゃあさっさと帰ろうか。僕はこれの後始末で忙しいんだ。いつまでもここでボケーツと立っているようなら……目障りだ、咬み殺すよ？」

「ひえ、は、はい！ 失礼します！」

雲雀恭弥にギンと睨まれた秋田は冷や汗を流しながら家へとダツシュしようとする。

その時、秋田は気づいた。たった今、自分の名前をあの雲雀恭弥に呼ばれたことに。

——あれ、雲雀先輩。今、俺の名前を呼んだ？ 俺、学校に全然行っていないのにどうして俺のことをわかっ……え、まさか雲雀さん、全校生徒の名前を覚えているんじゃないのか？

その可能性に思い至った時、秋田は一旦、立ち止まった。

「雲雀先輩！ 助けてくれて、ありがとうございました！」

声を張り上げて、頭を下げて、心からの感謝の意を告げる。

そうして。今度こそ秋田は雲雀の元から走り去った。怯えられていた生徒からまさか感謝されると思わなかった雲雀が、どんな滑稽な顔をしていたかを見ることなく。



◇◇◇

その後。秋田勝は不登校をやめた。

なけなしの勇気を抱えて再び並盛中に足を運び、そして風紀委員になつた。

ただ恐怖を煽り立てるうわさと違い、強く優しい雲雀先輩のためになりたかつたのだ。

そして今日、草壁が他校の生徒との渉外活動に向かつたため、彼の代わりに秋田が応接室の雲雀の元へ赴いている。秋田以外の風紀委員は誰も応接室に入りたがらなかつたからだ。

「雲雀先輩、今大丈夫ですか?」

「入つて」

命令されたので、素直に入室する。

そして、秋田は一連の報告事項を簡潔に雲雀へ伝える。

話すことはすべて話し終え、秋田が応接室を後にしようとした時。

ふと、秋田の目に、テーブル上の色とりどりの興味深い物体が映つた。

「雲雀先輩、それは?」

「かるかん。作つてみた」

「え、ひ、雲雀先輩がですか!?!」

「まあね。桃かるかん、レモンかるかん、いちごミルクかるかんやブルーハワイかるかん。思いつくままに色々試してみたけど……僕がこんなことに取り組むのはおかしい?」

「い、いえ! ほんでもないです! けど、雲雀先輩が料理も上手いのが何だか意外で——」

「僕にできないことはないからね、やればできる。……ああ、これはあくまで並盛の新名物を生む一端だから、誤解しないように」

「な、なるほど。そういうことだったんですね!」

雲雀作のカラフルなかるかんが盛りつけられたお皿が異彩な雰囲気放つ中。

雲雀と料理という、あまりに想定外な組み合わせに秋田が驚愕している、ここで雲雀が「食べる？」と秋田に問いかけてきた。

「へ？」

「ちようどその辺の草食動物の感想が聞きたかったんだ。……あ、嘘を吐いたら咬み殺すから」

「は、はい！ で、では、いただきます」

秋田はおずおずと手前にあったレモンかるかんを手に取り、パクつく。

雲雀作のお菓子は、秋田の予想に反して、優しい味わいだった。

「お、美味しいです！ えと、レモンの仄かな酸味とかるかんの甘さが絶妙にマッチしてるっていうか、そんな感じですよ！ すみません、上手く表現できなくて」

「そう。じゃあ、もう君に用はないから、帰っていいよ」

「はい、失礼しました！」

そつけない雲雀の物言いを特に気にすることなく、秋田は応接室を後にする。

雲雀恭弥の新たな一面を知ることができて、とつても嬉しい秋田勝であった。

### 風紀3. †すやすやお昼寝で風紀を守ろう†

光陰矢の如しとはよく言ったもので。

僕がこの世界の女の子の雲雀さんに憑依してからある程度の日数が経ち。

ついに沢田綱吉を筆頭とした主人公勢が並盛中に入學した。

これで、ツナくんが1-Aのクラスメイトたちにダメツナダメツナと言われるようになれば、ツナくんの元に家庭教師のリボンが現れ、原作が始まることとなる。

ボケーツとしていたら命を失いかねない、ツナくんの激動の日々が始まるのだ。

しかし、原作準拠の流れなら雲雀さんの登場は2学期になってからだ。

僕はもう少しだけのんびりできることだろう。ツナくと違って。

基本的に、この手の作品内のキャラに転生なり憑依なりした人物のスタンスとしては、原作への積極的介入、原作の野次馬的傍観、原作介入の徹底的回避などが挙げられる。

僕は雲雀さんらしい言動を心掛けているため、原作との接触は避けられないだろう。

並盛を物理で支配する僕が遅かれ早かれリボンに目をつけられないはずがない。

ただ、僕はツナくんたちと出会うその日までただ座して待つつもりはない。

僕はある理由から、リボン以外のとあるマフィア関係者に早めに接触するつもりでいる。

この世界には原作があるとはいえ、何もかもが原作通りになるとは限らない。

僕が本来の雲雀さんのように所構わず暴力を振りまいていないことから明らかだ。

ゆえに、何が起こっても大丈夫なように少しでも準備が必要な

だ。

とはいえ、今は時期じゃない。

急いで仕事を仕損じるし、時期を見誤っては成功するものも失敗してしまう。

ということで、僕は今日分の風紀委員長としての仕事を終え、校舎の屋上へ足を運んだ。

この雲雀さんボディが可及的速やかなお昼寝を欲しているからだ。

何気に雲雀さんの体は常時寝不足状態である。

葉が落ちる音で目を覚ます雲雀さんはまともにも何時間もぐっすり眠れないのだ。

いくら夜中でも、家の中や外から一切音がしない状況が何時間も続くことはマレなのである。

ゆえに、態度にこそ出ないが、雲雀さんはいつも眠気を堪えていたりする。

これ、詳しいことはわからないけど、睡眠障害なんじゃないのかな。とはいえ、雲雀さん的には寝不足は何ら問題ない症状なのだろう。

考え方を変えれば、寝不足なのは、眠りたいと思っただらいつでも眠れるということなのだから。

それに雲雀さん的には寝ている時間こそが至高なのだろうと僕は考えている。

なぜなら、寝ている時だけは絶対に誰とも群れずに済むから。

雲雀さんは群れることを非常に嫌う。

しかし、人間である以上、程度の差こそあれ群れることから避けられない。

雲雀さんのように、並盛の風紀を守ろうと考えているならなおさらだ。

しかし、寝ている時は関係ない。群れずに、自由にいられる。

眠ることは、雲雀さんがいかなる概念にも囚われない、至福の時なのだ。

あ、夢の中で草食動物たちがわらわらしていたら話は別だけどね。というわけで、雲雀さんの言動をなるべく踏襲しておきたい僕もす

やすや眠ることにする。

4月の日差しはぽかぽかとしていて、お昼寝には最高の季節だ。

その辺に仰向けになって、目を瞑れば……1、2、ほら。( ☒ ☒ )  
スヤア

ホント、雲雀さんの寝つきの良さもまた素晴らしいよね。

……ふと思った。

寝不足を解消したいのなら、高級耳栓でも購入すればいいのではないかと。

その時、歴史が動いた。なんてね。

◇◇◇

根津銅八郎は並盛中の理科を担当する55歳の男性教師である。

生徒からの根津への評判はすこぶる悪い。誰もが根津の名前を聞くとき、しかめっ面をする。

根津は授業中やテスト返却中に成績の悪い生徒を吊し上げ、公開処刑するからだ。

しかし、根津は自分に対する生徒の評価などどうでもよかった。

根津はバカな生徒を筆頭に、並盛中から気に入らない生徒を排除したい欲求に駆られていた。

例えば自分への心証が害されようと、とにかく頭の出来のよろしくない生徒を退学させたかった。

頭の悪い生徒は目障りだ。まるで学生時代の私を見ているようでも力つくからだ。

不良な生徒は排除対象だ。学生時代の冴えない私を喜び勇んで虐げてきたからだ。

中学生レベルの授業内容を理解できないアホ生徒など、中学校に馴染めず道を踏み外す沸点の低い不良など、社会のゴミだ。ゴミの処理、これを私が担って何が悪い。

根津は己の打ち立てた身勝手な基準を用い、勝手に生徒をゴミかそ

うでないかを判別する。

こんな歪んだ教師スタイルを取る根津である。ストレスが溜まらないわけがない。

いくらゴミ生徒を退学に追いやっても、新たなゴミ生徒が湧いて出てくる現状に行き場のないイライラが募らないわけがない。

(なぜだ、なぜゴミが減らない！ こんなにも私が率先してゴミを処分しているのに……！)

昼休みにて。根津は苛立ちをそのままに階段を踏みつけながら屋上へ足早に向かう。

バンと力任せに扉を開けて、スーツの内ポケットからタバコを取り出した時、根津は先客がいることに気づいた。雲雀恭弥。並盛町を暴力で支配する、並盛中の風紀委員長だ。

(くそッ、なんで教師の上に平然と生徒が居座っているんだ！ 私は東大卒だぞ！)

いつもの根津なら雲雀の姿を捉えた瞬間、すぐさま踵を返していたことだろう。

しかし、今日の根津は大層イラついていた。呑気に眠る雲雀を一瞥すると、タバコに火をつける。そして、雲雀の顔にタバコを押し付けようとする。

(これは社会を知らないくせに我が物顔で偉ぶる生意気坊主への社会的制裁だ！)

根津の口角が凶悪に吊り上がる。

数秒後の、あの雲雀恭弥が火傷にのたうち回る姿を想像したからだ。

「ねえ。僕の眠りを妨げると、どうなるか知っているかい？」

しかし、根津の思惑は現実とならなかった。

根津が乱暴に扉を開けた時点で目を覚ましていた雲雀がパツチリ

と目を開けて、底冷えのする声をぶつけてきたからだ。

「ひ、ひえッ!? ぼ、暴力か!? 暴力反対!」  
「……」

ひよいつと体を起こす雲雀に、根津は尻餅をつく。

腰の抜けている根津は雲雀の暴力に怯え、体を縮こまらせるも、当の雲雀は攻撃してこない。

ただふわぁーと、マイペースにあくびをしているのみだ。

ここで根津は思い出した。

自分と似たような思想を持つ教師が以前、話していたことが脳裏をよぎる。

彼曰く、最近の雲雀は腑抜けている。おそらく嫌味を言った程度では、暴力を振るわない。

雲雀が手を出してこないのなら、何を怯える必要があるだろうか。

「おい、雲雀恭弥あ。あ、あくまで仮定の話だが、いつまでも中学校を卒業せず、この学歴社会において邪魔にしかならない不良どもを束ねているトップがいるとしよう。エリートコースを歩んできた私が推測するに、そういう奴は所詮井の中の蛙、大海を知らない。いくら狭い世界で頂点に君臨しようと、暴力で集団を統率する、協調性皆無な奴に社会の居場所はない。そんな人間に果たして、生きる意味があると思うかね?」

根津はクククツと喉を震わせながら雲雀を精神的に傷つけにかか  
る。

根津は常々思っていた。雲雀恭弥こそが、並盛中にこびりつく最も  
厄介なゴミだと。

そのゴミを処分できる機会が今、巡ってきている。このチャンスは  
モノにするべきだ。

あの雲雀相手にこの程度の言葉責めで効果があるとは思えない。

だから、積み重ねるのだ。敵意を持った言葉はナイフとなって心を  
傷つける。

自分では平気と思っけていても、人は案外、悪口への耐性がない。心の盾は簡単に用意できない。

多感な10代ならなおさら、雲雀だって例外ではないはずなのだ。

「否定はしないよ。けど、居場所がないのなら作るまでだよ」

「は、はあ?」

「僕ならできる。東大を卒業したとうそぶく君にはできないだろうけど」

「なあツ!」

「僕が何も知らないとでも思っけているの? 経歴詐称で教職に就いた、5流大学卒の草食動物くん。学歴アレルギーも大変だね」

「な、ななななな——」

根津の嫌みのお返しとばかりに雲雀の投じた爆弾発言に、根津はただ驚くことしかできない。

確かに雲雀は理不尽な物理的暴力を振るわなくなった。しかし、言葉で相手を追い詰めないとは言っけていない。根津は雲雀を下に見過ぎていたのだ。

(マ、マズい。私の経歴詐称をバラされたら一環の終わり……!)

「君の経歴詐称を告発するつもりはないよ」

「へ?」

「僕が君を排除しないのは、必要だからだよ。社会というくだらないシステムは皆が皆、善人では成り立たない。一定数のゴミがいるから、社会は均衡を保てる。そう、君は並盛中に必要なゴミさ。他者をゴミだゴミだと見下す君こそがより劣悪なゴミなのさ」

「……」

「ま、僕が直接手を下さずとも近い将来、君は破滅する。芸術的な悲鳴を楽しみにしているよ」

雲雀はただ立ち尽くす根津を放置して屋上を後にする。

しばらく突っ立っけていた根津は、ハツと我に返る。怒りに肩をワナワナと震わせる。



「あ、んのガキツ……！ 生意気言いやがってええええええええええええ  
!! クソツッ！ クソ、クソツッ！ クソ野郎がああああああああああ  
!!」

根津は50代男性の体面を置き去りにして地団太を踏む。

その後、根津の心に燦る激情はますます頭の悪い生徒への八つ当たりに向けられるのだった。

#### 風紀4．†誕生日を祝って風紀を守ろう†

ハッピーバースデー、トゥーユー！　ハッピーバースデー、トゥーユー！

ハッピーバースデー、ディア☆ひばりん☆　ハッピーバースデー、トゥーユー！

……ふう、お誕生日の歌、詠唱完了。

さすがに1番の方は歌わなくていいか。

1番は確かグッドモーニングの歌だもんね、あれ。

さて、今日は5月5日。雲雀さんの誕生日である。

何歳かはわからないが、雲雀さんは今日、また1つ大人になったのだ。

心なしか、雲雀さんの体躯も大人らしく成長しているように感じられる。

さて、大事なことなのでもう一度言うが、今日は雲雀さんの誕生日である。

この記念すべき日に、いつものように雲雀恭弥の言動をトレースするなんて論外だ。

誕生日ぐらいいは男装を解除して、ありのままの姿で過ごしてもいいのではなからうか。

ということで、僕は今、女装して並盛町へ繰り出している。

……雲雀さんの元々の性別が女の子なわけだから女装って言葉の違和感が凄まじいけど。

女の子らしい衣装に身を包んだ僕が向かう先は無論、ケーキ屋である。

そう、ケーキを買うのだ。雲雀さんの誕生を孤高に自宅で祝う際の必需品を手に入れるのだ。

雲雀さんとケーキ。似合わないと思いがちだが、雲雀さんは案外、甘いものを食べられる。

憑依したばかりの時は苦手なのかなとも思ったけど、普通に自作の

甘いお菓子も食べられたし、雲雀さんに苦手なものはないとか、そんなノリの設定が反映されたのだろう。

もしくは、甘いモノを愛する女の子らしい感性が影響したか。

「へへへ。よお、そこのかわいい子?」

「ちよつと俺らと一緒に遊ばねえ? 退屈させねえからよ?」

目的のケーキ屋が視界に入ってきた辺りで、僕の前方に軟派な男3名が立ち塞がる。

雲雀さんは一応並盛中所属だからと、化粧はしなかったのだが、それでも雲雀恭華としての美貌は男たちの劣情のストライクゾーンをぶち抜くクオリティのようだ。

この反応だと、APP16くらいかな。はいはい、さすひばさすひば。

「邪魔☆」

せつかくの誕生日タイムをゲスな妄想ばかりしている男連中に奪われるわけにはいかない。

僕はトートバッグから仕込みトンファアを展開し、一瞬にして3人の男を咬み殺す。

その後、「ふぎや!」「ぎやおす!」「すべや!」などと珍妙な悲鳴を残して地に倒れる男たちを無視して僕はケーキ屋に入った。

ちなみに、今の僕は女装中のため、なるべく年頃の女の子らしい態度を心掛けている。

恭華さんモードの時まで↑孤高の浮き雲↑でいる必要なんてないもんね。

え、じゃあさつきトンファアを振るってたのは何だったのかって? ……元気な女の子って、素敵だよね。ね?

「いらっしやませー」

店員の朗らかな声に笑みを返し、ショーケースに並べられたケーキたちを一瞥する。

チーズケーキにショートケーキ、モンブランにミルフィーユと人気所が密集する様は圧巻だ。

口内のよだれが一気に量を増したことから、雲雀さんの体も地味にテンションが上がっていることがわかる。やっぱり雲雀さんも女の子なんだね。いやはや、良かった良かった。

「はひ!? とっても綺麗な女の子がいます!?!」

と、ここで背後から少々バカっぽいリアクションが聞こえてくる。えっと、この声はもしかして? と、振り返ってみると、案の定の人物が僕を見つめていた。

ま、まさかこのタイミングで出会うことになろうとは。正直、意外すぎる件。

◇◇◇

5月5日。三浦ハルは全力ダツシユでケーキ屋を目指していた。ハルの誕生日は5月3日なのに、今の今まですっかり忘れていたのだ。

そのため、慌てて13歳になった自分の誕生日を祝おうと、ハルはケーキ屋へ突入した。

そのケーキ屋には先客がいた。パーマの入った艶やかな黒髪。理性的な瞳。整った顔つき。スレンダーな体躯。

可愛さとカツコよさを兼ね備えた、非の打ち所のない美少女さんがいた。

「はひ!?! とっても綺麗な女の子がいます!?!」

つい、ハルは心の中で思ったことをそのまま叫んだ。

直後、ハルは目の前の女の子の迷惑になったのではないかと内心で焦る。

すると、ハルの大声に気づいた美少女さんがこちらに目を向けてく

る。

当の美少女さんは、ハルの存在にわずかながら驚いているようだった。

「貴女は……」

「は、はい！ 私は緑中1年の三浦ハルです！」

「あ、ご親切にどうも。僕は並盛中の雲雀恭華だよ。よろしく」

「はひ!? 名前まで可愛いなんて、凄いです！ 完璧です！」

「えと、大げさだと思うけど、ありがとう？ ハルって名前も素敵だと思うよ？」

「そう、ですか？ ありがとうございます！ 恭華ちゃんって呼んで

いいですか？」

「いいよ。その代わりに、僕もハルって呼ぶね」

初対面の相手と会ったらずは自己紹介をしないと。

ハルのハキハキとした自己紹介を契機に、ハルは瞬間に恭華との仲を縮めていく。

ハルの天真爛漫さが功を奏した瞬間である。

「このケーキ屋によく来るんですか？ このケーキ、本当に美味しいですよ！ ハル、食べる度にほっぺたが落ちちゃわなかった心配になっちゃうんです！ 恭華ちゃんはどうですか？」

「いや、ここに来たのは今日が初めてなんだ。へえ、このケーキってそんなに美味しいんだ、楽しみになってきたよ」

「え、初めてなんですか？」

「うん。今日は僕の誕生日でね。誕生日ぐらいは自作のお菓子じゃなくて、ちゃんとした所で買ったケーキを食べようかなって」

「はひ!? そうなんですか!? 実はハルも誕生日のためにここへ来ただんです!？」

「あれ、そうなの？ じゃあ、もしかしてハルも今日が誕生日なの？ 凄い偶然だね」

「あ、いえ。ハルの誕生日は一昨日の5月3日です。自分の誕生日の

ことを今朝思い出したから、今からでもお祝いしようかなって——そうだ！ 恭華ちゃん！ せっかくですし、一緒に祝いましよう！ 1人で祝うより2人で祝った方が楽しいですよ！」

「え、でも……」

「ハルはノープロブレムです！ さあさあ！」

ハルは持ち前の無自覚な強引さで恭華と一緒に互いの誕生日を祝うことを決める。

そして、それぞれ食べたいケーキを購入すると、イトインスペースの一角に着席した。

ちなみに。ハルはミルフィューク、恭華はレアチーズケーキを頼んでいる。

「ハッピーバースデー、トゥーユー！ ハッピーバースデー、トゥーユー！ ハッピーバースデー、ディア恭華ちゃん！ ハッピーバースデー、トゥーユー！ イエーイ！」

ハルがパチパチパチと勢いよく拍手すると、恭華が照れくさそうに頬を掻く。

恭華の満更でもない表情にハルが自分のことのように嬉しく思っている、「ぼ、僕も歌わないとだね」と、恭華がお返しにお誕生日の歌をハルに対して歌ってくれた。

「ハッピーバースデー、トゥーユー！ ハッピーバースデー、トゥーユー！ ハッピーバースデー、ディアハールー！ ハッピーバースデー、トゥーユー！」

恭華の声はまるでウグイスのように澄んでいて。ハルは思った。

こんな心地いい声で誕生日を祝ってもらえるハルは何て果報者なのか。

「う、ううう……」

「ハ、ハル!? なんてそんなに号泣してるの!?!」

「が、感動じだからです！ ハルば今、猛烈に感動じでいます！」  
「全く、ハルは何から何まで大げさだなあ……」

ダバーと洪水のように涙を流すハルに、恭華はハンカチを優しく当ててハルの涙を拭う。

そうして。ハルの感動が落ち着いた頃。ハルは思った。恭華ちゃんと友達になりたい。

ゆえに。今日、偶然出会った恭華相手に、ハルは積極的に親睦を深めていった。

「恭華ちゃん、食べ合いつこしましよ。はい、あーん」

「え、あーん!？」

「はい！ ミルフィーユ、美味しいですよー！ あ、後で恭華ちゃんのレアチーズケーキ、一口もらつていいですか!？ いいですよね!？」

「う、うん。別に僕は構わないけど」

「やったあ！ じゃ、あーん♡」

「ところで、ハルのフォークで食べさせてもらわないといけない理由がどこにあるんだろうか?」

「いいからいいから」

お互いのケーキを『あーん』で食べさせあったり。

「1年に1日しかない誕生日なのにケーキ一切れで終わらせるなんて物足りないです！ もっと食べましょう！ 恭華ちゃんは何を食べたいですか?」

「僕はさつき食べたレアチーズケーキでもう十分なんだけど」

「えええええ！ そんなこと言わずに一緒にケーキを追加して、また食べ合いつこしましよようよー!」

「……どうせケーキの食べすぎで太るなら、僕も巻き添えにしてしまえ。とか思つてない?」

「は、はひ!? い、一体何のことでしょうか!？ ハルハゼンゼンワカラナイデス」

「ハルってわかりやすいよね」

「むう！ そんなことないですよお！」

ケーキを追加注文して、パクパク召し上がった。

「さあ！ 流行りのお洋服の偵察に行きましょう！ そうしましょう！」

「え、いや僕はケーキを食べたらそのまま帰る予定で……」

「せっかく町に来たのにすぐ帰っちゃうのはもったいないってかの偉人の何とかさんも言ってます！ てことでほら、色々見ていきましよう！ 試着室でファッションショーとか絶対楽しいですよ！ 女の子のロマンですよ！」

「そ、そうかな？」

「そうです！ このハルが太鼓判を押します！ 間違いありません！」

恭華を無理やり引き連れて、ウィンドウショッピングを実施したり。

とにかく遊び回った。とても数時間前に初体面した相手とは思えないノリで、ハルはとにかく恭華と一緒に時を過ごした。全ては、恭華と友達になるため。

「恭華ちゃん。今日、ハルと一緒に楽しかったですか？」

「……そうだね、たまにはこんなに騒がしいのも悪くはなかったよ」

夕日が沈まんとする頃。ハルは少しだけ疲れが表情に出ている恭華の姿を見て、後悔した。

ああ、やってしまった。ハルの都合にひたすら付き合わせて、疲れさせてしまった。

これでは、恭華は友達になってくれないのではないか。ハルの顔が蒼白に染まっていく。

「ご、ごめんなさい！ ハル、いつもこんな感じで！ 人に迷惑をかけちゃうんです！ 本当にごめんなさい！」

ハルはぺこぺこ頭を下げる。恭華に嫌われたくない一心で。



「なんで謝るの？ 僕は楽しかったよ。色々新鮮だった」

「え？」

「じゃあね、ハル」

恭華はハルに微笑みを見せると、クルリとハルに背中を向けて歩き出す。

恭華はハルを嫌っていない。それだけわかれば十分だった。

「恭華ちゃん！ ハルと友達になってください！ それで、また2人で遊びましょう！」

ハルの申し出に雲雀は返事をしない。

ただ、ヒラヒラと、後ろ手でハルに手を振った。それは肯定の返事だった。

願った通り、恭華がハルの友達になってくれた。ハルはグググッと両手で拳を作る。

「やったあああああああああああああああ!!」

そして。両手の拳を真上に掲げ、己の歓喜の感情を思いっきり爆発させた。

かくして。ハルの13歳の誕生日は例年と比べてはるかに特別な意味合いを持つのだった。

## 風紀5. †毒を喰らって風紀を守ろう†

5月のゴールデンウィークが終わり、ごく一部の生徒が五月病を発症する中。

ついに原作が始まった。凄腕の殺し屋で赤ん坊なりボーンが並盛町を訪れ、ツナくと接触したのだ。その影響で、ツナくんが並盛町で色々と暴れるようになった。

パンツ一丁でクラスメイトの笹川京子に告白したり。

男尊女卑思想を持つてるっぽい剣道部主将の髪を乱暴にむしったり。

バレーボールで小さな巨人顔負けの超人的なジャンプ力を見せつけたり。

校内でダイナマイトを繰り出す獄寺隼人を手懐けたり。

自殺を試みて屋上から飛び降りた山本武を死ぬ気で救ったり。

わかってはいたけど、何というかもうやりたい放題だ。

若いつて、いいね。僕にはとても真似できないよ。

そして、物理的におかしくなったツナくんを周りの人たちは特に気にしていない。

まるで麻帆良の認識阻害の結界の中にいるかのように、ツナくんの存在を日常として受け入れている。これがギャグ時空の効果か、さすがだね。

さて、そんなこんなで月日は流れ。家庭科実習で女子がおにぎりを作る日が訪れた。

僕はこの日を待っていた。その理由は、毒サソリことビアンキと出会ったためだ。

なぜ僕がフリーの殺し屋たるビアンキとの接触を目論んでいるのか。

理由は単純明快。この世界が原作同様の展開を刻むとは限らないからだ。

この世界ではいずれ、雲雀さんはボンゴレ雲の守護者となるのだろ

う。

僕が並盛町から失踪するとかいった、変な暴走をしない限り、間違いない。

その時、問題となるのは約一年半後に控える、ヴァリアー編の大空戦だ。

大空戦ではツナくんとザンザスが戦う間、お互いの守護者はデスヒーターとかいう、野生の象すら歩行不能となるらしい猛毒で身動きを封じられてしまう。

しかし、ザンザス側のレヴィやベルフェゴールはザンザスの施しでデスヒーターを解除できてしまい、ツナくんの他の守護者を殺そうとしてしまう。

これを防ぐには、原作通り、ツナくん側の僕こと雲雀さんが自力でデスヒーターに抵抗して毒を解除し、他の守護者を毒から解放しつつ、ザンザス側の敵と対峙しないといけない。

しかし、今の僕が憑依しているのは雲雀恭華。雲雀恭弥でない、女の子だ。

男だった雲雀恭弥と同様の体力を持ち、毒に抵抗できるとの楽観視はしない方がいい。

性別の差でデスヒーターに対抗できず、「くっころ」となる可能性は十分に考えられる。

そうになると、ツナくん側の守護者はレヴィやベルフェゴールに惨殺されてしまう。

そんな胸糞な全滅エンドは絶対に回避しないといけない、絶対にだ。

そのために必要なのは、雲雀さんの毒への抵抗力の強化だ。

ゆえに、ビアンキと接触し、彼女のポイズンクッキングを日常的に摂取し、少しでも毒物への耐性をつけようと考えたのだ。

これはある種の賭けだ。

一般に、毎日のように毒を摂取することで、毒に耐性をつけるというのはおとぎ話の類いだ。

何せ、毒は体内に蓄積すれば蓄積するほど将来的に体に牙を剥くの

が普通だからだ。

水銀や放射性物質を毎食ごとに摂取したらどうなるかを考えればわかりやすいだろう。

でも、獄寺くんはビアンキの料理でトラウマにはなっても死ななかつたし。多分大丈夫。

それにリボーンの世界って割と滅茶苦茶だしね。平然とマグマ風呂に浸かってる人もいるぐらいだから、僕のいた世界の常識はある程度無視しても問題ないはず。

ビアンキって何気に元彼を毒殺してるっぽいけど、大丈夫大丈夫。

雲雀さんボディがある程度はデスヒーターに抵抗できるとわかっている以上、ビアンキのポイズンクッキングで即死する心配はしなくていいはずだ。

リボーンの世界なら、僕もキルアみたいに、日々是精進で毒耐性がつくって信じてるから。

生き残るために、自分を痛めつけるというのは何か違う気がしないでもないけれど。

特に雲雀さんの体に憑依して、体を借りている状態で毒を喰らうのは気が引けるけれど。

やるしかない。全てはリボーンの世界が後々物騒になるのがいけないんだ。

ということ、今日から始めようか。

下手したら命にかかわるかもしれない、毒物摂取ライフを。

雲雀さんがデスヒーターに負けない、屈強な体を手に入られると信じて……！

ご愛読ありがとうございます！

……うん、アレだね。フラグ立てるのって割と楽しいね。



女子生徒がおにぎりを作る家庭科実習の最中。ビアンキは並盛中に潜入していた。

かつてのように殺し屋仲間のリボーンと共に仕事をするため、愛するリボーンを無駄に並盛町に拘束する、につくきボンゴレ10代目候補である沢田綱吉を殺したいからだ。

愛のためなら人は死ぬる。この持論を元に、ビアンキは笹川京子のおにぎりをポイズンクッキングにすり替え、ポイズンクッキングを拒絶できない状況に持ち込み、沢田綱吉の毒殺を画策した。

しかし、ビアンキの目論見は失敗した。リボーンに死ぬ気弾で頭を撃たれた沢田綱吉が死ぬ気になり、女子が作ったおにぎりをポイズンクッキングごと食べつくしたからだ。

一時は毒殺が成功したとビアンキは顔を綻ばせたものの、沢田綱吉はへそにも撃たれた死ぬ気弾により一時的に毒の通じない鉄の胃袋を手に入れたため、沢田綱吉は死ななかつたのだ。

結局、得意なポイズンクッキングで沢田綱吉を殺せなかつたビアンキはリベンジを誓い、並盛中を後にする——ことはできなかつた。

唐突に、背中に鋭い殺気とトンファーを突きつけられたからだ。

(背後を取られた!! いつの間にか!?)

「ねえ、君。大人しくついてきてもらえるかい? でないと、校内に無断で侵入し、生徒を殺そうとした不審者として咬み殺す」

背中に突きつけられる殺気は紛れもなく本物だ。並盛中にトマゾファミリーが所属していることは知っているが、トマゾのお調子者と内藤ロンシャンが放てる殺気ではない。

ビアンキは動揺を隠せないまま、今はひとまず、背後の男の命令に従い、移動した。



ビアンキが連行された先は応接室だった。

ビアンキを応接室に向かわせた張本人は、応接室の奥の椅子に座る。

ここで初めて男の顔を見たビアンキは、目の前の男の正体に気づい

た。

「ここ並盛町を暴力で支配する人物——雲雀恭弥——であると。

「君のことは知ってるよ、毒サソリ」

「ッ!？」

「驚いたかい？ 部下に調べさせたんだ」

「……ええ、驚いたわ。風紀委員会ってのは仮の姿で、実際はマフィアだったりするのかしら？」

「君の想像に任せるよ」

裏社会の存在を知るはずのない中学生に自身の正体を知られていく。

ビアンキは内心冷や汗ながらも探りを入れてみる。しかし、雲雀にはまるで通じない。

「ところで、殺し屋である君の素性が並盛町に知れ渡ったらどうなるだろうね？」

「……そうね。ほとぼりが冷めるまで、並盛町で過ごしくなくなりそうね」

「そうだね。さて、そのほとぼりが冷めるのはいつだろうね。1週間後か、1か月後か、1年後か、10年後か……」

「でも、並盛の人たちが、私が殺し屋だって信じると思うのかしら？ こう見えて、私って殺し屋には似つかわしくない容姿だけど」

「僕がそう命令すれば、嫌でも信じ込み、君を町から追い出そうとするよ」

雲雀の物言いにビアンキはサアアと血の気が引いていくのがわかった。

もしも自分の正体を吹聴されたら、沢田綱吉を立派なボンゴレ10代目に育てるために並盛町に留まるリボーンに、容易には会えなくなるからだ。

「雲雀恭弥、何が目的なの？」

「君のポイズンクッキングを毎朝、僕に配達してほしい。もちろん、相応の報酬は用意する。そして、このことは他言無用だ。これを破ったら、わかるね？」

「自殺志願者？ それとも毒殺したい人がいるの？ それならそうと、依頼すればいいのに」

「君の想像に任せるよ」

ビアンキの詮索をあくまではぐらかし、雲雀は不敵に笑う。

ビアンキは想定より遥かに厄介な男に目をつけられたと辟易としつつも、応接室を後にした。

その際、ビアンキの耳にわずかに雲雀の声が届いたが、内容は残念ながら聞き取れなかった。

「……自殺志願者、ね。否定はしないけど、死ぬつもりはないよ。近い将来、死なないために今、命を削るのさ」

## 風紀6. †爆破才子でも風紀を守ろう†

最近何だか元気が出ない。仕事に、家事に、中々身が入らない。そんな悩みを抱えるその貴女！ 灰色がかった毎日に彩りを取り戻す、刺激的な商品はいかがでしょうか!?

†ポイズンクッキング†

この商品は、健康食品メーカー・ビアンキ社により開発されました。いかにも刺激的な名前とは裏腹に、味わいは(ドロドロとしつつも)滑らかで、(物理的に)ほっぺたが(溶けて)落ちちやいそうになるのが特徴的です。

しかも、ただ美味しいだけでなく、健康にも極めて高い効果を持っているんです。

現代科学ではまるで解明できない謎の各種栄養は、(毒を排出した体の本能から)お通じを良くし、(死を全力で脱却するために)頭の回転をガンガン早めるなど、まるで魔法のお薬を服用しているかのような劇的かつ様々な効能を貴女の体にもたらしてくれます!!

H・Kさん(年齢不詳)

「僕、常々長生きしたいなって思ってたんだよね。そこで目にしたのがポイズンクッキング! これを食べ始めてから本当に調子がよくてさ。視界が一気に彩り豊か(という名の紫一色)になって、文字通り世界が変わったんだ」

「(洒落でなく死にそうになる時もあるから)毎日毎日を大切にしようって、テキパキ日々を過ごすようになったし、(毒よりははるかにマシだから)普段食べている料理が涙が出るほど美味しく思えるようになったしね」

「本当にポイズンクッキングと出会ってよかったと思ってるよ(だから画面の前の皆も僕と同じ苦しみ味わってもらおうかな。さあさあさあ。食中毒、皆で発症すれば、怖くない!)」

※個人の感想であり、効果には個人差があります

さあ、その貴女もポイズンクッキング! ポイズンクッキングは



いかがでしょうか!?

ポイズンクッキング1か月分、本来なら8,600円(税込み)の所、今なら4,900円(税込み)!

4,900円で商品をお求めいただけます! さらに、2か月分をご購入の方には9,800円(税込み)、ではなく! 今なら9,000円(税込み)で提供させていただきます!

また、もしもポイズンクッキングをお試しになり、效能を感じられなかった場合、ポイズンクッキングのご購入金額を全額返還させていただきます! (どうせ大半の人は死んでるだろうから、実際は返還しなくて良さそうだしね)

貴女の生活を(ある意味で)ガラリと変えるポイズンクッキング! 貴女の漫然とした毎日に(致命的な)刺激を加えるポイズンクッキング!

貴女を新境地へ導くポイズンクッキング! いかがでしょうか!?

お求めの際は、XXX—XXX—XXX—XXXまでおかけください!

貴女のお電話をお待ちしております!

◆◆◆

…:ハッ、ここはどこ!? 僕は誰?!

つと、周辺の様子を察するに、今日も応接室でポイズンクッキングを食べる日課をこなした結果、僕は久々に意識を飛ばしていたらしい。

どうせポイズンクッキングの効果で珍妙な夢でも見ていたのだろう。

ポイズンクッキングの強烈な毒性ってば本当に恐ろしいね。

だって、ポイズンクッキング摂取生活開始からもう数ヶ月経ってるのに、未だに慣れないもん。今みたいに、たまに気絶しちゃうし。

こんな体たらくじゃ、毒を制する時は一体いつになることやら。

せめてヴァリアー編までには間に合っしてほしい所だね。

さて。そんなこんなで夏休みが終わり、2学期になった。

リボーンが僕に目をつける時期がついやって来たようだ。

今の僕は、憑依前と比べて咬み殺し芸を控えめにしているので、リボーンが僕の存在に気づくのが遅れるかもしれないが、そんなものは誤差の範囲内だ。

確か、リボーンがボンゴレファミリアのアジトを作るとの名目で、ツナくん、獄寺くん、山本くんを応接室へ誘導する形で、僕と主人公一行との記念すべき初対面が為されるんだよね。

うーむ、どう対応したものか。

リボーンの目的は僕との戦いを通して主人公勢に実戦トレーニングを行わせること。

下手にリボーンの思惑に逆らうと後が怖いから基本的に原作の雲雀さんの行動準拠が無難だけど、一方でツナくんたちをボコリたくない気持ちもある。

むむむ、本当にどうしよう。雲雀さんのスタイルを考えるなら問答無用で咬み殺すのが正解だけど、ボンゴレ10代目と愉快的守護者たちが大好きだっていう僕の感情を捻じ曲げてまで非情に徹するのは果たして正解と言えるのか。

……まだツナくんたちは応接室に来てないんだし、今はまだ考えなくていいか。

どうするかは、実際にツナくんたちと会って、その時の流れで考えよう。

僕が雲雀さんに憑依して、原作と外れた行動をしているのなら、バタフライエフェクト的な何かでツナくんたちの性格が変わってるなんてこともあるかもだしね。

臨機応変。当意即妙。量体裁衣。フレキシブルな対応こそが大切なのです！ 思考放棄万歳。

よっしゃ！ そうと決まれば、いつ来てもいいからね！

ツナくん！ 獄寺くん！ そして添えるだけに定評のある山本くん！



こここの所、ツナこと沢田綱吉の学校生活はハチャメチャ続きだった。

思いつきり赤ちゃんなのに、殺し屋なりボーンがツナの家教師になったことを機に、多種多様なごたごたが舞い込むようになったのだ。

こんなことになったのは、なぜかダメツナな自分がボンゴレ10代目候補者だから。

マフィアの物騒すぎる世界の住人になんてなりたくないツナとしてはいい迷惑である。

そんなある日。リボーンの提案でボンゴレのアジトを並盛中の応接室に作るようになった。

当初、本格的なマフィア活動なんてしたくないツナはあまり乗り気でなかった。

しかし、獄寺や山本がやる気になっていることや、リボーンの提案に抵抗しても無駄なこと、応接室に今まで入ったことがないことなどを勘案し、結局ツナも応接室へ向かうことにした。

ツナは獄寺と山本とともに応接室に入る。興味本位でキョロキョロ見渡してみると、部屋は質素ながらも綺麗に整っていて、応接室らしい格調高い雰囲気を感じられた。

(うわツ、何か凄いなあ。俺が場違いな感じ)

「君たち、誰だい?」

と、ここで。応接室の奥から声がする。どうやら応接室には先客がいたようだ。

ツナが声の主に目を向けると、ボサボサの黒髪、肩に羽織った学ラン、『風紀』と書かれた左腕の腕章が特徴的な人がいた。

(何かオーラのある人だなあ。もしかして先輩なのかな?)

「っと、聞くまでもなかったね。沢田綱吉、獄寺隼人、山本武」

「なツ!? テメエ、なんで俺たちの名前を知ってやがる!? ハツ、まさ

か10代目を狙う刺客か!？」

「10代目? 何それ? 僕はただ、並盛中の生徒全員の顔と名前を把握してるだけだけど」

「え、ええええええええええええ!？」

初っ端から突つかかる獄寺へ、目の前の黒髪の人がサラッと返事を  
する。

その内容に、ツナは素直に驚愕する。並盛中は各学年ごとにAからCまでの3クラス用意されており、生徒数もそれなりに多い。なのに、その全員のことを記憶しているというのだ。

全然勉強のできないツナはただ驚くことしかできない。

「ハッ、ますます怪しいぜ! テメエ、何者だ!？」

「知らない? 僕は雲雀恭弥、風紀委員長にして並盛中の頂点だ」

「風紀委員長だあ?」

「まあまあ獄寺。ここは俺に任せてくれないか?」

雲雀に常時ケンカ腰な獄寺を、山本が宥めつつ一步前が出る。

ピリピリとした雰囲気だと、山本の気遣いは本当にありがたい。

けど、いつもと違って、今の山本は少しだけ焦っているようだった。

(この雲雀さんって人、怖い人なのかな?)

ツナはブルリと身震いをする。ここ最近のハチャメチャ生活のせいで、ツナの中で『怖い!自分が命の危険に晒される』との方程式が組み上がっているからだ。

「ふうん。君なら話を進められそうだね。で、ここに何の用?」

「それがな——」

雲雀の噂を知っている山本が、雲雀を怒らせないためか素なのか、ニコニコ笑いながら雲雀に事情を話す。マフィアだとかアジトだとか、普通に考えれば『何言ってるんだ、こいつ?』と思われそうな話を雲雀はちゃんと最後まで聞き終えた。

「それで、しばらく応接室を貸してほしいんだが……」

「悪いけど、応接室を明け渡すわけにはいかない。もしどうしても応接室を使いたいのなら、正式な手段を取ってから出直してきてもらおうか」

「そっか。わかったぜ」

が、雲雀は山本の頼みを聞き入れず、応接室を譲る姿勢を見せなかった。

その返答を素直に受け入れる山本だったが、ここで獄寺がズイと身乗り出してきた。

「ああ？ 応接室はテメエの私物じゃねえだろうが！ なんで我が物顔してんだよ!？」

「私物だよ。今、応接室は風紀委員のものだ。それに、並盛を統べる立場としてのメンツがある。僕が何の対価もなしに後輩に譲った、妥協したなんて前提を作れば、僕を恐れて不良行為を控える草食動物どもが増長し、無駄に風紀が乱れる」

「はあ!? んなこと、知ったこつちやねえんだよ!」

雲雀の上から目線の物言いが気に入らず、獄寺が食ってかかる。

雲雀は冷静に言葉を返すが、聞く耳を持っていない獄寺を見る目が、段々冷酷なものへと変わっていく。ツナはふと、嫌な予感がした。

「ちよっ、ちよっと獄寺くん!」

「任せてください10代目！ 今すぐこの邪魔者を排除して、10代目に素敵なアジトを用意してみせます!」

「いや、そうじゃなくて!」

ツナは何とか獄寺の暴走を止めようとする。だが、当の獄寺はニカッとツナに晴れやかな笑顔を返すだけで、とても冷静になつてくれそうにない。

「果てる!」

どうしたら獄寺くんを落ち着けられるのか。ツナが必死に考えて

いる隙に、獄寺が仕掛けた。

タバコをくわえて火をつけ、両手いっぱいを持ったダイナマイトの導火線に当てて着火させ、雲雀へ投げ飛ばしたのだ。

「おい獄寺！ 何やってんだ!?!」

「ああああああああ!?! 避けてください!」

山本とツナがそれぞれ焦燥の声を上げる中。雲雀はいつの間に取り出したトンファアを構え、迅速に振るった。結果、導火線を切られたダイナマイトが爆発せずにボトボトと床に落ちる。よく見ると、雲雀のトンファアの側部から無数の棘が生えており、それで導火線を切断したようだった。

（え、何あのトンファア!?! 物騒すぎない!?! というか、獄寺くんのダイナマイトを無効化した!?! 雲雀さんって一体……）

「……へえ、そう来るか。群れることしかできない草食動物の分際で、生意気だね」

「んだと!?!」

「君たちが譲らないのなら、仕方ないな。正当防衛で、今から君たちを咬み殺す」

イレギュラーな改造が施されているらしいトンファアに驚いたり、雲雀の実力にビックリしたりとツナが忙しくしていると。獄寺の攻撃により、雲雀が戦う気になつたらしく、真正面から駆け出してきた。

「うわ、え、来たああああああああ!?!」

「10代目に手は出させねえ! 2倍ボム!」

ツナがわたわたと慌てていると、獄寺が先ほどの2倍のダイナマイトを撒き散らす。が、雲雀は何なく全てのダイナマイトの導火線を切りつつ、獄寺の腹部をトンファアで打ちつけた。ドゴオと。まるで車が歩行者にぶつかったかのような、鋭く重い衝撃音が応接室を伝播する。

「応接室は君たちのアジトにする予定なんだよね？　なら、ダイナマイトは使用禁止。ちゃんと弁えようか」

「ガハッ!」

「まずは一匹」

雲雀が獄寺の後頭部をトンファーで殴りつけ、獄寺を床に叩き伏せる。

雲雀の強烈なトンファー2連撃を喰らった獄寺の意識は遥か彼方へ飛ばされていた。

「次は君かな。すぐに片付きそうだし」

「お、俺!」

「おっと、ツナには手出しさせないぜ!」

「邪魔だよ」

ひいひいと悲鳴を上げるツナを庇うために、山本が立ち塞がる。

一方、雲雀は瞬時にトンファーを振り上げ、山本の下顎を打ち抜いた。

まともに頭を揺さぶられた山本は数メートルほど打ち上げられ、受け身を取れずに落下した。

「武器を持ってないのなら、こんなものか。これで2匹。さて、彼我の実力差は認識したかな。ところで、チャンスは与えてるつもりだけど、まだここから立ち退かないのかい？　なら、いい加減——本気で君たちを黽つて、病院送りにするけど?」

「は、はい!　立ち退きます!　すぐ帰るから見逃して——」

雲雀の人を殺せそうなほどの眼光にツナは竦み上がり、ぺこぺこと雲雀に頭を下げる。

が、その時。ツナは聞こえた気がした。どこからか、「情けねーぞ、ツナ」とのりボーンの眩きと、パァンとの乾いた発砲音を。

直後。ツナの額に、銃弾が命中する。

為すすべもなくその場に倒れる中、死にながらツナは後悔した。

俺、こんな所で死ぬんだなど。こんな形で人生が終わるのなら、せ

めて——例え獄寺くんのダイナマイトが雲雀さんと敵対した原因で、俺たちに非があるとしても、それでも雲雀さんに傷つけられた獄寺くんと山本のために、逃げずに雲雀さんと戦えばよかったと。

その後悔は力となる。死したツナの骸がムクムクと膨れ上がり、パンツ一丁かつ額にオレンジ色の炎をメラメラと宿したツナが爆誕した。

「復活！<sup>リ・ボン</sup> 死ぬ気でお前を倒す！ うおおおおおおおおお！！」

「あ、そう」

死ぬ気モードのツナは雄叫びを上げて雲雀へ殴りかかる。

対する雲雀はツナの拳を軽くないなし、ツナの後頭部を掴んで床に叩きつける。

が、その程度でツナは止まらない。己の後頭部を押さえる雲雀の手を、うつ伏せのまま右手で殴りつける。後頭部の押さえつけがなくなったツナはピョンと跳ね上がり、雲雀へ猪突猛進する。

だが、その途中でツナは止まった。パァンと、ツナの足元に銃弾が穿たれたからだ。

ツナが見ると、雲雀のトンファアの先端部分に穴が開き、そこから硝煙が上がっていた。

「もう一度言うけど、そろそろ本気で病院送りにするよ？」

「そこまでだ」

膠着状態を破ったのはリボンだった。

応接室の窓から身軽に中へと飛び降りると、トテトテと雲雀の元へ歩み寄る。

「やっぱつえーな、お前」

「君は誰かな？ 赤ん坊にしては随分と知的そうだけど、その沢田綱吉の援軍かい？」

「さあな。ツナ、撤退するぞ。2人を運べ」



「おう！」

リボーンは雲雀の問いに答えずに、ツナに指示を送る。

その後。死ぬ気のツナが気合いで獄寺と山本を担ぎ上げて応接室をズダダダダとダツシュで退出すると同時に、リボーンは床に散らばるダイナマイトの内の1本に焼夷弾を発砲した。

結果、ダイナマイトが爆発。他のダイナマイトも連鎖的に爆発し、応接室は大惨事と化した。

かくして。主人公勢と雲雀とのデンジャラスな邂逅は幕を閉じるのだった。

## 風紀7. †総大将を逃がして風紀を守ろう†

ふっはつくらえ！ ふっはつくらえ！ ふっはつくらえ！  
ふっはつくらえ！ ふっはつくらえ！ ふっはつくらえ！

ふいー。疲れた、疲れた。よし、今日の鍛錬はこんな所かな。

僕は仕込みトンファアを仕舞い、地面に置いていたペットボトルの水を頭上へ持ち上げる。

そして、ペットボトルを傾け、バシヤアと頭から水を被る。

ああ、気持ちいい。超気持ちいい。この瞬間がホントたまらない。

さて。今、僕がいるのは並盛山の人気のない一角である。

そう、ボンゴレ守護者たちが修行の際に御用達にしていたあの場所である。

日課というほど頻繁ではないが、僕はここでトンファアをひたすら振るって鍛錬をしている。

理由は簡単。今後リボン世界に怒涛の勢いで訪れる物騒な展開の数々に対応するためだ。

いざという時に、我が身や仲間をマモレナカッタ……とならないために、日頃の努力が大事なのである。特に、今の雲雀さんの中身たる僕はあくまで凡人、平民。本来の雲雀さんのような天才じゃないんだから、鍛錬を通じて心を鍛える必要があるわけだ。

目標はトンファアの素振りを繰り返し、心を鍛えつつ通常攻撃を秘奥義級に仕上げることに。

感謝の正拳突き1万回とまで突っ走るつもりはないが、「ふっはつくらえ！」の連撃のラッシュで六道骸辺りを秒殺できればいいなと思っている。……無理かな？

あ、何気に今の僕は男装をしていない。

周囲に誰もいないんだから姿を偽る必要なんてないからね。

ゆえに、今はありのままの恭華さんの姿なため、汗や水の滴る美少女状態となっている。

おそらくこんな状態で町に繰り出せば、欲望に忠実な男たちがじや

んじゃん釣れちゃうのだろう。安定のさすひば案件である。ピバ、恭華さん。

閑話休題。話は変わるが、並盛中ではそろそろ体育祭が開催される。

並盛中には文化祭がないため、自然と体育祭に力が込められるというもので。

まだ体育祭まで期間があるのに、生徒たちは応援旗を作ったり、優勝するために綿密に作戦会議を行ったりとハイなテンションで張り切ってくれている。

並盛中を盛り上げてくれる生徒の存在は、並盛を愛する雲雀さん的には歓迎すべき存在だろう。きっと、雲雀さんも内心で「いいぞ、もつとやれ」とか思ってるはず。

ちなみに、並盛中は各学年ごとにA〜Cクラスまで、用意されている。

そのため、体育祭では学年関係なく、縦割りでもA、B、C組に分かれて優勝を競うのだ。

中でも、並盛中の体育祭の目玉は棒倒し。男子のみが参加でき、5メートルほどの丸太状の木柱の頂上に各クラスの総大将が上り、その総大将を地面に落としたクラスが勝ちとなっている。

棒倒しは体育祭のメインイベント。その総大将は男子にとって最も輝きうる役回り。

ゆえに、各クラスは基本的に組を取りまとめる代表を総大将に選出する。

尤も、A組の総大将は組の代表たる笹川了平が総代表を辞退。その後、彼の推薦でツナくんが半ば強制的に総大将になっちゃうんだけどね。うん、南無。

その後の原作の大まかな流れとしては、体育祭の各競技がつつがなく進行する中。

獄寺くんと笹川兄とのケンカに横槍を入れたC組の総大将こと相撲部主将の高田剛助が2人に殴られ気絶。B組の総大将こと空手部

主将の押切連造がリボーンに襲撃され気絶。

B組とC組の総大将が棒倒しに出られなくなつたのはA組総大将のツナくんのせいという空気にリボーンが誘導した後に、A組対B&C組合同チームとで棒倒しが行われるのだ。

その際、雲雀さんはリボーンへの好奇心からツナくと戦うため、B&C組の総大将となるのだが……既にリボーンの情報を知っている僕がそれをする事はないだろう。

とすると、僕はこの体育祭でどういう立ち回りをしたらいいのだろうか。

校舎の屋上でお昼寝、はできないか。葉の落ちる音で起きちゃう雲雀さんだもの。

となると、屋上から体育祭の観戦とか、応接室でのんびりするとか、その辺かな。

……んー、いや。本当にそれでいいのかな。

今回の体育祭、原作通りに進めば、A組以外の生徒のツナくんへの心証は著しく悪化する。

獄寺くんが睨みでも利かせていたのか、その後の学校生活でツナくんがいじめられたりはしなかったけど、でもツナくんが好きな僕としてはツナくんのイメージ悪化はなるべく避けたい。

ツナくん、良い子だし。

となると、僕がやるべきは……リボーンの策略の阻止。これに尽きる。

リボーン的には棒倒しの前にB&C組の生徒のヘイトをツナくん集中させた方が棒倒しが過酷になり、ツナくんを成長させる糧になると思っているかもだけど。この体育祭が原作通りに進まないと後々詰むとか、そんなことはまずないはずだし、ちよつと妨害させてもらうよ。

ついでに、僕の鍛え上げた「ふっはつくくらえ！」がどこまで通じるか、試させてもらおうか。

……あ、うん。もちろん、冗談だよ？ あのリボーンに今の雲雀さんじゃまず勝てないしね。

何はともあれ、体育祭当日が楽しみになってきた。

◇◇◇

体育祭当日。生徒たちが各競技の結果に熱狂する中、リボーンは密かに動き始めた。

リボーンは何かツナに面白そうな出来事が舞い込むと、敢えてトラブルを発生させるなどして、ツナを騒ぎの中心に巻き込むようにしている。

リボーンなりに、ツナを肉体的かつ精神的に育てるとの家庭教師の使命を全うしているのだ。

ゆえに。体育祭という絶好の機会をリボーンが活用しないわけがない。

リボーンの考えは単純明快。ツナの所属するA組以外の全生徒からのヘイトが総じてツナに向けられるようにして、棒倒しでA組が勝利する展開の難易度を跳ね上げること。具体的にはB&C組の総大将をボコって、ツナに濡れ衣を着せる。そうすることで、B&C組は何が何でもツナを倒そうとするし、容易には掴み取れない勝利を前に、A組の総大将のツナを成長させられる。

(お、C組の総大将は自らツナたちに絡みに行くみてえだな。なら、オレが手を出すまでもなくノックアウトになるだろうな。んじゃ、オレはB組の総大将を仕留めるか)

現在、並盛中の校舎内をテクテク歩くりボーン。窓からC組の総大将たる高田の様子を確認すると、B組の総大将たる押切の入っている男子トイレへ向かう。

が、男子トイレの前には学ランにリーゼント姿の風紀委員が2名、仁王立ちしていた。

(護衛か、真面目だな)

そう。今年の体育祭では、なぜか『並盛中体育祭の看板たる棒倒し

を正々堂々と執り行うため』との名目で、各クラスの総大将の護衛役を担う風紀委員がいるのだ。

リボーンの脳裏に、つい最近出会ったばかりの風紀委員長の姿が浮かぶ。

何を考えているかはわからない。けど、この程度の戦力ではオレの障害にはなり得ない。

リボーンは髪を立てて、特注の並盛中の制服を着ると、ちやちやつと変装をする。

そして、舎弟スタイルになったリボーンはトイレ前の風紀委員の元へ近づいた。

「おう？ テメエ、見ねえ顔だな。ここに何の用だ？」

「ちやおツス！ 先輩、俺トイレに行きたいツス！」

「ダメだ。今はB組総大将が使用中だ。別のトイレを使え」

「もう漏れそうツス！ 行かせてほしいツス！」

「ごねようと無駄だ。さつさと帰れ」

「酷いツス！ 意地悪言う先輩なんて知らないツス！ ここは押し通るツス！」

「ガハッ!?」「ホゲッ!?」

リボーンの迫真の演技に、しかし風紀委員2名は全く取り合わない。

これ以上遊んでいても時間の無駄だ。リボーンはあくまで演技は続行しつつ、瞬時に風紀委員たちに蹴りを叩き込む。ちびっちゃん見た目からはかけ離れた威力の蹴りを的確にみぞおちに叩きこまれた風紀委員たちはまもなく倒れ、気絶した。

「よし、行くか」

リボーンは一瞬の内に舎弟スタイルの変装を解除して、いつもの黒スーツ姿に戻る。

早速男子トイレの中に踏み込むと、ちょうど洗った手をタオルで拭き終えたらしい押切がいた。

「ん？ お前、誰だ？ あのやたら付き纏ってくる風紀委員がトイレには誰も通さないって——」

困惑顔の押切に構わず、リボーンは押切を蹴り飛ばそうとする。が、ここで。リボーンは帽子に乗せている形状記憶カメレオンのレオンを短めの刺又に変化させ、真上に持ち上げた。直後、ガキインと派手に衝突音が巻き起こる。

刺又の感覚から、リボーンは己に危害を加えようとした者の武器がトンファーだと察知した。

「へえ。不意打ちが上手くいったと思ったけど、止めるんだ。やっぱり、君はただ者じゃないね」

「また会ったな、ヒバリ」

「そうだね。……秋田勝。押切連造を連れていけ」  
不意打ちを仕掛けた張本人たる雲雀にリボーンは平然と話しかける。

一方。雲雀は彼が連れていた風紀委員の秋田勝に速やかに命令を下す。

「はい！ 行きましょう、押切先輩！」

「お、おう？」

秋田勝と未だ困惑の最中にいるB組総大将がその場から離れ、男子トイレにリボーンと雲雀のみが残る中。リボーンは興味本位で雲雀に問いをぶつけることにした。

「ヒバリ。どうして今年は総大将に護衛を付けているんだ？」

「おかしいかい？」

「ああ。お前まで出張って、積極的に総大将を守ろうとしている所が特にな」

「……個人的な都合、とだけ言っておくよ。あと、君と仲良くしている連中が、C組総大将の高田剛助を気絶させてくれると思ってるようだ

けど、その目論見は叶わないよ。あつちには草壁哲矢を派遣して、総大将潰しを阻止するように言つてあるから」

「そうか」

「で、だ。まだ君がB組とC組の総大将を棒倒しの前に潰すつもりなら、僕が君を咬み殺す。見た目は赤ん坊なのに銃を扱ったり、僕の攻撃を受け止めたり……君には興味があるからね」

「オレはつえーぞ」

「だからこそだよ」

雲雀はトンファアを構え、好戦的な笑みでリボーンを見つめる。

その獰猛な肉食獣のごとき雲雀をリボーンは冷徹な眼差しで静かに見つめ返す。

その後、何を思ったのか。リボーンはクルリと雲雀に背を向けた。

「……今回はやめとくぞ」

「戦わないのかい？」

「ああ。オレは女を無意味に傷つける主義じゃねえからな」

「え」

ついさつきまで一触即発だったのに、リボーンは雲雀と戦わないこととした。

その理由を雲雀が尋ねると、リボーンはニツと口角を上げて、盛大に爆弾を落とすのだった。

◇◇◇

「……え、性別バレてる？」

リボーンがいなくなり、誰一人いない男子トイレに静寂が訪れる中。

しばらく硬直していた雲雀は、真っ白に染まりきった頭で、ポツリと呟いた。

雲雀はリボーンの恐ろしさを改めて認識した。



余談だが、雲雀の行動の結果、棒倒しはA組対B組対C組で行われた。

その際、勝利したのは、死ぬ気モードで暴れ回ったツナを総大将に据えるA組だった。

## 風紀8. †誕生会に出席して風紀を守ろう†

僕は今、男装せずに恭華さんの姿でショッピングモールを訪れている。

化粧品や衣服、アクセサリーなどを扱う店に片っ端から入っている。

雲雀恭弥としての男装技術を更なる高みへ向上させるヒントを掴むためだ。

体育祭の時、僕の男装は実にあっさりとりぼーンにバレてしまった。

少なくとも、憑依前の雲雀さんレベルの男装はきちんと再現できていたはずなのに。

僕の変装の何がいけなかったのか。どこに改善の余地があるのか。それを見つけるために、ショッピングモールで色んな商品を見て

回っているのだ。

もちろん、事前にファッション雑誌を読み漁った上でのことだ。

しかし、りぼーンに変装がバレたのは本当に想定外だった。

何だかんだ、隠し通せると思っていた僕は、間違いなくりぼーンを甘く見積もっていた。

同じマフィア関係者のビアンキが見抜けていなさそうだった影響か、楽観的だったのだ。

僕個人としては、別に雲雀さんの真の性別がバレようが問題ない。でも憑依する前の雲雀さんが隠していた以上、性別バレイベントは容認できない。

そんなことをやらかしたら最後、雲雀さんの精神が戻ってきた時に本気で咬み殺される。

容赦なくバリガブグシャムシャされて、食料にされる。うぼあ。

りぼーンに見破られたのなら、他のマフィア関係者も警戒する必要があるだろう。

特に、最強の赤ん坊ことアルコバレーノの面々に真の性別を隠し通

すのは困難だ。

とはいえ、アルコバレーノに性別がバレるのはそこまで問題視しなくていい。

アルコバレーノは性格に癖はあるけど、根本は悪人じゃないからね。……多分。

それよりも、Dr. シヤマルだ。シヤマルにだけは絶対にバレたくない。

三次元の女好きを極め、見目麗しい女性を見かけたら速攻でキスを仕掛けてくるあのキス魔おじさんなら、初対面だろうと直感で真の性別を見破りかねない。

そうなれば、今後シヤマルと出くわす度に付きまとわれてしまう。

雲雀さんじゃなくても、群れることを嫌がりストレスの溜まる未来が透けて見える。

僕が並盛山でトンファーを振るう修行の時間を削ってでも男装に力を入れるのも当然だ。

ちなみに、雲雀さんが女だとの弱みを知ったりリポーンはこれまで僕に大した要求をしていない。精々、性別を隠す代わりにツナくんがつい殺しちゃった泥棒の死体処理とツナくんの殺人の事実の抹消を頼まれ、ツナくん家に行ったぐらいだ。

それも結局は、泥棒の正体が自分の意思で心臓を止めて仮死状態になる「殺され屋」のモレッティだったためにツナくんは殺人をしておらず、当然リポーンもそのことを知っていたため、死体処理の案件はなくなった。ゆえに、これも要求の内には入らない。

後々厄介な要求をぶつけるつもりなのか。

それともこのまま僕に大した要求をしてこないのか。

どうなんだろうね。リポーンの思考はまるで読めないや。

「あ、恭華ちゃん！」

あ、ハルだ。声の元へ振り向くと、三浦ハルがパタパタと走り寄ってくる。

僕に手を振り、晴れやかな笑みを浮かべるハル。まるで犬耳や尻尾

がついているような感覚だ。なるほど、これが幻覚か。病みつきになつてしまふそうさだ。

「やあ、ハル。今日も元気だね」

「はい！ ハルは元気が取り柄ですから！」

「今日はどうしたの？」

「ハルはリボーンちゃんの誕生日のためにパーティーグッズを買いにきたんです！ そうだ！ 恭華ちゃんも一緒に祝いましょう！」

「え？」

「誕生会のメンバーが一人でも多い方がリボーンちゃんも嬉しいはずです！」

「待つて待つて。僕、そのリボーン？ のこと、知らないよ？」

「大丈夫です！ リボーンちゃんはプティティーですから、きっと恭華ちゃんも仲良くなれます！」

そういえば今日はリボーンの誕生日だったか。

なんて思っていたら、何か僕もリボーンの誕生日を祝う流れになつていた件。

むむむ、どうしよう。正直な所、リボーンにはちよつと会いたくない。

僕の渾身の男装をいとも簡単に見破つてのけたリボーンだ。

下手したら、今度は雲雀さんに憑依中の僕のことまで発見しかねない。

でも、ここで断つてハルの残念そうな顔を見るのは忍びない。

……考え中。考え中。考え中。終わり。

よし、決めた。リボーンに会いに行こう。

何を血迷ったかと思われるかもしれない。

でも、憑依のことを知られるリスクを負つてでも、リボーンに会いたい。

それで、リボーンから変装の指南をしてもらおうよう、頼みたい。

リボーンに弱みを握られている上にさらに貸しを与えることになるが、リボーン以外の面々に雲雀さんの性別がバレにくくできるメ

リットは大きいしね。シヤマル対策は最重要案件なのだ。

ついでに、恭華さんモードの時ぐらい、ツナくんたちと仲良くなっておきたい。

せっかくハルが誘ってくれたわけだし、僕もリボーンの誕生会に参加するか。

「そうだね。うん、行こうか。特に用事もないしね」

「恭華ちゃんならそう言ってくれると思ってました！」

「でも、僕が行っていいか、そのリボンって人に確認を取った方がいいかもね」

「——オレは構わないぞ」

アイエエエエ！ ニンジャ!? ニンジャナンド!?

何と、シヨッピングモールの壁から忍装束のリボンが現れたのだ。

両手に持つは、形状記憶カメレオンのレオンが変化したらしい、壁と同じ色の布。

いつからいたかはわからないが、全く気配が読めなかった。さすりボ案件だね。

「はひ、リボンちゃん！」

「君がりボンなんだね。僕は雲雀恭華。恭弥兄の妹だよ。よろしくね」

「そういう設定で行くんだな。わかったぞ」

「前々から考えてたんだ」

僕はその場にしゃがみ込んでリボンと握手すると、早速リボンが、『雲雀恭華Ⅱ雲雀恭弥』だと見破ってきた。さすりボ案件その2だね。どこまで積み上がるのやら。

「ところでさ、リボン。早速だけど、君に頼みがあるんだ」

「オレの誕生会に来たら聞いてやるぞ」

「りよーかい」

まだ内容を言っていないのに、当のリボーンは僕の頼みを予測し終えている模様。

さすりボ案件その3の確立はあつという間の出来事だったようだ。そんなわけで。僕はリボーンの誕生日を祝うため、ツナくんの家へ向かうのだった。

◇◇◇

ツナこと沢田綱吉の現在の心境は果てしなく居たたまれないの一言に尽きた。

獄寺、山本、ハル、ビアンキ、ランボといった、リボーンが家庭教師となつてから頻繁に関わるようになった面々が誕生日の準備をこつそり進めている。

その話を聞いて、家族以外に誕生日を祝ってもらえるなんて初めてだとルンルン気分で帰宅した所、皆が用意していたのがリボーンの誕生日だったと判明したからだ。

加えて、獄寺以外の全員がツナの誕生日のことを知らなかった、あるいは忘れていたのだ。

自分の誕生日を祝ってくれるものと勘違いしたツナの羞恥心と虚しさは推して計るべきだろう。

具体的にはベッドに飛び乗り布団を被って「うわああああ！」と叫びたい心境である。

そのような内心を抱えつつも、ツナの部屋でリボーンの誕生会が開かれた。

山本の父親が竹寿司を切り盛りする寿司職人である関係から、山本から豪華な寿司が振舞われる中。ツナはふと、鉄火巻きをパクパク食べる女の子の姿が目に残まった。ボサボサの黒髪にちよつとだけ目つきの鋭い女の子。ツナはこの子に見覚えがない。

「えっと。君って初対面だよな？ 誰、かな？」

「ツナの知り合いじゃなかったの？ てつきりツナから紹介が入ると

ばかり」

「恭華ちゃんはハルの友達です！ 今日、バツタリ会ったので、連れてきちゃいました！」

「雲雀恭華だよ。場違いかもだけど、今日はよろしく」

ツナが問いかけると、ビアンキが中トロを頬張りながら小首を傾げる。

ハルが女の子の両肩をパシツと掴んで、その女の子が自己紹介をした時。

ツナ、獄寺、山本の3名は『雲雀』という名字に反応し、ビシリと硬直した。

「え、雲雀!?!」

「雲雀ってまさか!?!」

「んー。その反応を見るに、恭弥兄は派手にやってるみたいだね」

「……え、恭弥兄って……も、もしかして、あの雲雀さんの妹なの?」

「あの雲雀さんがどの雲雀さんかはわからないけど、僕は雲雀恭弥の妹だよ。改めてよろしく」

「えええええええええええええええええ!?!」

山本と獄寺が反射的に尋ねると、恭華はやれやれと頭をかく。

その言動から思い至った予想をツナが質問すると、あっさり恭華は肯定した。

ツナは思わず驚愕の声を上げる。いとも簡単に獄寺と山本を倒し、ツナに恐怖を刻み込んだ雲雀恭弥に、大して危険性のなさそうな妹がいることがとにかく予想外だったのだ。

「ああ、妹だったのか。ハハッ、そう言われて見てみたら確かに雲雀の面影があるな」

「アハハ、目がそっくりだってよく言われるよ」

「へえ。貴女、あの雲雀恭弥の妹なのね。それにしても随分と普通そうね」

「雲雀家が全員アウトローと思われるのはちよつと。恭弥兄が全力で

突き抜けてるだけだよ」

「はひ？ 恭華ちゃんのお兄さんって有名なんですか？」

「気になるならネットで検索してみよう。ただし、心の準備は念入りにね」

大して雲雀恭弥に思う所のない山本は朗らかに笑いながら恭華の印象を口にする。

過去に雲雀恭弥に取引を強要されたビアンキは興味津々に恭華を見つめて感想を零す。

他校の生徒ゆえに雲雀恭弥を知らないハルはコテンと首を傾げる。そのような各々の反応に随時返事をしながら、恭華はポンと胸に手を置く。

「とりあえず、僕のこととは気軽に『恭華』とでも呼んでよ。その方がややこしくないでしょ？」

「おい、雲雀妹。テメエの家を教えろ！」

「え、どうして？」

「雲雀の奴にやられっぱなしは性に合わねえんだよ！ だから、殴り込む！」

「ああ、なるほど。恭弥兄の友達なんだね。いいよ、教えてあげる。これからも仲良くしてやってよ。不器用を拗らせてるけど、良いお兄ちゃんだからさ」

と、ここで。獄寺が恭華の両肩をガシツと掴んで、雲雀恭弥の住所を絞り出そうとする。

が、獄寺の粗暴な言動に恭華は全く動じない。眼前の獄寺が全身から表出させている『打倒・雲雀恭弥』な敵対心に気づいていないのか、ニコニコ笑顔で獄寺に対応する。

「はあ!? なんで俺がああの野郎と友達なんだよ!? お断りだ！」

「ふむふむ。これが男同士の友情って奴か。難しく僕にはよくわからないな」

「だから！ 勘違いすんじゃないやねええええええ!!」



結局、雲雀恭弥と友達だとの恭華の認識を変えられなかった獄寺は、恭華から住所を聞くことをやめた。妹に變に誤解されたまま、雲雀恭弥の家に行きたくなかったからだ。

(さ、さすがはハルの友達。ハルとは別方向の天然だ、この人……！) 「ま、誕生日の主役がいるんだから僕の話はここまでにしよう。とにかく、おめでとう。リボーン。……あと、ついでに沢田くん？」 「ついでにって言わないで！ 悲しくなるから！」

恭華はリボーンを祝福した後、おずおずと明日に控えるツナの誕生日も祝う。

そんな恭華の善意な気遣いの影響で、ツナは再び居たたまれない心境に追いやられる。

少し天然だけど、気遣いのできる落ち着いた人。これがツナの恭華への第一印象だった。

◇◇◇

余談だが、この後リボーンの誕生日会は平穩に執り行われる、なんてことはなかった。

ボンゴリアン・バースデーパーティーという、誕生日を迎える主役が参加者のプレゼントや出し物に100点満点の点数をつける企画が始まったからだ。

最上位の参加者は主役から豪華プレゼントをもらえるが、最下位の参加者は殺されるという物騒な企画にて、参加者がそれぞれ個性的なプレゼントや出し物を披露する中。

誕生日会へ飛び入り参加な恭華は、所持している仕込みトンファー(お遊び用)から水鉄砲やシャボン玉、各国の旗などを繰り出す、お手軽パフォーマンスで60点を確保した。

そして、ボンゴリアン・バースデーパーティーは最終的にツナ&獄寺の、人が入った箱に剣を刺す手品(種なし)で幕を下ろした。

誕生日会の終了後、リボーンと恭華がコソコソと話をしていたのだ

が、死ぬ気の手品の影響で体を痛めて病院行きとなったツナには知る由もないのだった。

## 風紀9． †唐突に入院して風紀を守ろう†

結論だけ言うと、リボーンは僕に変装技術を教えてくれることになつた。

自宅で待機していると言われたため、僕は今、自室のベッドで二度寝を試みている。

雲雀さんの体に憑依してからというもの、睡眠欲が膨れ上がってるからね。

睡魔には勝てなかったよ。ま、眠るのって気持ちいいから勝つつもりなんてないのだが。

ちなみに。今日は平日だから、本当は並盛中へ行かないといけない。

しかし、雲雀さんを校則ごときが縛れるわけがないのだ。仕方ない。仕方ない。

「誰だい？ 降りてきなよ」

と、ここで。天井からかすかに人の気配を感じ取ったので、呼びかける。

十中八九リボーンだろうけど、もしかしたら別人——例えば、雲雀恭弥のことを知らずに忍び込んだ恐れ知らずの泥棒とか——かもしれないので、声色に不機嫌オーラを乗つけてみる。

「ほう。オレの接近に気づくとは、やるじゃないか。パオーン！」

（パオーン？ え、リボーンじゃないの？）

直後、天井板がクルリと回転するのに合わせて一人の老人が部屋に飛び降りてきた。

ゾウの被り物。白いあごひげ。小さな体躯。露出した上半身。老成された雰囲気。

とてもリボーンとは思えない人物の唐突な登場に僕は内心で混乱する。せざるを得ない。

「オレはパオパオ老師。ムエタイを極めに極めた男だ。パオーン！」

「……ワオ。で、そのムエタイの達人とやらが僕に何の用かな？」

「オレとの約束を忘れたのか？ パオーン！」

「約束？ ……ん？ もしかして君、リボーン？」

「正解だ」

まさかとは思うが、眼前の人物が変装したりリボーンではないか。

『約束』というキーワードからその可能性に気づいた僕は確証がないまま率直に問いかけると、パオパオ老師はニヤリと笑い、一瞬の内に黒スーツ姿に着替え終える。

「ちやおツス。ヒントを与えたとはいえ、すぐに見破ってきたな」

「へえ……」

いつもの服装に戻ったりリボーンが僕の観察眼を素直に褒める。

一方、僕はリボーンの変装技術に戦慄した。僕は原作でリボーンの変装一覧の中にパオパオ老師のスタイルがあることを知っていたはずだ。しかし、それでもいぎ目の前にしたら、パオパオ老師がリボーンだとは全然わからなかった。一切、違和感を抱かなかったのだ。

「なるほど、これがプロの変装か……」

「オレレベルになれば、性別を隠し通すのも簡単だろうな」

「どうすればいい？」

「そうだな。動物の着ぐるみパジャマを作れ」

「え？」

「犬、猫、兎、鼠、亀、虎、鯨、蛙、羊、パンダ、イルカ、ランボ。何でもいい、いっぱい作って着ろ。そして、着た動物の気持ちになった言動に心掛ける。これが第一段階だ」

「……それで本当に変装が上手くなるのかい？」

「今のオレは家庭教師だ。相手が誰だろうと、教育に手は抜かないぞ」

「……わかった」

「んじゃ、ヒバリが上達した頃にまた来るぞ」

僕の返事を聞いたリボーンは窓を開けて飛び降りるようにして僕の家から去る。

自室に一人残された僕は、しばし考える。今、リボーンが提示した方法ではたして変装が上手くなるのか。着ぐるみパジャマなんて作っても無駄にしかならないのではないか。

(ま、リボーンは変装の達人なわけだし、今は信じるか。それに、色んな動物の着ぐるみパジャマを着たきやわわな恭華さんを見てみたいしね)

かくして。僕は着ぐるみパジャマの世界へと足を踏み入れた。

◇◇◇

さて。そんなこんなで時は過ぎ。僕は着ぐるみパジャマの作成に熱心に取り組んでいる。

もちろん、並盛町の巡回も忘れない。風紀を守るため、男装モードで今日は朝から巡回している。が、しかし。ただいま体調が最悪です。急に体調が凄まじく悪化しちゃってます。

雲雀さんの体は頑丈で病気にも強く、滅多に風邪を引かない。となると、これは毒の症状か。

ここ最近はずんくツキングにどうにか慣れてきた頃だったので、完全に油断した。畜生。

うう。視界がグルグルしてて気持ち悪い。頭がガンガンとハンマーで殴られているようだ。

キイイインと金属系の耳鳴りも脳を揺さぶってくるし、南極にでも放り出されたかのような悪寒と、日中の灼熱砂漠に降り立ったような暑さが交互に迫ってくるし、もうわけがわからない。

幻覚に酔うとこんな感覚になるのだろうか。

だとしたら、僕は耐えられる気がしない。先が思いやられるね。

あーうー、あつい。ひざしがやばい。さむい。あつい。あつい。うん、あつい。

いま、なんがつだっけ？ 10がつ？ 11がつ？ でも、すごくあつい。やける。

いつそぬいでしまおうか。ここ、あきっぱらのじゅうたくがいただけ、だいじょうぶ。

あ、でもせいべつばれあるかな？ どうしよう。ぬぎかたしだいになんとかなる？ おー？

……ん、あれ？ ぼく、なにかんがえてる。なんか、おかしい。ぐにやぐにやきもちわるい。

これ、ほんかくてきにまずい。どこか、ひかげできゆうけいしな、いと。

え、う？ あれ？ なんかうごけない。どういうこと？

あ、あー。これこんくりーと？ へえ、こんくりーとつてひんやりしててきもちいい。

どうろのまんなかでねころがってたらめいわくかな。でも、いいきもち。

もうすこし、このままで。あとすこししたらおきるから、うん。ふい——。



人間爆弾と称される香港の殺し屋ことイーピンは日々、修練を積んでいた。

風船が木に引っかかり、取れなくて泣いている自分より年上の子供を助けたり、腰が痛そうなご老人の荷物運びを手伝ったりと。5歳の少女でありながら、イーピンは善行を積んでいた。

そんなある日。規則正しく朝早くに起床し、並盛町を見回っていたイーピンは見つけた。

住宅街の路上の中心で、誰かが倒れているのを偶然にも発見した。

「——!？」

(訳：大丈夫!?)

イーピンは倒れている人物に駆け寄り、中国語で声をかける。が、当の人物の意識は沈んだまま。荒々しい呼吸を繰り返すばかり。額に手を当ててみると、酷い高熱だとわかる。汗も凄い。明らかに重症だ。

(救急車、呼ばないと！)

「！、――！、――！、――！」

(訳：急患！ 人、倒れてる！ 住宅街！ 早く来て！)

イーピンは周辺を一瞥し、公衆電話を見つけ、早速119番に連絡する。

が、イーピンの言葉は通じない。どうやら電話先の人物は中国語がわからないようだ。

「あれ？ どうしたの、イーピンちゃん？」

困り果てていると、ふと背後から落ち着いた女性の声がかかる。

イーピンがバツと背後を振り向くと、最近仲良くなった女性がコテんと首を傾げていた。

(京子さん！)

笹川京子。イーピンが現在居候中の沢田家によく足を運んでくる優しい人で。

イーピンにケーキの素晴らしさを教えてくれた恩人の一人だ。

「！、――！、――！、――！」

(訳：京子さん！ あの人の、重症！ 早く、死んじゃう！)

イーピンは京子を見上げて必死に言葉を紡ぐ。京子も中国語はわからない。

それでも京子はイーピンの様子から事態を速やかに察知した。

「イーピンちゃん、受話器貸して」

京子はイーピンから受話器を受け取り、倒れている男の容態や居場所を電話先に伝え、救急車を要請する。その後、京子はイーピンの力を借りて男の体を日陰に移す。

やっぱり京子さんは頼りになると。イーピンの京子への尊敬度がぐんと上昇した。

「えッ？…この人、まさか…?!？」

京子の驚愕の声を置き去りにして。

イーピンはキラキラとした眼差しを京子に向けるのだった。

◇◇◇

重症だった人物は並盛中央病院に運び込まれ、適切な治療が施された。

当の患者は今、病室で深い眠りについている。

イーピンは椅子に座って、ベッドで眠る患者をジッと見つめていた。

人を助けようとしたが結局は救急車を呼べなかったイーピンは、己の未熟さを悔いた結果、患者が目覚める時までは経過を見守りたいと思ったのだ。

「……ん」

昼下がりの日光が、白いカーテンの隙間から差し込む中。患者がおもむろに目を覚ます。

未だ意識がハッキリしていないのか、どこかぼんやりとしている。

「ハ、ハハハは……っ！」

「病院ですよ、雲雀先輩」

患者こと雲雀が無意識に呟いた問いに、イーピンの隣の椅子に座る京子が答える。

雲雀は京子の姿を意外そうにしばし見つめる。イーピンの存在に



はまだ気づいていない。

「君は、笹川京子だったか。助かったよ」

「先輩を助けたのは私じゃなくてイーピンちゃんですよ」

「……そう」

「!?」

「!」

(訳:京子さん!? イーピン、何もしてない! 救急車、呼べなかった!  
! 助けてない!)

京子は雲雀の感謝を受け取らず、代わりに隣のイーピンを抱きかかえる。

自分は力になれなかった。そう考えていたイーピンは京子の言動に困惑する。

どうにか雲雀の誤解を解こうと言葉を畳みかけるも、その行為は途中で遮られた。

雲雀が手を伸ばし、イーピンの頭にポンと乗せたからだ。

「?」

「ありがとう、イーピン」

雲雀の意図がわからず、雲雀に目を向けると。雲雀はよしよしとイーピンの頭を撫でて。心からの感謝を告げ、笑顔を浮かべた。もしも今の雲雀が冷静に頭の回る状況であれば、より雲雀らしくあろうと、少なくとも笑みを浮かべることはなかった。が、意識が朦朧としているこの時の雲雀に、そのような判断能力はなかった。

(m p t # : 2 t 9 — m % & ! ? )

今の動作で体力を使い切った雲雀が再び眠る中、イーピンの頬はカアアと赤く染まっていた。

脳裏に映るのは、先ほどの雲雀の屈託のない輝かしい笑みのラッシュ。

破壊力抜群な雲雀の笑顔の前に、イーピンは。あつという間に。雲

雀に心から惚れた。

雲雀の真の性別を知らない現状のイーピンは、まさしく知らぬが仏の好例であった。



ちなみに。イーピンは恥ずかしさが頂点に達すると、筒子時限超爆を発動する。額に九筒が現れ、八筒、七筒と切り替わる形でカウントダウンが為され、一筒になったのを最後に、盛大に自爆をするのだ。

当然ながら今回も恥ずかしさのあまり、無意識に筒子時限超爆を発動させようとした。

あわや大惨事だったのだが、ちょうど同時期に入院していて、リボンと愉快的仲間たちのハチャメチャっぷりに巻き込まれていたツナにより、筒子時限超爆の被害が雲雀や京子に及ぶことはなかった。

## 風紀10. †変質者から逃げて風紀を守ろう†

ただ順風満帆なだけの人生は存在しない。

誰であろうと。幸福と不幸を繰り返し、終着点に行きつくのだ。

一寸先には闇があり。またさらに一寸先には光があり。

その度に人は一喜一憂して、時間とともに人間性を成熟させるわけだ。

まあ、雲雀さんに憑依中の僕が何を言いたいのかというところ。

「待つてよお☆ 俺とチューしよーぜえ♡」

「にやあああああああああああ!?!」

キス魔おじさんことDr. シヤマルに捕捉され、標的とされ、追われている今の恭華さんモードな僕は紛れもなく不幸の時間に突入しているということだ。



不幸の始まりはほんの些細な出来事からだった。

僕が無事、退院してから月日は流れ。並盛町が冬を迎え、新年を越して。ますます寒さが肌に突き刺さる中。休日だろうと当然のように並盛中に登校し、草壁さんとともに応接室で業務に励んでいた所。ふと、校庭からワーワーと騒ぎ声が聞こえてきた。

ちょうど本日分の業務を終えたばかりということ。僕は温かい緑茶を用意しつつ、窓から外を見下ろすと。眼下には、ツナくんたちが3チームに分かれて派手に雪合戦を行っていた。

様々な思惑が錯綜しつつも純真無垢に、真剣に遊ぶツナくんたちを見て。

ふと。気の迷いか、僕も雪を使って遊びたくなった。童心に返りたくなった。

とはいえ、雲雀恭弥に男装した状態で雪遊びなんてやらかせば、絵

面を第三者視点で考えるだけで壮絶なキャラ崩壊だし、その姿を誰かに目撃されたら目も当てられない。

そんなわけで、僕は人気のない公園に場所を移し、恭華さんな服装に着替え。

一人でコツコツと雪だるまを作ることにした。ハルを誘おうかとも思ったけど、やめておいた。

ハルは僕にかなり懐いている印象がある。僕の急な呼び出しがあると、例え新体操部の部活など他の先約があってもほっぴり出しそうな予感がしたからだ。

ボツチで雪だるま作りなんてつまらないと思うかもしれない。が、何事も凝ろうと思えば集中するし、楽しくもなるものだ。

まして、雲雀さんのスペックがあれば、クオリティの高い雪だるまも容易に作成できる。

モリゾー。キングさよなライオン。ソニック。グレートありがとうウサギ。まだ見ぬヒバード。どせいさん。まだ見ぬロール。オプーナ。せんとくん。ヴェルタースおじいさん。などなど。

色んな有名キャラクターを短時間に次々と生み出し、雪景色を背景にしたキャラたちの夢の競演を成し遂げた僕は、達成感を満喫しつつ、携帯で記念写真を撮った。

直後、僕の背後からパチパチパチとの拍手と、声が届いた。

(え、見られてた? 誰に——つて。げえツ、Dr. シャマル!? なぜここに!?)

「いやあ、君凄いな。可愛いだけじゃなくてこんな独創的な雪だるまを作るなんて、もーお反則だよ。ね、チューしていい?」

「え? は?」

「その反応は脈ありだね? それじゃ、遠慮なくう!」

「あ、いや、何その無駄に洗練された無駄な動き! へ、変態! こっち来るな!」

「やれやれ、変態とは心外な。俺は愛の伝道師さ。さ、君も素直になろっか」

(ダメだ、話が通じない！ 逃げないと！)

もしも僕が雪だるま作りに没頭しすぎなければ。適度に周囲に目を向けていれば。

シャマルの接近に気づけたはずだ。何たって、雲雀さんのスペックだもの。

しかし現実の僕は気づけなかった。時間は巻き戻せない。手遅れだ。

そんなわけで。僕は今、シャマルに執拗に追われている。ボスケテ。

◇◇◇

「待ってくれよ、かわいこちやーん♡」

「待つわけあるか！ というか、なんで僕をずっと狙ってくるんだ!？」

可愛い人なら僕以外にもいるよな!？」

「悪いが、今の俺は君にゾッコンなのさ」

「こんな嬉しくない特別扱いとか初めてだよ、このロリコン!」

僕の逃亡劇もかれこれ10数分は経過している。その間、僕は逃げながらもシャマルに暴走をやめるよう色々と言葉を投げかけているが、まるでシャマル暴走特急が止まる気配はない。いつの間にか飲酒ブーストもかけているせいか、踏みとどまる判断能力も落ちていそう

だ。  
正直、これは大ピンチだ。ポイズンクッキングで入院した時以上にヤバイ。

シャマルは真面目な時は頼りがいがあるけど、日常編ではフルスロットルで女の敵だ。

京子ちゃんレベルの天然属性がなければ、スルーできないほどの変質者だ。

まさしく事案の権化、ギャグ時空な並盛町でなければ警官と戯れるべき存在だろう。

加えて、シャマルは単なる変質者のようでさりげなく強いマフィア

関係者だから厄介だ。

ビアンキのポイズンクッキングの顔面投擲には、ラップ的なもので顔面直撃を防いで回避する。

雲雀さんのトンファアを喰らいつつも、蚊を媒介としてサクラクラ病を伝染させる。

独立暗殺部隊ヴァリアーに誘われるぐらいだ。『厄介』の一言に尽きる。

この辺がフリーの殺し屋：トライデント・シャマルの強みか。なんてこった。

とにかく。下手に攻撃すれば、シャマルに妙な病気を植えつけられかねない。

攻撃できない危ない存在が迫ってくるなら、もはや逃げるしかない。

そもそも、雲雀さんが男装していたのが、過去に男に性的暴行されたとかそんな理由だとしたら、キス魔おじさんとは相性が悪すぎる。いつそ天敵だ。

そういった意味でも僕にはこのまま逃げる選択肢しか残されていない。

しかし、どこに逃げたものか。自宅バレなんて論外だからと、あてもなくテキトーに逃げ続けてきたけど、未だにシャマルを撒けていない。

逃げた先にツナくんがいればシャマルを押し付けられるのだが、まあ早々都合よくツナくんとは会えないだろう。さつきまで校庭で雪合戦してたわけだしね。

どうしよう、ホントどうしよう。

さすがにずっと走り続けるのは疲れるから、並盛中で雲雀さんのバイク回収は必須だ。

でも、バイクを使っても、それでもシャマルを撒けない予感がするのは気のせいだろうか。

ああもう。なんて恐怖体験だよ、これ。今日は厄日であったか。

「わッ!？」

しまった。走りながら考えすぎたせいで、前への注意が足りなかった。

そのせいで誰かとぶつかってしまったけど、幸いにも相手は転んでいない。

ただ僕の方が尻餅をついたただけだ。猶予はない、さっさと謝って早く逃げないと。

「大丈夫、ですか？」

「あ、はい。すみません。失礼し——え？」

差し伸べられた相手の手を掴んですぐに立ち上がりつつ、頭を下げて。

ぶつかった相手の顔を見て。知人を前に僕は思わず硬直した。

◇◇◇

並盛中の風紀委員たる秋田勝は寒空の元、精力的に風紀維持活動に励んでいた。

今日は雪が降り積もるほどに寒く、さらに休日だったが、それでも秋田勝は熱心に並盛町の見回りを行っていた。全ては風紀委員として、憧れの雲雀先輩の一助になりたいからである。

安易にホモ扱いしてはいけない一途さが秋田勝には秘められている。

「うう、さむッ」

制服を巧みにすり抜けて体を凍えさせる風に秋田がブルリと体を震わせる中。

偶然、近くに置かれた自動販売機が目に入り、秋田はつい足を止める。

(体が冷えてきたし、何か温かい飲み物でも飲もうかな)

秋田は自動販売機の飲み物を凝視しつつ、財布と相談する。と、その時。ドンと、秋田の肩に少々強めの衝撃が走った。つい転びそうになったけど、秋田はバランスを取って事なきを得た。

秋田の目の前には、「わッ!?!」と声を上げて、尻餅をつく少女の姿。どうやら自動販売機に気を取られていたせいで、誰かにぶつかったようだ。

「大丈夫、ですか?」

「あ、はい。すみません。失礼し——え?」

自分の不注意で怪我をさせてはいないか。

秋田は心配そうに少女に声をかけ、立ち上がりやすいように手を差し出す。

大した怪我じゃないらしく、少女はすぐに秋田の手を握って立ち上がり、秋田にペコリと頭を下げようとして、意外そうに目を丸くした。

(え? 何だろ、この反応?)

「あの、並盛中の風紀委員の人ですよ? 助けてください、変質者が追ってくるんです!」

秋田が少女の妙な反応に内心でクエスチョンマークを浮かべていると。

ハッと我に返った少女が焦りを多分に含んだ口調で秋田に頼み、秋田の背中に身を隠した。

「変質者?」

「ふいー、やっと止まってくれたか。君、体力あるなあ、ビックリだ」  
秋田が少女から詳しい事情を聞こうとした時、秋田の前方から声が響く。

視線を向けると、見た目30代半ばな髭の男性が膝に手を置いて荒く呼吸を繰り返していた。



「んあ？ 誰だお前？ そののかわいいこちゃんの彼氏か何か？」

ようやく呼吸を落ち着かせた男性が顔を上げ、秋田の顔をうつとうしそうに見つめる。

赤らんだ顔からして、男性が真昼間から全力で酔っているのは明らかだった。

「いえ、違いますけど」

「あつそ。じゃ男はあっち行った。シツシツ」

「いや、そういうわけにはいきませんよ。この子から助けられて頼まりましたし、風紀委員として、今の貴方は見過ごせません」

「それは言葉の綾。その子が素直じゃないってだけ。いいから彼女と2人きりにさせてくれ」

「嫌です」

「……あんまり大人を怒らせない方が身のためだぞ、少年？」

「自分を大人だって言うなら、もっと大人らしく振る舞ってくださいよ」

「ほう、言うじゃねえか」

秋田との会話を通じて幾分か酔いを醒ましたらしい男性がニヤリと口角を吊り上げる。

同時に、秋田は悟った。目の前の変質者がただ者ではないと。自己より遥かに強いと。

「な、なんでこの子を追い回してるんですか？」

「なんでって、一目見て気に入ったから以外に理由があるか？ 恋に理屈は通じねえさ」

「この子に恋したからって追い回していいことにはなりませんよ？ 怯えてるじゃないですか」

「だから怯えてないって言ってるだろ？ 百戦錬磨の俺の目に狂いはない。さ、わかったら。後ろのかわいいこちゃんを渡してくれ」

「い、嫌です。絶対に渡しません」

シヤマルから鋭い眼光をぶつけられ、秋田は思わず逃げ出したくな

る感情に駆られる。

しかし、秋田は逃げなかった。寸前の所で思いとどまり、男性との対峙を続ける。思い出したからだ。桃巨会のヤクザに絡まれたかつての自分を助けてくれた、尊敬すべき雲雀恭弥の姿を。

今、自分の後ろに隠れている女の子は、かつての自分だ。

怖い人にただ震えることしかできず、助けを求める自分自身だ。

ここで逃げることは、自分を見捨てるのと同じ。だから、譲れない。

「並盛町の風紀を守るのが風紀委員の務めです！」

秋田は虚勢を多分に含んだ宣言をする。

内心では男性に怯えながらも、絶対に退かない意思を示す。

と、ここで。秋田を睨みつけていた男性が「やれやれ」と頭を掻いた。

「あー、ヤダヤダ。これじゃ俺が一方的に悪人じゃないか。……仕方ない、かわいこちゃんとのチューはまたの機会にするか」

男性は興ざめしたと言わんばかりに踵を返し、姿を消す。

すると。秋田の背中越しに経緯を見守っていた少女が秋田に頭を下げた。

「助かりました。ありがとうございます、秋田さん」

「あ、どういたしまして。って、あれ？ どうして俺の名前を？」

「あ。……えと、秋田さんの話を恭弥兄から聞いていたので」

秋田が素直に尋ねると、少女は一瞬『しまった』といった表情を浮かべる。

が、少女は何事もなかったように秋田の名を知る理由を口にした。

（え？ 恭弥兄って言った？ それって雲雀先輩の名前だよな？ てことは、もしかして——）

「もしかして君、雲雀恭弥先輩のご家族の方ですか？」

「はい。妹の雲雀恭華です」

「ああ、先輩の妹さんですか。確かに目つきが似てますね」

「よく言われます。……恭弥兄、秋田さんのこと期待してるみたいですよっ。」

「ほ、本当ですか!？」

「はい。風紀委員のお勤め、頑張ってください。それでは失礼します」

少女こと恭華は助けてくれたお礼に秋田が喜びそうな言葉を残し、その場を去る。恭華の口から、雲雀恭弥が自分に好印象を抱いていると知った秋田のテンションが上がらないわけがなく。

「よ、よし! 見回り、もっと頑張るぞ!」

あたかも某ボクシング部部长が憑依したかのように全力で風紀維持活動に取り組むのだった。

## 風紀11. †桜舞い散る中で風紀を守ろう†

例のごとく、月日に関守なし。鳥兔匆匆うとそうそうと言わんばかりに時は過ぎ。

並盛町を温帯とは思えない寒さに突き落とした冬が終わり、その後に待つは——春ですね。

春、それはぽかぽか日和と花粉とのアメとムチとで馴染み深い季節。

終わりと始まり。出会いと別れを司り、人によって好き嫌いがはっきり分かれる季節。

そんな日本の春の象徴と言えば、満場一致で桜だろう。異論は決して認めない。

ま、どうしてもと言うなら異論を唱えてもいいが、その時は雲雀さんの咬み殺し芸の被害に遭うことを覚悟した方がいいかもしれない。雲雀さんつてば桜が好きっぽいし。

そんなわけで。雲雀さんに憑依してから割と長いこと経過しつつある僕は早朝から一人、桜のある公園を次々と巡っている。全てはベストポジションでお花見をするためだ。

部下の風紀委員を派遣して良い立地を調べてもらってもいい。が、あまり風紀と関係ないことで強権を振るうのは趣味じゃない。どの辺が花見に最適かを自分の目で下見するのも乙なものだろう。

ちなみに、今の僕は恭華さんモードで偵察をしている。

理由は簡単、男装で桜が満開な公園に乗り込もうものなら原作の流れになりかねないからだ。

ツナくんたちと出会い、お花見に適した立地を賭けた戦いになり、目障りなDr. シヤマルをトンファーで殴ったらカウンターで桜クラ病を植えつけられる。これが後々の六道骸との戦いで敗北する主な原因となる。以上、原作雲雀さんの歩んだ軌跡だ。

原作をある程度把握し、ただいま雲雀さんに憑依中の僕が敢えて桜

クラ病を患う必要はない。僕は雲雀さんの言動を模倣するスタンスだが、何でもかんでも原作通りが良いとは考えてないからね。ウイルスを植えつけられて喜ぶ被虐体質でもないし、桜クラ病はノーセンキュー。

お、ここいいかも。テキトーに雲雀さんの桜イベントのことを考えていると。

いい感じに桜が咲き誇っている桜並木一带を見つけられた。

スペースも広々としているし、そよ風も心地いい。

これは早速ベストポジションを探し出せたかな。幸先イイネ。

「あれ？ 君は——恭華さん？」

「雲雀妹!?!」

「お、久しぶりだな」

と、ここで。僕の背後から非常に聞き覚えのある声がある。三者三様の反応に振り向くと、ツナくん・獄寺くん・山本くんのいつものメンバーが勢ぞろいしていた。

これは、雲雀恭弥の姿で花見適切箇所を探らないで本当に良かったみたいだ。

でないと、原作通りに桜クラ病発症まっしぐらだったろうしね。これぞ、転ばぬ先の杖。

「えーと。沢田くんは獄寺くん。山本くんは合ってるよね？ やっほー。もしかして君たちもお花見の場所取り担当？」

「え。君たち『も』って……まさか恭華さん、雲雀さんに頼まれてお花見の場所を取ってるの?」

「そうだよ。ちなみに、ここがお花見ベストポジションだとも思ってる」

「え、ええええええええええええ!!」

僕の返答にツナくんがガビーンとの擬態語を引き連れて驚愕の声を盛大に上げる。

どうしよう。俺たちもここがお花見に良い場所だと思ってたのに、

このままじや雲雀さんと衝突しちゃうよ！ ツナくんの青ざめた顔から思考は割と容易に読み取れる。

わかりやすいなあ、ツナくん。ま、そこもまたツナくんの美德だと僕は思うけど。

「あはは、そんなに不安そうな顔しなくても大丈夫。恭弥兄は夜桜を楽しむみたいだから、日中はここを占拠しないって。恭弥兄とかち合いたくないなら、昼間の内にお花見を楽しめばいいよ」

「え？ そうなの？ はああ、良かったあ」

「ははは。ケンカしないで済むならそれに越したことはないよな」

「チツ。雲雀の奴、来ねえのか。あん時のリベンジの機会だと思ったのに」

雲雀恭弥の脅威が降りかからない旨を伝えると、心から安心するツナくん。爽やかボイスで自然体なままの山本くん。あからさまに悪態を吐く獄寺くん。

ふと彼らに対して、今日の前にいる僕こそが実は本物の雲雀恭弥なんだよ！ と思いつきリカミングアウトしたい心境に駆られるが、我慢我慢。

何のために雲雀さんの真の性別を隠しているのかわからないからね。

「お、恭弥兄のことを気にしてくれてるんだ。妹として、ホント助かるよ。この調子で恭弥兄と末永い交友関係を築いて行ってね」

「だから！ なんて俺があいつと友達になっただよ！ 雲雀妹！ 俺はただ10代目の右腕として、いけ好かねえあいつをぶちのめしたいだけだ！」

「ふむふむ。これがツンデレ男子って奴か。好き嫌いが分かれそうだけど……うん、僕は嫌いじゃないよ？」

「うがああああああああああ!!」

（獄寺くんって一見、弄られキャラとは無縁そうに見えて実は弄られキャラだよね。反応に幅があつて楽しいから、僕もついつい弄つちや

うし)

(あ、あの獄寺くんをまた手玉に取ってる！ 恭華さんの天然、ホントに凄え！)

カミングアウトを取りやめる代わりに獄寺くんをネタにしてみると、打てば響くように言葉が突きつけられる。いやあ、隣のツナくんが僕に内心で戦慄してるっぽいのも相まってか、超楽しい。

「まあまあ。落ち着けてって獄寺。つと、そうだ。恭華も俺たちと一緒に花見しないか？」

「あ、そうだね。ハルも来るし、恭華さんもどうかかな？」

「んー、面白そうだけど、僕は遠慮しとく。さすがに今日一日で2回もお花見に参加するのは体力が持たなそうだし、恭弥兄の夜桜鑑賞の方に付き合うよ」

ツツコミを放棄して荒れる獄寺くんをよそに。山本くとツナくんが僕を誘ってくる。

正直参加したかったが、今回は辞退した。今後登場するであろうDr. シヤマルが変態的な意味でも桜クラ病的な意味でも怖いからね。ちかたないね。ホント天敵だよ、あの闇医者！

「そっか」

「2人とも、誘ってくれてありがと。……ところで少し気になったんだけど、僕のことを『さん』付けしなくてもいいよ、沢田くん。別に僕は年上でも偉い人でもないからさ。山本くんみたいに普通に呼んでよ。もしくは愛称も可。もちろん、雲雀妹以外でね」

「え、えーと。恭華さんってたまに大人って雰囲気があるから、『さん』付けしないと違和感があつて。でも、そうだね。俺もこれからは恭華って呼ぶよ」

「うむ、そうしてくれたまえ」

僕は敢えて偉そうに鷹揚にうなづく。その場のノリって奴だ。

閑話休題。ツナくんが僕を『さん』付けする理由を尋ねてみたら、意外な答えが返ってきた件。

これってツナくんの超直感がニートをやめて、仕事をし始めているのかな。

僕の変装には違和感を覚えてないようだからまだまだだけど。

それにしても、ツナくんの常人を遥かに凌ぐ直感力——通称：超直感——って本当に凄いよね。

クトウルフなら目星（90）って所だからね。僕も欲しいと思うのは欲張りだろうか。

雲雀さんに超直感……虎にライトウイング、鬼にグレネードランチャーかな。

「おー！　また会えたね！　可愛いこちやーん！」

「ツ!？」

と、ここで。僕が最も聞きたくない声が耳をスルリと通り抜けた。

ビクツと肩を震わせ。ギギギと固まったロボットののように首だけ後ろを見やると。

一升瓶を抱え、ベロンベロンに酔っているキス魔おじさん：シヤマルがいた。

もしかしたら変態（シヤマル）じゃないかもと期待したが、そんなことはなかった。

「げえツ、変態！　じゃ、皆！　僕はこれで！　また何かあったら誘ってよ！」

「ああ！　待ってくれ、恭華ちゅわああああーん！　今日こそ俺とチューしようぜえ！」

「うぎゃああああああ！　名前知られた!?　最悪だああああああああああ！」

全力で肉薄せんとするシヤマルから逃れるため、僕は簡潔にツナくんたちに別れを告げ、逃走を開始する。やっぱり自力でなく、部下にお花見のベストポジションを探させるべきだったと後悔すれど、所詮は詮無きことであった。





ツナが獄寺、山本、リボン、ビアンキ、京子、ハル、ランボ、イーピン、奈々といった例のハチャメチャメンバーでお花見を楽しんだその夜。

外灯に照らされる、夜の荘厳な桜の情景は並盛中の風紀委員が独占していた。

雲雀恭弥が風紀委員長として、日々並盛町の風紀を守る風紀委員たちを労うための花見を企画したからだ（表向きは風紀副委員長の草壁哲矢発案となっている）。

まだ憑依前の雲雀が積極的に並盛町民から回収していたシヨバ代をふんだんに使用して開催されたため、風紀委員たちは各々、普段は滅多に食べられない豪華な料理を堪能し、はしゃいでいる。

（委員長は一体どこへ？）

そんな中。風紀委員たちが暴走せずに、ある程度の秩序を保ったまま騒いでいる様子を遠巻きに眺めていた草壁哲矢は雲雀の姿が見えないことに気づき、探していた。

己が幹事として挨拶をした時は近くの桜の幹に背中を預け、目を瞑っていた。

あれから大して時間は経過していない上、桜を好みわざわざ花見を企画した委員長が早々にいなくなるとは考えにくい。そのように推理を組み立てて付近にまんべんなく目を配っていると。

草壁はようやく雲雀の姿を発見できた。当の雲雀は、桜の少々太めの枝の上に腰かけ、満月を見上げていた。夜、満月、桜に彩られた雲雀は、草壁視点で非常に絵になっていた。

「ここにいましたか、委員長」

「僕は群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね」

草壁が声をかけると、雲雀は草壁を一瞥した後、満月を見上げて一言、零す。

確かに委員長は群れることを嫌う。だが、きっとそれだけじゃないと草壁は考える。

普段、風紀委員を力で統率する委員長は一般的には畏怖される存在だ。

秋田勝のようにただ委員長を尊敬する例外もいるが、大概是委員長に恐怖する。

そんな怖い人物が近くにいては、おちおち花見を楽しめない。

だから、委員長は風紀委員たちの目に入らない場所に移動したのだろう。

「……そうだ、草壁哲矢。君に聞きたいことがあったんだ」

「何でしようか？」

「もしも将来、僕が修羅の道を進むとして、君はどうする？」

「修羅、ですか？」

雲雀からの唐突な問いかけの意図がわからず、草壁は聞き返す。

一方、雲雀は草壁の質問返しは想定内らしく、そのまま言葉を紡ぐ。

「そう。暴力が絶えない、血飛沫が舞うのが日常茶飯事、人の命が軽い。そんな危険な世界に、地獄に僕が向かうとして、君はどうしたい？」

「……私は、委員長と同じ道を歩みたいです」

「早死にするかもしれないよ？ 僕の道は、大往生できる道じゃない。

命の心配をしなくていい、安寧な将来とは対極だ」

「それでも。委員長の行く道が、私の道です」

「……」

「委員長がどんな未来を見ているのかはわかりません。ですが、委員長が迷惑に思わない限り、私はどこまでも付き従いたいと、委員長の力になりたいと思っています」

「……ワオ。何とも盲目的で、短絡的で、面白い答えだね。そう、わかった。なら、君の好きにするといいよ。僕も好きだけど、君を巻き込ませてもらうから」

「はッー！」

雲雀は草壁の返答にわずかに驚いたように目を見開き、ニイと口角を吊り上げる。

雲雀の反応と言動から、草壁は少なくとも自分の回答は間違っていないと察し、安堵した。

後の草壁哲矢は語る。この時こそが、己の波瀾万丈極まりない人生の分岐点だったと。

## 風紀12. †海を満喫して風紀を守ろう†

うーみーはーひろいーなー、おおきーいーなー！  
つーきーがーのぼるーしー、ひがしーずーむー！

海の歌、詠唱完了。さーてと、ウエミダー！ ウエミダウエミダー

！

というわけで、恭華さんモードな僕は今、海水浴場に赴いている。ちなみに、今の僕は内心でテンションがキレッキレになっている。興奮冷めやらぬままにバサツと。水着を覆い隠すパーカーをスタイリッシュに脱ぎ、ビーチヘテクテク歩く。

理由は簡単、僕は海が好きなのだ。この度、ハルに誘われるまですっかり忘れてたけど。

一人で遊ぶも、皆で遊ぶも、遊び方は千差万別。ビーチバレー。ビーチフラッグ。スイカ割り。砂の城。砂山崩し。普通に泳ぐ。海洋生物鑑賞。何でもござれ。これぞ海のポテンシャルだよね。

とはいえ、ただ遊ぶのが目的で海水浴場に来たわけじゃない。僕の目的、それは——雲雀さんを褐色美少女に仕上げることに。

肌を太陽で焦がし、小麦色の肌になった雲雀さんに興味はないだろうか。

別に僕は褐色の魅力に憑りつかれているわけではないが、大いに興味がある。

雲雀さんは男だろうと女だろうと、日焼けによりさぞ魅力がマシマシになるだろう。

褐色イケメンならフェロモン増量キャンペーン、褐色美少女なら新境地開拓達成。

どっちにしろ、僕は日焼けという強烈な武器を手にした雲雀さんの姿を見てみたいのだ。

最近の太陽光は紫外線マシマシで危険だとの意見があるのはわかる。しかし、僕は生涯肌を焼き続けると決めたわけではない。

一度ぐらい紫外線を思いっきり体中に浴びるぐらい、セーフセーフ。

加えて、リボーンの連載時期からして、紫外線の威力はまだそこまで強力でないはずだ。

適度に紫外線を浴びることは健康に良い以上、過剰な心配はするべきでない。

日焼けサロンにでも行つて手っ取り早く褐色肌を入手しとけよとの主張もわかる。

しかし、マシンの力を借りて褐色肌をゲットなんて個人的に少々味気ない。

せつかくなら、褐色肌は人工的手段でなく天然の手段でモノにしたいのだ。

よつて。僕は海水浴場をギラギラと照り付ける太陽光の元で遊び、肌を焼く。

褐色肌という素晴らしい武器を手に入れた雲雀さんを姿見に移す瞬間が楽しみだ。

「あー！ 恭華ちゃん！ こっちこっち！」

「おっと。ハル発見」

内心でワクワクを募らせていると、ハルが手を振る姿が見える。

僕が先にハルを見つけ出すつもりだったが、ハルに先手を取られたようだ。

「今日は誘ってくれてありがとね、ハル」

「いえいえ！ 去年は恭華ちゃんと海で遊びそびれましたから！ 今年こそはとー！」

「気合い入ってるのはいいけど、ペース配分考えないと途中でバテるよ？」

「大丈夫です！ この日のために昨日はたっぷり寝ましたから！」

ハルは僕の両手を掴みながらハイテンションを全面に押し出す。

やっぱりハルの僕への好感度って凄まじいものがあるよね。もし

も僕が男なら、このハルはツナくんなんてそっちのけで『恭華×ハル』ルートへ一直線もあり得るのではなからうか。

なんてことを考えていると、ハルの背中から一人の女の子がヒョコッと顔を出した。

笹川京子。ツナくんのクラスメイトかつ想い人である。

「貴女が恭華ちゃん？ ハルちゃんからお話、聞いてるよ」

「そうなの？」

「はい！ 恭華ちゃんの良い所、いーっぱい話しましたよ！」

「……んー。ハルの言うこと、全部真に受けなくていいからね。僕は雲雀恭華。並盛中の某風紀委員長の妹だよ。ま、僕は恭弥兄みたいにボッチ狼気取ってないから、気軽に付き合っってほしいな」

「うん。私は笹川京子。並盛中のボクシング部の了平お兄ちゃんの妹だよ。よろしくね」

僕と京子ちゃんはきちんとお互いに自己紹介をしてから握手をする。

これまで僕は雲雀恭華としてロクに京子ちゃんと接触していなかった。

意図的に接触を避けていたわけじゃない。自然とエンカウトする機会に恵まれなかったのだ。

ハルとは割と頻繁に人付き合いがあるのに、なぜ京子ちゃんとは今まで縁がなかったのか。

不思議に思ったこともあったが、よくよく考えればそう不自然なことではない。

僕と京子ちゃんとの関係は、ハルを媒介とした友達の友達だった、というだけだ。

例えるなら、京子ちゃんの友達こと黒川花がハルとそこまで親睦を深めていないのと一緒に。

ハルの友達の僕と京子ちゃんとの関係が少々希薄でも仕方がない。

しかし、それも今日までのこと。せつかくこうして海を堪能する同志として巡り合ったのだ。

僕は本日、京子ちゃんと親交を結ぶことにしよう。そうしよう。僕は内心で『京子ちゃんと友達になろう』計画を進めつつ、海で遊ぶメンバーたるツナくん、獄寺くん、山本くんと合流する。そして。今回の集まりの発案者である了平くんの元に皆が集い、いざ遊ぶぞという機運が高まった時。大層ウザったい横槍が入れられた。

「うーっす」

了平くんの先輩であり、ライフセイバーの仕事を請け負っているチャライ褐色男たちがやってきたのだ。彼らはナンパ成功を目論んで、女性受けの良さそうなライフセイバーをしている低俗な連中ゆえに、ツナくんたちにライフセイバーの仕事を押し付けて僕たち女性陣を強引に遊び（意味深）に連れ出そうとする。と、ここで。獄寺くんを筆頭にチャライ褐色男たちの横暴に反攻したことで、なぜか敗者は勝者の下僕となるという謎条件の元で、ツナくん・獄寺くん・山本くん対チャライ褐色男3名の水泳勝負が開かれた。

結局。勝負は溺れる子供の存在でうやむやになった。

でもって、何だかんだでチャライ褐色男たちはツナくん、獄寺くん、山本くんにボコられた。

その後。僕たちは気を取り直して遊んだ。結果、僕は京子ちゃんと友達になれた。

熱烈な太陽光線のおかげで、肌もいい具合に褐色にできた。

が、あの善良なライフセイバーと褐色肌な男の人への風評被害待ったなしなチャライ褐色男たちの横槍のせいで、海で遊んだ満足感が多少減ってしまったのもまた事実。

せっかくの海のテンションを白けさせやがって。顔は覚えたからな。

一回ツナくんたちがボコっただけで終わるとか、甘いからな。

◇◇◇

「くそッ！ あの中坊、俺の大切な顔を容赦なく殴りやがって！ お

かげでナンパしづらくなつたじゃねえか！」

後日。夕暮れ。並盛中のある工場跡にて。

褐色肌をしたライフセイバーのチャライ男は憎々しげに顔を歪めていた。

彼の右頬は見事なまでに腫れ上がっており、見るからに醜い様相を呈している。

「ホント、生意気なクソガキだぜ！」

「絶対仕返ししてやる！ あいつらの動向はわからないのか!？」

「今、他の奴らが調べてる。直にわかるさ」

「へへへ、あの中坊、何で殴ってやろうかなあ？ やっぱバットか？」

「鈍器より、ナイフ持ち出した方が良くねえか？」

「銃がありや良かったんだがな。893と人脈があればなあ」

「チツ。あの婆さん、ロクに金持ってねえじゃんか。ひったくって損したぜ」

「はした金でも構わねえよ。人の不幸は蜜の味ってな」

今現在、工場跡にはチャライ褐色男たちが集結していた。その数、約100名。

誰もがモラルを失っており、己の欲望を満たすためなら平気で犯罪をやつてのける。

そのようなクズい共通点を持つ者たちがたむろする場所として、工場跡は機能しているのだ。

「おい、皆！ 聞いてくれ！ あのクソガキどもの予定がわかった！

あいつら、夏祭りに行くみたいだぜ！」

「それ、本当だろうな？」

「ちやんと裏は取った！ 間違いねえ！」

と、ここで。チャライ褐色男の一人が工場跡に駆け込む。

彼がもたらした情報にチャライ褐色男たちは活気づく。

「おお、ナイス！ いい仕事したぜ！」



「よっしや、あの間抜け顔を泣きべそに変えてやるぜ！」

「先輩の恐ろしさを体に叩きこんでやる！」

各々、負の感情を心に滾らせ、夏祭り会場へ赴く準備を進める。

沢田綱吉が、獄寺隼人が、山本武が。自分たちの手によりズタボロにされて、痛みに呻くことしかできないボロ雑巾となる瞬間を妄想して、ニタニタ顔で準備する。

と、その時。足音が響いた。コツコツと。ゆっくりと歩くような足音だ。

まるで、初めて工場跡にきたかのような、辺りを一瞥しながら歩んでいるかのような足音だ。

この場所を知る仲間たちの歩き方じゃない。チャライ褐色男たちは騒ぐのをやめる。

しばらく警戒を強めていると、一人の男が工場跡に足を踏み入れた。

ムスツとした顔。ボサボサの黒髪。肩に羽織った学ラン。『風紀』と書かれた左腕の腕章。そして。自分たちと同様の褐色肌が特徴的な男だった。

「へえ、集まってるね。ちょうどいい」

「んだ、テメエ？ ガキが何の用だ？」

「君たちは並盛町の風紀を著しく乱している。弱いばかりに無駄に群れている。咬み殺す相手として、ここまでピッタリな連中は珍しいよ」

チャライ褐色男がガンをつけると、対する男は涼しげな顔でトンファーを構える。

男が単騎で自分たちと戦おうとしている。チャライ褐色男たちは一斉にゲラゲラ笑い始める。

「ぎやははは！ バカだ！ この中坊、バカすぎて笑いが止まらねえ！」

「おいガキ。厨二病もいいけどよ、先輩舐めてつと痛い目見るぜ！」

「後悔してももう遅え！ 舐め腐ったこの中坊、潰すぞ！ 前哨戦だ！」

「「ひゃっはあああああ!!」」

チャライ褐色男たちは我先にと男を攻撃しようと近づいていく。

数の暴力を頼り、相手を舐めているのはむしろ自分たちだとのこと  
に気づく由はない。

「さて。良い悲鳴を頼むよ。心地いい、心に染み渡るものがないかな」

「いつまでも調子づいてんじや——あぎやあああ!？」

「ぐへあ!？」

「ぼがぶ!？」

この後、工場跡で繰り広げられたのはたった一人の男による蹂躞劇  
だった。

トンファアを装備した男はかすり傷すら負わずに、チャライ褐色男  
を一人一人丁寧にぶちのめしていく。まるで真・三國無双の一騎当千  
の武将のように。

結果、100名ほどいたはずのチャライ褐色男たちはあつという間  
に死屍累々となった。

が、工場跡を制圧したというのに男は止まらない。止まる気配がな  
い。

地に倒れる者どもを踏みつけ、蹴り上げ、追いつきのトンファアで  
殴りつける。

「悪いね。僕は機嫌が悪いんだ。気の済むまで、遊ばせてもらうから」

「ひ、ひいいいー!」

「黙れよ」

「ぐぎやッー!」

もうすっかり戦意を失い、怯えるだけのチャライ褐色男たち。

しかし、それでも男は止まらない。戦う気のない者をボコつてもつ  
まらないだなんて考えは欠片も持っていないのだ。男はトンファア  
を用いて、殴る。殴る。殴る。殴る。

「君たち、くれぐれも覚えていてね。並盛町の風紀を乱そうものなら僕が、並盛中の風紀委員長：雲雀恭弥が今みたいに咬み殺すから」  
「う、あ……」

「ああそうだ。君たちの全財産は風紀委員の活動資金として没収する。ついでに、身ぐるみを剥いだ後、君たちの身柄を警察に預けるから」

どれだけ時間が経っただろうか。チャライ褐色男たちに過剰な暴力を振るった男はようやく気を晴らしたのか、最後の仕上げとしてチャライ褐色男たちに精神的に恐怖を刻み込む。

かくして。チャライ褐色男たちは雲雀恭弥という、恐るべき存在を知ったのだった。

絶対に敵に回してはいけない、並盛町に君臨する支配者の存在を。

黒曜編を咬み殺す

風紀13・†Re：方針を決めて風紀を守ろう†

大人にとつての年月は短く、子供にとつての年月は長い。ジャーネーの法則というやつだ。

となると、雲雀さんに憑依中の僕の年月はそれなりに長いはず。

なのに、あつという間に並盛中の夏休みが終了し、気づけば2学期になっていた。

要するに、雲雀さんの褐色肌期間は終了した。夏の終わりを象徴する出来事の様で寂寥感を覚えるが、褐色雲雀さんを姿見で十分満喫したので、問題ない。

とと、そうじゃない。今回ばかりは思考を脱線している場合ではない。

ツナくんたちが中学2年生の2学期を迎えた以上、黒曜編について本格的に考えないと。

黒曜編。それは大々的に原作2巻分を使用したリボン初の長編である。

リボンがギャグ漫画から熱いバトル漫画へとシフトしたのもここからだ。

つまり、ハチャメチャながらも平穏なツナくんの人生はここでサヨナラバイバイ。

今後は命の危険がしつこく付きまとうマフィアの殺伐世界が眼前に広がっているわけだ。

当然ながら、雲雀さんのキャラを壊してでも全力で抵抗しなければ、ツナくんの守護者ルートが確定的な雲雀さんも同様の世界で生きることとなる。

この黒曜編の概略を簡単に表すと、マフィアが嫌いな六道骸くんがマフィアの殲滅と世界大戦(?)を企み、ボンゴレという立場を求めてツナくんを狙いをつけ、紆余曲折を経てツナくんに返り討ちにされ

る、と言った感じだ。

ちなみに、六道骸とは右目に『六道輪廻』という特殊な能力を秘めた強者である。

と、同時に、パイナップルヘアー大好きボーイや、雲雀さんとの Sakura addition な仲や、『クフフのフ〜僕と契約〜』とのキャラソングからして、ネタに事欠かない人気キャラだ。

そんで、黒曜編だが……正直、雲雀さんが関与しなくても何とかなる。

というか、できることなら関与したくない。なぜなら、雲雀さんの役目が骸くんがどれだけ強いかを読者の皆さんにお知らせする、咬ませ犬ポジションだからだ。

一応、ピンチの獄寺くんの命を救う役目もある。しかしそれは、柿本千種の最初の襲撃で横槍を入れて、獄寺くんに重傷を負わせなければ、その役目は意味を失う。

ゆえに、このことが僕が黒曜編に首を突っ込む理由にはならない。それに原作通りに事が進めば、雲雀さんは骸くんに憑依される。そうなったら、ただいま雲雀さんに憑依中の僕はどうなるのか。

骸くんと直接かち合う可能性がある。それだけならいい。

僕の持つ原作知識が露呈しかねない。それは致命的だが、まだマシだ。

でも、もしも、もしもだ。憑依のプロフェッショナルな骸くんの力で僕が雲雀さんの体から追い出されてしまったら。その時、僕に戻る場所はあるのか。

僕の本当の体へと戻るかもしれない。でも、そうじゃないかもしれない。

もしも僕の居場所がなかったら。寄る辺を無くした魂の末路はきつと、ロクなものじゃない。

ならば、僕は骸くんに憑依されるような道を進むべきじゃない。死にたくないし。

でも、雲雀さんの言動を模倣するつもりなら、骸くんの元に殴り込まない選択肢はない。

骸くんがツナくんをおびき寄せるために『並盛中ケンカの強さランキング』の上位ランカーを次々とスタボロにする以上、並盛町の風紀を守るマシーナな雲雀さんが動きを見せないのは凄まじく不自然だ。最悪、リボン辺りに原作知識の存在を看破されてしまいそうだし。さて、上記を踏まえ、僕はどのようなスタンスでいるべきか。

どのように動けば、僕は雲雀さんらしさを壊さずに済むだろうか。正直、骸くんと会うのは嫌だ。原作では桜クラ病の弱点のせいで雲雀さんは骸くんに負けた。

けど、桜クラ病の件がなくても骸くんの六道輪廻がチートすぎて雲雀さんの負け濃厚なのに、どうして負け戦に挑まなきゃいけないのか。

……でも、行かないわけにはいかないよね。

僕が雲雀さんに憑依してから、もう何年か経過して。

僕にも大事だと思える者が増えた。原作の主要人物だけじゃない。恐怖、畏怖。そのような感情の元で精力的に風紀維持活動に勤しんでくれる風紀委員一人一人にも愛着が生まれている。でないと、花見なんて思いつかない。

当然、雲雀さんのロールプレイ中の僕は態度には表さないけど。

そんな風紀委員たちが、これから骸くんの迷惑の元でボロ雑巾みたくされるのだ。

しかもペンチで『並盛中ケンカの強さランキング』の順位のみで永久歯を抜かれるのだ。

当然、麻酔はない。その壮絶な痛みは、想像するに余りある。考えるだけで被害者が可哀想だ。

……

……

よし、決めた。僕のスタンス。黒曜編における、僕の行動指針。原作の展開を考えると、この辺の終着点が妥当かな。被害をゼロにはできない。

僕は凡人だから、限界がある。でも、原作より被害を減らすことはできそうだし。

後は作戦をしつかり考えて、心の準備を終えて、実行に移すだけ。不安要素は多々あるけど、まあ雲雀さんのスペックなら何とかかなるはず。

さてと。そうと決まれば、後は流れでお願いしますってね。



その日。午前6時。並盛中の風紀委員2名は早朝の並盛町の見回りをしていた。

2人1組で動いているのは、雲雀恭弥が突如、9月を風紀月間として、風紀維持活動を行う際は必ず2人以上で取り組むようにと厳命を下したからだ。

「何を考えてるんだらうな、委員長」

「わからない。けど、雲雀先輩の先を見通す聡明な頭脳が導き出した指示だから、絶対何か意味があるって！」

「はあ。秋田ってホント、自分から委員長に尻尾ブンブン振ってるワゴンコだよな。そういう怖いもの知らずで一直線な所は尊敬するよ。真似したくはないけど」

「? よくわからない例えだな。でも、サンキュー。哀川」

哀川常男はやれやれとため息を吐き、秋田勝はコテンと首を傾げる。

2名は時折会話を挟みつつ、風紀委員としての職務を全うする。

と、ここで。住宅街を歩く2名の進路を塞ぐように眼前に複数的人物が現れた。

緑を基調とした制服を着た5名の者たちに、秋田と哀川は見覚えがあった。

「お前ら、黒曜中の生徒か。こんな朝っぱらから並盛町で何をしている?」

「ああ、ちよつと人を探していてな。ところで、君たちって哀川常男と

秋田勝？」

「え、ああ。そうだけど」

「お。22位と24位見つけ。幸先良いな。そんじゃ——死ねや！」  
「ガッ!」

相手が風紀を乱す輩でないか。確かめようと黒曜中学生の元へ近づくと哀川に、黒曜中の生徒の1人が背中に隠し持っていた角材が振り下ろされた。唐突な不意打ちに反応できず、頭を容赦なく殴られた哀川は為すすべもなく、地に倒れた。

「グ、オオオオ……」

「哀川!? お前ら、何のつもりだ!」

「ハッ。見てわかんねーの? 察しが悪いなあ。これだから並中生は」

「無茶言ってるやるなよ。並中生は総じて普通の雑魚なんだから。ハイスペックを期待するとか可哀想だろ」

「マジ言ってるわ」

「ッ!!」

激痛に悶える哀川の様子を愉快だと言わんばかりに笑う黒曜中学生たち。

さらに彼らが並盛中自体をバカにした時、秋田はキレた。

並盛中をバカにすることは、雲雀恭弥をバカにすることと同義だったからだ。

「こ、の野郎おとおおおおおお!!」

ゆえに、秋田は駆け出した。獰猛な眼差しで黒曜中学生をロツクし、殴りかかった。

が、角材やら警棒やら木刀やらで武装した黒曜中学生5名に、素手の男が単騎で攻めた所で結果は明快だ。都合のいい覚醒なんてあり得ないし、気合いでどうにかなるほど、世界は甘くない。

悪意ある黒曜中学生により、秋田はボコられた。哀川も含めて殴打の嵐の被害者となった。



「さーてと、そろそろ本題に入りますか」

散々ぶちのめされたせいで地に倒れ、指一本動かすことも叶わない秋田と哀川。頭上からの愉悦がかった声に秋田が目を向けると、黒曜中学生の1人がペンチを取り出していた。

「……ペンチ？」

「はい。それじゃ今から歯医者さんごっこを始めます」

「ま、さか!?! お前ら、何が、目的だ!?! こんなことして、タダで済むと——」

「痛くないでちゅからねー。はい、お口開けてー」

こいつらは俺と哀川からペンチで歯を抜こうとしている。

黒曜中学生たちの意図を理解した秋田は何とか立ち上がり、逃げようとする。

が、黒曜中学生数名に体を押さえつけられている現状、逃走は叶わない。

かくして。哀川と秋田は黒曜中学生の凄惨な仕打ちの犠牲者として、は、ならなかった。

「ぶいッ!?!」

ペンチを持ってニタニタ笑っていた黒曜中学生が突如、まるでトラックとでも衝突したかのように真横に吹っ飛ばされたからだ。当の黒曜中学生は住宅街の石壁に頭から突っ込みつつ、グツタリとしている。どうやら意識を失っているようだ。

「な、何だ!?!」

「何が起きた!?!」

「——ねえ、君たち。僕の部下に何をやっているの?」

予期せぬ展開に動揺する黒曜中学生4名に、淡々とした声がかかる。

4名が一斉に振り向いた先には、ムスツとした顔、ボサボサの黒髪、

肩に羽織った学ラン、『風紀』と書かれた左腕の腕章が特徴的な一人の男が立っていた。

「こ、こいつがやったのか？」

「冗談だろ？ 化け物かよ！」

「いや、いくら強くても俺たちが連携してかかればきつと——」

「僕の質問を無視するなんて良い身分だね。……まあいいか。驕り高ぶった草食動物を存分に咬み殺してから、また改めて聞くよ」

雲雀は一瞬で黒曜中学生との距離を詰めると、渾身の力でトンファーを振るう。

黒曜中学生たちの骨がバキボキ折れる音が聞こえようと、雲雀は止まらない。

結果。いつかの再現のように、黒曜中学生たちは見るも無残な姿へと成り果てた。

「さて。これからの僕の行動がなるべく不自然でなくなるように、今から君たちには色々吐いてもらうよ。痛い思いをしたくなかったら、早めに話すといいよ」

パパッと黒曜中学生たちを片付けた雲雀はこれ見よがしに奪ったペンをパチパチ鳴らす。

さつき並中生にやろうとしていたように、これから自分たちが歯医者さんごっこをさせられるのではないか。黒曜中学生たちはただ震えることしかできなかった。

## 風紀14. †堂々たる殴り込みで風紀を守ろう†

『並盛中ケンカの強さランキング』22位と24位の風紀委員、秋田くんと哀川くんを襲撃した黒曜生5名を僕が返り討ちにした後。僕は黒曜生たちをしつかりとボコリ、無事黒曜生から、彼らを支配する骸くんの情報入手した。

当然ながら、一般人な黒曜生が知っている骸くん関係の情報なんて高が知れている。

が、黒曜生を尋問して情報収集した。この事実を作ったことで、僕は動きやすくなった。

ということで、ズタボロにされた秋田くんたちのため、まずは救急車を手配する。

そうして。僕は単身、向かい始めた。目的地は黒曜ヘルシーランド。

並中生の被害者がいて。加害者の黒曜生を偶然居合わせた僕が倒す。これが原作知識を悟られずに骸くんのいる黒曜ヘルシーランドにいち早く殴り込みをかける条件というわけだ。

できれば、秋田くんたちがボロボロになる前に助けに入りたかったんだけどね。

これ、2人1組じゃなくて3人1組にしておけばよかったかな。後の祭りだけど。

さて。僕が黒曜編での被害者を減らすために何をしようとしているか。

端的に言うと、僕は骸くんに交渉するつもりだ。襲撃する並中生の数を減らしてもらう。『並盛中ケンカの強さランキング』の順位でカウントダウンをするなら歯の本数でなく、懐中時計の時間で示してもらおう。これが僕の要求だ。つまり原作のような襲撃方法でなく、アニメ版の襲撃にする&被害者を減らすように骸くんに提案したいのだ。

だって、ねえ。考えてほしいんだけど、歯を抜くって酷い仕打ちだもの。

ほとんどの中学生は永久歯だから、抜かれたらもう二度と生え変わってくれない。

となると、被害者は今後、入れ歯や差し歯で生きていくことになる。それって凄まじく不憫だと思うんだよね。マフィア関係者じゃない分、なおさらね。

80歳になっても20本以上の自分の歯を維持する啓発活動こと『8020運動』に割と真剣に取り組んでいた僕からすると、無理やりな抜歯行為なんて看過できない。

それに。歯を抜くって結構手間だし、被害者の悲鳴も周囲一帯に響き渡るしで非効率的な手段だ。骸くんからしても、僕の提案を受け入れる余地はあるはずなのだ。

とはいえ、骸くんが僕の提案を受け入れるわけがないから、そこは交渉（物理）を成功させるしかない。骸くんの六道輪廻への対抗手段がない以上、僕の勝率はほぼゼロだ。

だから、交渉成立の可能性も皆無だ。それでも、僕は雲雀さんらしさをどうにか保ちつつ、黒曜生の襲撃による被害者を減らすために動く決めた。ゆえに、骸くんと戦うのは決定事項だ。

原作と違って、僕は骸くんの手札を知っている。このアドバンテージを上手に活用すれば、何かこう綺麗な感じにハマって、交渉成立とまらないだろうか（圧倒的希望的観測）

いやいや、もしも骸くんに勝ったら襲撃自体をやめさせろよ。

その方がもっと並中生の被害を減らせるだろ、との意見があるのはわかる。

だが、僕が奇跡を呼び起こしたり、骸くんがとんでもなく油断したりで、僕が骸くんに勝利して、それで黒曜編が終了となるのはかなりマズい。

理由は単純、ツナくんたちが骸くん一派との戦闘で成長しないからだ。

特に、ツナくんが覚醒イベントを経て超<sup>ハイパー</sup>死ぬ気モードを得られないのは最悪だ。

普通の死ぬ気モードなツナくんではさすがにザンザスに勝てない

だろう。パンツ一丁だし。

そうなれば、ボンゴレリング争奪戦でヴァリアーに敗北。守護者は壊滅。

もちろん、ツナくんの雲の守護者な僕もデッドエンドな未来が透けて見える。

原作の展開を踏まえると、ツナくんVS. 骸くんの構図は残しいい。

ゆえに、僕は仮に骸くんに勝てたとしても、骸くんを戦闘不能にしているわけではない。黒曜生の並中生襲撃を中止させて、リボーンに骸くんの存在に気づいてもらうきっかけを消してもいけない。

だからこそ。具体的には『並盛中ケンカの強さランキング』10位辺りから上位の面々だけを襲ってもらうよう交渉するのだ。上位ランカーの方々、本当にすみません。特に草壁さん。

「ちやおツス、雲雀」

「ひ、雲雀さん！ お、おおはようございます！」

と、頭の中で思考をつらつらと垂れ流していると。前方からリボーンと制服姿のツナくんが近づいてきた。ツナくんは僕に咬み殺されるのが怖くてあまり近づきたくないようだけど、リボーンが平然と僕の元へテクテク歩んでいるので渋々後を追ってきたって感じかな。

「やあ、赤ん坊に沢田綱吉」

「お前の妹の調子はどうだ？」

「妹？ ……ああ、恭華のことか。君のおかげで変装の精度が上がったって喜んでいたよ」

「そうか。変装の第三段階の進捗は聞いてるか？」

「着ぐるみパジャマのまま町を散策して、住民に見られた時には自分が動物だと錯覚させるのが第三段階だったかな。凄く恥ずかしそうにしてたけど、ちゃんと取り組んでるよ」

唐突にリボーンに妹のことを聞かれ、僕は一瞬硬直する。が、すぐに僕のもう一つの姿である恭華さんモードのことを問われたと気づ

き、特に違和感なく返答する。

そう。僕がリボーンから変装スキルの教授をお願いしてからもう何か月も経過した現在。僕の変装スキルは著しく上達している。リボーンのお墨付きをもらえるくらいだ。

でも、着ぐるみパジャマで外を歩くのはホント恥ずかしいんだよね。目撃者がいた時には、僕が動物だと勘違いしてくれるように動物の鳴き真似とかしないといけないし、全然慣れない。

現状、知り合いには誰も会っていないのが幸いだけど、誰かとバツタリ出くわすのは時間の問題だろうし、早くこの第三段階をクリアしたいなあ。

「リボーン、変装って?」

「雲雀の妹に俺が直々に変装スキルを仕込んでるんだ」

「ええええええッ!? 恭華に何やってんの!」

「あんまり目の前でコソコソしていると目障りなんだけど。咬み殺すよ?」

ツナくんがリボーンに顔を近づけてごによごによと内密話を展開していく。

放置しているとしばらく続きそうなので、遮断するために軽く脅しをかける。

すると、効果抜群。ツナくんは「ひいひい!! ご、ごめんなさい!」と涙目でリボーンから距離を取った。ホント、ツナくんのリアクションは天下一品だよな。

「ピリピリしてるな。何かあったか?」

「黒曜中の生徒が並盛中に喧嘩を売ってきたから、今から思い知らせに行くのさ」

「面白そうだな」

「君たちの出番はないよ。それじゃ」

「あ、失礼します! 雲雀さん!」

僕がツナくんたちの元から歩み去る際、あからさまにホツとした顔

のツナくんがペコペコ頭を下げる。ますます『雲雀恭弥Ⅱ雲雀恭華』であることを暴露したくなっただけ、全力で我慢。

さてと。リボンに黒曜中とのキーワードをサラツと与えられたことだし。改めて。

骸くんハウスのある黒曜ヘルシーランド（廃墟）へ。いざ、みのりこめーへ、



あの時の雲雀恭弥はまるで鬼神か死神のようだった。後の黒曜生は語る。

2年前の土砂崩れにより、今は閉鎖した総合娯楽施設：黒曜センターの一角、黒曜生の不良がたむろする黒曜ヘルシーランドにて。ある日突然、一人の並中生が乗り込んできた。

ムスツとした顔。ボサボサの黒髪。肩に羽織った学ラン。『風紀』と書かれた左腕の腕章。

不良たちは並中生の外見要素から、すぐに並盛中の風紀委員長：雲雀恭弥だと気づいた。

不良たちは雲雀恭弥を知っている。自らの勢力図を広げようと画策し、抗争を仕掛ける時、いつも自分たちの目論みを物理で叩き潰してくる、並盛中の目障りな守護神だ。

「おい！ 何の用だ、雲雀恭弥！」

「六道骸と話がしたい」

不良の1人が問いかけると、雲雀は言葉少なに要求を口にする。

が、他校の不良の言うことに素直にうなづくようなら、不良なんてやっていない。

また、支配者たる骸に「来客は丁寧にもてなせ（意味深）」との命を受けていることもあり、「ああ？ 誰がテメエなんかに従うかよー」と、ポケットからナイフを取り出す。

そんな血気盛んな不良の言動を契機に、他の不良たちもワラワラと

雲雀の元に集う。

それぞれ得物を構え、ジリジリと雲雀との距離を詰める不良たちに慢心はない。

だが、これだけの数の差があるのだから、自分たちの勝利は固いと推測していた。

「ふうん。暇つぶしにはちょうどいいかな」

「ヘラヘラ笑ってんじゃねえ！」

が、傍目から見れば絶対的に不利な状況下で、雲雀は不敵に笑う。

この時、一部の不良は今の戦力では雲雀恭弥を倒せないと悟った。

しかし。不良たちの士気の高揚からして、白旗を掲げることは許されない。

一部の優秀な不良たちは覚悟を決めた。残る不良たちはヒヤッハーと世紀末の住人のように雲雀へと一斉に襲いかかった。その顛末はここに記すまでもない。南無。



黒曜ヘルシーランドの3階。今や何も上映されない映画館にて。ソファーに悠然と六道骸は腰かけていた。黒曜ヘルシーランド1階で雲雀が派手に暴れ回っていることを知っただけながら、泰然自若な構えを崩さない。そんな骸の眼前の扉が、ゆっくりと開かれる。

「おや、来客ですか」

数多くの黒曜中の不良を相手にしたのに無傷かつ全然疲れてなさそうな雲雀の来訪に、しかし想定内の範囲内な骸は敢えて意外そうに言葉を紡ぐ。一方、来訪者たる雲雀は一瞬、不思議そうな顔をした後に、何事もなかったように骸をまつすぐに見据える。

「君が六道骸かな？」

「ええ、そうですよ。貴方は誰ですか？」



「雲雀恭弥。並盛町の風紀を乱す君を咬み殺しにきた」

「クフフ、物騒ですね。僕はただ、並盛町に新たな秩序を設けようとしただけなのに」

「既に僕が秩序だから、君の行いは余計なお世話だよ」

「そうですか」

「いつまでソファアに座ってるの？ さっさと立って、得物を構えなよ」

「クフフフ、まあそう逸らずに、まずは話でもしませんか？」

「……いいよ。僕も君に話があるから」

雲雀は構えていたソファアを一旦仕舞う。

対する骸は、雲雀が自分の提案に素直に応じたことに笑みを深める。

「クフフ。貴方、興味深いですねえ。気に入らないことがあればすぐに暴力に頼る狂犬だと聞いていたのですが、実際は随分と聞き分けがいらしい。何だか貴方がわざと狂犬を演じている良い子ちゃんのように見えてきました」

「無駄話をするだけならここらで実力行使させてもらうけど？」

「おっと。聞き分けはいいけど少々せっかちなんですかね、本当の貴方は」

「君、さっきから何を——」

「——ねえ、雲雀恭華さん？」

風紀15. †会話フェイズで風紀を守ろう†

「聞き分けはいいけど少々せっかちなんですかね、本当の貴方はねえ——雲雀恭華さん」

「……」

黒曜ヘルシーランド3階。今は朽ち果てた映画館跡にて。六道骸が底冷えのする声で『雲雀恭華』の名を口にした。雲雀は表向きは何ともなさそうな顔をしていたが、内心は穏やかではなかった。ちなみに。ポーカーフェイスなんて別に得意でないのに、雲雀が今の骸の一言でボロを出さなかったのは、以前リボーンに真の性別を見抜かれた前例の賜物だ。

え、ちょッ、は!?! はああああああああ!?!

なんでバレてるの!?! 入念に変装をしたつもりなのに!?!

なんですぐバレてしまうん? わけがわからないよ! どういうことなの!?!

僕の変装スキルはリボーンの教授のおかげで間違いなく向上している。よっぽどでもない限り、まずバレないレベルには到達しているはず。なのに、どうして。

「名前、間違えてるよ。僕は雲雀恭弥だ」

「おや。これはすみません。雲雀恭華さん」

「……ねえ、君はさつき聞いた人の名前も覚えられないような単細胞なのかい? 君がさつきから言っているのは僕の妹の名前だ」

「違いますよね。ウソは良くないですよ。なぜか『雲雀恭弥』という偽名を使い、男装をした上で並盛中の風紀委員長をやっている雲雀恭華さん」

「……」

あ、これダメだ。完全に僕の真の性別を確信している奴だ。その手のニツコリ笑顔だ。

ただ鎌をかけているだけかと思いたくてごまかしてみたけど、全然

骸くんが揺らいでくれない。

にしても、なんでわかったんだらう。骸くんってつい最近マフィアの刑務所を脱獄したばかりで、情報収集しようにもそこまで深くは僕のことを探れないはずなのに。

仮に探れるとしても、僕じゃなくてボンゴレ10代目のことをもつと優先しそうなのに。

「クフフ、なぜわかったのかと言いたげな眼差しですね。では、種明かしをしましょうか。貴女はランキングフウ太を知っていますか？」

「ランキングフウ太？ 何それ？」

「その様子だと、知らないようですね。となると、ハズレですか」

僕はフウ太を原作知識で知っている。だけど敢えて素知らぬフリをしてみた。

その演技を骸くんが見抜かなかった辺り、僕の変装がバレた説はなさそうだ。

「で、そのランキングフウ太って？」

「非常に優秀な裏社会の情報屋ですよ。彼の手掛けるランキングの的中率は100%、そのため彼のランキングの内容を記したランキングブックを手に入れたら世界を獲れるとも言われています」

「ワオ、凄いね」

「同感です。僕はそのランキングフウ太に接触し、ランキングブックから『並盛中ケンカの強さランキング』を見せてもらいました。結果、1位は雲雀恭華という人だとわかりました。そこで早速情報収集してみたのですが、雲雀恭華の暴力的な噂は全然聞こえてこない。聞こえるのは、卓越したケンカの実力で不良を統率し、並盛町で名を轟かせる雲雀恭弥のことばかり。なのに、ケンカランキングに雲雀恭弥の名はどこにも載っていない。……明らかにおかしいですよ。ここから推理すれば、自ずと貴女が男装をして、偽名を使っている雲雀恭華だと見えてくるものです」

「弱い根拠だね。僕は並中生のつもりだけど、実年齢はとつくに15

歳を超えているし、並盛中の卒業要件は既に満たしている。僕がそのランキングの並中生の定義に当てはまらなかったからランキングに載らなかつただけじゃないの?」

「クフフ、根拠はまだありますよ。『並盛中歴代風紀委員長のケンカの強さランキング』というものもありましてね。その1位も『雲雀恭華』で、雲雀恭弥の名は載っていないんですよ。不思議ですね。貴方の妹はいつ、ケンカに長けた風紀委員長になったんでしょうね? 風紀委員長を務めているはずの雲雀恭弥の名がなぜどこにも見当たらないのでしょうか?」

「……」

「お望みなら、もっと根拠を示しましょうか?」

／( ^ o ^ )／オワタ

これは、詰みですね。これ以上はもうごまかせる気がしない。

フウ太くんのランキング能力と骸くんの頭脳のコンビ、マジで怖すぎるよ!

もう雲雀恭弥らしくしている必要はないし、ここからは恭華さんモードの口調でいくか。

「……降参だよ。そうさ、僕は雲雀恭華だよ」

「おや。口調は少し柔らかくなりましたが、素の貴女も一人称は『僕』なんです。しかし、貴女の正体を知っている今も半信半疑ですよ。今の貴女は男性にしか見えませんか?」

「それは良かった。僕の変装スキルが拙いわけじゃないとわかって安心したよ」

やっぱり僕の変装を見破られたわけじゃないのか。

こういうバレ方もあるとはね。事前に想定しておけばよかった。

「それで? 僕の正体を知った君はどうするのか?」

「おや。思ったより動揺していませんね?」

「僕の男装や偽名は情性で続けていただけで、大した理由はないからね。君にバレた所で、弱みにはならないよ。好きにすればいいさ」

そう、当の雲雀さん的には男装や偽名に大層な事情があったから、嫌だと思われるけど。

僕自身は別に雲雀さんの真の性別をバラされても特に痛くないだよな。

精々、いずれ雲雀さんの精神が帰ってきた時に容赦なく咬み殺されるぐらいだし。

だから、僕のこの秘密を骸くんが知った所で精神的ダメージは負わないし、弱みにもならない。

「……ふむ、虚勢やハツタリではなさそうですね。やれやれ、それは残念です」

「僕の弱みで、一体何を企んでいたのやら」

「クフフ、秘密です」

「で、話は終わるか？」

「はい、僕からの話は以上です」

「じゃあ次は僕の番だね。君にお願いがあるんだ」

骸くんの話が終わったようなので、僕は例の提案を始める。

黒曜編での並中生の被害者を減らせるかどうかはここからが正念場だ。

交渉相手は切れ者、六道骸。どうなるかわからないけど、上手くいけばいいなあ。



(男装や偽名のことをバラさないでくれるに越したことはないけど、バラされたらバラされたで構わない、といった様子ですね。これでは彼女の精神を揺さぶる材料にはできなさそうです)

六道骸は少々肩透かしを食らっていた。

せっかく『並盛中ケンカの強さランキング』1位の雲雀恭華の弱みを掴んだと思っていたのに、当の本人が男装や偽名のことを気にしていなかったからだ。

この弱みを起点として恭華をマインドコントロールし、ボンゴレ10代目を手中に収める手札の1つにすることを視野に入れていただけに、当てが外れたのは地味に残念だった。

「じゃあ次は僕の番だね。君にお願いがあるんだ」

「何ですか？」

「黒曜生が『並盛中ケンカの強さランキング』の24位以上の生徒を襲撃して、順位の数だけ歯を抜こうとするの、やめさせてくれないかな？ 君ならできるよね？」

「お断りします。目的を果たせなくなりますので」

「襲撃自体をやめろとは言っていないよ。ただ、襲撃人数を減らして、襲撃方法を変えてほしいんだ。君の目的とやらのためには必ず24人を襲わないといけないのかな？ ランキングの順位を示すために、何が何でも歯を抜かないといけないのかな？ 襲撃人数なんて10人もいれば充分だし、順位を示す方法も、例えば懐中時計の時刻で示すとか、他に効率的な方法があるはずだ」

「……ふむ、思ったより僕の目的に寄り添った提案ですね。なぜ僕の襲撃自体を止めようとしないのでですか？ 僕の行いは、並盛町の風紀維持を信条とする貴女にはとても許せないはずでは？」

「確かに許せないね。けど、君に目的があるように僕にも目的がある。完全に襲撃を止められると、それはそれで困るんだ」

骸は雲雀の提案を受けて、しばし思考する。骸の目的をほとんど制限しないだろう雲雀の提案。これを受け入れた場合の今後の展開を軽くシミュレーションした骸は言葉を紡ぐ。

「許容範囲の提案ですね、特に断る理由も見受けられない。しかし、この僕が、何の見返りもないのに、ただの一中学校の主ごときの命令を、素直に聞き入れると思っっているのですか？」

「いや、思っていないよ。だからまずは君を咬み殺す。対話でダメなら実行使、それが高町式交渉術の基本だからね。で、さつきも言ったけど、いつまでソファアに座ってるの？ さつきと得物を用意して、

構えなよ?」

「おや。先ほども思いましたが、敵にわざわざ準備をさせるとは、優しいですね」

「君のような一筋縄でいかなそうな敵は正面から咬み殺してこそだからね」

「……クフフ、貴女は面白いですね。いいですよ、余興にはちょうどいいでしょう」

一度は仕舞ったトンファーを両手に構えて、ニイと笑みを深める恭華。

そんな恭華のことが幾分か気に入った骸はソファーの後ろから三叉の槍を取り出す。

すると。突如、恭華が骸に背を向け、何も無い空間にトンファーを振るった。

直後。ソファー付近の骸の姿が掻き消え、恭華のトンファーで顔を殴られた骸が現れた。

「ッ!」

骸は驚愕した。実は恭華が入室した時点でソファーの自分を幻覚にすり替えていた骸は、自身が見えないように幻術を施した状態で恭華を背後から不意打ちしようとした。それを未然に防がれたのだ。それも幻術を扱う術者でない恭華にだ。驚くのも無理はない。

「さっきから何かコソコソと手品まがいのことをやっているみたいだけど。僕に小手先の技が通じると思わないことだね」

雲雀恭華に幻術が通じていない。恭華の迷いのない一撃と言葉から、骸は理解した。

頬を強く殴られた痛みを一気にかき消すような衝撃的な事実には骸は目を見開く。

その後、骸は数歩後ずさるも、その場に倒れずに踏みとどまり。

「——クフ、クハハハハ！ 貴女は本当に面白い人だ！」

だ。 哄笑。そして獰猛な肉食獣のごとき、好戦的な眼差しを恭華に注い



## 風紀16. †幻想殺しで風紀を守ろう†

黒曜ヘルシーランド3階。今は朽ち果てた映画館跡にて。

六道骸が幻術を仕掛けるも雲雀恭華に全く通じず、恭華のトンファーで顔を殴られた時。

ほんのわずかな時の中で。恭華の思考回路はいつになく、ギユンギユン稼働していた。

やっぱりだ。僕に骸くんの幻術が効いていない。

僕は特に幻術対策していないのに。超直感なんて備わってないのに。

それでも僕の目は骸くんの幻術を見破っているらしい。

骸くんの待つ映画館に入った時、僕は2人の骸くんを見た。

1人は奥のソファアーに悠々と腰掛ける骸くん。

もう1人は僕から10メートルほど距離を置いて、真横から僕を眺める骸くん。

前者は半透明の立体映像みたいに透けていて、後者はしっかりと実体を持っていた。

最初は『六道骸、実は双子説』とか生まれて少々混乱したが、今は理解している。

半透明の方が幻術で、後ろが透けていない方が本物ということだ。スケスケだぜ。

だけど、どうして僕に幻術が効かないのだろうか。原作雲雀さんには通じるのに。

……ん？ 普通の雲雀さんには幻術は効く。でも憑依された雲雀さんに幻術は効かない。

あ、これ。もしかして。幻術の効果範囲は雲雀さんの体だけ、というんじゃないか？

いくら雲雀さんの体は騙せても。脳は騙せても。心はあくまで僕。雲雀さんとは別物の異物だ。

だから、幻術で僕は騙せない。僕が雲雀さんに憑依中という状況を骸くんが知らない限り、騙しようがないのだ。

例えるなら、今の僕はガンダムの搭乗者みたいなものだ。

いくらガンダム本体に幻術を仕掛けようとも、搭乗者には何ら影響は及ばない。

雲雀さんの体を通して、食事の味を楽しめたり、運動すれば疲れたりと、感覚を感じていたので、てっきり僕は雲雀さんの体と一体化しているものと考えていた。

でも、本質的には僕は雲雀さんの体を自在に操作するプレイヤーみたいなものだったわけだ。

ゲームのキャラクターが毒状態になった所でゲーム画面の先のプレイヤーも連動して毒を喰らわないように、雲雀さん自体が幻術にかかっても、僕に幻術の効果は届かない。

要するに、僕に幻術は通じない。多分、精神干涉系の技も通じない。

この幻術無効化能力、名づけるなら——イマジンプレイカー†幻想殺し†。

【緊急】雲雀さんに憑依したと思っていたら実は上条さんに憑依していた件。並盛町は学園都市だった？ 早く男女平等パンチを習得しなきゃ——つとと、ちよつと脱線してしまった。

とにかく、僕の幻想殺しは重大なアドバンテージだ。

リボーンの世界で、幻術の通じない体がどれほどチートかは語るまでもない。

今後ボンゴレに立ちはだかる強敵は、大抵幻術を使ってくるからだ。

幻術を制する者はマフィア関係の戦闘を制する。持論だが、そう言っつていいほどのメリットだ。

……これは、骸くんの幻術を無効化できるとなると、いけるかもしれない。

ちよつと整理してみよう。骸くんの右目に宿る六道輪廻の詳細はこんな感じだ。

- 一．地獄道：永遠の悪夢により精神を破壊する能力（幻術）
- 二．餓鬼道：技を奪いとるスキル（他者に憑依中に使用可能？）

- 三. 畜生道：人を死に至らしめる生物の召喚（おそらく動物全般）
- 四. 修羅道：格闘スキルの向上（雲雀さんクラスの戦闘能力）
- 五. 人間道：修羅道以上に格闘スキルを向上させて最も危険なスキル（ちよおつおい）

六. 天界道：マインドコントロール（骸くん的には契約？）

※参照元：六道骸のキャラソング「霧の憑依」の歌詞

地獄道は僕の幻想殺しで容易に攻略できるから問題ない。

餓鬼道は骸くんが他者に憑依中に使える技って印象だから、今は無視してよさそう。

畜生道は毒蛇の他にも飢えたライオンとか召喚しそうだから要注意。

修羅道は戦闘能力を跳ね上げるけど、原作のボロボロ雲雀さんでも喰らいつけたから大丈夫。

人間道は正直使われるとマズいけど、骸くん自身が使用を控えてるから警戒は不要。

天界道は骸くんの三叉槍の穂先で傷つけられさえしなければいい。

結論。人間道を使われない限り、割と勝算ありそうだね。幻想殺し様様だよ。

にへへ。ほぼ負け戦だった所に唐突に勝算が見出されたせいとか、ワケテカしてきた。

よし、やろう。骸くんに勝って、「いやあ、六道骸は強敵でしたね」と微笑んでやるんだ！



「——クフ、クハハハハ！ 貴女は本当に面白い人だ！」

六道骸は心底愉快そうに笑った。

なぜなら、幻術が全く効かない相手は初めてだからだ。

幻術を見破る者は時折存在する。同じ幻術使いなら容易に相手の幻術に惑わされないし、直感なんて理屈をすっ飛ばした理由で幻術に囚われない猛者もいる。

だが。雲雀恭華には幻術がまるで効果を示していないのだ。幻術で相手の脳を騙せる、騙せないなんて次元じゃない。

雲雀恭華の前では、幻術が当然のように無効化されているのだ。

これが笑わずにいられるものか。骸は爛々とした眼光を恭華に注いだ。

「捕まえて、隅々まで調べたくなってきました」

「言いたいことはわかるけど、もつと言葉を選べないのかな？」

「おや。では改めて——貴女の四肢を解剖台に拘束して麻酔なしで切り開きたくなってきました」

「違う、そうじゃない！」

骸の発言から実際の解剖風景を想像してしまったのか、恭華はブルリと体を震わせる。

一方、骸は地獄道で全長50メートル級の大蛇の幻術を作り、恭華に大蛇を差し向ける。

シャアアアアと叫ぶ幻術の大蛇。その迫力ある幻術の中に、骸は畜生道から全長1メートル程度の毒蛇を計5匹、忍ばせている。が、雲雀はすぐさま大蛇の中に潜む毒蛇の頭をトンファーに仕込まれた銃弾で次々と撃ち抜いた。

「こういう手品は通じないと言ったはずだけど？」

「念のためですよ。あと、この技術は一般に幻術と呼ばれています」「へえ」

今度は僕の番だと言わんばかりに恭華は一気に骸との距離を詰める。

骸は修羅道を用いて己の戦闘能力を跳ね上げると、恭華の容赦ないトンファーを敢えて紙一重でかわす。その後、恭華の腹部に三叉槍の柄で突かんとする。

が、直前で反応した恭華が左のトンファーで三叉槍を床に叩きつける。続けて右のトンファーで骸の下顎を打ち抜こうとするも、骸が瞬時に後退したため、トンファーは虚空を掠めるのみだ。

「やるね」

「貴女も中々だと思えますよ」

まずは互いに様子見の攻撃をした両者は内心はともかく、表向きには相手の戦闘センスを褒める。その後、2人は再び衝突した。長い得物を持つ骸は恭華との距離が縮まりすぎないように気を遣いながら、柄で、穂先で恭華を貫かんと三叉槍を振るう。

対する恭華はトンファーから射出できる銃弾で骸の移動先を制限しつつ、骸の懐に飛び込み、怒涛の殴り込みを行うべくトンファーを振るう。その際、どれだけ三叉槍で体を打ち付けられようとも、恭華は止まらない。恭華的には多少怪我を負おうとも、三叉槍の穂先で傷つけられなければいいのだ。それに、守る戦い方はらしくない。恭華の猪突猛進スタイルが起因する所である。

(クフ、恭華さんは実に戦闘狂ですね)

無傷での勝利を捨て、本気を出して戦う恭華に、骸の修羅道は喰らいつくので精一杯。当然、骸も無傷ではいられず、その身にトンファーの打撲痕が次々と刻まれる。

人間道を用いれば恭華を倒せる可能性は高いが、その選択肢を選びたくない骸は、代わりに自身に接近中の恭華に向けて畜生道から獐猛な虎6匹を召喚した。

「「「「「グアアアアアアアアアアアアウツ！」「」「」」」」」

「へえ、迫力あるね」

虎は映画館跡をビリビリ震わす唸り声と共に一斉に恭華へと飛びかかる。

骸から恭華の姿が見えなくなるも、直後。6匹の虎は恭華の渾身のトンファーを体に打ち付けられ、それぞれ四方八方へ吹っ飛ばされていった。が、虎が何もできなかったわけじゃない。虎の爪は恭華の体にいくつもの裂傷を刻み、さらには恭華の左肩を深々と突き刺していた。

「くッ……」

恭華はダクダクと左肩から血を流し、握力が弱まったのか、左のトンファーを落とす。

この好機に骸は攻め込んだ。三叉槍の柄を迅速に繰り出し、恭華の首を打ちつけようとする。恭華が右のトンファーで骸の三叉槍を下から殴り、柄の方向を恭華の首から頭上へとズラす。が、骸はこの瞬間を待っていた。恭華の戦闘スキルから、こういう対処をしてくれると期待していた。

（決まった）

骸は柄での突きをピタリと止める。そして、トンファーで殴られた衝撃を利用して、三叉槍を一回転。恭華に穂先が向こうとした所で、骸は逆袈裟を振るった。恭華は骸が迅速に攻撃を切り返してきたことにわずかに反応が遅れ、三叉槍の攻撃を右のトンファーで防ぐことや、回避行動が間に合わない。骸は勝利を確信した。この三叉槍で傷を入れたら、契約が成立するからだ。

要は恭華の体に乗っ取れるようになるのだ。相手の体を自由に動かせる権限を得た時点で勝負は決まったも同然なのは想像にたやすいだろう。しかし、骸は忘れていた。恭華の提案にしろ、幻術の利かない幻想殺しな体質にしろ、とにかく雲雀恭華は常識に留まらない規格外であることを。

「させないよ」

恭華は左手で骸の三叉槍の穂先をギュツと掴んだ。これにより、恭華は三叉槍で斬りつけられることはないが、左手に傷がつき、骸との契約が成立する。そのはずだった。しかし、三叉槍が恭華の左手に切り傷を生むことはなかった。恭華の掴んだ穂先の部分がボロボロと溶け始めたからだ。

「なッ!？」

思わぬ異常現象に骸は思わず恭華から飛びのく。その後、バツと三叉槍を見やるが、既に穂先はデロデロに溶けきり、消失していた。この時、ブシヨアアと溶ける音が嫌に骸の耳についた。

「間一髪だね。危ない危ない」

「貴女は一体、何を——」

「話すと思うの？　ただ、切り札を1つ切っただけさ」

ホツと息を吐く恭華にたまらず骸が問いかけるも、当然ながら恭華はネタばらしをしない。恭華が何をしたのか。答えは簡単、とつさに左袖に忍ばせていた『溶解さくらもち』を左手に取り出し、『溶解さくらもち』ごと三叉槍を掴み、穂先を溶かしたのだ。

『溶解さくらもち』とは、ビアンキが手掛けるポイズンクッキングの一種で、様々な物体を腐らせる効果を持っている。そう、恭華は料理の勉強をする中で、メシウマヒロインを極めるだけでなく、メシマズヒロインの道も同時に模索し、切り開いていたのだ。

本人の発想的には、『ちよつと僕もツナくんみたいに零地点突破してみたい↓でも僕にボンゴレの血は流れてないから本家の零地点突破はできない↓何のスキルなら零地点突破してマイナスの境地に至れるだろうか↓ふむ、料理スキルとかどうだろう↓メシマズとメシウマとを使い分けられる女の子って斬新で素敵だよね？↓よし、ポイズンクッキングを練習してみるか』とのルートを辿っている。結果、恭華は弛まぬ実践の果てに『溶解さくらもち』をマスターし、『料理スキルの零地点突破・†<sup>ウエ</sup>ポイズンクッキング†<sup>ナ</sup>』などと勝手に名付けている。何てフリーダムな発想だろうか。

だが、恭華に憑依中の凡人はネタでポイズンクッキングの練習を始めたわけじゃない。原作の雲雀さんとは違ってメンタルが弱い凡人は、ごり押しには不利な女の子の体に憑依中の凡人は、今後の危険なリボン世界を生き残るために、なるべく切り札を多く揃える心積もりなのだ。だから、仕込みトンファーに銃機能を追加するし、ポイズンクッキングも一部取得する。1だけ努力すれば10の結果が伴ってくる、雲雀さんの天才スペックを利用して多彩な攻撃手段を用意す

る。その心構えが今、骸の三叉槍を防いでマインドコントロールを許さない未来を生成したわけである。

「ところで、僕も君も中々にボロボロになってきたけど、まだ戦う？ これ以上続けるなら、どっちもタダじや済まないと思うよ？」

戦況が膠着状態となる中。恭華は落としていたトンフアーを左手で拾いつつ骸に尋ねる。

すると、骸は三叉槍や自身の体を軽く一瞥して、逡巡の後に口を開く。

「……そうですね。これ以上消耗するのは得策ではありません。わかりました、貴女の提案を受け入れましょう。僕の目的と関係ない貴女との戦いにうつつを抜かし、本懐を遂げられなければ本末転倒ですしね」

「そう」

「ただしーっだけ条件があります」

「なに？」

「このまま引き分けだと面白くないので、またいずれ、雌雄を決しましょう」

「……ま、いいよ。僕も勝敗がハッキリしてる方が好きだから」

骸が提示する条件に恭華は意外そうに目を見開くも、しばしの沈黙の後に首肯する。再び骸と戦うことになれば、三叉槍で傷つけられ、マインドコントロールされる可能性はある。だが、恭華は黒曜編を終えた後の骸にはそこまで危険性がないことを知っている。ゆえに、申出を受諾した。

「おや、気が合いますね」

「僕を解剖したがっている人に言われても嬉しくないね」

「クフフ、あれは愛情表現ですよ」

「目が笑っていないよ？」

その後、恭華は骸と軽口を交わしつつ黒曜ヘルシーランドを後にす



る。  
かくして。恭華は黒曜編での並中生の被害を減らすことに成功した。

## 風紀17・†運命的な邂逅で風紀を守ろう†

いつけなくい！ 自己紹介自己紹介！（ゝω・）v  
僕は雲雀恭華。雲に寄り添うスズメは恭しい華、と書いて雲雀恭華だよ。

年齢不詳で明らかに15歳を超えているのに平然と並盛中の不良の頂点に立ち、ケンカが異様に強いだけの、並盛町に住むごく普通の学生だよ。あ、実は僕は男装中で、偽名は雲雀恭弥。あと、ついでに今の僕は厳密には雲雀恭華じゃなくて、彼女に憑依している別人だけど、これも普通の範囲だよ。うん、普通普通。ぼくノーマルタイプ。ウソつかない。

これまで僕は憑依先の恭華さんの言動を模倣して、穏やかな日常(?)を送っていたんだけど、つい数日前から家庭教師ヒットマンREBORN!の黒曜編が始まっちゃってもう大変！

僕と同じ並中生が隣の黒曜生に襲撃されて歯を抜かれそうになるし、思惑を胸に殴り込んだ先の、黒曜生の不良を統べるトップはナツポー頭の無駄に強い変態だし、わけがわからないよ！

チートな六道輪廻を使うナツポーに僕も常時発動型のチートで対抗してどうにか引き分けにできたけど、また近い内にナツポー以外の変態——ボスbot、カスbot、モヒカンオカマ、守銭奴赤ちゃんなど——が大挙して押し寄せるみたいなんだ。

一体僕ってば、どうなっちゃうの!? 教えて偉い人！ ヘルプミー！

次回「変態ホイホイ魔境と化した並盛町」お楽しみに！



僕が憑依する前の恭華さんの性格をちよつとシミュレートしてみたけど、これはないな。

こんなに女子女子してる子だったら男装して不良の頂点に君臨な

んてしないだろうし。

閑話休題。骸くんとこの戦いを終えた僕は血まみれのまま並盛中央病院に赴き、治療を受けた。

当初、軽い怪我じゃなかったので入院確定ものだと想定していた。が、実際は病院で処置を受け終えた頃にはもう問題なく動けるようになっていたため、入院しないことにした。

恭華さんボディの自然治癒力が並外れているゆえか、はたまた並盛中央病院の医者が隠れスーパードクターゆえか。謎は深まるばかりだ。

そんなこんなで僕が黒曜センターに突入してから3日の時が流れ。

黒曜編は無事に終了した。厳密には、『並盛中ケンカの強さランキング』10位から4位が病院送りにされてるから無事とは言いがたいかもだけど、黒曜センターに乗り込んだツナくんたちが骸くん一派に打ち勝ち、誰一人死ぬことなく帰ってこれたのだから、無事の範疇だろう。

ちなみに。柿本千種の最初の襲撃でツナくんを庇った獄寺くんが重傷を負う件は、僕が山本くんに早めに『並盛商店街で獄寺隼人が他校の不良に因縁吹っかけられてケンカをしているらしい。実力は互角だから、もしかしたら獄寺隼人が深手を負うかもね』と情報を伝えたことで回避された。

『並盛中ケンカの強さランキング』1位に雲雀恭華の名前が載っている違和感を消すために、恭華さんモードで獄寺くんを直接助けることも考えた。

しかし、ケンカの強い雲雀恭華を見たツナくんが超直感で『雲雀恭弥⇨雲雀恭華』であることを察知する可能性があったため、今回は山本くんに動いてもらった。

いやあ、それにしても六道骸は強敵だったね。ホントに強かった。今でも骸くん相手に引き分けを掴み取れたのは奇跡の類いだと思えてならないしね。

あの時はつい骸くんと再戦の約束をしちゃったけど、できることから反故にしたい。





フウ太は逃げていた。ハツハツと息を切らせて必死に逃げていた。フウ太がチラツと後ろに視線を向けると。全速力で追いかけてくる2名の若者の姿があった。「待てやゴリアー！」と声を荒らげる様からは、フウ太を見逃す心算が見られないことが伺える。

フウ太はまだ子供ながら裏社会の優秀な情報屋である。

彼のランキング能力で入手した情報は、その正確さゆえに値千金。となると、当然ながらフウ太を手中に収めようと彼の身柄を狙う者は多い。

今現在、フウ太は六道骸にマインドコントロールされた影響でランキング能力を失っている。

それでも、フウ太の記したランキングブックや、フウ太が記憶しているランキング情報の価値は依然として高く、フウ太を追い求める者は少なくない。

だが、今回フウ太を追いかける若者2名の狙いはフウ太の情報ではなかった。

彼ら若者の目的は、フウ太が懐に抱え持つ生き物である。

フウ太は肩で息をしながら一生懸命駆けていた。

今、自分が持つている生物を悪意ある者に奪われたくない。可哀そうだからだ。

純粋な心情を胸に逃走するフウ太。その目の前にふと、一人の男性が映った。フウ太よりも年上の少年——雲雀恭弥——は、いかにもケンカ慣れしていて頼りになる印象だった。

「そこのお兄さん！ 助けて！」

「？」

フウ太が呼びかけると、雲雀は頭に疑問符を浮かべて立ち止まる。

その隙にフウ太は雲雀の背中に回り、猛追してくる若者たちから身を隠した。

「おう、そののがきんちよ。大人しく後ろの坊主をWA☆TA☆SE！」

「へい、ボーイ！ 兄貴の言うこと聞かなきゃ痛い目見るぜーい！」

「お、お兄さん……」

「……」

若者2名は奇妙なテンションでフウ太の引き渡しを雲雀に要求する。

確かに今僕が盾にしているお兄さんは頼りになりそうだけど、でも2対1なのは大丈夫だろうか。フウ太が不安そうに雲雀を見上げると同時に、当の雲雀が沈黙を破った。

「なに、この珍妙な草食動物？」

「え、えっと——」

「ぐずぐずすんなよ、がきんちよ。今から5秒以内に決断しなけりやその顔ぶつ飛ばーす！」

「出た！ 兄貴の無慈悲な5秒宣告！ ひゃあ、ボルテージ上がってきたあ！ へい、フュンフ！ フィーア！ ドライ——」

雲雀がフウ太に事情説明を求め、フウ太が応じようとする。

が、若者2名がフウ太の声をかき消す音量で喚き、勝手にカウントダウンまで開始する。

「話は後だね。今はこいつらを咬み殺す」

若者たちのあまりのウザさに、雲雀は不機嫌そうな顔でトンファーを握る。

戦闘スキルなんて持っていない若者2名が雲雀の攻撃により、ほんの数秒で犬神家のスケキヨのごとく、アスファルトな地面に頭から突き刺さったのは自明の理であろう。

「で。なんで追われてたの？」

「あの人たち、この子を狙ってたの。見るからに珍しいから、売ったら絶対金になるって」

トンファーを仕舞った雲雀がフウ太に尋ねると、フウ太は服の内側から一羽の小鳥を取り出した。ヒヨコのように、カナリアのようにも見える。不思議な黄色いモフモフの小鳥だった。

「それは君の飼ってる鳥かい？」

「ううん。今日、公園で見つけたんだ。でも、どうしよう。この子、多分また狙われるよね？」

「だろうね。あの2人は殺してないし、彼ら以外にもその鳥を狙う人はいるかもしれない」

「やっぱりそうだよ。うう……」

「それだけ情が移ってるのなら、君が飼えばいい」

「そうしたいけど、ダメだよ。僕、ツナ兄の家に居候してるから」

フウ太はしよんぼりとうなだれる。ツナ兄の家には今、多くの居候がいる。

そこにさらにペットの負担が増えるとなると、ツナ兄の家の家計は大変だろう。だから僕は飼えない。でも僕が飼えないばかりにこの子が可哀そうなことになるのは嫌だ。

どうしよう。フウ太が悩んでいると、雲雀が思わぬ提案をフウ太にもたらしした。

「……なら、僕が飼うと言ったら？」

「え？」

「ちようど小動物を飼いたい気分だから、僕にとってはいい機会だけど、どうする？」

フウ太にとって非常に都合のいい提案を前に、思案する。

雲雀が悪意を持って小鳥の回収を目論んでいる可能性を検討しかけて、やめた。

何も事情がわからないまま、それでも自分を助けてくれた人を、フウ太は信じたかった。

「……この子をお願いします、お兄さん」

「いいの？」

「うん。お兄さん、強くて優しいから」

「そう」

「あ、でも。また会った時にこの子と遊んでいい？」

「いいよ、別に構わない」

「やった。ありがとう」

小鳥を雲雀に託したフウ太は、自らの細やかな願いを聞き入れてくれたことに破顔した。

一方、小鳥を受け取った雲雀は小鳥を手の甲に乗せて、真摯な声色で問いかける。

「さて、僕たちの間で話は決まったけど、君自身はこれでいいの？ 僕のペットになるのが嫌なら、飛び立つといい」

雲雀は小鳥にも選択権を与える。そして、しばし小鳥の判断を待つ。

結果、小鳥は雲雀の手の甲から飛び立つことはなく、雲雀の手の甲を控えめに突いて答えた。

『ペット、ペット』

「そう。なら、これからよろしく」

『よろしく、よろしく』

小鳥は雲雀を見上げて、先ほど雲雀の口にした言葉を復唱する。

そのような愛らしい小鳥——後のヒバード——を雲雀はツツと軽く撫でる。

いい飼い主に出会えてよかったね。フウ太は小鳥と雲雀の雰囲気から安堵した。



## V S ヴァリアー編を咬み殺す

### 風紀18・†家庭教師と対面して風紀を守ろう†

黒曜編が終了してから、約1か月の時が流れ。僕は今、応接室で書類整理をしている。

そんな僕の机の端に、ヒヨコのようにモフモフした黄色い小鳥がちよこんと着地し、クルクルとした眼差しで僕の様子を眺めている。ヤバイ、超かわいい。これが人を萌え殺す程度の能力か。

だ、駄目だ。まだ叫ぶな、堪えるんだ。し、しかし——ヒバアアアアアアアアアアド!

ハッ!? あまりのヒバードの愛くるしさについて内心で愛の咆哮を放ってしまった。

ヒバードのパッシブスキル：メロメロの恐ろしさの片鱗を味わったね、うむ。

閑話休題。あの後、僕はフウ太くんからもらい受けた小鳥に原作通り、ヒバードと命名した。

ちなみに。ヒバードをペットにはしたが、鳥籠に入れて飼育、なんてことはしていない。

基本は放し飼いだ。束縛を嫌い、孤高を好む雲雀さんがヒバードを狭いスペースに拘束するのはどうかと思うしね。そんなわけで、ヒバードは僕と戯れたい時や、食事時にやってくる。

例えるなら、餌を求めてあざとさを武器に近寄ってくる野良猫と猫好き人間の関係だろうか。

今は午後2時過ぎだから、食事目的じゃなさそうかな。

ヒバードの来訪目的を軽く推測していると、ヒバードが机の端の光り物突き始める。

「いらいらい」

ヒバードの可愛さにすっかり毒されている僕は、雲雀恭弥として男

装していることを忘れ、だらしない口調でヒバードを嗜め、光り物を取り上げる。

この光り物に——雲のハーフボンゴレリング——に変に傷がついて、後々死ぬ気の炎が灯しくくなった、なんてことになったら洒落にならないからね。

そこまでボンゴレリングが柔だとは思わないけど。ま、念のため。

そう。今、僕の手元には雲のハーフボンゴレリングがある。今朝、郵便ポストに入っていたのだ。きつとツナくんのお父さんこと沢田家光さんが放り込んだのだろう。

これが意味することは単純明快、VSヴァリアー編開幕のお知らせだ。

VSヴァリアー編とは、原作6巻分ほどを使用したりボーンの長編である。

概要としては、ボンゴレ特殊暗殺部隊：ヴァリアーのボス：XANXUS<sup>ザ</sup>がボンゴレ10代目になるべく、後継者の証たるボンゴレリングを殺してでも奪おうとしたことを契機として、互いのハーフボンゴレリングを賭けて、ツナくと愉快な6名の仲間たちとヴァリアーとが計7回の1対1でのリング争奪戦を行い、最終的にツナくんサイドが勝ち越すといった感じだ。

週刊少年ジャンプの3原則『友情・努力・勝利』の要素が存分に詰め込まれたこのVSヴァリアー編の展開の熱さから、リボーンにハマったという人も多いはず。かくいう僕もその1人だ。

当時はまさかこの僕が雲雀さんに憑依するとは思わなかったけど。

ちなみに。このVSヴァリアー編を語る際に、『なんでボンゴレ9代目とその守護者はボンゴレリングを持ってないの？ 後継者の証なんでしょ？』とかツツコンではいけない。

恭華お姉さんとの約束だぞ（\*・・▽・・\*）

さて、このVSヴァリアー編で僕がどう動くかだけけど、前の黒曜編みたいに、原作沿いの流れから積極的に逃れるつもりはない。原作と同様、僕はツナくんの雲の守護者として、ヴァリアー側の雲の守護者：ゴーラ・モスカ（ロボット）と対峙する所存だ。

そもそも僕が雲の守護者として参戦しなかったら、ツナくん側が戦力にできる雲の守護者の候補を見つけれられずに雲の守護者戦が不戦敗になりかねないからね。

リング争奪戦に敗北した側のチームは皆殺しにされてしまう。リング争奪戦で負け越したツナくんたちが無残に殺されるのは嫌だから、僕が参戦しない道はない。

だが、その際に1つ、やりたいことがある。これをしでかすと、大空戦でツナくんがザンザスに敗北する可能性があるけど、それでもやりたいんだよね。ツナくんたちが殺されるのが嫌なくせに、早速矛盾しているのは確かだけど、こればかりは妥協したくない。

『譲れないものを1つ、たった1つで強くなれる』って、かの偉大なLM・Cさんもそう言ってたし、ここは意地になっておきたい。

そのやりたいことを果たすためには、とにかく強くなる必要がある。

ゆえに今まで僕は自力で特訓を重ねてきた。が、それも今日までだ。

本日、ここ応接室にリボーンの采配でディーノさんがやってくるはずだ。ツナくんの兄弟子なディーノさんの目的は、僕こと雲雀恭弥を雲の守護者として強くすること。

タダで優秀な専属家庭教師が来てくれるのだから、存分に頼らせてもらおう。

ま、さすがに原作みたく日夜ぶっ続けでディーノさんと戦うつもりはない。

いくら雲雀さんボディが疲れなくても、中身の凡人の僕は精神的に疲れるし。

それに、保険のために、リング争奪戦は全て観戦するつもりだからね。

原作通りの順番で守護者戦が展開されるとは限らないし、僕が雲雀さんに憑依して変わったように、ヴァリアー側にイレギュラーが発生している可能性は否定できないもの。

おっと。色々と考えていたらいつの間にか結構時間が経っていた

件。

そろそろデイナーさんが来そうだし、『お・も・て・な・し』の準備でもしようかな。

◇◇◇

ボンゴレファミリーの同盟ファミリーの1つ、キャバツローネファミリーの10代目ボスたる跳ね馬デイナーは今、腹心の部下のロマーリオを引き連れて並盛中の応接室へ向かっていた。

同じ家庭教師のリボーンにビシバシ育て上げられている弟弟子：沢田綱吉を10代目ボスに据えた次期ボンゴレファミリーの雲の守護者として、雲雀恭弥を鍛えるためだ。

(さーて、どんな奴が待ち受けているのやら)

リボーンから事前に聞いた雲雀恭弥の人物像は、群れることを嫌い、気に入らないことがあつたらすぐさまトンファーでボコ殴りにする狂犬、の皮を被った善人。なので、言い回しをちやんと考え、きちんと誠意を示して話せば、ツナの守護者になることを応じてくれるはず、とのこと。

「入るぜ」

デイナーは特にノックせずに応接室の扉を開ける。

部屋の中を見渡すと、ソファで悠々と緑茶を嗜む1人の少年がいた。

(見た目からして、こいつが雲雀恭弥で間違いなさそうだ)

「君たち、誰だい？ 並盛中の関係者じゃなさそうだけど」

「俺はデイナー。ツナの兄弟子で、リボーンの知人だ。後ろのは部下のロマーリオだ」

「へえ、あの赤ん坊の関係者か」

「お前が雲雀恭弥で間違いないな？」

「そうだよ。で、何の用？」

「お前が今持つてる、雲の刻印のついた指輪の話がしたい」

「ああ。これのこと？ ……その話、長い？」

「ま、5分そこらじゃ終わらねえな」

「ふうん」

デイーノは雲雀からの自身の第一印象が悪くならないよう、下手に飾らず自然体で話す。

そして。雲のハーフボンゴレリングの話題を出すと、雲雀が眼前のソファアを指差した。

「2人とも、そこに座りなよ」

「お、そんじや遠慮なく」

「……スーツの君は座らないの？」

「こちらのことはお構いなく」

「そう」

雲雀の対面のソファアにデイーノがドカツと座り、ロマーリオがデイーノの背後に立つ。

座らないロマーリオに雲雀が首を傾げるも、ロマーリオの返答に興味をなくす。

さて、どう切り込んだものか。改めて雲雀への事情説明の段取りを考えていると、デイーノの目の前に緑茶と栗ようかん（※何気に雲雀自作の一品）が差し出された。

「長話への準備はこんな所かな」

「お、サンキュー。いただきますつと。うん、美味しい。……しっかし意外だな」

「何が？」

「いや。見た感じ、細やかな気配りができるタイプには見えなくてな」  
「その認識で合ってるよ。余ってた風紀委員の所有物を在庫処分したただだから」

「え、在庫処分!？」

「賞味期限は過ぎてないから慌てる必要はないよ」

雲雀に感謝を告げ、早速栗ようかんを食べたデイーノは正直な感想を零す。

その後、雲雀の『在庫処分』の言葉に嫌な予感を感じるも、涼しげな雲雀の表情から、栗ようかんが賞味期限をとつくの昔に過ぎているとか、雲雀が栗ようかんに何かを仕込んだとか、その手の可能性はなさそうだった。

「さて、用件を聞こうか」

「よしきた」

そして。雲雀の一言を機に、デイーノの説明が始まった。

◇◇◇

マフィアのこと。ボンゴレのこと。ツナのこと。ハーフボンゴレリングのこと。などなど。

デイーノは一般人の雲雀にもよくわかるように懇切丁寧に事情を話した。ちなみに。後の雲雀の独り言曰く、原作知識のあいまいな部分を補完できて助かったとのことだ。

「ふう、こんな所だ。要約すると——雲雀恭弥。お前には未来のボンゴレ10代目たるツナの雲の守護者となって、ヴァリアーと戦ってほしい。そこで、ヴァリアーと対等に戦うために、俺にお前を鍛えさせてくれ」

「僕がそのヴァリアーよりも弱いつて言いたいのか?」

「そうじゃない。けど、俺は噂を鵜呑みにしない性質でな。家庭教師として、直接お前の実力を確認して、ヴァリアーに勝てなさそうなら鍛えて強くしたいんだ」

「……」

「で、どうだ?」

「嫌だ」

「え?」

「断る」

ツナを取り巻く事情を話し込むにつれて、すっかり雲雀が自分の頼みを受け入れてくれるものと思いついていたデイーノは、首を横に振る雲雀に慌てて言葉を紡ぐ。

「え、いやちよつと、なんでだよ? 恭弥って並盛の風紀を大事にする主義なんだろう? ヴァリアーが並盛で暴れるのを放置する気なのか?」

「いきなり馴れ馴れしくなったね、君。……ヴァリアーの荒らし行為を看過するつもりはないよ。けど、どうして僕が特定の草食動物の下につかないといけないの?」

「あ、そういうことか。別にツナの部下にならなくていい。ただ恭弥らしく、雲の守護者らしく、ヴァリアーを倒してほしい」

「雲の守護者らしく?」

「ああ。『何者にも囚われず我が道を行く浮雲』らしく、独自の立場でボンゴレファミリーを守ってほしいんだ」

「……」

「こ、今度こそどうだ?」

デイーノは雲雀の顔をうかがいながらおそおそと尋ねる。

一度バツサリ断られただけに、今のデイーノの表情からは緊張感が読み取れる。

「……僕はいつでも、風紀を守るだけだ。ボンゴレだとか、マフィアだとか、関係ないね」

「てことは、今回は協力してくれるってわけか。何たって、並盛町民のツナとその仲間の命を狙って、無法者が並盛に乗り込んでくるんだからな」

「そうなるね」

「そうかそうか。いやあ、良かったぜ。もし勧誘失敗ってなったらりポーンに何されるかわかったもんじゃなかったからな」

「その時は力づくでも僕を雲の守護者にすればいいんじゃないの？」

「んな禍根を残す真似、最終手段以外で使う気ねえよ」

「ふうん。ま、実力行使された時は返り討ちにするだけだけど」

「ハハ、言うじやねえか」

雲雀が雲の守護者の件に応じてくれたことで肩の荷が下りたらしいデイーノは、雲雀の挑発的な物言いにも朗らかな笑顔で返し、バツと勢いよく立ち上がる。

「よっしゃ。話は決まったし、早速修行を始めるぜ、恭弥！」

「待った。まだ今日の仕事が終わってないから、修行は後ね」

「——つて、何だよ。締まらねえな。出鼻くじかれちまったじゃねえか。……その仕事は他の奴に頼めねえのか？ 多分、修行は風紀委員の仕事の片手間じゃこなせないぞ？」

「そうなの？ なら、草壁哲矢に業務を引き継ぐから……そうだね。1時間後に出直してよ」

「いや。他に用事ないし、それぐらいならここでテキトーに時間潰しとくぜ」

「そう」

デイーノは再びソファアに座り直し、草壁に連絡するため携帯を取り出す雲雀を眺める。

どんな修行内容がいいかと思いを巡らせていると、雲雀がジツとデイーノを見つめ返してきた。

「ん？ どうした、恭弥？」

「さっきから君は勘違いしてるようだね。君は僕の家庭教師になるんじゃない、僕が強くなるための少し頑丈なサンドバッグになるだけさ」

「ホント、恭弥は威勢がいいな。それでこそ、鍛え甲斐があるってもんだ」

「……やれやれ」



雲雀からの焚きつけるような発言に、デイーノは気分を悪くせず  
ニカリと笑う。

かくして。デイーノと雲雀は原作と比べて、さほど殺伐としていな  
い初邂逅を果たした。

## 風紀19・†ダイジエストな修行で風紀を守ろう†

僕が雲のハーフボンゴレリングを入手したその日、ディーノさんがやってきた。

その目的は、ヴァリアーが偽物のハーフボンゴレリングを掴まされたと気づき、並盛町へ殴り込むであろう10日後までに、ヴァリアーの雲の守護者を倒せるレベルにまで僕を鍛えること。

……実際にヴァリアーが並盛に来襲するのに1週間もかからないのはここだけの話。

とはいえ、何か特別なことをするわけじゃない。

原作と同様に、ただひたすら僕とディーノさんがガチンコバトルをするだけだ。

僕が、雲雀さんが強くなるのに必要なのは、自分と同格か、それ以上の相手との真剣勝負。

ディーノさんと本気でぶつかり合い、急ピッチで経験値を溜めていくことこそが重要なのだ。

そんなわけで、家庭教師ディーノさんによる、僕の修行が始まった。ロマーリオさんがまるで菩薩のように、ニコニコ笑顔で僕とディーノさんを見守る中。雨ニモマケズ、風ニモマケズ。いかなる天候だろうと関係なく、並盛中の屋上を始めとして、工場跡、海岸、山麓、川辺など、様々な場所で僕とディーノさんは激しい戦闘を行った。時には、互いの武器を捨てて素手で戦ったり、利き腕の使用を禁じたりと、縛り条件を設けて激闘を繰り広げた。

そんな体を酷使したガチンコバトルを5日続けた今日、オデノカラダハボドボドダ！

ちやんと食事を取っているし、睡眠時間も確保しているから原作より怪我の具合はマシなんだろうが……現状、僕の全身の至る所にディーノさんのムチの打撲痕が青々と刻まれている。これはどう見てもドSな彼氏に可愛がられている(意味深)DMな彼女特有の体です。ね、わかります。ま、僕も負けじとディーノさんをトンファーでボ

コリまくってるからお相子だけどね。

それにしても、戦えば戦うほどによくわかる。

ムチという一見ふざけた武器が、かなり利便性が高いことに。

基本的にリーチが長く、しかし距離を詰められても即座に対応できる。

青痣を与えるだけでなく、皮膚を切り裂くことも容易にできる。

敵が間合いを図りにくくなり、存分に翻弄できる。

ふむ、ムチ。ムチか。……アリかな。

せっかくムチのスペシャリストがいるんだし、挑戦してみるか。

何事も未知の領域に臆せず、挑戦するユー○ヤン精神が大切だろうしね。

何より、雲雀さんにムチってかなり似合う気もするし。

「跳ね馬。君はムチを使いこなすのにどの程度時間をかけた？」

「ん？ どうした、恭弥？」

「いいから答えなよ」

「そうだなあ。ま、一朝一夕のことじゃなかったな。癖のある武器だしな」

そんなわけで。早朝の並盛山中にて。今日も僕を鍛える気満々なディーノさんに問いかける。

きよとんとしているディーノさんに催促すると、ディーノさんは首を傾げながら返答する。

ふむふむ。そう簡単にはムチを使った戦い方をマスターできないと。まあ当然か。

でも。だからって「あ、そう」と引き下がるつもりはないけどね。独力で『溶解さくらもち』を習得できた雲雀さんの天才スペックならきつとムチマスターにもなれるはず。

「ふうん。君がその程度なら、すぐに身に付けられそうかな」

「え？」

「跳ね馬。予備のムチぐらい持つてるよね？ 僕に貸してくれない

？」

「はあ？ いきなり何言つて——まさか、今からムチを極めようつて考えてんじやねえよな？ やめとけつて。今、武器を変えたらヴァリアーに勝てなくなるぞ。今のまま、トンファーでの戦闘技術を仕上げなきゃだ」

「誰がトンファーからムチに鞍替えすると言ったかい？ 僕の武器はトンファーのままだよ。ムチを学びたいのはあくまで保険。使える手段が多いに越したことはないからね」

「ああ、そういう考えか」

僕がディーノさんにムチの貸し出しを要請すると、僕が武器をトンファーからムチに変更したがっていると解釈したディーノさんが真剣な面持ちで忠告してくる。この勘違いはすぐに解消しないとムチで戦わせてくれない。ということで、僕は直ちに己の見解を述べた。

「そーいや昨日、ポイズンクッキングで俺のムチを溶かしたよな。トンファーにも色々仕込んでるし、戦い方が多彩というか、パターンがないというか……何つうか、凄え雑食だな、恭弥つて」

「並盛の風紀を守るために手段を選んでないだけだよ」

「なるほどな。けど、ムチの扱いは厄介だぞ。俺だって今みたいに馴染ませるのにメチャクチャ苦労したんだ。そう簡単に習得できると思ふなよ？」

「なら、1日でマスターして君の悔しそうな顔を拝むとするよ」

「ホント、どこからその自信が出てくるのやら。ムチの世界を思い知らせて、泣かせてやる」

売り言葉に買い言葉な応酬の後、ディーノさんから予備のムチを投げ渡された僕は、トンファーを仕舞いつつムチをキャッチする。雲雀恭弥らしく振舞うために積極的にディーノさんを挑発しているが、言葉とは裏腹にディーノさんが大人の余裕を保った態度でいてくれるのはありがたい。険悪な関係になっちゃうと、僕が精神がストレスでマツハだからね。

「そんじや、いくぜ——恭弥！」

「今日こそ君を咬み殺す」

はてさて、今日はこの恭華さんボディにどれくらいの青痣が増やされるのだろうかね。

◇◇◇

沢田家光はボンゴレ10代目候補の沢田綱吉の父親である。

同時に、ボンゴレファミリーに属しながらも独立した諜報機関 チエ デ フ C E D E F のトップである門外顧問に就任しており、ボンゴレの若獅子とも称されている。

ボンゴレ No. 2 の地位を持つ門外顧問の権限は大きい。

ボンゴレの後継者選びにおいてボスと対等の権限を所持しているのがその証左だ。

家光は今回、ハーフボンゴレリングを息子のツナとその知り合いに配布した。

対して、ボンゴレ9代目はハーフボンゴレリングをヴァリアーに分配した。

この不一致から先ほど、ヴァリアーとツナたちが一触即発の状態にまで陥った。

が、家光がもたらした9代目の勅命により、ヴァリアーとツナたちの全面戦争は免れた。

代わりに、ヴァリアーとツナたちは9代目直属と自称するチエルベツ口機関の監修の元、明日よりハーフボンゴレリング争奪戦に参戦することとなった。

同じ種類のリングを持つ者同士が互いのリングを賭けて命を削るのだ。

家光はボンゴレ No. 2 でありながらチエルベツ口機関のことを知らない。

遅かれ早かれ、チエルベツ口機関について探りを入れる必要がある。

しかし、何よりも優先するべきはツナの守護者の修行状況を逐次確認することだ。

そう判断した家光はこの度、雲雀とデイーノ（+ロマーリオ）のいる並盛山に足を踏み入れた。

「調子はどうだ、デイーノ？」

目的の人物はすぐに発見できた。夜の山は暗く、一見人探しは困難なように思われる。

しかし、明かりが乏しいゆえに、最近並盛山で寝泊まりしている雲雀たちが灯した焚き木の炎を見つけ出すのは、家光にとってそう難しい事ではないのだ。

「おっと、家光か。神出鬼没だな」

「知己をちよつとばかり驚かせるのが俺の中で流行っててな」

「趣味の悪いマイブームだな」

デイーノに背後から声をかけ、少しデイーノを驚かせた所で家光は雲雀に視線を向ける。

雲雀は少々太めの木の枝に座り、木の幹に背中を預けてすやすやと眠りについていた。

「で、雲雀の実力はどんなもんだ？」

「正直、見込み以上だ」

「というところ？」

「恭弥は憎らしいほどの天才だぜ。大して強敵との戦闘経験なんてないはずなのに、俺の本気に喰らいついてくるし、必死に考えた初見殺しな技も平然と最小限の被害に抑えてくる。俺の手札を全て見透かされてんじやねえかって疑いたくなるレベルだ」

「ほう」

「何より恭弥は、使えそうな技術は何でもかんでも吸収しようとする嫌いがある。今日もあつさりムチで戦えるようになりやがったし……あの貪欲さは、恭弥をどんどん強くするぜ」

「そいつは良かった」

「あ、これ恭弥には話さないでくれないか？ 下手に調子に乗られると困るからさ」

「あいよ」

デイーノから忌憚なき意見を聞いた家光は安堵の言葉を零す。

これだけデイーノがべた褒めするのなら、雲の守護者戦の心配は杞憂になりそうだと。

「ところで、何かあったのか？ 険しい顔してるぜ？」

「ああ、実はな——」

家光はデイーノに先ほど決定したリング争奪戦についての一切を伝える。

端的に現状を伝え終えた時、デイーノは神妙な顔つきで正直な感想を呟いた。

「チエルベツロ機関が仕切るリング争奪戦か……妙なことになってるな」

「ま、お前たちはこの調子でひたすら戦っておけばいいさ」

「——へえ、面白いことになってるね」

と、その時。家光とデイーノの上から唐突に声がかけられた。

見上げると、そこにはふわあくとあくびをしている雲雀の姿があった。

「恭弥!? 起きてたのか!？」

「知らないの？ 僕は葉が落ちる音でも目が覚めるんだ」

「マジかよ!? え、待て。恭弥、いつから起きてた？」

「『恭弥は憎らしいほどの天才だぜ。大して強敵との戦闘経験なんて——』」

「最初からかよ!」

「君が嫉妬するほどの才を僕は持っているようだね。これなら君を容

赦なくサンドバッグにできる日も近いかな?」

「やっぱこれ調子に乗ってるよな。明日こそは絶対叩きのめしてやる」

「期待してるよ」

家光は、雲雀とディーノとのやり取りを微笑ましく見守る。言葉だけを捉えるなら仲が悪そうに見えるが、その実、2人にはしかと信頼関係が築かれているとわかったからだ。

「それはそうと、そのリング争奪戦。観戦させてもらおうよ。並盛の風紀を揺るがすヴァリアーとやらがどの程度なのか、興味があつてね」

「リング争奪戦に興味を持つてくれるのは嬉しいけど……恭弥、大丈夫か?」

「何が?」

「リング争奪戦の舞台は並盛中だ。下手したら、並盛中が戦闘で壊されるかもしれない。その中で、理性を保てるか? 1対1の守護者戦に乱入なんてしないよな?」

「暴れてほしいの?」

「やめてくれ。雲のハーフボンゴリングを没収されかねない」

「なら暴れないでよくよ。リングがないせいでヴァリアーと戦えなくなるのはつまらないし」

「お、明日来てくれるか。いやあ、助かるぜ。明日、何の守護者が戦うかわからないから、観戦する守護者は1人でも多い方が安心してもらうだ」

リング争奪戦の観戦に関して会話を繰り広げる雲雀とディーノの前に、家光は意外そうに言葉を紡ぎ、笑みを浮かべる。雲雀が観戦に来てくれれば、明日が雲の守護者戦になった際にヴァリアーの不戦勝とならずに済むからだ。

「君、誰?」

「俺は沢田家光、ツナの父親だ。息子が世話になつてるな」

「別に。……眠い、おやすみ」



朗らかな笑みで自己紹介する家光から雲雀はぷいと視線を逸らし、その後あくびとともに目を瞑る。夜間に目覚めたばかりなせいか、まだまだ寝たりなかったようだ。

「恭弥はホント、マイペースだなあ」

「面白くていいじゃねえか」

「気楽なもんだな、家光は」

雲雀の様子にディーノはやれやれとため息を吐き。家光はニカニカ笑う。

かくして。リング争奪戦前日の夜が過ぎゆくのであった。

## 風紀20・↑混乱中の思考でも風紀を守ろう↑

やあ、僕だよ。女体化した雲雀さんに憑依中の僕だよ。

現在時刻は夜の10時45分。僕は今、ディーノさんとの修行を切り上げ、単騎で並盛中の校舎脇に足を運んでいる。目の前には本格的に組み上げられた特設リング。『日輪のコロシウム』と称されるこの戦闘エリアは、まるで地下格闘場のようだ。

「う、お、おい！ テメエ、昨日は見なかった奴だな？」

何となくコロシウムを眺めていたら上から並盛中一帯に響き渡るぐらいの大声が聞こえた。

直後、屋上から飛び降り、僕の目の前にシユタタとスタイリツシユに着地するヴァリアー勢。

あ、そういえばヴァリアーって集合時刻の11時より前に現場に集合してたっけ。

確かレヴィに至っては2時間前から待機してたって設定だし、意外と律儀だよな。

「だったら、なに？」

「昨日見たガキどもはどいつもこいつも雑魚だったから姿を見せねえ他の奴に期待してたんだが、テメエも期待外れだな！」

まだツナくんたちが誰も現場に来ていないから、暇だったのだろうか。

キレル若者よろしく、スクアアロがヴァリアーの先頭に立って雑に僕を煽ってくる。

でも、僕知ってるよ。今はただの『俺に触れたら火傷するぜ』と言わんばかりの白髪長髪剣帝お兄さんだけど、実は面倒見が良くて気配り上手なできる上司さんだって知ってるんだ（\*^o^\*）

「弱い奴ほどよく吠えるとは聞くけど……君はわかりやすい具体例だ

ね」

「うゝお、おい！ いい度胸じゃねえか。ここで始めるか？」

「僕は構わないよ」

とはいえ、挑発されたら挑発し返すのが雲雀恭弥スタイルなので煽り返さない手はない。

僕は沸点の低いスクアーロとバチバチと火花を飛ばす。スクアーロの眼力、超怖い件。

「おやめください。守護者同士の場外での乱闘は失格となります。ここで矛を収めないのなら、双方のハーフボンゴレリングを没収いたしますよ？」

「……チツ、邪魔が入ったか」

「君、命拾いしたね」

「ああ、!？」

チエルベツロ機関の女性がいいタイミングで仲裁に入ってくれたので、素直に退く。

また、視界端にツナくんたちが見えたので、捨て台詞を残してヴァリアーの元を去った。

僕の背中にビシビシ伝わってくる威圧のオーラなんて気にしない気にしない。

「え、雲雀さん!? 来てくれたんですか!？」

「おお！ 雲雀も来たのか！ 極限にやる気のような！ 良い事だ！」

「弱い草食動物のくせに、なんで僕の仲間面してるの？ 咬み殺すよ？」

ツナくんが目を丸くして驚き、了平くんが晴れやかな笑みを浮かべて歩み寄る。

僕は直ちにトンファーを構えて威嚇し、スタスタとツナくんたちから距離を取る。

ここで群れてくるツナくんたちを黙認すると、雲雀恭弥像として違

和感が生まれちゃうからね。

「ひ、あ、あの、ごめんなさい!？」

「なッ!? 極限に何なのだ、あの態度は!? 雲雀も俺たちと共に戦うつもりでここへ来たのではないのか!？」

「ケツ、あの野郎。お高くとまりやがって。気に食わねえ」

やっぱり雲雀さんは怖いままだと怯えるツナくん。

守護者になったのにツナくんの元に集おうとしない理由が理解できない了平くん。

せっかく出くわした僕相手にかつてのリベンジをしたいが、リング争奪戦前に下手に怪我を負わせては本末転倒だからと、僕を睨みつけるだけに留まる獄寺くん。

「まあまあ、いいじゃねえか」

僕の高圧な態度で少々僕へのヘイトが高まるも、山本くんが素でフォローを入れてくれる。正直、助かります。雲雀さんロールの影響でファミリー内で変に軋轢が生まれたら厄介なもの。尤も、山本くんのフォローがなかったら代わりにはリボーンが落ち着かせてくれるだろうけど。

さて。そんなやり取りを経て。午後11時からリング争奪戦の1回戦が始まった。

もちろん、僕は山本くん発案の「了平ファイオー!」な円陣には参加していない。

初戦は原作通り、晴の守護者同士の対決。役者は了平くんとルツスーリア（モヒカンオカマ）だ。明日の天気は雨と、事前に情報を仕入れている。この分なら、明日は雷の守護者同士の対決となりそうだ。守護者戦の順番は原作と変更はなさそうだね。

対決の経過も大体原作通りだった。最初はムエタイを駆使するルツスーリアや、『日輪のコロシウム』の強烈な光や熱に苦戦を強いられる了平くんだったが、妹魂シスコを起点に極限太陽マキシムキャンを繰り出し、ルツスー

リアの膝を粉々に砕いて逆転勝利を果たした。

これならリング争奪戦の勝敗も原作と変わらないっばいかな。ほむほむ。

「……」

晴の守護者戦を観戦するための必須アイテムだったサングラスを外した僕は1つ息を吐く。一見、落ち着き払っているように見えて、今の僕は『こんらんしている』状態だ。なぜなら、と。僕は改めてヴァリアー勢に視線を向ける。その先に映るのは、黒髪の女の子。

ところで、あの女の子、誰？ ヴァリアーに女の子っていなかったよね？ 性別不詳の赤ちゃんはいたけどさ。てか、レヴィがいなくね？ どこにも見当たらないんだけど。え、じゃあもしかしてこの世界のレヴィも僕みたいに女体化してるとか？ レヴィ・ア・タンがレヴィアたんになっちゃってるとか？ いや、待った。早合点は良くない。ザンザスの理不尽な暴力のはけ口にされたとかで今日たまたまレヴィが観戦しに来てないだけかもしれないじゃないか。でもそれじゃあ、あの女の子の正体はどうなるの？ レヴィ率いる雷撃隊の一員とか？ それとも実はリボン二次創作によくある8つ目のハーフボンゴレリングの守護者になったオリキャラとか？ ボンゴレリングが天候になぞらえたものなら、例えば雪のハーフボンゴレリングがあっても別におかしくないし？ 属性・凍結辺りで未来編で雪白熊とか雪アザラシとかいった匣兵器を使う強敵が出てきても不自然では——って、思考が脱線しまくってないかな!? 落ち着こうよ、僕！ どうどう！

「今宵の勝負はこれで終わりますが、今回より決戦後に次回の対戦カードを発表します。明晩の対戦は——雷の守護者同士の対決です」  
「明日か。このレヴィ・ア・タン、あんなガキなんか5秒で壊して、ボスの寵愛を賜るとしよう」

と、ここでチエルベツ口が明晩に関する連絡事項を公表する。  
すると、例の女の子がふふふと口角を吊り上げる。

やっぱりあの子、レヴィアたんじやないか!? あの美少女っぷりでボストは変わらさずとか、ヤンデレ待ったなしじやないか! なに、デキてるの!? 寵愛とか言ってるし、ザンレヴィ始まってるのは!? てか、なんでレヴィが女の子になってるの? 僕が雲雀さんに憑依した影響によるバタフライエフェクトとか? ならレヴィのついででスクアードも女体化してるのかあり得るのかな。スクアードは長髪キャラだからあり得ないことはないかも? いや、でもさつき凄まじい時はとても女性には——って、いい加減に正気に戻ろうか!

「……皆、帰ったのか」

僕が女体化したレヴィに関して混乱しまくっている内に、チエルベツ口機関もヴァリアーもツナくんたちも校内から去ったらしい。僕も並盛中を後にしようと思を進めると、僕の前方から意外な人物が声をかけてきた。

◇◇◇

「じゃーな」

晴の守護者戦の終了後。対決を観戦していた山本武はツナに手を振って家路に就く。

と、見せかけて一人こっそりと校舎脇へと戻る。山本の向かう先には、チエルベツ口機関により一瞬にして解体された『日輪のコロシアム』の残骸と、現場にたたく雲雀恭弥。

山本は雲雀に用があつた。単純に、雲雀と模擬戦を行いたかつたのだ。

雨の守護者戦を迎えるまでに強者と戦い、自身の課題を見つける所存なのだ。

その強者として、同じ守護者の雲雀はちょうどいい相手。ゆえに今、山本は雲雀への接触を試みる。今を逃せば、次の機会はもう巡ってこないかもしれないからだ。

「雲雀」

「なに?」

山本が雲雀の名を呼ぶと、突き放すような一言が返ってくる。

本題に入る前にまずは雑談を挟んだ方が良さそうかなと、山本は言葉紡ぐ。

「いや、ちよつとな。にしても、雲雀もツナの守護者なんだよな? 心強いぜ」

「勝手に君たちの遊びに僕を加えないでくれる? 僕はただ、並盛の風紀を脅かす不屈き者を一人残らず咬み殺すだけだよ」

「そっかそっか。頼りにしてるのな」

「……で、何の用? 僕は忙しいんだ、要件はさっさと行ってくれない?」

「お、いいのか? そんじゃ早速——今から俺と戦ってくれないか?」

雲雀と少し会話をしていると、雲雀が山本を鋭く睨みつけ、本題を催促してくる。雲雀から許可が出たので、山本は早速、頼み事を持ち出した。雲雀の眼光なんてものともしていない。

「……どういふ風の吹き回し?」

「俺さ、スクア—ロって奴に勝ちたいんだ。親父に頼んで修行をつけてもらって、時雨蒼燕流の型は覚えたけど、今のまま本番ってのは少し怖くてさ。相手になってほしいんだ」

「僕を試金石にするんだ。ふうん、度胸あるね」

「ははは? で、どうだ?」

「……山本武。君と初めて会ったのは1年前だったかな」

「?」

「いいよ。1年前は僕に咬み殺された君が今、どこまで喰らいつけるか見させてもらう」

「そっくなくっちゃな!」

雲雀が自分との手合わせに付き合ってくれる。意外とすんなりと雲雀が山本の頼みに応じてくれたことに、山本はわんぱく小僧のよう

に、嬉々として時雨金時を鋼鉄製の竹刀から日本刀に変化させ、構える。強者：雲雀恭弥の胸を借りる。そのつもりで山本は、全力で雲雀へと駆け出した。



## 風紀21. †手合わせをして風紀を守ろう†

リング争奪戦1戦目、晴の守護者戦の終了後。  
深夜の並盛中の校舎脇にて。僕は今、山本武と模擬戦を行う流れになっっている。

山本武。ついこの前までただの野球少年だったはずが、リボンがギャグ中心からバトル中心へと方針をシフトする中で時雨蒼燕流と出会い、一気に剣豪の才覚を顕わにする予定の男だ。

でもって、リング争奪戦が始まってもお、深刻な空気をいまいち読み取れず、マフィアごっこの一環と考えるぐらいの重度の天然さんだ。

山本くんはつい1週間前に時雨蒼燕流の剣技を習得したばかりの素人だ。

普通に考えれば、元から強く、さらに日々修練を積んできた僕が、負ける要素はないだろう。

しかし、侮ってはいけない。この模擬戦、少しでも気を抜けば、僕は山本くんに負ける。

『並盛中ケンカの強さランキング』で山本くんは何気に僕に次ぐ2位だ。

しかもそのランキングは山本くんが時雨蒼燕流を取得する前のデータに基づいたもの。

さらに、リボンが『生まれながらの殺し屋』と称するほどに柔軟に山本くんは戦える。

要は、山本くんは雲雀さんと同じく天才型の人間なのだ。攻式四型・守式四型を1回見せてもらって、型を真似するだけでマスターしないといけないという、次世代に継がせる気がないと思えないハードモードな滅びの剣：時雨蒼燕流を物にしているのが良い証拠だ。

原作でも雲雀さんが山本くんの動きに対応できなかつたシーンがあることから、山本くんは舐めていい相手じゃないのだ。全力で戦

わねば、勝利は掴めない。

尤も、僕に手を抜くつもりは毛頭ない。

凡人の僕が舐めプなんてしたらすぐさまバツサリ斬られちゃうし。それに、何か急にザーザーと、バケツをひっくり返したような豪雨が降り始めたし。

あつという間に足首が浸かるぐらいの水位になっちゃったし。

時雨蒼燕流は水のある環境でこそ、真価を發揮する。いくら明日の天気予報が雨だからって、よりによって今から降り始めるって、山本くんってば運を味方につけてるなあ。

「いぐぜー」

目の前には、時雨金時を日本刀へ変形させつつ一息に距離を詰めんとする山本くん。

山本くんがお父さんから譲り受けた武器：時雨金時は時雨蒼燕流の型を使おうとしている時のみ竹刀から日本刀へ姿を変えるのだ。

「来なよ」

まるで水を得た魚のように生き生きとしている山本くんを前に、僕はトンファーを構える。

この度、僕は搦め手を存分に織り交せて山本くと戦うつもりだ。山本くんがスクアール口との戦いを見据えているのなら、常に搦め手の存在を頭の片隅に置いてほしいからね。そうすれば、雨の守護者戦での山本くんの怪我は減ってくれることだろう。あと、何だかんだで勝ちたいし。

とはいえ、さすがに『溶解さくらもち』で山本くんの時雨金時を溶かして使い物にならなくするのは可哀そうだし雨の守護者戦にも影響しそうだから、そこは自重しよう。うん。

さーて、それではご唱和ください。

HEAVEN OR HELL, Let's Rock !!



時雨蒼燕流にとって都合のいい豪雨が並盛町一体を襲う中。

山本武は雲雀恭弥へ向けて駆け出した。己の大好きな野球で鍛え上げた身体能力で瞬く間に雲雀との距離を縮めた山本は、早速両手に掴む時雨金時を雲雀の胸に目がけて突く。

——時雨蒼燕流 攻式 一の型 車軸の雨

そのまま立ち呆けていれば、雲雀は時雨金時に体を貫かれたことだろう。が、山本の実力を十分に警戒している雲雀が、山本の繰り出す俊敏な刀を目で追えないわけがない。

「遅いよ」

雲雀はトンファアを下から振り上げ、時雨金時を上方へ弾く。衝撃で山本の両手が頭上へ持ち上げられた所で、雲雀はトンファアの先端を山本に向けて、ズガンと発砲した。

「いいッ!?!」

まさかトンファアに銃機能が搭載されているとは露にも思わなかった山本は、動揺しながらも反射的に横に跳んで銃弾をかわす。が、山本の回避先を読んでいた雲雀は一直線に山本へ迫り、トンファアを振るう。その間に、再び時雨金時を構え直した山本と雲雀は、一合。二合と。互いの得物を激しく打ち合わせる。

現状、リーチの面では山本が著しく不利であった。雲雀が山本の懐に入り、不自由なくトンファアの猛攻を畳みかける一方、時雨金時の太刀の長さでは雲雀との距離が近すぎて窮屈なのだ。

（こども押されてると戦いづらい。距離を取らねえと——）

「逃がさないよ?」

山本は雲雀の攻撃の隙を見極め、一旦後退しようとする。

が、雲雀は山本の思考を見据えたかのような発言の後に、両手のトンファアからバシユツと鎖分銅を出す。そして、トンファアを振り回し、先の尖った分銅で山本の右肩を突き刺した。遠心力を存分に味方

にした分銅の一撃は、山本の右肩を思いの外、抉った。

「ぐッ!？」

山本は痛みに顔を歪める。すぐに痛みについての考えをシャットアウトする。

その後。速やかに雲雀から距離を取るため、山本は右手に時雨金時を持ち、左手のみでバックハンドスプリング。両手で時雨金時を構え直し、刃先を水に浸け、水を巻き上げるように振るった。

前方へと押し出された大量の水はそのまま、山本へ追撃を仕掛けんと接近する雲雀を呑み込んだ。が、水を被った程度で雲雀は止まらない。決して、迂回せず、止まらず、まっすぐに走り、山本であろう人影に鎖分銅をぶつけにかかる。

しかし、今度は山本の体を分銅が穿つことはなかった。山本が、水を利用して雲雀から自身の姿を隠しつつ、体を小さく屈めて刀を眼前に添え、鎖分銅の攻撃にしかと備えていたからだ。

——時雨蒼燕流 守式 二の型 逆巻く雨

上手く雲雀の分銅に刃先をぶつけ、ガキンと弾いた山本は、大振りに時雨金時を振るう。

直後、雲雀の分銅を繋ぎ止めていた真ん中の鎖部分がパツキリと切断された。

「ふう、何とかなつたぜ」

「へえ」

ほんのわずかな時間で鎖分銅を攻略されたことに雲雀が意外そうに声を漏らす。

一方。鎖分銅にどうにか対処できたことで勢いづいた山本はお返しだと時雨金時を振るう。

山本にとつてちよいどいい時雨金時のリーチは、雲雀にとってはトンファアの届きにくいリーチ。なるべく長居したくないリーチ。ゆえに雲雀は、山本が時雨金時を真上から振り下ろしたタイミングで、トンファアで刀身を上から叩きつける。

雲雀の渾身の力で殴られた時雨金時の刃先は勢いのままに水面下の地面に突き刺さる。

「おわッ!？」

すぐさま時雨金時を持ち上げようとして、しかし意外に深くまで突き刺さったせいも、持ち上げるのに想定以上の筋力を要したことに山本は驚きの声を素直に上げる。

対する雲雀は数歩ほど後退し、壊された鎖分銅をトンファーに仕舞いつつ、鋭く山本を睨んでくる。この時、雲雀は勝負は再び仕切り直しだと考えていた。しかし、山本は雲雀のすぐ背後に校舎があることを一瞥し、今こそが攻める好機だと捉えた。

「これならどうだ?」

「?」

山本はせっかく持ち上げた時雨金時をパツと手放す。

一見、意味の分からない山本の行動に雲雀がコテンと首を傾げるも、刹那。雲雀はパツとその場から真横に飛び退いた。闇を切り裂く閃光のように時雨金時が飛んできたからだ。

雲雀がかわさなければ、今頃時雨金時は雲雀の脇腹に突き刺さり、背後の校舎に雲雀の体を繋ぎ止めたことだろう。山本が何をしたのか。答えは単純、山本は時雨金時を手放し、時雨金時の柄が水面に落ちるか落ちないかといった所で右足で時雨金時を蹴り飛ばしたのだ。

——時雨蒼燕流 攻式 三の型 遣らずの雨

同時に、山本は一気に雲雀へとフルスロットルで飛び出す。山本の奇襲に雲雀が度肝を抜かされている内に、山本は校舎の壁に突き刺さる時雨金時を引き抜きつつ横薙ぎに雲雀へと払う。だが、ここでもう我に返った雲雀はその場にしゃがんで時雨金時の軌道から逃れつつ、山本の右手の甲をトンファーで打ちつける。結果、強い衝撃について、山本は時雨金時を手放す。

「今のは面白いね。でも、終わりだよ」

「いや、まだだ！」

雲雀はニイと笑い、両手のトンファーで怒涛のラッシュを繰り出す。

しかし、どの攻撃もまるで山本に当たらない。体にかすりはしても、全然決定打にならない。雲雀のトンファーのリーチの中。山本は雲雀の呼吸をジツと眺め、呼吸音に耳を澄ませ、足元の水の流れに合わせ、相手の体の動きに合わせ、一切の攻撃をかわしきる。

——時雨蒼燕流 守式 四の型 五風十雨

山本は雲雀の攻撃の途切れ目を狙い、足元の時雨金時を蹴り上げ、右手でキャッチする。

そして、間髪入れずに右手で胴薙ぎをする。当然、雲雀は時雨金時を防ぐためにトンファーで盾をした。が、肝心の時雨金時が来ない。なぜ。雲雀が疑問を抱いた時、気づいた。山本の右手に時雨金時が握られていない。その瞬間、ワンテンポ遅れて、山本の左手に持ち替えられた時雨金時が、雲雀に迫った。

——時雨蒼燕流 攻式 五の型 五月雨

雲雀は防御のタイミングを狂わされた。が、ギリギリの所で山本の時雨金時をガキンとトンファーで防御できた。雲雀の天才的な身体能力・反射能力の賜物である。

「中々やるね」

「今のを防ぐのかよ……！」

雲雀と山本はつば迫り合いに突入する。山本の時雨金時と雲雀のトンファーにそれぞれ力が込められ、押して押されてのプレッシャーの掛け合いが行われる。

と、ここで。山本が動いた。ダンと力一杯に地面を踏み、思い切つて背後に跳躍した。当然、雲雀は追撃のために前に踏み進む。そして、風を切つて振るわれたトンファーを山本は紙一重の所で避け、雲雀とのすれ違いざまに左の小手を柄でドゴツとぶつけた。

——時雨蒼燕流 守式 六の型 黒風白雨

「ふん」

左手に痺れが走り、一時的に左手ではトンファーを持ってなくなった雲雀は右手のトンファーで、山本の背中に立て続けに銃弾を放つ。が、弾かれたように振り返った山本は足元の水を巻き上げながら、中薙ぎに時雨金時を振るい払い、銃弾を弾き飛ばした。

——時雨蒼燕流 守式 七の型 繁吹き雨

山本は再び時雨金時の刃先を水に浸け、大量の水を雲雀の頭上に落ちるように巻き上げる。雲雀は水に吞まれないように前へと踏み出し、山本の顔面目がけてトンファーを振るう。が、当然ながら山本には時雨金時で防御される。と、その時。山本は時雨金時のリーチでないにもかかわらず、さらに一步。雲雀の懐に踏み込み。八の字を描くように、変幻自在の鋭い斬撃を雲雀に浴びせた。

——時雨蒼燕流 攻式 八の型 篠突く雨

雲雀の体はいともたやすく吹っ飛ばされ、校舎に叩きつけられる。老朽化が進んでいたのか、校舎の壁の一部が壊れ、雲雀に降り注ぐ。そうして、雲雀の姿は瓦礫に覆われた。

「……」

山本は依然、警戒を解かない。ジツと瓦礫を見つめる。が、雲雀の反応はない。雲雀の動く気配がない。

「やった、のか？ って、ヤベエ。やりすぎた。雲雀を助けないと——」

「——相手が勝利を確信した時、そいつはすでに敗北しているって言葉、知ってるかい？」

「え？」

山本は雲雀に勝利したと思った。同時に、このまま雲雀が瓦礫と水に埋もれば命が危ぶまれると、慌てて駆け寄ろうとした。瞬間、雲雀の不敵な声が届く。困惑から山本は立ち止まり、直後。バチツと山本の右足を何かが巻き付いた。視線を落とすと、そこには黒いムチ。

「ムチ？　って、うわああああ!？」

右手のトンファーで自身に覆い被さる瓦礫をドンと派手に吹っ飛ばした雲雀は痺れのなくなった左手で掴むムチを力任せに引っ張り寄せる。すると、今の地面が豪雨の影響で水に浸かっているせいか、山本は踏ん張りきれずにその場に転んでしまう。その隙に時雨金時の柄に雲雀のトンファーから射出された銃弾が命中し、山本の得物が自身の手の届かない範囲へ弾き飛ぶ。マズい。山本が危機を察知した時すでに遅し。雲雀は山本の眼前に迫り、山本の顔面をトンファーで殴りつけた。

「がッ!？」

山本はこのまま雲雀に追い打ちされると身構えた。

だが、予想とは裏腹に。雲雀は山本の目の前でピタリと、トンファーを止めた。

「僕の勝ち、だね」

「……ハハッ。俺の負けか。勝ったと思ったんだけどな」

「油断大敵だよ。戦闘中に気を抜くのは愚かな草食動物のすることだ」

「そう、だな。確かにな」

山本は雲雀の正論に朗らかに笑う。負けたことをそこまで気にしていないようだ。

まだまだ自分は戦闘慣れしていない。この事実を今回、山本は思い知らされた。

「にしても、なんで途中で攻撃を止めたんだ？　雲雀のことだから、寸

止めとかしないで普通に殴り続けて、最低でも俺を半殺しにすると思ってたんだけど」

「君が手加減をしていたからね」

「？」

「君が僕を本気で殺す気でいたなら、僕は左手を斬り落とされていた



し、君の最後の攻撃で体を真つ二つにされていただろう。君が死合いを望んでないようだから、僕も合わせただけさ。それに、さつきピンの女が『守護者同士の場外での乱闘は失格となります』とか言っていたことを今、思い出したからね。戦いを見られてリングを取られる前に切り上げようと思った。それだけだよ」

「雲雀……」

「強くなったね、山本武。君なら僕の好敵手となり得るかもしれないね」

「……そっか。ハハッ、雲雀にそう言ってもらえるなんて、光荣なのな」

あの雲雀から自身の實力を評価してくれた。その事実山本の頬が自然に緩む。

心から嬉しくなつて、山本は勢いよく立ち上がる。そして、雲雀に元氣よく手を振った。

「今日はサンキューな、雲雀！ いい勉強になったぜ！」

「さつきと帰りなよ。君と馴れ合うつもりはない」

「ハハッ、手厳しいな。そんなじゃ、また明日な！」

かくして。山本は太陽のような笑みを残して並盛中を後にする。

最後に残つたのは水を被つたせいで色んな意味で透け透けになつた雲雀ののだが、戦闘にばかり集中していた山本は今回、雲雀の秘密に辿り着かなかつたようだった。

## 風紀22. †後を託されて風紀を守ろう†

山本くと激しい模擬戦を行ってから、1日後。

相変わらず雨が降りしきる中。夜の11時。並盛中の校舎の屋上にて。

僕は今、リング争奪戦の2回戦を観戦している。5歳児ランボとレヴィが織りなす雷の守護者戦を静観している。もちろん、「ランボ、ファイオー！」な円陣には参加拒否している。

雷の守護者同士の対決の舞台となる戦闘エリアの名は『エレットウリコ・サーキット』。

電柱のようにそびえ立つ複数の避雷針と、床に張り巡らされた特殊な導体により、避雷針に落ちた強力な雷の電流が何倍にも増幅されて戦闘エリア中を伝播する仕組みとなっている。

それだけ強烈な電流をまともに浴びようものなら、常人なら焦げ死ぬことは避けられない。

私見だが、どの戦闘エリアよりもぶつちぎりで危険なフィールドだと思っっている。雲雀さんボデイですら、電流を喰らったら死にかねないし。でも、ランボは雷を受けてもほぼダメージを負わないエレットウリコ・サーキット電撃皮膚の体質だから『エレットウリコ・サーキット』内でも平気なんだよね。

ランボ凄え。マジリスペクトです。

さて。この危険度キレッキレな『エレットウリコ・サーキット』にて。ランボと女体化してしまったレヴィ・ア・タン改めレヴィアさんとの戦闘は原作とほぼ同じ展開を辿っていった。

具体的には、雷の守護者戦は、レヴィアさんにボコられたり雷を体に浴びたりしたランボが10年バズーカを使用して10年後ランボを召喚↓10年後ランボでもレヴィアさんに勝てない↓10年後ランボがさらに10年バズーカを使用して20年後ランボを召喚↓20年後ランボがレヴィアさんを圧倒↓レヴィアさんを倒しきる前に10年バズーカの効果時間たる5分が過ぎて5歳児ランボに逆戻り

↓レヴィアさんに殺されかける↓ランボを救うためにツナくんが介入↓守護者戦への第三者の介入はルール違反のため、ランボとツナくんの、雷と大空のハーフボンゴレリングがヴァリアーの手に渡る、といったルートを辿ることとなった。結果、リング争奪戦は1勝2敗である。

レヴィアたん化した影響で、母性から少しぐらいは子供への情け容赦が生まれ、さすがに全力で殺しにかかりはしないのではないかも予想していたが、そんなことはなかった。

まあ、女体化しようとしてレヴィアたんはヴァリアーの幹部でボスbotだもんね。そりやそうか。

そして。僕は結局、執拗に罵られるランボを助けようとしなかった。

原作知識があるくせに、ランボを助けない。僕は所詮凡人なので、己の行為に思う所はある。

だが、言い訳できないわけではないが、雲雀恭弥が面識のない子供を助けるのは違和感が凄い。

また、原作と似た展開をなぞっているのなら、ツナくんがランボを助ける確率は高かった。

何より、ここでツナくんに動いてもらわなければ、ツナくんの打倒ザンザス精神が弱まる可能性があった。ツナくんにザンザスを倒してもらうために、ここで僕がランボを助けて、ツナくんの『もっと強くなりたい』との覚悟完了を妨害してはならなかったのだ。



そんなこんなで、さらに1日後。次なるリング争奪戦の3回戦は嵐の守護者戦となった。

自称ツナくんの右腕たる獄寺くんとどつかしらの王族の血を継いでいるらしい、目隠し金髪天才属性のベルフェゴールとの嵐のボンゴレリングを賭けた対決。

舞台は並盛中の校舎の3階全域。戦闘エリアのあらゆる所に設置

された、ランダムで超強力な突風を発生させるハリケーンタービンが幅を利かせる中、戦闘開始から15分経っても決着がつかなければ、ハリケーンタービン内の時限爆弾が発動し、3階全域を全壊する仕組みとなっている。

ちなみに。もう触れなくてよさそうだけど、「獄寺、ファイオー！」な円陣には参加していない。もはや予定調和である。

ところで。守護者戦を1回戦から観戦する方針にした理由はいくつかある。

1つは単純な興味。雷の守護者戦を観戦することで、10年バズーカというトンデモ極まりない夢の道具が使用されるシーンを一度見てみたかった。ただそれだけだ。

他に、大空戦でのベルへの対処のため、という理由もある。原作だと、雲雀さんはベルのナイフ&ワイヤーを駆使した奇術に対応できず、体を切り刻まれてしまう。それを原作知識を悟られずに防ぐには、嵐の守護者戦の観戦は欠かせないのだ。

しかし、だからといって雷の守護者戦と嵐の守護者戦にだけ顔を出し、他の対決には姿を見せないのはあまりに不審。だから、僕は1回戦からリング争奪戦を観戦しているわけだ。

閑話休題。獄寺くんとベルとの戦闘は原作通り、熾烈を極めた。獄寺くんは校舎という雑然とした舞台を上手く利用して、新兵器のロケットボムを筆頭に、ダイナマイトを駆使して派手に戦った。一方、ベルは大量のナイフとワイヤーを巧みに操って獄寺くんを翻弄し、着実に獄寺くんを傷つけていった。結局、頭脳戦の果てにズタボロとなった両者は物理的なリングの取り合いに発展。ハリケーンタービン内の時限爆弾が両者を襲う直前に、ツナくんが獄寺くんの命を案じた心からの説得を試みた結果、獄寺くんがリングを諦め、ベルがリング争奪戦に勝利した。

これで1勝3敗。リング争奪戦は全7戦なので、ボンゴレ側はもう敗北が許されなくなった。

一見、ツナくんサイドが非常に絶望的だと思われる。

でも、残りのリング争奪戦の出場者をちよっと考えてみよう。

天才劍豪・山本武。六道輪廻を使える六道骸を召喚可能なクローム髑髏。そして、僕。

うん。僕の中身が凡人でなければ、何て頼もしい面々だろうか。大丈夫だよな？　ちやんとディーノさんと特訓したし、僕、モスカに勝てるよね？　雲雀さんが一撃でモスカを倒せたのなら、例え女体化のせいで弱体化していても、接戦の末の辛勝ぐらいはできるよね？　ああ、何か不安になってきた。後でヒバードに癒してもらわないと。

……ふと思った。もしゴラ・モスカじゃなくて、ストウラオ・モスカが「やあ（・ω・）」ってバーボンハウスしてきたら、どうしよう。勝ち目なさすぎてマジ震えてきやがった。

◇◇◇

嵐の守護者戦が終わり、12時間後。並盛町に1名のミイラ男が出没していた。

ロマーリオにより包帯で全身をグルグル巻き、という雑な治療をされた哀れな獄寺隼人である。

嵐の守護者戦により、文字通りズタボロになった獄寺には病室での安静が必須だった。しかし、獄寺にはただ病室で無為に時間を過ごしていられない事情があった。ゆえに、ロマーリオの男の治療（笑）を受けた獄寺は今、並盛町を徘徊している。

獄寺はまだリング争奪戦を行っていない守護者に会い、後を託す旨を伝えるつもりだった。自分の命を優先して、リングを捨てたことに後悔はない。しかし、自分の敗北が、リング争奪戦のヴァリアー勝利の王手となってしまった。ならばせめて、10代目の右腕としてできることをしたかったのだ。例えば少々怪我が悪化しようと、止まってはいられなかったのだ。

（どこだ？　雲雀と霧の守護者はどこにいる……？）

山本には既に思いの丈を伝え終えている。

そのため、残るは雲雀恭弥と、正体不明の霧の守護者。

未だ姿を見せない霧の守護者と偶然出会えることにはあまり期待していない。

よって、獄寺の狙いは雲雀恭弥ただ1人だ。

(うぐ、体が……)

周囲を歩く人々が獄寺を見てヒソヒソと話していることなどいざ知らず。

キョロキョロとしきりに辺りを見渡し、休みなく並盛町を歩き回っていた獄寺はここでズキリと、まるで体が今にもバラバラに避けてしまいそうな激痛に囚われる。

これ以上動いたら、傷が開きかねない。一旦休まないと。

獄寺は手近な公園にフラフラと立ち寄り、ベンチに座った。

(どこだよ。どこにいやがる、雲雀の奴!)

「君、何してるの？ ハロウィーンにはまだ早いよね？」

獄寺が苛立ちを胸に抱えつつ、タバコを吸おうとした時。いつの間に距離を詰めてきたのか。雲雀恭弥が目の前に立っていた。当の雲雀の目は、この妙な格好をした不審人物を咬み殺して、風紀を守ろうと如実に語っていた。

「ま、待て雲雀！ 俺だ、獄寺隼人だ！」

「で？ 例え並盛中の生徒だろうと、いたずらに住民の不安を煽る格好で町を練り歩いていい理由にはならないよね？ よって、咬み殺す」

「頼む、話を聞いてくれ！ その後なら好きにしていいいから！」

「……ふうん。君にしては随分と下手に出てきたね。草食動物らしい、殊勝な態度だ。いいよ、特別に遺言を聞いてあげる」

獄寺のいつになく弱気な説得に、何を思ったのか雲雀は矛を収める。

どうやら嵐の守護者戦で敗北したことが、思いの外、心に刺さって

いるらしい。

「だけど。そのおかげで雲雀を止められたのなら好都合だ。獄寺は手短に言葉を紡ぐ。」

「昨日の試合は、見てただろ?」

「うん、君の負ける様を見ていたよ。勝った、と油断したのが運の尽きだったね」

「ぐツ。ま、まあ、それはそれだ。もう1勝3敗だ。後がねえ。残り3試合、誰も負けられなくなっちゃった。だから、不本意だが、テメエにも頼らないといけねえ」

「それで?」

「ボンゴレ10代目に相応しいのは10代目しかいないんだ。頼む、絶対に勝ってくれ!」

（くそ、なんで俺がこの野郎に頭を下げなきゃならないんだ! でも、今はなりふり構ってられる状況じゃねえ。少しでも勝率を上げるためなら、何だってやらねえと!）

獄寺は端的に心情を表し、深々と雲雀に頭を下げた。

雲雀なんか懇願したくない心押し殺し、真摯に頼み込んだ。

「……」

「おい、雲雀? って、グハツ!」

一方、雲雀は獄寺の言葉に返答しない。ただ沈黙を紡ぐばかりだ。

雲雀の様子が気になった獄寺は少し顔を上げ、瞬間。顔をトンファーで殴られた。

たまらず、獄寺の体が地面に転がり、包帯が砂まみれになる。

「テメエ、何しやる!」

「面白いね、君。僕がヴァリアーに負けるかもしれないと思ってるんだ?」

「あ……」

ここで獄寺は気づいた。ニタアと凄惨な笑みを貼りつける雲雀を

見て、地雷を踏んでしまったことを悟った。獄寺はただ後続に想いを託すだけのつもりだったが、雲雀からすれば、自分の実力を舐められていると解釈してもおかしくない。スタスタと歩み寄る雲雀を見て、獄寺の本能はヤバいとしきりに警鐘を鳴らしていた。が、雲雀は獄寺に追撃をしなかった。

「言われるまでもないよ」

「え？」

「僕に立ち塞がる者は誰だろうと、咬み殺す。それだけだ」

「……そうか。へへ、頼んだぜ」

雲雀の心強い言葉を確かに耳にした獄寺は、体力の限界だったのか、気絶した。

結局。獄寺の身柄は、雲雀の連絡によりディーノが回収したのだった。



## 風紀23. †夜の語りいで風紀を守ろう†

ミイラ男こと包帯グルグル巻きな獄寺くんに後を託された、その夜の夜。

ツナくん一派とヴァリアーとのリング争奪戦4回戦こと雨の守護者戦の幕が下ろされた。

僕との模擬戦で経験値を積んだ時雨蒼燕流の継承者：山本くんと、少年時代に当時のヴァリアーのボスこと剣帝テュールを殺せるほどに強い特攻隊長：スクアアロとの対決の舞台は『アクアリオン』。外と完全に遮断された、密閉空間な並盛中の校舎B棟にて。天井の至る所をぶち壊した上で、最上階のタンクから階下に水が延々と注ぎ込まれるのだ。結果、戦闘が続けば続くほど水位は上がり、戦いにくくなる。また、一定時間が経過したら、獰猛なサメが投入される手はずとなっている。要するに、面倒な戦闘エリアだ。

ところで。僕は今、校舎A棟の屋上から雨の守護者戦を観戦している。

雨の守護者戦は校舎B棟の外壁に設置された巨大スクリーンに鮮明に映し出されるため、わざわざツナくんたちの近くで対決を観戦する必要がないのだ。

というか、了平くんがいい加減、僕を円陣に組み込みたいとメチャクチャうずうずしていたので、了平くんが強制行使に走る前に一旦、ツナくんたちと距離を置きたかったのだ。

だって、円陣なんて群れる行為筆頭なことを勧められたら、雲雀恭弥としてツナくんたちを咬み殺さざるを得なくなっちゃうし。数日後に大空戦が控えているのに、皆を痛めつけるのはNGだ。

さて。僕が遠目で観戦している雨の守護者戦だが、原作とは違う展開を辿った。

山本くんはスクアアロ相手に油断せず、最初から全力でぶつかった。

あまり途中で会話を挟まず、スクアアロが時折混ぜる搦め手にも

引つかからず、ひたすらに己の磨いた時雨蒼燕流を信じて、次々と剣技を繰り出す。時には複数の型を繋げた奥義を解き放つ。とてもついでこの間までただの天才野球少年だったとは思えない剣さばきだ。

だが、山本の猛攻は、以前に時雨蒼燕流の使い手を殺した経験を持つスクアーロには通じない。初見殺しの要素の強い三の型・遣らずの雨や五の型・五月雨もスクアーロには届かない。

スクアーロが大して怪我を負わない一方で、次々と裂傷を重ねる山本くん。

このまま培った経験の差でスクアーロが圧勝するかと思われた。が、山本くんの八の型・篠突く雨を起点とした奥義にスクアーロが対応できず、山本くんが土壇場で自力で開発した九の型・うつし雨をモロに喰らって、スクアーロは敗北した。

なぜ時雨蒼燕流の八の型にスクアーロが対応できなかったのか。答えは簡単、時雨蒼燕流は継承者がそれぞれ独自の型を1つ追加してから次世代に引き継がせるからだ。ゆえに、スクアーロが以前戦った時雨蒼燕流の使い手と山本くんの八の型が一致せず、対応できなかった。

だが、スクアーロは死ななかつた。山本くんは油断こそしなかつたものの甘さは捨てず、峰打ちでスクアーロを倒したからだ。一定時間経過により獯猛なサメが校舎B棟に放たれる中、山本くんは動けないスクアーロを助けようとしたが、剣士の誇りを重視したスクアーロは死を選び、サメに身を投じた。かくして、雨の守護者戦は山本くんの勝利となった。これで2勝3敗だ。

ツナくんたちはスクアーロの死を受け入れきれず、勝ったのに沈鬱な雰囲気の流れている。

つい「実はスクアーロ、サメに思いつきり喰われたくせに生きてるんだぜ！」ってネタバレしたくなるけど、そうするとスクアーロが凄まじく死にかけなのに大空戦に出場し、デスヒーターの猛毒で苦しまないといけなくなるから我慢我慢。

にしても、山本くんの怪我が軽傷に終わったのって、僕と模擬戦したからかな？

だとしたら、了平くんや獄寺くんにチケットに喧嘩売っておくべきだったかな？

なんて頭の中でツラツラと考えながら。僕は校舎A棟を去ろうとした。その時。

「クフフ、お久しぶりですね。雲雀恭華さん」

僕の背中から、できればあまり聞きたくなかった口調が響いた。

◇◇◇

六道骸は城島犬と柿本千種を引き連れ、体育館の屋上で雨の守護者戦を観戦していた。

とはいえ、骸自身が今ここにいるわけではない。骸は以前、沢田綱吉の体を乗っ取ろうと画策したが結局失敗に終わった後に、法で裁けない者を裁くマフィアの掟の番人・復讐者<sup>ヴァインディチェ</sup>に捕まり、牢獄に囚われたからだ。その後、犬と千種を逃がす代償に脱走に失敗し、最下層の牢獄に投獄された骸が並盛中に存在できるのは、クローム髑髏を依代にしているからだ。

また、リング争奪戦の経過を見守っているのは、骸がツナの霧の守護者だからだ。

沢田家光との交渉により、犬と千種の身柄の保護を条件にマフィア風情の一派に加わった骸は、山本武の勝利を見届け、明日が霧の守護者戦であることを把握すると、犬と千種を帰らせる。

向かう先は校舎A棟の屋上。その先でたたずむ、実に興味深い女性に骸は気さくに話しかける。

「クフフ、お久しぶりですね。雲雀恭華さん」

すると、恭華が振り返って、直後。困惑の念を含んだ視線を骸に投げかける。明らかに六道骸の口調なのに、体は中学女子なクローム髑髏。この齟齬に戸惑っているようだ。

「君は六道骸、だよな？ 女装の趣味があつたのかな？」

「クフフ、貴女と関わったせいかな、僕も新しい自分に目覚めたようです。この庇護欲を駆られるような女の子に変貌した僕の出来栄え、素晴らしいと思いませんか？ 貴女には幻術が通じないから、直接変装を施したのですよ？」

「ふえツ？ は、え？」

「クフフフ、冗談ですよ。訳あって、この娘を介してでしか貴女と接触できないんです」

「……君の意識をその子に宿らせていると」

「そんな所です。この娘はクローム髑髏と言います。よろしくしてくださいね？」

「ま、機会があればね」

恭華の問いかけに便乗すると、恭華は目に見えて困惑の様相を顕わにする。

いつも落ち着いている恭華の新鮮な反応を見て、骸が笑みを深めると、ここで骸に遊ばれていたと気づいた恭華の両眼がジト目へと、まぶたが引き下げられる。

「それで、僕に何の用かな？ また並中生を襲撃するつもりなら今ここで咬み殺すよ？」

「いえ、そんな物騒なことは企んでいませんよ」

「本当に？」

「僕の曇りない誠実な目を見れば、自然と疑いが晴れることでしょう」「詐欺師のような据わった目をした人を信じる気にはなれないね」

「おや、どうやらクロームには詐欺師の才能もあるようですね。今度、教授してみましようか」

「……そろそろ本題に入ってくれないかな？」

「それもそうですね」

もう少し恭華の新鮮な反応を引き出してみたかった骸だが、催促された以上、本題を引き延ばしにし続けるのは得策ではない。骸は本題に入った。

「雲の守護者戦は明後日、貴女の出番は近いですよ」

「……」

「貴女の対戦相手のゴーラ・モスカ。あの兵器には気をつけた方がいい」

骸は恭華に忠告する。骸はザンザスの恐ろしい企てを把握しているものの、ザンザスの企てに関して、骸はボンゴレ側に肩入れするつもりはなかった。だが。気に入っている恭華にヒントを授けるぐらいいは、しておきたかった。しかし。ここで恭華は骸の想定を飛び越えた。

「——知ってるよ。そのために、僕は強くなったんだ」

一言。サラツと恭華が口にした言葉に、骸は思わず目を見開く。

「ほう？。どこまで気づいていますか？」

「モスカが有人兵器だつてことと、ザンザスがモスカを僕たちに壊させたい——というか、沢田くんに壊してほしいと思っていることぐらいいは、わかってる」

さらに骸は踏み込んで尋ねる。そして、恭華の鋭い回答に、骸は愉快そうに笑った。

「クフ、クハハハハハ！ 貴女は本当に面白い。そこまで見抜いていたとは」

「そのぐらい、モスカとザンザスを見ていればわかるよ」

「なるほど。しかし、貴女がやろうとしていることは決して沢田綱吉のためにはなりませんよ？ むしろ貴女の行いは彼の成長を妨げることでしょ？」

「それも知ってる。でも押し通す。譲れない所だからね。それに雲雀恭弥としても、自分の獲物を他者に横取りされたくないからね。敵は、容赦なく咬み殺すまでだよ」

「そうですね。……やれやれ、僕の働きかけは無意味でしたか」

「君がそう思うんならそうなのかもね」

凜とした言葉で。揺るがぬ態度で。恭華は己の意思を語る。

心配するだけ杞憂だった。本題を話し終えた骸は校舎A棟を後にする。

「クフフ、雲の守護者の対決がとても楽しみです」

骸が最後に紡いだ言葉は、風に紛れ。

恭華の留まる屋上に静謐な余韻を残すのだった。

◇◇◇

はてさて。クロームに憑依した骸くんと接触した出来事の翌日。

並盛中の体育館にて。リング争奪戦5回戦こと霧の守護者戦が開催された。

骸くんに内臓を補ってもらっている影響での依存系女子：クローム髑髏と、守銭奴赤ちゃん系アルコバレーノ：マーモンとの術士同士の騙し合い対決だ。

今回、戦闘エリアとなる体育館には特に何も仕掛けを施されていない。

『無いものを存るものとし、存るものを無いものとする』ことで敵を惑わし、ファミリーの実態を掴ませない、まやかしの幻影』を使命とする霧の守護者戦に余計な設備は必要ないのだ。

今回は体育館内の一部に観戦エリアが用意されたため、僕もその中に入った。

結果、当然ながら了平くんが何が何でも円陣を組ませようと迫って来たので、下顎をトンファーで打ち抜き、最小限の被害で了平くんの行動を止めることにした。ついでにツナくんたちをギンと力を込めて睨み、僕を円陣に組み込む流れを消し飛ばした。雲雀恭弥のキャラを守るためとはいえ、せっかくの好意を無下にして正直、すまんかった。(・ω・)

そんなわけで。始まった霧の守護者戦は大体原作と同じ展開を

辿った。

強力な幻術使いなマーモンに、大して幻術の経験のないクロームの力は及ばない。抵抗虚しく敗北するかと思われたが、ここでクロームを依代に骸くんが降臨。圧倒的にチートな六道輪廻の猛威を存分に振るってマーモンを追い詰め、いともたやすく勝利をもぎ取った。これで3勝3敗だ。

「明日はいよいよリング争奪戦、最後のカード——雲の守護者の対決です」

チエルベツロが淡々と明日の予定を告げる。

よし。それじゃ、譲れないものを抱えて、明日に挑ませてもらうか。

リボンやザンザス辺りが会話しているのをよそに、僕はいち早く体育館を後にした。

## 風紀24・†心の守護者として風紀を守ろう†

新しい朝が（否応なしに）来た！ 希望の朝だ（自己暗示）！

喜びに胸を開け（物理）！ 大空仰げ！／（＾o＾）／

とまあ、冗談はさておき。ついに雲の守護者戦の日がやってきた。現状、リング争奪戦は3勝3敗。この雲の守護者戦で明暗が分かれるというわけだ。

といっても、原作で雲雀さんはゴーラ・モスカをワンパン撃破したからそこまで気負うことはないんだけどね。後は、女体化&凡人憑依のダブルパンチで肉体的にも精神的にも弱体化しているであろう恭華さんボディで同様のことができるかどうか。

ま、ここはデイーノ先生による修行の成果を信じるのみだ。

「よ、恭弥。調子はどうだ？」

「試してみるかい、跳ね馬？」

「いやいや！ 待て、恭弥！ 嬉々としてトンファーを構えるな！

戦わないって！ 今戦って恭弥を消耗させるわけにはいかないんだよ！ はやる気持ちは夜まで取つとけ、な？」

「……仕方ないね」

自宅で目覚め。男装を始めとした色々な支度を終えた所でインターホンが鳴る。

外に出ると、デイーノさんが気さくに声をかけてくる。相変わらず、爽やかやね。

体の調子を問われたので、ひとまず雲雀恭弥ロールに走ってみると、慌てて僕の暴走を抑えようとする。ホント、デイーノさんってば苦労人だよな。

「ふう。落ち着いてくれて良かったぜ。じゃ、俺はもう行くぜ。えと、クローム髑髏だっけ？ あの子の様子も見とかないとだからな」

本当に僕のコンディションを見て確かめるためだけに僕の家立



ち寄つたらしいディーノさんが慌ただしく家を後にする。ちようど、僕も1人で頭を働かせておきたい所だったので、この機会に改めて考えを整理してみようか。

本日の雲の守護者戦。僕の相手となるゴーラ・モスカは、ボンゴレが秘密裏に研究室で作り上げた対人戦闘用の兵器だ。巨体には様々な兵装がこれでもかと積まれており、足部のスラスターで素早く動きながら物量に任せて銃撃や爆撃をばら撒くモスカは強敵と言えるだろう。

だが、このモスカの一番重要な所は、動力源が炎の生命エネルギーだということだ。

つまり、ゴーラ・モスカは中に入った一部の特殊な人間の命を喰って動くわけだ。

そして今、モスカの中にボンゴレ9代目が囚われている。9代目が動力源にされている。

要するに。現在、イタリアのボンゴレアジトにいるのは9代目の偽物で。ツナくんを10代目にするべくリボーンを派遣したはずの9代目が、10代目にふさわしいとしてザンザスにハーフボンゴレリングを渡したのは、既に本物の9代目がザンザスの手に堕ちているからだ。

モスカの中に9代目が囚われている。

これは雲の守護者戦でヴァリアー側は勝とうが負けようが一向に構わないことを示している。

モスカが僕に勝てば、ヴァリアーは4勝3敗。

普通にリング争奪戦に勝利し、ザンザスはボンゴレ10代目を継承できる。

一方で、モスカが僕に負けても、僕がモスカをボコボコにすれば、モスカの中の9代目はタダでは済まない。正直、死んだって不思議ではない。

そうなれば、ツナくん側は9代目殺しの事実を背負わされる。9代目の養子であるザンザスに仇打ちという名のツナくん一派の皆殺しの大義名分が生まれてしまう。結果、仇討ちを果たしたザンザスは1

0代目を継承することへのマフィアの圧倒的サポートを取りつけることとなる。

仮に僕がモスカを大して傷つけずに雲のハーフボンゴレリングをかすめ取って勝利したとしても、その時は敢えてモスカを暴走させれば問題ない。

その際、ツナくんが暴走するモスカを破壊してくれれば最高の流れとなる。

今夜の雲の守護者戦がどう転ぼうと、ザンザスは心の中でコロンビアAAをできるわけだ。

ちなみに。原作では、暴走するモスカを超死ぬ気モードのツナくんが破壊した。

結果、死ぬ寸前となった9代目がモスカから吐き出され、ザンザスがツナくん一派の殺戮の大義名分を得た所で、チエルベツロの介入により大空戦が開催されることとなった。

今までのリング争奪戦の勝敗は関係なしに、大空戦で勝利した方がボンゴレ10代目を継承するにふさわしいと判断する形にチエルベツロが調整したのだ。

ツナくんは優しい子だ。9代目を殺しかけた一件は、ツナくんの心を酷く傷つけたことだろう。

ツナくんが立ち直れたのは、打倒ザンザス精神へと気持ちを切り替えられたのは、9代目が死の淵にありながらもツナくんを健気に励ましてくれたからだ。

原作では息絶え絶えの状態からどうにか生還した9代目だが、スクアール以上に死亡してもおかしくなかったはずだ。高齢の身でかなり衰弱していた上に深いダメージを刻まれたわけだし。

……もしも9代目が即死していたら、ツナくんの心は折れていたかもしれない。

だからこそ、原作の代わりに——僕がモスカを粉々に咬み殺す。ツナくんが抱えるはずだった心の負担を、僕が肩代わりする。ツナくんが9代目を殺す。これはザンザスの思い通りになるという意味でも、今のツナくんに殺人を経験させたくないという意味でも、防がないと

いけない。

代わりに僕が9代目殺しを果たす可能性があるが、そもそも雲雀さんって殺人経験あると思うから平気平気。じゃないと、殺人のもし消しを風紀委員が担当してないでしょ。

後は、僕自身のことだけど、当然ながら殺人経験なんてものはない。でも、9代目の殺害なんてトラウマ不可避なことを中学2年生のツナくんさせたたくない。

僕は大学生で。ツナくんより大人なんだから。普段は雲雀恭弥の演技でツナくんたちに非協力的な分、こんな時ぐらいはツナくんの守護者としての責務を全うしないとね。

よし。考えは纏まった。後は今夜に向けて英気を養うだけだ。

いくぞ、モスカ。兵装の貯蔵は十分か。生命エネルギーの蓄えはどうか。

僕はモスカの中に9代目が入ってようと君が止まるまで容赦なく攻撃するから覚悟するように。

あ、でも9代目は気合いで生き永らえてね。9代目が死なずに済むのが一番なので。

……伊東ラ○フ式の応援でもしようかな。がんばれ♥ がんばれ

◆◆

午後10時50分。並盛中の運動場にて。

獄寺、山本、笹川の3名が集っていた。クローム髑髏、城島犬、柿本千種とは別の場所で集結した3名。その目的は当然、雲雀を応援するため。ツナが修行のため、雲の守護者戦を観戦できないこともあり、特に獄寺は今日の応援に気合いを入れていた。

「お、今日の主役の登場だぜ」

ここで。雲雀が運動場に姿を現したことに山本が気づく。

闇に溶ける学ランを纏い、威風堂々に歩む様子は何とも頼り甲斐が

あった。

「よ、雲雀。元気そうだな」

「君たち。なに群れてるの？」

「雲雀。テメエの応援に来たんだよ」

「応援？　へえ、君たちが僕の肩慣らしサントバッグに付き合ってくれるってこと？」

山本がニコニコ笑顔で話しかけると、雲雀が不思議そうに問いかける。

獄寺が端的に返事をする、雲雀は獰猛な肉食獣のごとき好戦的な笑みを浮かべた。

「ちげえよ！　なんでそんな解釈になんだよ!?!」

「違うんだ。なら、目障りだ。消えないと咬み殺すよ」

「なッ!?　雲雀！　仲間に向かって、極限に何だその物言いは!」

「まあまあ落ち着こうぜ。雲雀、俺たちのことは気にしなくていいのな」

「……ふうん」

瞬時にトンファーを構える雲雀に獄寺が慌てて言葉を紡ぐと、雲雀はどこか残念そうにため息を吐き、己の視界から外れるように脅しかかる。あまりに傲慢な発言に了平が激昂しそうになるも、山本が宥めてフォローに走る。結果、雲雀は山本たちへの興味をなくし、雲の守護者戦の戦闘エリアへと足を踏み入れた。

チエルベツロ曰く、此度の戦闘エリアの名は『クラウド・グラウンド』。円状のエリアの境界を取り囲む有刺鉄線。30メートル以内の動く物体に射撃する8門の自動砲台ガトリングガン。地中に埋められた、警報音の直後爆発する無数の重量感知式の地雷。結果、クラウド・グラウンドは常人であれば数秒で命が消し飛ぶ戦場の様相へと成り果てている。

「それでは始めます。雲のリング。ゴーラ・モスカV.S.　雲雀恭弥。勝負開始」

チエルベツ口の勝負開始宣言の直後。モスカは足部のスラストを起動し、瞬く間に雲雀との距離を詰めようとする。そして。モスカが雲雀目がけて指先から弾丸を放たんとする中。

「——さあ。狩りを楽しもうか」

雲雀は目を爛々と輝かせ。愉快そうに呟いた。

## 風紀25・†過剰暴力で風紀を守ろう†

「——さあ。狩りを楽しもうか」

雲の守護者戦の戦闘エリア、『クラウド・グラウンド』にて。モスカが足部のスラスターを吹かせて僕との距離を瞬時に詰める中。僕はモスカの指先から間断なく放たれる銃弾の束をしゃがんでかわし、モスカのながら空きな腹部を殴りつける。様子見ゆえにそこまで本気で殴らなかつたが、それでもモスカの巨体は上方へと吹っ飛ばされる。手ごたえはある。女体化して筋力面で原作雲雀さんより劣化している影響でワンパン撃破は無理でも、モスカにダメージを与えられるようだね。良かった良かった。

対空中のモスカが腹部の圧縮粒子砲で真下の僕を狙い撃つ中、僕は圧縮粒子砲の光線を後方へ跳んで避ける。その際、着地した場所から地雷の警報音が高らかに鳴り響いたため、再び前進する。僕の視線の先には、ズウンとの重厚な音を引き連れて着地したモスカの姿。

「へえ、面白い武器を持っているね」

初撃で圧縮粒子砲を壊せなかつたか。まあいいけどね。

モスカの指先に仕込まれたマシンガンの銃弾を、僕は今度はトンファーから鎖分銅を出し、鎖分銅を高速回転させることで銃弾を鎖で弾き飛ばす。その後、モスカの背中から放たれ、僕の頭上から迫るホーミングミサイルから逃れるようにモスカの背後へ回り、鎖分銅をトンファーに仕舞いつつ、今度は渾身の力でモスカの腹部を激しく打撃した。

モスカの巨体は勢いよく吹っ飛び、『クラウド・グラウンド』の有刺鉄線に叩きつけられる。直後、モスカの近くの2門のガトリングガンがモスカに標準を定め、銃弾の弾幕を浴びせにかかった。が、ガトリングガンではモスカは大して傷つかない。装甲にわずかな傷や汚れが付着したに留まったモスカは、再び僕目がけてスラスターを焚きつける。

「あの機械、あれだけ撃たれたのに全然効いてないぞ!？」

「でも、雲雀は余裕そうだな。さすが、俺たちのエース」

「……認めたかねーけどな」

雲の守護者戦を食い入るように見つめている了平くん、山本くん、獄寺くんがそれぞれの着眼点から感想を零す。観戦者の声を聞き取れるぐらいには、僕はゆとりを持って戦えているようだ。それはつまり、今のペースで落ち着いて戦えばモスカ相手に苦戦せずに勝てそうだとということ。

しかし、無駄に戦闘を長引かせるのはよろしくない。僕の集中力が途切れて、モスカに予期せぬ大逆転を許しかねないし、何よりモスカの戦闘時間が延びれば延びるほど、動力源の9代目の死亡確率が高まってしまふ。……そろそろ仕掛けるか。

僕は前方の地面の3か所へとトンファアの先端から銃弾を3発、発砲する。結果、それぞれの着弾点から警報音が生まれ、3つの地雷が立て続けに爆発した。ちょうど、スラストアの推進力で僕に向けて高速低空飛行中のモスカが、僕が起動させた地雷の真上を通るタイミングで。

3つの地雷はモスカを巻き込んで盛大に爆発し、周囲の視界を覆う土煙を形成する。そうして、観戦者や僕の視界が遮られている中、僕は右に跳ぶ。瞬間、僕のいた場所に到着するモスカ。予想通り、モスカは地雷でも大して傷つかないらしい。

もしも、僕が地雷の爆発がモスカに命中したと気を緩めていたら、今頃モスカの猛スピードの体当たりをまともに喰らっていただろう。その衝撃は、暴走トラックに轢かれるレベルで凄まじいものと考えられる。まあ、当たってないから意味のない仮定だけど。

それはとにかく。土煙が立ち込める現状は、機械のモスカにとって有利極まりないだろう。それが一般的な考え方だ。が、しかし。切り札を容易に他者に見せびらかしたくない僕にとってもまた好都合なんだよねえ（\*、ω、\*）

僕は左のトンファアを一旦仕舞い、代わりに左袖から『溶解さくら

もち』を左手へと落とす。モスカの顔面に思いつき投げ飛ばした。結果、まるでパイ投げの被害者のように顔面『溶解さくらもち』まみれになったモスカの顔が、紫色の煙とともにデロデロに溶け始める。

「……ワオ」

【衝撃】モスカの装甲にもポイズンクッキングは効果的。ビアンキの技術、凄すぎな件。いや、まさか『溶解さくらもち』がこうも効果抜群とは思わなかったよ。うん。

顔面がただいま絶賛崩壊中ゆえに、モスカの視界が僕を見失う中。僕は今が好機と、再び左のトンファーを装備し、跳躍とともにモスカの顔面を殴る。殴って陥没させる。頭が何度か爆発しながら、モスカは僕に殴られた衝撃で背中から地面に倒れる。瞬間、モスカの背中から地雷の警報音が自身の存在感を大いに主張した。

モスカは足部のスラストーを利用して地雷から距離を取りつつ、立ち上がって体勢を立て直そうとする。が、その前にモスカの腹部に僕が重力を伴って着地し、モスカが飛ばないように体重を込める。そして。地雷の爆発に合わせて、モスカの腹部を殴打した。

地雷の爆発と、僕の攻撃。対極から容赦なく力をぶつけられ、衝撃を逃がせなかったモスカは、耐えきれずに爆発する。僕の体は爆風に飛ばされるも、クラウド・グラウンドの端のガトリングガンの上上手いこと着地できたので、事なきを得た。

いつまでもガトリングガンの上に居座るのは怖いので、とつとがトリングガンから地面に飛び降り、モスカの元へ歩み寄る。その時、ちようどクラウド・グラウンドを覆う土煙が晴れ、土煙で少々汚れた僕と、すっかりスタボロになったモスカの構図が観戦者の視界に映し出された。

「おお！ 雲雀が極限に勝ってるぞー！」

「雲雀の奴、全然怪我してねえ……」

「圧倒的なのな」

了平くんが歓喜に拳を握り。獄寺くんが僕が無傷なことに驚愕し。



山本くんがニコニコしている中。僕はモスカと距離を詰めて、モスカの巨体を蹴り上げる。

「こ、これ。マズいんじゃないか？」

「どーすんの、ボス？ モスカ、もうダメそうなんだけど」

すっかりボロボロに傷ついているモスカの様子にヴァリアー側のレヴィが焦り。

ベルフェゴールが純粹にザンザスに問いかける中。

「ねえ、まだ動けるよね。壊れたフリはやめようか」

僕は蹴り上げて無理やり立たせたモスカに一撃。二撃と。ひたすらにトンファーで攻撃を続ける。と、ここで。運動場に玉座を持ち込み雲の守護者戦を観戦していたザンザスが沈黙を破った。

「おい。勝負はついた。降参だ」

「ままだよ。僕はまだこのガラクタが隠し持っているリングを手に入れている」

「降参だと言っている。それでも続けるのか？」

「君が言っても意味がない。降参させたいのなら、このガラクタに直接、言わせなよ」

「死体蹴りに何の意義がある？」

「ストレス発散」

「……あ？」

偉そうに玉座に座ったままのザンザスがわざとらしく両手を上げて降参の意思を告げる。一方、一旦モスカへの攻撃を中止した僕はまだ雲のハーフボンゴリングをモスカから奪い取っていないことを理由に、ザンザスの言葉に従わない。すると、ザンザスが人を普通に殺せそうな威圧感のこもった眼差しとともに僕の真意を尋ねてきたので、雲雀さんらしい理由を返す。結果、ザンザスは心なしかきよんとしている。僕は今、ザンザスの非常に珍しい顔を目撃しているかもしれない。

「最近、イライラしているんだ。跳ね馬しかり、山本武しかり、草食動物のくせに無駄に抵抗して、あっさり咬み殺されない連中ばかり相手にしていたからね。今は、どうしようもない雑魚を心ゆくまで捌りたい気分なんだ。……それに。君たちヴァリアーは、沢田綱吉たちが降参したら、すぐに攻撃をやめて命を助けるのかい？」

「……」

「助けないよね。殺すよね。なら、君たちに僕の行動を咎め、縛る権限はない」

「チツ」

「……君がこうも強く降参を主張するってことは、それだけ大事な人がこの機械の中に入っているのかな？ それなら。この機械の内側で、安全地帯で、のさばっている搭乗者を引きずり出して咬み殺すまで、止まれないな」

僕はさも不機嫌そうに言葉を紡いでザンザスとの会話を打ち切ると、僕が攻撃をやめたことで再び地面に倒れ伏したモスカに追撃のトンファーを叩き込む。

直後、モスカに異変が起きた。ガガガガツと不協和音を立てながら自力で立ち上がったモスカが足部のスラストを最大出力で焚きつけたかと思うと、ドリルのように螺旋状に回転しながら、背中のホーミングミサイルを、両指のマシガン銃弾を、腹部の圧縮粒子砲を、四方八方に敵味方関係なくばら撒き始めたのだ。

「ああ、なんてこった。俺は万一の事態を憂慮してモスカの敗北を主張し、戦闘を中止するよう呼び掛けたのに、向こうの雲の守護者が俺の発言を一切聞き入れず、モスカへの攻撃をやめなかったせいで、モスカが暴走を始めてしまった」

ザンザスが自らの正当性を示すため、周囲一帯によく聞こえる声量で頭を抱えるポーズを取る中。モスカはクラウド・グラウンドを形成する有刺鉄線をホーミングミサイルで爆破し、戦闘エリア外で観戦していたクローム髑髏にそのまま体当たりをしようとする。

が、クロームを助けるために城島犬と柿本千種が彼女に駆け寄るも、彼らの行動は無駄に終わった。超高速でクロームに迫っていたはずのモスカの動きが急停止したからだ。それはなぜか。答えは簡単、モスカの右足首に僕のムチを巻きつけ、僕の方へとモスカを引っ張っているからだ。

「逃がさないよ？　僕を無視して他を標的にするなんて、いい度胸だね」

僕は表向きは涼しげな表情を作りながら、暴走するモスカの右足首を拘束するムチを持つ右手に満身の力を結集させ、力づくでモスカを自らの元へと引っ張り寄せようとする。クラウド・グラウンドの場外へ飛び出そうとするモスカと、モスカを逃がすつもりのない僕の力は拮抗し、結果的にモスカはクラウド・グラウンドの境界から動けないでいる。

クラウド・グラウンドの場外へのモスカの脱出を許したら、後でこの場にやってくるツナくんが皆を守るためにモスカに手を出してしまう。それはダメだ。何としてでもモスカをクラウド・グラウンド内に閉じ込めるんだ。これは僕とモスカの戦いだ。あくまでリング争奪戦を、雲の守護者戦を終わらせない。そのために、僕は強くなったんだ！

「君の相手は、この僕だ」

僕はムチでモスカの足止めしながら、トンファアの先端からモスカの足部のスラスターを狙って発砲する。が、モスカは止まらない。トンファアに収まる程度の小さな銃弾では、モスカのスラスターを壊せない。ゆえに、僕は左手のトンファアをモスカに投げつける。トンファアはモスカのスラスターに吸い込まれるように投擲され、モスカの左足の一部のスラスターを破壊した。

「僕の方を向きなよ」

スラスターの一部が破壊され、モスカの推進力がわずかに減衰す

る。その機会を逃さずに、僕はあたかも釣りで大物を釣り上げるかのように、モスカの右足首を縛るムチに力を込め、モスカを手元へ引き寄せる。そして。放物線を描くような軌跡を辿って、クラウド・グラウンドの中央に、背中から叩きつけられる形となったモスカに、僕はムチを手放し、モスカのスラスターに刺さるトンフアーを回収しつつ、二対のトンフアーで、ここぞとばかりにモスカに連撃を浴びせ始めた。

「肉食動物の恐ろしさを教えよう」

僕はモスカを殴る。殴る。とにかく殴る。ひたすら殴る。モスカが二度と立ち上がらないように。スラスターを駆使して無茶な軌道をしなないように。クラウド・グラウンドにモスカを縫い付けるようにして、僕はモスカをただただ殴り続ける。

君が、ズタボロになっても、殴るのをやめない！

もしかしてオラオラですかーッ!? YES! YES! YES!

!

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!

……うん、何だか凄まじくテンションが上がっている件について。僕、別に戦闘狂じゃないんだけどな。ごく普通の凡人な大学生なんだけどな。

うん、普通普通。ぼくノーマルタイプ。ウソつかない。

「皆、対決はどうなっている?」

「10代目! それが――」

ザンザスと戦う展開に備えた修行を完全に終えた超死ぬ気モードのツナくんが、リボンやバジルくんを伴って並盛中へと姿を現し、獄寺くんに雲の守護者戦の流れを尋ねる様子をよそに。僕はモスカを殴る手を一切緩めない。結果、僕はモスカの足部のスラスターを全て破壊し終えた。

これまで暴走中ゆえに特に攻撃相手を定めなかったモスカは、自身

の移動手段を奪って妨害する僕を最優先排除対象と定め、自らに搭載された兵装を一気に行使しようとする。が、僕のトンファアの連撃により、腹部の圧縮粒子砲は壊れ、両指のマシガンはモスカの両手がちぎれ落ち、僕に攻撃できなくなる。モスカは直ちに背中中のホーミングミサイルを起動するも、僕に着弾する前に、僕がホーミングミサイルをトンファアの銃機能で狙撃し、次々爆発させるので、僕に攻撃が届かない。もはや、モスカの敗北は決定的だった。

モスカはガガガガッと再び不協和音を盛大に響かせ、全身を小刻みに振動させ始める。モスカの耐久が限界を超えた。そう察した僕はモスカへの攻撃をやめ、背後へ跳躍してモスカとの距離を確保する。直後、モスカは爆発した。2度、3度と連続して爆発し、今度こそ動かなくなった。

「……ふう。少しは気が晴れたかな」

と、さも僕がさつきまで凄くイライラしていたと言わんばかりの独り言を呟いていると。僕に向けて何かキラリと光る物が飛び込んできると。トンファアを仕舞いつつ、ふと僕はそれを空中で掴み取る。見ると、それは雲のハーフボンゴリングをだった。どうやら爆風に煽られ、モスカが所持していた雲のリングが偶然、僕の手元まで飛んで来たらしい。僕は、ポケットに入れていた自身の雲のリングを取り出し、2つのハーフボンゴリングを1つに結合させた。

「モスカが戦闘不能となったため、雲のリング争奪戦は雲雀恭弥の勝利です」

「おお！ 極限にやったぞ！」

「ああ。しっかし、雲雀の奴、凄まじかったな」

チエルベツロが僕の勝利を機械的に宣言し、了平くんと獄寺くんが今の心境を早速口にする中。爆発を終えたモスカの体が開き、中から何かを吐き出す。それは人だった。全身をきつく拘束され、胸や口から血を流す老人だった。

「な、中から人が出てきた!？」

「やっぱり中に人がいたね。けど、ヴァリアーの隊服を着ていない？」

山本くんが皆の疑問を代表するように驚き。老人の正体を知らない立場な僕が、老人の生存を願いつつ、表では少々ズレた着眼点で老人を不思議そうに見つめる中。

「…………え。こ、この人、9代目!？」

超死ぬ気モードの終わったツナくんが、以前写真で見たことのある老人の正体を口にする。

瞬間、まさかの事態に場が凍った。

## 風紀26・↑強者の論理で風紀を守ろう↑

「……え、ここの人、9代目!?!」

雲の守護者戦にて。雲雀恭弥が倒したモスカが吐き出した、息も絶え絶えの老人。

その正体を沢田綱吉が口にした瞬間、場の空気が凍った。

「9代目は、ゴロー・モスカの動力源にされてたみてーだな」

対決を観戦していたリボーンが9代目に駆け寄り、どこからか取り出した救急箱で9代目の応急処置に入る。応急処置ではどうにもならない深手だとわかっていても、リボーンは9代目を手当する手を止めない。その中で、リボーンは以前、見た記憶のあるモスカの構造を手掛かりに、己の推察を口にする。

「そんな、どうして……!?!」

「どうしてじゃねえだろ! テメエの守護者が9代目を手にかけてんだぞー!」

ツナは蒼白の表情で、フラフラとした足取りで9代目の元へ歩み寄る。と、その時。ザンザスの怒声が轟いた。ザンザスはツナに罪を押しつけ、精神を折りにかかる。

「じじいを容赦なくぶん殴ったのは誰だあ? もう勝負は決まっていたのに、守護者を止めずに、じじいに過剰に暴力を振るう守護者を静観していたのはどこの誰だあ!?!」

「あ、あ……」

瀕死の9代目に釘づけなツナに、ザンザスは次々と罵声を浴びせかける。

ザンザスに言われるがままに、己を責め始め。呼吸が荒くなるツナ。が、そんな精神的な余裕を失い、周りが見えなくなり始めたツナを引き戻したのは、当の9代目だった。

「悪いのは、私だ……」

9代目は語る。己の弱さが、ザンザスを8年の眠りから蘇らせてしまったと。

そして。ツナの眉間に仄かな死ぬ気の炎を宿した指を当てながら、ツナがマファイア向きの性格でないからこそ、ツナを10代目として選んだのは間違いでなかったと告げる。

「待つて！ そんな、待つてください！ 9代目！ 9代目！」

ツナは思い出す。眼前の9代目が、自身の幼少期に遊び相手になってくれたあの優しいお爺さんだと気づく。ツナは目からボロボロと流れ落ちる涙を気にも留めずに、意識を闇へと葬り去った9代目の手を取って、叫ぶ。必死に9代目に呼びかける。

「よくも9代目を！ 9代目へのこの卑劣な仕打ちは実子であるザンザスへの、そして崇高なるボンゴレの精神に対する挑戦と受け取った！」

「なッ!?」

が、ここで。ザンザスが玉座から立ち上がり、声高に口上を並べる。ザンザスの想定外の埒外極まりない主張にツナが絶句する中、ザンザスは荒々しい宣言を続ける。

「しらばっくれんな！ ボス殺しの前には——」

「——リング争奪戦の勝敗など無意味。俺はボスである我が父のため、そしてボンゴレの未来のために、貴様と守護者を殺し、仇を討つ。……とでも、言いたげだね？」

「「ッ!?」」

が、ザンザスの宣言は途中で遮られた。ザンザスの言葉を先読みして、つらつらと話す人物がいたからだ。その場の誰もが弾かれたかのようにバツと視線を向ける。その先には、雲雀恭弥。



「御託は聞き飽きたよ。結局君は、リング争奪戦に勝とうが負けようが、沢田綱吉たちを皆殺しにできるように大義名分を用意していたわけだ。……リング争奪戦に敗北した時のことを想定して舞台を整えるなんて、君は思ったより身の程をわきまえた草食動物みたいだね」

「……じじいを殺した張本人が何スカしてやがる？」

雲雀はつまらなそうにあくびをしつつ、ツナとザンザスの間に割つて入るように移動する。ザンザスが邪魔をするなど視線で雲雀の行動を封じようとするも、肝心の雲雀の表情は涼しげだ。

「君は僕を、そして僕を守護者とする沢田綱吉がさもボス殺しの極悪人のように語るけど、それならその老人を拘束して、ガラクタに放り込み、僕と戦わせた君は一体何なんだろうね？」

「あ？」

「知らなかったと白を切るかい？ まあいいけどね。それなら君はそのガラクタの仕組みや中の搭乗者についての情報を知らないままに戦わせた、ただの無能な実子になるだけだ」

「……」

「でも、親が僕に咬み殺されたというのに動揺しないで長々と口上を垂れる辺り、君は確実に知っていたはずだね。準備を整えておきながら、まるで悲劇の主人公かのような口ぶり、面構え、厚顔無恥さ。もはや呆れを越えて敬意を表するレベルだね。正直、気持ち悪い」

「テメエ……！」

雲雀は平然とザンザスを挑発する。雲雀の口撃にザンザスの敵意の対象がツナから雲雀へと完全に切り替わる。雲雀とザンザスは互いに睨み合い、火花を散らす。

「この世は肉食動物が頂点に立つようになってきている。力こそが正義で、勝った者が正義だ。いくら君が今回の雲の守護者戦を利用して罫を仕掛け、自身こそがボンゴレの正当後継者とする展開を構築できた所で、ここで君が僕に咬み殺されれば、それはただの弱者の主張に終わる。草食動物の正義は通らないし、認められない。それがこの世界

のルールだ」

「は？ テメエが、俺を咬み殺す？ ぶっははは！ 面白れえジョークだな！」

「試してみるかい？ 僕は今、君のような醜い弱者を土に還したい気分なんだ。君みたいな愚者でも、土の養分にぐらいは活用できるしね」

「テメエは最後にかっ消すつもりだったが、気が変わった。まずはテメエから——」

雲雀とザンザスの間の火花は激しさを増し、一触即発の様相を呈していた。

そして。ザンザスが今まさに雲雀へ攻撃を仕掛けようとした時。雲雀とザンザスの戦闘意欲に水を差すように、第三者から声がかかった。

「待ってください、雲雀さん。ザンザスの相手は、俺に譲ってくれませんか？」

「……沢田綱吉？」

ツナはおもむろに立ち上がり、雲雀の返事を待たずに雲雀の前に出る。ツナは以前は怖くてたまらなかったザンザスの眼光を直視して、一言。静かに己の意思を表出させた。

「——ザンザス、大空のリングは返してもらおう。お前に、お前のような奴に、9代目の跡は継がせない」

ツナの揺るぎない意思。これをきっかけに雲の守護者戦の現場に居合わせていた獄寺、山本、了平、クロームがツナに同調し、ヴァリアーとの総力戦への戦意をたぎらせる。対するザンザス、ベルフェゴール、レヴィアたんも殺意を昂らせる。しかし、ここでチエルベツ口機関が制止に入り、結局は明晩に開催する大空のリング戦の勝利者を次期ボンゴレボスと位置づける形に終息した。



ふいい。何とか原作通りの形に収まったか。命拾いしたよ。

ザンザスが一方的にツナくんの精神をボッコボコにする展開を静観してられなくてつい口を挟んでしまったけど、あのまま激おこステイクフアイナリアリティぶんドリームなザンザスとの戦闘に突入しちゃったらアウトだった。まず間違いなく僕含めて皆殺しだった。

何せ、ツナくんは修行で疲れ果ててるし、ザンザスが本気で僕を倒そうと思ったら、憤怒の炎で空中を陣取り、銃で地上の僕を延々と狙撃すればいいだけだしね。危ない危ない。

「あの、雲雀さん」

「なに？」

僕が内心でホッと胸を撫で下ろしていると、おずおずとツナくんが声をかけてくる。

お。ツナくんが男装中の僕に怯えずに、しかも一人で近づいてくるなんて珍しい。何の用かな。

「さつきはありがとうございます。その、ザンザスから庇ってくれて。雲雀さんがザンザスに言い返してくれなかったら、きっと俺、立ち直れませんでした。だから——」

「——どうして僕が草食動物を守ったことになってるの？」

「え？」

「僕はただ、やたら得意げでムカつく奴を黙らせたかっただけだよ。その結果、君がどう影響されようと、僕の知ったことじゃない」

僕に感謝の気持ちを伝えるツナくんに、僕は敢えてそっけなく対応する。ツナくんのお礼を律儀に全て聞き終えて、「どういたしまして」と返すなんて、雲雀さんのキャラじゃないもの。

「それでも、ありがとうございます」

ツナくんは僕の態度を気にせずに、改めてお礼の言葉をきちんと告

げる。

うん、良い顔をしている。京子ちゃんやハルが見たらトウクしそ  
うなカリスマフェイスだ。

この様子なら、明日ザンザスの気迫に呑み込まれることなく、戦い  
抜いてくれそうだ。

「……そう」

僕は安心する心とは裏腹に、ツナくんに大した返事をせずいち早  
く並盛中を去る。

僕の正念場が明日に控えている。今のツナくんが守護者全員を殺  
されてしまって絶望、なんて鬱展開にならないように、僕も頑張るよ。

## 風紀27・†猛毒に抗って風紀を守ろう†

僕が無傷のまま一方的にモスカをフルボッコだドン！の刑に処したり、壊れたモスカから瀕死のボンゴレ9代目が吐き出されたりと濃厚な展開続きだった雲の守護者戦の翌夜。

僕は雲の守護者戦の舞台だった並盛中の運動場に足を運んでいる。チエルベツロ機関の指示で、大空のリング戦を開催するに当たり、生きている全守護者に各々が戦ったフィールドへの移動を要請されたからだ。今は重傷で動けないルツスーリアや気絶中のランボがチエルベツロ機関の手により運ばれている頃合いだろう。しかし、あの体格の良いルツスーリアをベッドごと運ぶとか、意外とチエルベツロたちつてば筋力あるっばい？

まあ、それはともかく。

大空戦は嵐、雨、晴、雲、雷、霧、大空のボンゴレリングを全て手に入れることが勝利条件だ。そのため、今までのリング争奪戦で勝者が手に入れた各リングは一旦チエルベツロ機関に返還され、各守護者戦の舞台に設置された、10メートルほどの高さのポールの上に置かれている。なお、大空のリングはハーフボンゴレリングの状態でツナくとザンザスが所持している。

大空戦は全部のリングの回収が勝利条件。そして大空戦の舞台は並盛中全体。

そして、広大なフィールドでツナくとザンザスの戦闘の行方を見守れるよう、各所に大型ディスプレイが設けられ、さらに守護者にはカメラ搭載型モニター付きリストバンドが配布され、手首への装着を義務づけられる。このことから大空戦では守護者もまたリング争奪のために東奔西走するものと考えるのが一般的な推測だろう。

しかし、リストバンドの存在が守護者に自由な行動を許さない。なぜなら、リストバンドにはデスヒーターという、野生の象すら歩行不能にすることに定評のある猛毒が搭載されており、大空戦開始直前に守護者全員に注入されるからだ。そして当然、リストバンドを外せば

失格である。

デスヒーターは30分で守護者を絶命に至らしめる。避けるには、守護者の装着したリストバンドの凹みに守護者と同種類のリングを差し込み、デスヒーターの解毒薬を投与させないといけない。つまり、ツナくとザンザスは守護者全員の命を背負って死闘に臨まなければならぬのだ。

だが。僕が毒で動けず、助けを待つことは許されない。

全身を貫く燃えるような激痛の中で。それでも自力でポールのリングを回収し、解毒しないといけない。それができなければ、ツナくんの守護者全滅エンドが手招きするのみだ。

だからこそ、この日のために僕は毎日ポイズンクッキングを食べてきた。

雲雀さんが女体化した影響で。万が一にもデスヒーターに抗えないなんて可能性をゼロにするため、一年半も前から猛毒に体を慣らしてきた。その服毒習慣の成果が今、試されるわけだ。

「ッー」

と、ここで。リストバンドがデスヒーター投入のために僕の手首にグサリと針を刺す。

直後。僕の全身に激しい痺れと脱力感がほとばしり、その場にうつ伏せに倒れた。

な、何これ!? 痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い!

意識は結構はつきりしているから考えることはできる。でも、体中が熱すぎて集中力が保てない! え、原作の雲雀さん、こんな状況で平然と動いたの? 束縛が嫌だから? 規格外かよ。

「う、く……」

って、余計な事を考える場合じゃない。とにかく動かないと。早くポールをトンファーで倒して雲のリングを手に入れないと、ヤバイ。今の時点でメチャクチャ痛いのに、時間経過でドンドンデスヒーターの効果が強まるとか洒落にならないって! 絶対動けなくなるって

!

「あうっ？」

僕は地面についた両手を支えに、両足にありつただけの力を注いで立ち上がるようにする。

しかし、どうにか四つん這いの体勢になった所で力が抜け、再び僕は地に倒れ伏した。

……え、ちよつと。何これ。何この状況。え、え？ 待つて？ なんで動けないの？ まさか原作よりデスヒーターの効果強かったりする？ 野生の象すら歩行不能にする（笑）から野生の象すら歩行不能にする（真顔）へとデスヒーターの効果がクラスチェンジしてたりする？ それとも女の子な雲雀さんの体力が、原作雲雀さんより劣る影響でデスヒーターに抵抗できなかつたりする？ あれだけ毎日欠かさずポイズンクッキングを食べてきたのに？ とにかく、マズい。本気でマズい。早くしないと手遅れに――。

「ふははは！ これが大空だ！」

直後。僕のリストバンドに映る、憤怒の炎の推進力で飛行中のザンザスが哄笑とともに、二丁拳銃に憤怒の炎を込めて雷と嵐のリングの置かれたポールの根元を狙撃する。結果、レヴィアたんとベルフェゴールの手元に各リングが転がっていく。もう時間がない。解毒を終えた2人がツナくんの守護者を殺し回り始める前に、僕も急いで解毒をしないと――。

「ついでだ。この俺に舐めた口を利きやがったカスに絶望をくれてやる」

瞬間。ザンザスが再び地上に憤怒の炎を発射する。一直線に突き進む憤怒の炎は僕の真上のポールに直撃。結果、ポールの頂上に置かれた雲のリングが宙へ飛び、放物線を描きながら運動場のどこかへと落ちていった。







先ほどザンザスの憤怒の炎が直撃した影響で周囲に煙が立ち込める中。ベルフェゴールは攻撃の飛んできた方向に高圧的に問いかける。すると、煙が晴れるとともに姿を現したのは、雲雀恭弥。足元がおぼつかなく、呼気の荒い、沢田綱吉の雲の守護者。その手には黒いムチが握られている。

「げっ、お前はモスカに圧勝したあの——ん？ その様子、毒を解除してないっぽい？ はああ、何だ雑魚じゃん！ なんで動けるのか知らねえけど、警戒して損したぜ！」

ベルフェゴールは雲雀の登場に一瞬顔を青ざめるも、今にも倒れそうな弱々しい雲雀の様子から雲雀が毒を解除できていないと確信し、即座にトドメのナイフを放つ。

しかし、ナイフが雲雀の頭に深々と突き刺さることはなかった。宙を駆けるナイフが突如発生した爆発によってあらぬ方向へ吹き飛ばされたからだ。

「君の相手は僕じゃない。校則違反のダイナマイトを愛用する不良がお待ちかねだよ？」

「へっ、助かったぜ雲雀。この借りは必ず返す」

「いないよ」

爆風が収まるとともに雲雀の前に獄寺が現れる。そう、雲雀は床に倒れる獄寺の手に嵐のリングが収まるように調整してムチを放ち、ベルフェゴールの手から嵐のリングを弾いたのだ。結果、獄寺は嵐のリングでレスピーターを解除し、雲雀に迫るナイフをダイナマイトの爆発でぶっ飛ばすことができた。

「僕と群れる暇があるならさっさと嵐の守護者戦のリベンジを果たしなよ、ほら」

「リベンジじゃねえ！ 俺はあの野郎に勝ったけど、リングは取られただけだ！」

「はあ？ 聞き捨てならねえんだけど、その言葉」

己に絡んでくる獄寺の注意をベルフェゴールに向けようと、雲雀は雑に誘導する。すると、獄寺は雲雀のリベンジ発言の訂正を求め、その獄寺の物言いにベルフェゴールが不快感を示す。

「じゃあ、僕は行くよ」

「待て、雲雀！ 解毒ができてねえのに、一体どこへ——」

「屋上にいる、活きの良さそうな草食動物の元へ」

「……無茶しすぎんなよ。テメエが死んだら10代目が悲しむ」

「僕は草食動物に下剋上されるような、柔な人間じゃない」

「そーかよ」

ベルフェゴールの相手を獄寺に任せてさっさとその場を去ろうとする雲雀を獄寺が慌てて問いを投げかけるも、雲雀は足を止めない。『何者にも捕われることなく独自の立場からファミリーを守る孤高の浮き雲』たる雲雀に何を言っても止められない。そう悟った獄寺は簡潔に己の心情を伝え、後はベルフェゴールの相手に集中することにした。雲雀を放っておけないのなら、さっさとベルフェゴールを倒して雲雀の元へ駆けつけなければいけないだけなのだから。

「ぜえ、ぜえ……」

雲雀は側壁に手を添えつつ屋上への階段を上る。デスヒーターでガリガリと体力が削られる中、隙あらば崩れ落ちようとする体を気合いでねじ伏せ、一步一步着実に階段を上り行く。ここで倒れたら、もう二度と立ち上がれない。そのため、雲雀は強靱な意思を連れて階段を突き進む。

屋上は、すぐそこだ。

## 風紀28. †自力本願で風紀を守ろう†

「——ボス！ ありがたき幸せ！」

レヴィ・ア・タンもとい女体化したレヴィアたんは現在、歓喜の境地に至っていた。

ザンザスが雷のボンゴリングを設置したポールを憤怒の炎を注いだ銃を用いて破壊してくれたおかげで雷のリングがレヴィアたんの目の前に落ち、それを拾ってリストバンドの凹みに差し込むことでデスヒーターという名の猛毒を解除できたからだ。それは、ザンザスがレヴィアたんの存在をはつきりと認めたことを示している。

沢田綱吉の雷の守護者の牛ガキを打ち破った私をボスが必要とされている。これほどの誉れが他にあるうか。ゆえに。ボスの期待に応えるために私にできることは、一人でも多く。毒に苦しみ動けない、沢田綱吉の守護者を潰すこと。

（ベルも私と同じくボスのお慈悲により毒から解放された身、ならばベルよりも多くの守護者を狩らないといけないな！ ボスのために！ そしてボスから寵愛を——ふへへ）

「さて、まずは近くの牛ガキから殺そうか。どこにいる？ さっきのボスの炎で焼け死んだか？」

沢田綱吉の守護者殺しのMVPを獲得した私にボスがデレにデレまくって最上級の褒美をプレゼントする。そのような、まず現実にはなり得ない未来を脳内で構築しつつも、同時にレヴィアたんは自身のすぐ側でデスヒーターに苦しんでいたはずのランボを探す。

「見つけた。……よし、まだ息はありそうだ。ならばその忌々しい才能：エレットウリコ・クオイオ電撃皮膚とともに、盛大にミンチにしてやろう！」

レヴィアたんはザンザスの憤怒の炎の爆風で少々吹っ飛ばされていたらしいランボを見つけ、トドメを刺すべくランボとの距離を詰めていく。雷の守護者戦にて重傷を負って、入院していた所をチェル

ベッコ機関により強制的に大空戦に参加させられたゆえに、昏睡状態のランボは抵抗できない。レヴィアさんの致死レベルの攻撃を回避できない。

ランボの命は風前の灯火と化していた。だが、その時。銃声が轟いた。レヴィアさんはランボへと駆けるその足をとっさに止めた。直後、レヴィアさんの眼前を銃弾が突き抜ける。もしもレヴィアさんが今、止まっていなければ、銃弾は彼女の胴体を抉っていたことだろう。

「誰だ?」

「君ごときに名乗る名前はないよ」

レヴィアさんは銃弾の飛んできた方向を、屋上の扉の方へと勢いよく振り向く。

すると、レヴィアさんを鋭く見据える雲雀恭弥の姿があった。

「き、貴様は、雲雀恭弥!」

「へえ。僕の名前、覚えてんだ。強者に首を垂れて命を乞うしかできない草食動物らしい、殊勝な心掛けだね」

「……この牛ガキを助けに来たか。そのような性格には見えなかったが」

「それは違う。9代目の実子とやらは沢田綱吉に譲ったからね、代わりの獲物を探してたんだ。ちょうどいい所に君がいてくれて良かったよ」

雲雀の一挙手一投足を見逃してなるものかと、レヴィアさんは雲雀を警戒しながら雲雀と対話する。と、ここで。レヴィアさんは気づいた。雲雀の呼吸が異様に荒く、自分を見つめる視線があまり定まっておらず、そして足元がふらふらとおぼつかないことを。

(まさか!?)

「貴様、デスヒーターを解除できていないのか? 驚いたな、まさかあの猛毒の影響下にあつてなお、そのように動けるとは……」

「この程度で動けない君が軟弱。それだけの話だよ」

「……そうだな。認めよう、貴様は強い。あのゴーラ・モスカを無傷で下したその実力。そして毒を制する体力と精神力。どれをとつてもヴアリアークオリティに匹敵する。だが、毒で消耗した今の貴様に敗れるほど、ヴアリアーは甘くないぞ！」

レヴィアたんは自身の背中<sup>パラボラ</sup>にひっかけていた8つの電気傘を上方へ投げ飛ばす。8つの電気傘は円を描くような配置に移動し、空中で静止。その後、バチバチと電気を溜め始める。現状、雲雀は8つの電気傘の中心地点に立っている。このまま動かなければ、雲雀はレヴィアたんのレヴィ・ボルタの餌食となるだろう。ゆえに。雲雀は走り出す。レヴィ・ボルタの効果範囲から逃れつつ、電気傘を手放し手元に武器のないレヴィアたんをフルボッコにするために。だが、雲雀の行動はレヴィアたんの想定<sup>パラボラ</sup>の範囲内であった。

「がッ!？」

一筋の雷撃が、雲雀の脇腹を貫いた。思わぬ衝撃に雲雀は吐血しつつ、その場に倒れる。後ろを見ると、8つの電気傘の内、1つが溜めていた電気を失っている。そう。レヴィアたんの8つの電気傘は同時にしか雷撃を放出できないわけではないのだ。とはいえ、1つの電気傘から放出される雷撃の威力は大したものではない。音もバチバチとうるさく、雷撃の速さも目視で十分対応できる程度であるため、回避はさほど難しくない。それでも雲雀が雷撃をかわせなかったのは、デスヒーターにより視野やとっさの判断力が著しく衰えているからといえよう。

「これで終わりだ！ レヴィ・ボルター！」

レヴィアたんは己の勝利を確信しつつ、高々と技名を宣言する。すると、電気を充電し続けていた残り7つの電気傘の向きがグルンと、雲雀の倒れている位置へと修正される。そして、次々と電気傘から雷撃が発射され、雷の猛威が、暴力が、その場から動けない雲雀に容赦なく降り注いだ。



レヴィアさんのレヴィ・ボルタを為す術もなく喰らってしまった雲雀。ランボのような電撃皮膚がないのにレヴィ・ボルタの雷を浴びた雲雀は悲鳴も呻き声もなしにバタツと力なく倒れる。雲雀の学生服はズタボロで。雲雀の体からはプスプスと黒煙が立ち上っている。

「あああ！ ひ、雲雀殿が!？」

雲雀の痛々しい姿に、観戦席付近に備えつけられた大型ディスプレイを通じて戦況を見守っていたバジル——ボンゴレ外部組織こと門外顧問組織C E D E F所属の少年——がもはや悲鳴に近い狼狽の声を上げる。

「おいおい、こりゃあヤバいぞ！ 死んだっておかしくねえ！」

バジルに続き、D r・シヤマルも平静を失いつつあるようだった。普段は野郎の安否なんて一々気にかけないD r・シヤマルだが、雲雀はツナの雲の守護者だ。もしもここで死んでしまったら、一気にツナ陣営が精神的に瓦解しかねない。そうなれば、後はヴァリアーの独壇場だ。シヤマルが焦らないわけがなかった。

「いや。まだ生きてるぜ、コラー！」

焦るバジルとD r・シヤマルをよそに、冷静に雲雀の容態を見定めていたコロネロ——軍服を着込み、青色のおしゃぶりを持つアルコバレーノ——が雲雀の生存を確信する。直後。

「……い」

「なッ!? バカな、私のレヴィ・ボルタをまともに喰らってまだ生きてるだど!？」

ディスプレイの向こう側に映る雲雀が、わずかに唇を震わせた。

すっかり雲雀を殺したものと思ひ込み、8つの電気傘を己の背中に収納していたレヴィアさんは戦慄した。デスヒーターに抵抗できた

ことといい、この男はどこまで規格外なのかと。

「す……し……、……ん……い……、……みは」

「貴様、さつきから何を言っている？ 命乞いか？」

雲雀は死んでいないものの、瀕死には違いない。ボスほどではないにしても、雲雀ほどの規格外が死ぬ間際にどのような言葉を残すのか。ふと興味を抱いたレヴィアたんは不用心にも雲雀に近づき、雲雀の声を聞き取ろうとする。

「素晴らしく、運がないね、君は」

瞬間、雲雀は不敵な笑みを浮かべ、レヴィアたんを思いつきり見下す発言を繰り返した。

「な、なに!？」

第三者目線で見れば、戦況はどう考えてもレヴィアたんの勝利で。雲雀恭弥の敗北である。

それなのに、あくまで自分が勝ったかのように振舞う雲雀にレヴィアたんは思わず狼狽える。

その際に雲雀は懐から黒いムチを取り出し、残るかすかな力を振り絞ってムチを振るう。

その方向は——昏睡中のランボのモジャモジャ頭の中。そして、雲雀はムチを引っ張り戻す。

はたして、雲雀のムチはランボの10年バズーカを絡め取っていた。

「あ、あれはランボ殿の10年バズーカ!」

「——なるほど。雲雀の奴、考えたな」

「? どういう意味だ、コラ!？」

「ザンザスに吹っ飛ばされた雲のボンゴレリングの行方がわからない以上、雲雀は自力でデスヒーターを解除できない。今は束縛を嫌う意地の力で動けても、後々威力の増すデスヒーターに抵抗できずに動け



なくなるのはわかりきっていたはずだ。だからこそ、雲雀は獄寺を助けつつも、一目散に屋上を目指した。10年バズーカを持つランボの元に向かった」

「そうか！ あの野郎は最初から10年後の自分に後を託すつもりだったのか。やれやれ。猛毒で苦しいだろうに、よくそこまで頭が回るもんだ」

観戦席にて、バジルが雲雀がムチを巧みに活用して手にした10年バズーカに着目する中。リボーンはニツと口角を吊り上げる。意味深な言葉を呟くりボーンにコロネロが素直に疑問を呈すると、リボーンは謎を1つ1つひも解くように雲雀の意図を解説する。それによりようやく雲雀の策を悟ったDr. シャマルは、雲雀の意企に感心した。

「この戦い、僕の勝ちだよ」

雲雀は10年バズーカの砲口を己に向けて引き金に指を掛ける。

レヴィアさんは10年バズーカの恐ろしさを知っている。あの雑魚極まりなかった牛ガキですら、10年バズーカによって私を圧倒する強敵に成り果てた。なのに。現時点でモスカに圧勝できる雲雀恭弥が10年後の自分と入れ替わったとしたら。その後の展開なんて想像するまでもない。

「さ、させるかあああああ！」

レヴィアさんは背中から電気傘を一本取り出し、雲雀の体を突き刺すべく投擲する。が、電気傘が雲雀に刺さるよりも早く、雲雀は10年バズーカの引き金を引き終え、バズーカ内部の弾が雲雀に命中し、雲雀を中心にピンク色の煙が生じ、膨れ上がった。

そして。煙が晴れた時。ただそこに立っただけで屋上をビリビリと威圧させる人物が現れた。ボサボサの黒髪にムスツとした顔は変わらずに。長身瘦躯を黒スーツで着飾った、カリスマに満ち満ちた10年後の雲雀恭弥が満を持して、顕現した。

「……………」

10年後の雲雀は誰に問うでもなく、呟いた。

## 風紀29・↑運を味方に風紀を守ろう↑

「……………」

沢田綱吉陣営とザンザス陣営とのボンゴレリングを賭けた命がけの大空戦の最中、10年バズーカの効果で登場した10年後の雲雀恭弥は素直に疑問を口にする。が、周囲を軽く一瞥し、今の居場所が並盛中の校舎の屋上であるとすぐさま悟った。

続いて、10年後雲雀は激しい戦闘音が鳴り響く上空を見上げる。すると、炎の推進力で空中に留まる沢田綱吉とザンザスの一進一退の攻防が視界に映し出された。

「ワオ、ボンゴレリング争奪戦の終盤か。懐かしいな」

10年後雲雀は完全に理解する。今の自分が10年バズーカにより10年前の過去にいることを。と、ここで。10年後雲雀は己の足元に落ちていた、『風紀』と書かれた腕章に気づく。腕章はすっかり焦げちぢれ、10年後雲雀が触れようものなら塵と消えそうなズタバロ具合であった。

「へえ、10年前の僕は運が良いね」

もはや修復不能な腕章を見つめて10年後雲雀は口角を上げて意味深に呟く。

一方。終始マイペースな10年後雲雀を凝視するレヴィアさんの心中は焦り一色だった。

（マズい、マズいマズいマズい！ ただ立っているだけでこれだけの威圧感……ダメだ、私では10年後の雲雀恭弥を倒せそうにない。私の本能が敗北を認めている。だが、私はボスの期待を裏切るわけにはいかない！ どうすれば、どうすれば——ッ！）

レヴィアさんは冷や汗をダラダラと流しながら。焦燥に身を焦がしながら。必死に打開策を導かんと頭を働かせる。思考回路をガン

ガン回して、現状における最善手を導出しようとする。と、その時。レヴィアさんに天啓が舞い降りた。

「……」

直後。レヴィアさんは動き始めた。10年後雲雀がレヴィアさんに興味を移す前に、少しでも屋上の扉へと足を運ぶ。闇に紛れ、なるべく足音を立てないように意識して、速やかに退散しようとする。が、ここで。レヴィアさんの背中に10年後雲雀が声を投げかけた。

「ああ、君。一体誰の許可でここから退出するつもりかい？」

「ちッ、貴様に答える必要はない！」

10年後雲雀の問いかけにレヴィアさんは苛立ち混じりに返答しつつ、屋上の扉へ一心に駆ける。10年後雲雀に気づかれた以上、足音なんぞに気にかけて逃げる意味がなくなったのだ。

「ふうん、鬼ごっこ？ いいね、君の戯れに少し付き合っただけだよ。けど、その前に——」

一方。10年後雲雀は脱兎のごとく逃走するレヴィアさんの背中に向けて、懐から取り出したトンファアの先端から銃弾を発砲する。

「おわッ!？」

「それは没収だよ。リング争奪戦で死者を出すと、後々良くないことになりかねないからね」

銃声からとつさに横っ飛びで銃弾を回避したレヴィアさんに10年後雲雀は一息に距離を詰め、レヴィアさんの右指をトンファアで殴りつける。結果、レヴィアさんの右指に嵌められていた雷のボンゴレリングが宙に弾かれ、10年後雲雀はパシッと雷のリングを掴み取る。

「くそッ！」

レヴィアさんは奪われた雷のリングを取り返そうとせずに逃げの

一手を選択した。

10年後雲雀は屋上を去るレヴィアたんを追わずに、屋上の一角に転がる、昏睡中のランボのリストバンドの凹みに雷のリングを挿入し、デスヒーターの解毒薬を投与させた。

「さて。やることはやったし、後は彼女で遊ぼうかな。どんな悲鳴を響かせるか、楽しみだ」

苦しそうにうめいていたランボの表情が安らかなものに変化する中。

10年後雲雀は逃走中のレヴィアたんを咬み殺すべく、速やかに行動に移し始めた。



10年後の雲雀恭弥の顕現という、非常に分かりやすいデデドンな絶望展開において。

現状を切り抜けるためにレヴィアたんが閃いた作戦は単純明快。時間稼ぎ。その一言に尽きる。

ボスはボンゴレリングを回収することと、沢田綱吉の守護者を皆殺しにすることを望んでいる。しかし、だからといって今の10年後の雲雀恭弥と戦う必要はない。

(5分だ、5分経てば10年バズーカの効果が切れ、10年前の雲雀恭弥に戻る。そうなれば、後はデスヒーターとレヴィ・ボルタで死にかけの雲雀恭弥のトドメを刺し、雷のリングを取り戻すだけの簡単な仕事だ。……たったの300秒、持ちこたえられないで何がボスの雷の守護者だ！ レヴィ・ア・タン！)

レヴィアたんは階段を駆け下り、校舎3階に移動する。10年後雲雀が追ってくる気配はあるだろうか。レヴィアたんは廊下の壁に背中を預け、ソーツと階段を覗く。と、その瞬間。レヴィアたんの体の正面に位置する窓ガラスが蹴破られた。ガラスの破碎音が派手に鳴

り響く中。颯爽と校舎3階の廊下に着地したのは、10年後雲雀。

「なッ!? 窓からだと!?!」

「見つけたよ」

屋上の金網にムチの先端を巻きつけて降下する形で窓から侵入した雲雀は間髪入れずにトンファーでレヴィアたんの下顎を打ち上げる。

「ガアッ!?!」

レヴィアたんのまぶたの裏に星が散る中。レヴィアたんは脳を揺さぶられつつも、2歩、3歩と後方にたたらを踏みつつも、電気傘を3本、己の後方に投げ飛ばす。

「レヴィ・レールガン!」

レヴィアたんがその場にしゃがみ込んだ直後。3本の電気傘が雲雀目がけて一直線に高速の電撃を解き放つ。威力が大幅に減衰するものの、雷撃の速さに重きを置いたレヴィ・レールガン。10年後雲雀はスーツを素早く脱いでレヴィ・レールガンの遮蔽とすべく前方にフワリと投げるが、レヴィ・レールガンはスーツを軽々貫いた。

(命中した!)

レヴィアたんは思わぬ展開に喜色ばむ。10年後雲雀の実力ならばレヴィ・レールガンを見てから平然と回避するものと想定していたからだ。しかし、直後。レヴィアたんは衝撃に目を見開く。スーツのパスリと床に落ちる中、レヴィ・レールガンが直撃したはずにもかかわらず、無傷の10年後雲雀の姿があったからだ。

10年後雲雀が何をしたのか。答えは簡単だ。スーツの裏側で、レヴィアたんの見えない所で、右の中指に装着していた雲のリングに雲の炎を灯し、雷撃の盾としていたのだ。雲雀の純度の高く、かつ膨大な雲の炎によりレヴィ・レールガンの威力が完全に殺されたのだ。なお、雲のリングは炎の大きさに耐え切れず砕け散っていたりする。

ちなみに、10年後雲雀が堂々と雲の炎でレヴィ・レールガンを防御しなかったのは、レヴィアさんの動揺を誘いつつ、みだりに10年後の戦い方を見せびらかさないためだ。

「き、貴様！ 化け物か!?!」

「君が軟弱なだけだよ」

理不尽だとの思いをそのままにレヴィアさんは叫ぶが、10年後雲雀は涼しげな表情を崩さない。私では、レヴィアさんでは10年後雲雀の足元にも及ばない。そのような現実をまざまざと見せつけられて、レヴィアさんのプライドは酷く傷ついていた。だが、だからといって絶望に足を取られている場合じゃない。

「おおおおおおおおお！」

レヴィアさんは10年後雲雀が割った窓の先へと跳び出す。3階からの飛び降りだ。無傷で済むと考えるべきではないだろう。だが、今はとにかく時間を稼ぐことが大事なのだ。規格外極まりない10年後雲雀を相手に5分間生き延びる心算ならば、私もまた規格外な逃げ方をしないとならない。だからこそ窓からの逃走を選択した。しかし。

「逃がさないよ」

「ぐえ!?!」

10年後雲雀はトンファーから鎖分銅をバシユツと吐き出し、レヴィアさんの腹部に巻きつける。そして、トンファーを引っ張り、レヴィアさんの体を校舎3階内に引き戻す。腹部を強烈に絞めつけられたレヴィアさんはカエルが潰されたかのような声を上げ、さらに戻された勢いで廊下の壁に背中を強く打ちつけ、声なき悲鳴を響かせた。

「さあ、耐久テストといこうか。君はいつまで保つだろうね？」

そして、10年後雲雀による蹂躞劇が開催された。10年後雲雀

の際のないトンファアの連撃にレヴィアたんは対処できない。カウ  
ンターの反撃も。攻撃先を予測した上での回避も。怪我を最小限に  
留める防御も。何もかもできない。10年後雲雀の速く、重く、絶え  
間ないトンファアのラッシュにレヴィアたんはまるで抵抗できない。

(まだか!? 5分は、まだなのか!?)

次々に刻まれる痛みにレヴィアたんの意識が徐々に遠のく中。レ  
ヴィアたんは心の中で必死に叫ぶ。5分経ってしまえば私の勝利は  
固い。いくらボロボロになろうと、気絶せず、10年バズーカの効果  
のなくなった雲雀恭弥にトドメを刺す力さえ残していれば私は勝て  
る。だが、その5分が遠い。こんなにも。こんなにも5分は長かった  
のか。

(う……ボ、ス)

レヴィアたんの戦闘スタイルはルツスーリアみたく近接戦闘型で  
はない。ゆえに、日頃から体を鍛え抜いてなどいないレヴィアたん  
が、10年後雲雀の攻撃に晒され続けていつまでも耐えられるわけが  
なく。レヴィアたんは必死に繋ぎ止めていた意識を手放そうとする。

しかし、その時。ピタリと。唐突に10年後雲雀の攻撃が止んだ。  
不可解な現象にレヴィアたんが腫れ上がったまぶたを持ち上げて  
前方を見据えると。

ボフンと。柔らかな音とともにピンク色の煙がレヴィアたんの視  
界を埋め尽くしていた。

(……ま、さか? まさかまさかまさか! 5分、経ったのか!? 10  
年後の雲雀恭弥の攻撃に耐えきれたのか!?)

レヴィアたんは現状を理解し、歓喜にわなわなと震える。

時間稼ぎの作戦は成功した。ならば、レヴィアたんがすべきこと  
はただ1つ。

「死ねええええええええええ雲雀恭弥あああああああ!!」



ピンク色の煙の中にいるだろう瀕死の雲雀に、今まで散々ボコられた恨み辛みを全て乗せた上で渾身のトドメを刺すことだ。レヴィアたんは電気傘の柄を碎かんばかりに力強く握りしめ、血走った眼で煙の中を見据えつつ、電気傘を突き刺した。

「——甘い」

が、煙の中の雲雀恭弥は。レヴィアたんの電気傘を平然と紙一重で回避し、お返しだとばかりにレヴィアたんの顔面をトンファーで力いっぱい殴りつけた。

「がはッ!? な、なぜ……?」

もはや気力だけで意識を保っていたレヴィアたんはまるで糸の切れた操り人形のごとく床に仰向けに倒れ、疑問の言葉を最後にガクツと気絶する。

「君なら時間稼ぎに打って出ると思っていたよ」

一方。レヴィアたんを咬み殺した雲雀恭弥は付近に転がる雷のリングを拾いつつ平然と呟く。

その姿は瀕死とは程遠く。服こそ所々焼け焦げているものの。デスヒーターを解除し終え、レヴィ・ボルタによる重傷を治癒し終え、しかと復活した雲雀の姿がありありとうかがえた。



「こ、これは!? なぜ雲雀殿の怪我がなくなっているのですか!?!」

「こりゃあどういうことだ!?!」

観戦席にて。大型ディスプレイに映る無傷の雲雀に、バジルとDr. シヤマルは驚愕する。てっきり10年後雲雀がレヴィアたんを完全に戦闘不能にできなかった時点で雲雀の敗北、あるいは死が待ち受けているものと身構えていただけに、衝撃が大きいようだ。

「やっぱりか。雲雀の奴、賭けに出たんだな」

「賭けだ、コラ？」

「ああ」

雲雀の意図を薄々察していたリボーンは帽子を目深に被り直しつつ、ニツと笑う。

一方、リボーンの考察が気になったコロネロの問いにリボーンは現状を解説し始める。

「雲雀は10年後の自分にレヴィ・ア・タンの相手を任せるためと見せかけて、10年後の世界でデスヒーターや自分の怪我を治すために10年バズーカを使ったんだ。10年後の発達した医療技術なら、5分もあれば専用の解毒薬がなくてもデスヒーターを解毒できるかもしれない。重い怪我を治癒できるかもしれない。……そんな都合のいい可能性に、雲雀は賭けたんだ。そして、雲雀は賭けに勝った。実際に10年後の未来には解毒手段も怪我を完治させる手段もあった。だからこそ、雲雀は今ピンピンしているんだ」

「な、何と！ さすがは雲雀殿！」

「はあー。そこまで考えての行動かよ。全く、末恐ろしいガキだぜ」

リボーンの解説のおかげでようやく理解の追いついたバジルとDr. シヤマルは尊敬と畏怖と方向性こそ別だが、各々雲雀を称賛する。

「10年後の雲雀が屋上に落ちていたボロボロの腕章を見て、10年前の自分の怪我の状況を推察した上でなお、本気でレヴィ・ア・タンを倒そうとしなかったのも、瀕死の雲雀を完全に治癒できる目途が10年後の世界にあったからこそだな。そうじゃなかったら10年後の雲雀は遊ばずにレヴィ・ア・タンを速攻で仕留めていたはずだ。……とにかく、これで雲雀が復活だな」

「ああ。朗報だぜ、コラー！」

かくして。観戦席の面々は再び大型ディスプレイに映る戦況を見守り始める。

雲雀の影響で衝撃展開に事欠かない大空戦は、まもなく佳境を迎えつつあった。



さて。次はクロームを助けに体育館へGOだね。獄寺くんがベルフェゴールを倒していれば体育館でマーモン&ベルフェゴールと戦う必要はなくなるけれど、十中八九ベルフェゴールは獄寺くんとの戦闘から逃げて、マーモンのデスヒーターを解除しているはずだからね。

だって、獄寺くんにはナイフ&ワイヤーを用いたトリッキーな戦術を知られている上に、嵐の守護者戦のハリケーンタービンのようなベルフェゴールに有利な機械が校舎に設置されてないわけだからね。血を流すと冷静な判断力を失う縛りもあるわけだし、逃げ一択で間違いない。

「ッ!?!」

「雲雀!?! 大丈夫か!?!」

「……」

と、その時。僕の視界が二重にブレるとともにB棟内の瓦礫に足を引っかけて転びかける。

山本くんが僕を心配する中。僕は平然とした表情を心掛けつつ、歩を進ませようとした。

が、足が進まない。思わず首を傾げた瞬間、強烈な脱力感が襲いかかり、僕は思わずガクツとその場に膝をついた。体の調子がおかしい。確かに秋田くんの匣兵器で治してもらったはずなのに。どうして。わからないまま、僕は為す術もなくうつ伏せに倒れる。

(ま、さか……あの晴ヒトデじゃあ体力までは回復できないとか?)

ここで。ふと僕の脳裏にあり得そうな理由が思い浮かぶ。確かに10年後の世界で僕は猛毒と大怪我を治してもらった。でも、今までに失った体力はそのまま、回復していないとしたら。ここで動けなくなるのも当然だろう。それだけ、僕は雲雀さんの体を酷使しまくったのだから。

だけど、これはマズい。凄くマズい。せめてクロームを助けるまで、この体には意地でも動いてもらわないと困る。何せ、僕には

↑イマジンプレイカー  
↑幻想殺しがある。幻術の一切通じない僕なら、クロームをほぼりスクなしで助けられる。幻術を封じられたマーモンと、手の内を知っているベルフェゴールなんて、雲雀恭弥の敵じゃない。

だけど、もし僕がここでダウンしてしまっただらどうなるか。おそろく、原作通りに事が運ぶのだろう。守護者を助けつつ、リングを回収した獄寺くんと山本くんがまだ助けていない唯一の守護者たるクロームを助けようとして。しかしマーモンの幻術により晴、雷、雨、嵐、雲のリングを奪われて。獄寺くんと山本くんはマーモンの幻術で殺されかけるが、了平くんが極限太陽で<sup>マキシマムキャン</sup>体育館を丸ごと吹っ飛ばして2人を救う流れだ。

でも、何もかもが原作通りに進むとは限らない。了平くんの助けが間に合うとは限らない。マーモンの幻術による死を待たずにベルフェゴールが獄寺くんと山本くんに速やかにトドメを刺すかもしれない。皆が死ぬ姿は見たくない。僕が、僕が頑張らないと。

動け、動けよ！ さっきデスヒーターに抗ったように、もう一度動いてくれよ！

仮にもボンゴレ最強の守護者の体に憑依してるんだから、もっと――

「雲雀。後のことは俺に任せて、休んでくれ」

「……山本武？」

「毒で意識が朦朧としてたけど、雲雀の活躍はこのリストバンドから見てたのな。毒が回って、メチャクチャ辛いのは雲雀も同じはずなのに、すげえ無茶して、皆を助けてくれてさ。本当にカッコよかったぜ。ありがとな」

「……」

「だから、選手交代だ。もうとつくにMVPを獲れるぐらいの活躍をしたんだ、そろそろ雲雀は高みの見物で頼む。俺だってツナの守護者だ、俺にもカッコつけさせてくれ」

グギギギと、歯を食い縛って体に力を込めようとする僕に山本くんがトンと己の胸を叩いて選手交代を提案する。あかん、何これ山本く

んが眩しい。何か後光が見える気がががが。これ雲雀さんが憑依中じゃなかったら、堕ちたな状態になってもおかしくないのでは。何という破壊力だ。

「……これ」

僕は返事の代わりに服から雷と雲のボンゴレリングを取り出し、山本の手に握らせる。

雲雀恭弥のキャラが抱えるプライドに配慮した山本くんの提案を断る理由はない。あれだけ気合いを入れても動く気配がない以上、本当に体力が限界だろうから。ここで無理して肝心な所で倒れて足手まといでは意味がないのだから。

「仮にも僕の代わりを買って出たんだ、醜態を晒したら咬み殺すよ」

「ははは、気をつけるのな」

僕が山本くんをギンと睨むも、山本くんは何ともなさそうに朗らかに笑う。

そして。山本くんが校舎B棟を後にしたのを見届けた後、僕はスツと目を瞑る。

選手交代の提案を大人しく受け入れた僕だけど、これで終わらせるつもりはない。

少しだけ。ほんの数分だけ体を休めたら。再び活動を始めるつもりだ。

大丈夫かって？ まあ大丈夫でしょ。雲雀さんの規格外スペックなら、ほんのちよこつと仮眠を取っておけばきつとある程度は体力を回復できるはずだしね。

ふふふ、今こそ3時間睡眠で元気を取り戻せるソード・ワールドの冒険者たちも真つ青の体力回復力を発揮する時だね。僕の本気を見せてあげよう。いざ、南無三ー！



……  
……

あ、ありのまま今起こった事を話すよ！ 『僕は少しだけ休眠するつもりが、目覚めたら大空戦が既に終わっていた』。な、何を言っているのか、わからないと思うけど、僕も何が起きたのかわからなかった。頭がどうにかかなりそうだったよ。夢オチだとか死亡エンドだとかそんなチャチなもんじゃない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったよ……。

というわけで、次に起きた時には全てが終わってた件。

病室のベッドで朝日を拝んだ時は内心、パニック状態だったよ。果然と目を見開いてたよ。

ちなみに、僕が気絶した後の大空戦の行方はほぼ原作通りだったよ。うだ。つまり。危ない展開こそあれ、ツナくんたちは誰も死なない形で大空戦に勝利したわけだ。あ、9代目も一命を取り留めたってさ。良かった良かった。以上のことは僕が尋ねるより早く、大空戦の途中から観戦を始めたらしいディーノさんが全てを懇切丁寧に教えてくれました。毎度、ご苦労様です。

しっかし、クロームを助けつつ、ツナくんの零地点突破・改や零地点突破・初代エディションを生で見えたかったのになあ。うう、なんで仮眠なんて選んだんだ、昨日の僕。

氷漬けのザンザスとかも見てみたかったのになあ。もったいないことしたなあ。

……ま、嘆きに嘆いた所でどうしようもないし、引きずるのはここまでにしよう。

「——にしても、僕までランボくんの退院祝いに参加してよかったの？ 僕、あの子と今まで面識なかったのに」

「前にオレの誕生日にも来たんだ、今さらだろ」

「リボーンとは面識があったじゃないか。恭華としては初対面だったけど」

「それに、ぱーちーは人数があつてこそだからな。大歓迎だ」



「……そう言ってくれるのは嬉しいけど、ランボくんと接点のなかった僕が今こうしてタダでお寿司をいただくことにそこはかかない罪悪感があるんだよね」

「損な性格だな」

「あはは……」

そんなわけで。僕は今、恭華さんモードで表向きはランボの退院祝い、実質はヴァリアーとのリング争奪戦への勝利祝いのために山本くんの実家の竹寿司に来ている。

竹寿司を貸し切り、山本くんのお父さんこと山本剛さんが無料で色々な種類の寿司を振舞ってくれる中。雲雀恭華としてランボと仲良くしたり、リング争奪戦に参加してないがために、己の存在を場違いに感じた僕は偶然隣にいたりボーンに心情を吐露する。

「別に私も似たようなものだからいいんじゃないの？ 難しいこと考えないで、タダで美味しいお寿司を食べられてラッキーって思えば幸せになれるわよ？」

「そうかな？ って、えっと、貴女は？」

「黒川花、笹川京子の友達よ。貴女の話は京子からよく聞いてるわ。よろしく」

「黒川さんね、こちらこそよろしく。僕は雲雀恭華。あの雲雀恭弥の妹だけど——」

「——うえ!?! そうなの!?!」

と、ここで。前方から女の子が僕に声をかけてくる。中学2年生にしては非常に大人びている女の子こと黒川さんと軽く自己紹介する中で僕が雲雀恭弥の妹設定を持ち出すと、途端にビクツと肩を震わせ、蒼白な表情を見せる。

「うん。そうだけど、恭弥兄と違って僕は無害だから、そうあからさまに怖がらないでほしいな」

「……………うん、そうするわ。恭華は怖く見えないしね」

せつかく話す機会が生まれたのだから黒川さんに避けられなくな

いとの心境で、僕はニコニコ笑いながら言葉を続ける。すると、5秒ほど。黒川さんはジーツと僕の顔を凝視した後、僕相手に怯えない方針に決めたようだ。うむ、よきかなよきかな。

「このパーティーに集まってる連中、何か変なのが多いから、常識人っぽい貴女がいてくれて気が楽だわ」

「ま、皆それぞれ個性的なのは確かだよな」

（ごめんなさい、黒川さん。僕もその『変なの』の枠内なんだよね。ボンゴレ雲の守護者だし）

「あ、しっしっババアだ！ しっしっババアだもんね！」

「コラ！ 何度もババアって言うな！ このガキ！」

「がははは！ しっしっババアが怒ったあー！ 捕まえられるもんなら捕まえてみろー！」

僕が黒川さんと会話しつつ、内心で己が常識人でないことをこっそり謝罪していると。

カウンター席の上に陣取っていたランボが黒川さんを指差し、自分が勝手につけたあだ名を連呼する。結果、大の子供嫌いな黒川さんはランボにブチ切れ、ランボとの追いかっこを開始した。ランボと黒川さんとの身長差を考えると、ランボを捕まえるのは難しそうだ。ここが店内で、いっぱい人がいるのだからなおさらだ。

（……ま、頑張って、黒川さん）

年頃の女の子である以上、黒川さんの怒りは察するに余りある。

僕は心の中で黒川さんの健闘を祈った。

かくして。パーティーは賑やかに展開されていく。僕は京子ちゃんと一緒にツナくんリング争奪戦——ではなく、相撲大会（笑）の勝利を祝う言葉をプレゼントしたり、ハルと一緒に寿司のクオリティの高さに舌鼓を打ったりと、喧騒の中で自分らしく楽しく過ごす。

リボンが10年バズーカを喰らい、5分が経過しても戻ってこないで失踪する形でスタートする未来編の、ほんの数時間前の出来事

だ  
っ  
た。  
。

未来編を咬み殺す

風紀31. †思考を整理して風紀を守ろう†

VSヴァリアー編が終わり、リング争奪戦の勝利を祝うパーティーを終えた翌日。

僕は恭華さんモードで並盛町を徘徊していた。特に目的地はない。並盛町はそこまで大規模な都市でない以上、テキトーに歩いていればその内、会いたい人物に会えるだろうからだ。

「あッ！ 恭華ちゃん！」

「ん、ハル？ どうしたの、そんなに血相変えてさ？」

「恭華ちゃん！ 大変です！ リボンちゃんがなくなっちゃったんです！」

ほい、さっそくエンカウトだね。そう、僕が会いたかったのはハルか、ツナくんか、獄寺くんか。この3人の共通点は、10年バズーカにより失踪したりボーンを捜索していること。要は、リボンがいなくなったという話を聞くことで、未来編が始まった確信を得たかったのだ。

本気で未来編の始まりを確信したいのなら、パーティーが終わり家に就く途中のリボンが実際に10年バズーカを喰らって消えるシーンに居合わせれば確実なのではないかとの意見はわかる。しかし、原作にない僕の勝手な行動により、10年後の未来にツナくんたちを送っている入江正一くんの一般人メンタルに変な影響が発生し、予期せぬイレギュラーが発生しては困るため、こうして人伝でリボン失踪の情報を得ることにしたのだ。

「え、本当かい？ 僕も探すの手伝うよ」

「ありがとうございます！」

「それで、ハルは今までどこを探してたの？」

「山本さん家に行きました！ ツナさんは公園に、獄寺さんは並盛中に向かっています！」

「了解、じゃあ僕は並盛山の方でも探そうかな。ハルは……そうだね。商店街方面をお願い」

「わかりました！」

ハルと手早く情報交換を終えると、僕は駆け足で並盛山に向かう。もちろん、真剣には探さないけどね。ハルには悪いけど。何せ、今リボーンは10年後に、厳密には約9年と10カ月後の未来にいる以上、どう足掻いても見つけようがないからね。さて。今の内に改めて未来編へのスタンスを定めておこうかね。

未来編とは、原作15巻分ほどを使用した、リボーンの中で一番長い長編である。

この未来編は、10年後の未来で盛大に力をつけたミルフィオーレファミリーのボスカつマシユマロ大好きっ子の白蘭が世界征服と新世界創造を目的に、マーレリング7つ、ボンゴレリング7つ、アルコバレーノのおしゃぶり7つで構成された7トウリニセツテ、3を求め、ミルフィオーレの精鋭たる6弔花の1人である入江正一の知能を利用して、ツナくと6人の守護者+ツナくんたちが今までに知り合った人たち（※例：京子ちゃんやハルなど）を10年後の未来へ強制的に飛ばし始めたことを契機に始まる。そして、10年の月日を経て戦い方の常識が様変わりした世界で、ツナくんたちは匣兵器やボンゴレリング、そして己の純粋な力を活用して激戦の連続を乗り越え、最終的にツナくんが白蘭を倒すといった感じだ。

特に未来編序盤の、ボンゴレ狩りが行われている絶望っぷりや、匣兵器やリングの炎の影響によるパワーインフレっぷりに、どう物語が展開されていくか予測のつかないことが加わって、未来編にワクワクが止まらなかったといったリボーン読者は多いはず。かくいう僕もその1人だ。

さて。未来編における僕の方針だけど、まず未来にいかないのは論外だね。原作を知っている以上、僕に10年バズーカを命中させるた

めに僕の昼寝中にこっそり接近するであろう正一くんを咬み殺して僕の未来行きを阻止するのは簡単だけど、10年後のメローネ基地に全てのボンゴレリングがそろってなければ白蘭が起動させた超炎リング転送システムによりツナくんたちがメローネ基地ごとどこかへと飛ばされてしまう。転送先次第ではロクに後々のチヨイスへの準備ができず、真6弔花に皆殺しにされかねないからね。

しかし。未来編における雲雀さんって実にハードモードなんだよね。

何せ、ツナくんたちは88から始まるのに、僕に至ってはEasy goからの参戦だ。

しかも、10年後に飛ばされたと思ったら、いきなり未来編前半のラスボスポジションの幻騎士との戦いが待っているのだ。

例えるなら、マインクラフト初心者にゲリラVSコマンドーMODを勧めるようなものだ。

全然 Easy goで行けない件。ルナティックすぎて悲しいです。

となると、僕がすべきことは幻騎士と戦うその時までには膨大な雲の炎をボンゴレリングに灯せるようにすることだ。原作では圧倒的な力量差のある幻騎士を、雲雀さんは膨大な雲の炎を匣兵器に注入し、偶然ながらも雲ハリネズミを暴走させたことで戦闘を回避したのだから。

とはいえ、今すぐには行わないけどね。ディーノさんからリングに炎を灯せることを聞いてからじゃないと、僕の行動に違和感が出ちゃうから。

……え、他にやるべきことはないのかって？ うん、ないよ。

というか真面目な話、未来編は現時点で既に詰んでる可能性があるんだよね。

だって、無数のパラレルワールドの内、白蘭に支配され滅ぼされていない唯一の、たった1つの世界でツナくんが白蘭を倒して世界を正常に戻すのが未来編の結末だけど、この世界はそのパラレルワールドの1つだって考えた方が自然なんだよね。だって、雲雀さんやレヴィア

たんが女体化してるし。その場合、僕のやれることは白蘭がやりたい放題し始める中、トゥルルートのツナくんが白蘭を倒すまでの間、少しでも長く並盛を、知り合った皆を守るぐらいしかない。

だから。僕はこの世界が白蘭に支配されないトゥルルートの可能性に備えて、リングに覚悟の炎を灯す練習に取り組むのみだ。……いやはや、未来編ってホントスケール大きいよね。

結局。この日の僕はリボン搜索をテキトーな所で切り上げ、家路に就いた。

もう今頃はツナくんと獄寺くんが未来へ飛ばされているだろう。そして。明日には山本くん、ランボ、イーピン、京子ちゃん、ハルも強制的に未来へ旅立つはずだ。

10年後の世界は残酷だけど、どうか心を強く持つて生きてほしい。

きつと、10年後の僕もフォローするはずだしさ。



10年後の未来の並盛神社にて。獄寺は後悔していた。

眼前には、ミルファイオーレのブラックスペル。第3アフェランドラ隊の隊長たる電光の<sup>ガンマ</sup>γ。

傍らに倒れているのは、ガンマの匣兵器・エレットロ・ビリアルドから放出された、宙に浮かぶビリヤード球同士を繋ぐ雷の炎により体を焼かれた山本。

「さあ、教えてもらおうか。なぜボンゴレ10代目が生きている？そして今、どこにいる？」

ガンマが何としてでも情報を引き出すべく、拷問を始めようとする中。獄寺もまたガンマの匣兵器・電狐の強烈な電撃をまともに喰らったため、仰向けに倒れたままロクに動けない中。獄寺は深く後悔していた。

ラル・ミルチから事前にガンマが危険であると聞いていたのに。それでもなお、山本と共に戦うことを拒否してガンマと1対1で挑んだこと。山本の説教を受けて、心を入れ替え、山本と連携してガンマに一撃入れるも、これでガンマを倒せたと慢心したこと。慢心した隙を突かれてあつという間に形勢逆転され、さらにはこの時代では既に射殺された10代目の存在をガンマに教えてしまったこと。様々な後悔が獄寺の脳内を支配する。が、何を後悔した所で時は巻き戻せない。唐突に未来へ飛ばされ、心に余裕がなかったことを言い訳にした所で、後の祭りだ。

「誰、が……てめえ、なんかに」

「それともう1つ気になるんだが」

「ぐあー！」

「お前らの付けているリングには見覚えがある。どういう冗談だ？」

「ああああああー！」

だからこそ。今の俺にできることは。絶対にガンマに情報を渡さないこと。例えばガンマに手を踏まれ、指が折れるほどに強く手を踏みつけられたとしても。激痛に耐え抜くこと。情報を話さなければ、もうしばらくは殺されないはずだ。その間に何かイレギュラーでも起きれば、俺や山本が死なずに済むかもしれない。わずかな希望でしかないが、続ける以外の選択肢は今の獄寺に残されてはいなかった。

が、ここで。ガンマがふと獄寺の指をグリグリと踏む力を弱める。何事かと獄寺が焦点の定まらない眼を細めると。気絶していたはずの山本が時雨金時でガンマに斬りかかり、ガンマのキュー（※ビリヤードで使う棒状の用具）で防がれるシーンが獄寺の両眼に映った。

「……ハア、ハア……」

「バカ、山本……」

もはや立っているのもやっとなのだろう。山本は何も言えずにただ荒い呼吸を繰り返す。

自分を守るために、山本がガンマに立ち向かっている。その姿に獄



寺は思わず顔を歪めた。

そのまま倒れていけば。気絶したフリを続けていけば。

例えば俺が拷問の果てに殺されても、山本だけでも一命を取り留めたかもしれないのに。

「拷問には、1人いれば十分だ。お前は無用なんだ」

ガンマが煩わしそうに山本を見下ろすと同時に、ガンマの電狐がじりじりと山本に迫る。

2匹の電狐の纏う雷の炎が互いに共鳴し、雷の炎をどんどん増幅させる。

「や、め……」

ガンマはこの一撃で確実に山本を殺すつもりだ。

獄寺は必死に口に力をかき集めて、かすれ声でガンマに懇願する。

が、雷の炎がバリバリと響き渡る現状では、ガンマの耳に獄寺の声は届かない。

仮に届いたとしても、ガンマが止まらないのは目に見えていた。

(ちく、しょう……！)

電撃が山本を襲い始め、獄寺が己の無力を呪った、まさにその時。

風を切るようなスピードで何かガンマ目がけて突撃してきた。

攻撃に直前に気づけたガンマはその何かに2匹の雷狐をぶつけて、攻撃を相殺する。

「——おっと、奇襲失敗。ま、不意打ちワンパンで仕留められるほど、ミルフィオーレの6弔花は甘くないか」

ガンマが攻撃の飛んできた方向へ体を向けると。攻撃に使用した匣兵器を匣に仕舞いつつ、何とも場違いな明るい口調でスタスタと近づいてくる1人の女性の姿があった。パーマの入った艶やかな黒髪に理性的かつ鋭めな瞳が特徴的な、スレンダーな体軀をした女性だった。

「な……あ……!?!」

獄寺はその女性を見て、すぐに正体を悟り、驚愕した。いくら10年の月日を経て成長していても。女性の身に纏う雰囲気や口調が、明らかに雲雀妹のそれだったからだ。

「誰だ、あんた? こいつらを守るってことは、ボンゴレ関係者か?」  
「そうなるね。僕は雲雀恭華。ボンゴレ10代目の雲の守護者こと雲雀恭弥の妹だよ。君たちが進めてるボンゴレ狩りの対象に思いつきり入ってると思うけど、知らないの?」

「ん? あー。そういや、そんな名前もあつたか……。で、その妹とやらが何の用だ?」

「簡単な話だよ。今忙しい恭弥兄の代わりに、君を倒しに来たのさ」

「……ほう、面白い冗談だ。本気で俺に勝てると思ってるのかい、レディ?」

「確かに僕があんまり強くないのは認めるよ。だけど、恭弥兄から借りた匣兵器におんぶに抱っこスタイルでいけば……ま、何とかなるんじゃないかな? 君程度、余裕余裕♪」

10年後の恭華はふふんとどや顔を浮かべつつ、これ見よがしに匣を掲げる。

どこまでも飄々とした態度を崩さず、ちやつかり煽りを入れる10年後恭華を前に、舐められていると判断したガンマの機嫌が徐々に下降していく。

「ククッ、そうか。なら、身の程知らずなレディに現実を見せてやるよ。存分に痛めつけてやれば雲の守護者が釣れるかもしれないからな」

そして。ガンマは獄寺への拷問を後回しにして、10年後恭華を潰す方針を定めた。

「……ひ、ばり、いもう、と?」

「安心して眠ってなよ、獄寺くん。山本くんと一緒にさ。ここは大人の僕がどうにかするから」

10年後の雲雀妹は戦えるのか。大丈夫なのか。ガンマに勝てるのか。

獄寺の脳裏に疑問と不安が湧き上がり、獄寺は消え入りそうな声で彼女を呼ぶ。

すると、10年後恭華は慈愛に満ちた微笑みを浮かべて獄寺の不安を払拭しにかかる。

獄寺の疑問は何も解消されていない。なのに、なぜか安心できる。雲雀妹にガンマとの戦いを全て委ねていいと思えてしまう。雲雀妹の声色には、そのような不思議な力があつた。

結果、安心した気の緩みのせいも、獄寺の意識はここでプツリと途絶えるのだった。

## 風紀32. †匣兵器ラツシユで風紀を守ろう†

並盛神社にて。雲雀恭華と対峙するミルファイオーレファミリーの第3アフェランドラ隊の隊長こと<sup>ガンマ</sup>γは、恭華に舐められていることへの怒りや苛立ちを抱えながらも、激情を剥き出しにすることなく冷静に恭華を見つめる。

——確かに僕があんまり強くないのは認めるよ。だけど、恭弥兄から借りた匣兵器におんぶに抱っこスタイルでいけば……ま、何とかなるんじゃないかな？ 君程度、余裕余裕♪

いくら相手が匣兵器を持っているとはいえ、ミルファイオーレの精鋭であることを表す6弔花の1人であり、精製度Aランク以上ゆえにより純度の高い炎を活用できる雷のマーレリングを所持している俺が、ボンゴレ10代目の雲の守護者の妹ごときに負けるはずがない。

が、なぜか。俺の直感が、奴を警戒しろと声高に叫んでいる。命がけが常なマフィアの世界で長らく生き抜いてきた歴戦の勘が、決して慢心するなと警鐘を鳴らしている。

(この手の感覚には従うに限るな。それが賢い生き方だ)

そのため。ガンマは自分からは仕掛けず、恭華の出方を待つ。

恭華の一挙手一投足にしかと目を配り、平常心の維持に努める。

「さあ、始めようか」

恭華は右手の中指にリングを嵌めると、ボウツと雲の炎をリング上に生成した。

「なあッ!？」

ガンマは驚愕した。恭華が装備しているのは一見、己の持つマーレリングより遥かに精製度の低いリングだ。精々Cランクだろう。な

のに、雲の炎がバカでかいのだ。少なくとも雲の炎は恭華の体の2倍以上に膨れ上がっているのだ。

一体、どれほどの覚悟を胸に秘めていれば。これほど膨大な炎を生み出せるというのか。いや、そもそも精製度Cランクのリングが彼女の強大な波動エネルギーに耐えられるはずがない。リングが壊れ、使い物にならなくならなければおかしい。なぜ。なぜだ。

「簡単な話だよ。大きな炎を出してなおリングが壊れないのは、これが純度を極限にまで低めた脆い炎だからだよ。胸中に秘める覚悟をコントロールして炎の純度を低めれば、例えば粗製なリングで大きな炎を出した所でリングを壊さずに済むってわけ。で、このテクニクの何が良いって——」

ガンマの脳内で渦巻く疑問を読み取った恭華はニコニコと笑みを浮かべつつ解説する。

そして。ギユツと右拳を握る。瞬間、今までは薄かった紫の雲の炎が、一気に濃くなった。

「——低ランクのリングでも一瞬だけ、純度が高くて大きい炎を創出できる所なんだよね」

恭華は己の覚悟を調整し、リング上の雲の炎の純度を一気に高め、匣にリングの炎を注入する。

そして。恭華が匣をガンマへと向けると同時に恭華のリングはパリンと粉々に砕けた。

(精製度の低い指輪でも高密度の炎エネルギーを活用できるように我流のテクニクを編み出すとは……こんな奴は初めてだ)

恭華の匣の一面がパカッと開き、中から勢いよく何か飛び出してくる。

ガンマは恭華の匣兵器の正体を知るため、自身の雷狐2匹をぶつけることにした。

互いの匣兵器が激しく衝突し、拮抗したことで、ガンマは恭華の匣

兵器を視認できた。

「これは、アリか？ それにしては、大きいな」

「正解。恭弥兄は群れる習性を持つ動物とか大嫌いだから、僕に快く貸してくれるんだよね」

全長70センチほどだろうか。やけに大きく黒いアリが全身に雲の炎を纏いながら、電狐に力で押し勝とうと、衝突を続けている。これほどアリのサイズが大きいのは、恭華がとんでもない量の雲の炎を匣に注ぎ込んだからだろうか。

「お次はこれだよ」

見た所、雲アリの相手は電狐たち——コルルとピジエツト——に任せてよさそうだ。ガンマは己の判断の元、恭華と直接戦うべく、一息に距離を詰めようとする。一方、恭華は新たなリングを指に装備し、レディーススーツの内側に固定していた匣に雲の膨大な炎を注入する。刹那。パリンとのリングの破碎音の後。ドシューウと、恭華を起点に白色の煙幕が辺り一帯を白く染め上げた。

(煙を出す匣で目くらまし……正面から戦うのを避ける狙いか?)

この戦法を選ぶのなら、雲雀恭華は本人の申告通り、戦闘能力に長けていないのだろう。なら、この視界を妨げる煙を晴らすまで。ガンマは雷の炎を纏い、宙に浮遊するビリヤード球をキューで突く。ビリヤード球はガンマが思い描いた通りに他のビリヤード球とぶつかり合い、次々と地面に突き刺さる。そして。ビリヤード球の雷の炎を一気に放出して煙をかき消そうとした、その時。

「……」

「おっとッー」

ガンマの側面から白煙を切り裂くようにして恭華が飛び出し、装備していたトンファーで無言のままガンマに襲いかからんとしていることに気づいたガンマは間一髪、背後に飛び退く。すると、恭華はガ

ンマに追撃せずに煙の中に姿を消した。

(どうもこの煙を消されるのは都合が悪いらしいな)

煙なんて消された所で再び匣に炎を注入して新たな煙を放出すればいいだけ。普通ならそうだ。しかし、彼女は俺が煙を消すのを体を張って妨害してきた。戦闘能力が高くないはずなのに。

……彼女は匣兵器を用いる度にリングを使い捨てにする戦法を採用している。もしかしたらリングのストックが心もとないのかもしれない。そのようにガンマが推測を立てていると。今度はガンマの背後から恭華が攻撃を仕掛けてくる。

「残念だったな。煙で俺の視界を封じたつもりのようなのだが……煙の動きで居場所はわかるもんだぜ？」

だが。恭華の居場所をうねる煙の様子から察知していたガンマは恭華から離れるように前方に駆ける。そして、クルリと恭華へと振り返り、ガンマの動きに呼応して再び宙に浮かび始めたビリヤード球をキューで突く。結果、ビリヤード球は互いに弾き弾かれ、最終的に恭華を取り囲むように地面に着弾した。

「たつぷり味わいな。ショットプラズマ！」

「……」

ビリヤード球同士が共鳴して放つ鋭い雷の炎を回避できずに、感電した恭華は目を見開く。

が、恭華は悲鳴を上げない。うめき声一つ漏らさない。ただただ驚いたように瞠目し。

次の瞬間。恭華の体が、武器のトンファーが、粉々に砕け散った。文字通り、あたかも恭華の体に埋め込まれていた強力な爆弾が起爆したかのように、恭華の体が四散五裂したのだ。

「は……!?!」

ガンマのショットプラズマの影響ではんの少しだけ煙の密度が薄

まる中。

予想だにしていなかったグロテスクな光景にガンマは思わず言葉を失う。

が、今が戦闘中だと思い出し、我に返ったガンマは恭華がいた地点へ近づく。

すると。ガンマの足元に無数の小さな黒焦げの何かが散乱していた。

(これは、小魚?)

ガンマが内心でコテンと首を傾げた直後。ガンマの右腕に衝撃が走った。

視線を送ると、70センチサイズの雲アリがガンマの右腕を力強く咬んでいた。

「なにッ!？」

ガンマは右腕の雲アリを振り払い、雷の炎を込めたキューで突き刺そうとする。しかし、ガンマの行動を妨害するように別の雲アリがわらわらと立て続けに現れ、ガンマの左腕を、ふくらはぎを咬みついてくる。数の力を武器に、ガンマの体中を咬みつきつつ、足でガンマの体を拘束してくる雲アリたち。ガンマが空を自在に飛ぶ手段であるFシューズをも雲アリに咬み砕かれた以上、ガンマが雲アリを振り払えなくなり、身動きが取れなくなるのは自明の理だった。

(おかしい。何だこれは!?! なぜこんなにもアリがいる!?! 奴がコピーの匣兵器を大量に所持しているのか!?! くそッ、コルルとピジェットはどうなっている!?!)

混乱するガンマをよそに、恭華の放出した白煙が徐々に晴れていく。

その時、ガンマが見たモノは——全身の至る所を咬み千切られ、力尽きている電狐2匹と。ショットプラズマで焼いたはずなのに無傷でピンピンしている恭華の姿。



「うん。上手くいったね、よかったよかった」

「お前、何をした!？」

「手の内を明かすのは負けフラグだけど、まあいいか。雲アリは匣に注入した炎や他の匣兵器の炎を吸収することで、分裂するんだよ。君の匣兵器は雲アリとの衝突の中で炎エネルギーを献上し続けた末に、数の力に敗れたのさ。でもって、さつき君を襲った僕は霧シラスの群れで作った僕の偽者だよ。……いやあ、群れがいいよね。例えば1体が矮小な力しかなくても、束になれば強敵を欺き、圧倒できるんだから」

恭華は無残な姿に成り果てた霧シラスを匣の中に戻しつつ、簡潔に種を明かす。

「どうやら。彼女が煙を吐き出す匣を用いたのは、不意打ちでガンマを倒すためではなく。霧シラスの匣に霧の炎を注入し、己の偽者を作る様子を見せないため。そして、雲アリが増殖とともにコルルとピジエットを倒し、ガンマに攻撃を仕掛ける一切のシーンを見せないためだったようだ。」

(まさかここまで頭のキレる奴だったとは……)

慢心したつもりはなかった。だが、まだまだ警戒が足りなかった。それが今の結果だ。敵の守護者の身内ごときに敗北する情けない俺だ。

「くそッ……」

「さて。トドメといこうか」

恭華はスーツのポケットから取り出した新たなリングを嵌め、雲の炎を灯し、また別の匣を開匣する。現れたのは、灰褐色のカバ。全身に雲の炎をしかと纏っている。

「あれは!？」

と、その時。並盛神社の茂みから2人の人物が顔を覗かせる。

1人はゴーグルで両眼を隠した女。もう1人は栗色のツンツンとした髪が特徴的な少年。

「ちよつと遅かったかな、君たち。もう少し早く来ていたら、面白いモノを見られただろうに」

(……あのガキは、まさかな)

雲カバがガンマに向けてドドドドと突進を始め。恭華が突如現れた2名に対してニヘラと笑いかける中。少年からボンゴレ10代目の面影を感じ取ったガンマは己の直感をつい否定する。何せ、ボンゴレ10代目は確かに衆目の下で射殺されたはずなのだから。

「ガハッ！」

その後、ガンマは己に纏わりつく雲アリごと雲カバの突進を喰らい、遙か彼方へと吹っ飛ばされる。ただでさえカバは2〜3トンもの巨体を持ち、時速40キロの突進を繰り返すことができる動物だ。それに加え、この雲カバは雲の炎の属性：増殖で肉体が補強され、膨れ上がっているはずとなると、その威力は推して計るべきだろう。

ガンマが雲カバの突進をまともに受けて耐えられるはずもなく、ガンマは勢いよく吹っ飛ばされたまま意識を失う。かくして。ガンマは恭華に一撃も与えられずに完全敗北を喫するのだった。

### 風紀33. †人を焚きつけて風紀を守ろう†

入江正一くんの暗躍により10年後の未来に強制的に放り込まれる形で姿を消したりボーン、ツナくん、獄寺くんの後を追うように。山本くん、ランボ、イーピン、京子ちゃん、ハルもまた姿を消した。その翌日。

僕は風紀副委員長の草壁さんを経由して風紀委員に失踪した並盛中の生徒たちの搜索を命じた後、自分自身も並盛町のパトロールを兼ねて、男装の上で行方不明の生徒たちを捜している。見つからないのは百も承知。しかし、並盛中の風紀を守ることを重視する雲雀恭弥が、並中生徒の原因不明の連続失踪に何も動きを見せないのは明らかに不自然ゆえの行動だ。何せ、この連続失踪は黒曜中みたく、他校の生徒の犯行だとの推測だってできるのだから。

「雲雀いいいいいいいい！」

未来での幻騎士との戦いを見据えた脳内シミュレーションを行いたい願望もあるため、ほどほどで搜索を切り上げよう。そのように思考を巡らせていると、僕の背後から切羽詰まった声が轟いた。こうも熱意を込めて僕の名前を呼びそうな人。心当たりは1つしかない。

「いつになく暑苦しいね、笹川了平。一体、何の用だい？」

僕は後ろを振り向きつつ、簡潔に尋ねる。

ギザギザとした銀髪に鼻の上の白い絆創膏が特徴的な了平くんに問いかける。

「京子がどこにいるか知らないか!? 今、極限に搜索中なんだ！」

「京子? ああ、笹川京子か。風紀委員でも彼女を捜しているけど、足取りは掴めていないよ」

「なにッ!？」

「笹川京子だけじゃない。沢田綱吉、獄寺隼人、山本武……皆、行方不

明になってるね。僕の部下に町中を探させているけど、まるで見つかっていない」

「……なん、だと!？」

僕が素直に了平くんに現状を伝えると、了平くんは呆然とした表情で固まった。どうやら了平くんは僕ならば何か手掛かりを掴めているものと思ひ込んでいた分、ショックが大きいようだ。

それにしても、意外だ。原作では了平くんは未来へ送られるまでに日本を5周してまで京子ちゃんたちを全力で捜し回っていた。なのに、まだ了平くんが並盛町を離れていなかったとはね。

……待った。これ、ちよつとマズいんじゃないか？ このままだと了平くんは並盛町での捜索にとどまるかもしれない。それじゃあダメだ。未来編で了平くんはそんなに活躍しなかったけど、日本を何周もして体を鍛えまくっていないことが後々の了平くんの死に繋がるかもしれない。僕が了平くんを日本5周に焚きつけた方が良さそう  
だ。

「これだけ捜して手掛かり一つ発見できないとなると、彼女たちももう並盛町にはいないのかもしれないね。僕は引き続き並盛町で捜索するから、君は他の町で捜したらどうだい？ お得意のロードワークも兼ねてさ」

「おおおおお！ ナイスアイデアだ、雲雀！ そうだ、なぜ俺は並盛の外を捜そうと思わなかったんだ!？」 待ってる、京子！ うおおお——」

「——待ちなよ」

僕の提案を速攻で受け入れ、今すぐにも実行しようとした了平くんを引き留めるため、僕は了平くんの左手首にグググツと力を込めて彼の動きを止める。

了平くんが原作と同様に素直に日本5周をするならいい。だが、ここで僕が追加で誘導しなければ、泳いででも海外に向かつて捜索範囲を広げる可能性がある。さすがに中学生の正一くんが、海外に行ってしまった了平くんに10年バズーカを当てるのは至難の業だろう。

そのため、了平くんを日本に留める方便を伝えないといけないのだ。

「いだだだだ!? いきなり何をする!」

「1つ言い忘れたことがあってね。並盛中の風紀委員長は、並中生が今、日本にいるか海外にいるかを察知できる優秀なセンサーを持っている」

「?」

「つまり、笹川京子たちは海外にはいない。日本のどこかにいるということだ」

「そうか! ならば日本中をしっかりと捜し尽くせばいいのだな! 助かったぞ、雲雀! 京子おおおおおおお! 沢田あああああああああ!」

僕の拙い嘘を了平くんは欠片も疑わずに信じ、行方不明者の名前を叫びながらダッシュでその場を去る。これから了平くんは日本5周を経て筋肉をより一層ムキムキに改造するのだろう。

「……」

あれだけ努力を重ねる了平くんが未来のマフィアの世界ではあんまり活躍できない。

もしもリボンが筋肉重視の格闘漫画なら縦横無尽の大活躍待ったなしの努力家なのになあ。

どんどん小さくなる了平くんの背中を見つめつつ、僕は世の中の理不尽さを実感するのだった。

◇◇◇

10年バズーカに命中したりリボンが失踪した件について、10年後ランボから情報を得ようとランボの10年バズーカを強引に使おうとした際にうっかり自分も着弾したことを契機に、10年後の世界に飛ばされた沢田綱吉に待っていたのは絶望的な未来だった。

10年間で知り合った面々はミルフィオーレファミリーが実行中

のボンゴレ狩りの対象とされ、次々と消されている。山本のお父さんも殺されたし、運悪くイタリア旅行に向かった両親の安否もわからない。そして、10年後のツナ自身が棺桶に入っていたという事実がツナの心を確かに傷つけていた。

ラル・ミルチや10年後の山本のおかげで半日でボンゴレアジトに辿り着き、緊張を解けるようになった時、ツナは無性に現実逃避したかった。性質の悪い悪夢を見ているだけだと己に言い聞かせたかった。だが、ツナが目を背ければ、その分被害者が増え、状況は悪化する。そのため、翌日からツナはいつぱいいつぱいながらも己のできることを始めた。

だが、事は順風満帆とはならなかった。

10年後の山本とともに10年後の京子ちゃん、ハル、ランボ、イーピンを迎えに行くも、その5人が立て続けに10年前の見慣れた姿と入れ替わってしまう。

そのまた翌日には、お兄さんのことを心配した京子ちゃんがアジトから抜け出してしまう。

もちろん、京子ちゃんもボンゴレ狩りの対象だ。

ミルファイオーレに見つかれば、すぐさま殺されてしまう。

守護者を集めて入江正一という人を倒すなんて言っている場合じゃない。

でも、この大変な状況下で、10年後の雲雀さんがいれば、どれだけ心強いかな。

上記の心境の元、ツナは京子ちゃんを捜す『ツナ&ラル・ミルチ班』と、雲雀さんの手掛かりを探しに並盛神社に向かう『獄寺くん&山本班』に分けて同時に動くことに決めた。

ツナはとにかく必死だった。並盛町を徘徊するミルファイオーレの第3アフェランドラ隊の監視の目をかいくぐり、どうにか10年後の黒川花に保護されていた京子ちゃんを見つけた後。ガンマと交戦していると思われる獄寺くんと山本の元へ急ぐツナは焦りに満ちていた。

ツナの脳裏に、激強らしいガンマを前に、血だまりに倒れる獄寺く

んと山本の姿が浮かんでならない。嫌な予感を否定したくても、己には超直感がある以上、十分にあり得る展開だった。

とにかく。急いで2人と合流しないと。はやる気持ちを胸に草木をかき分けて並盛神社に到着したツナが見た光景は――

「ちよつと遅かったかな、君たち。もう少し早く来ていたら、面白いモノを見られただろうに」

「ガハッ！」

あつけらかんとした口調でツナたちを迎える10年後の恭華と、恭華が出したであろうカバの匣兵器でガンマを遙か彼方へと吹っ飛ばすシーンだった。

「あ、あれって！」

「やつほー、沢田くん。話には聞いてたけど、ホントに小さくなってるね」

「恭華！……さん？」

恭華とさほど雰囲気の変わっていない10年後の恭華の様子にツナは一度は普段の調子で彼女の名を呼び、その後、おずおずと『さん』を追加する。改めて恭華の全身を視界に収めたツナは、すっかり大人の女性らしく成長した恭華をいつものように呼ぶことに違和感を抱いたのだ。

「別に恭華でいいよ。今さら君に『さん』付けされてもむず痒いだけだし」

「そ、そうかな」

「それより。ほら、あっちの林の中に獄寺くんと山本くんが倒れてるよ。もっと早く助けられたらよかったんだけどね」

「え」

恭華に指差されるままに、ツナが視線を向けると。そこには獄寺くんと山本が血まみれで倒れていた。2人とも、遠目からわかるほどの酷い重傷だ。

「獄寺くん！ 山本！」

ツナは青ざめる。慌てて駆け寄り、名前を呼びかけても、2人はピクリとも動かない。

まさか、最悪の予想が脳裏によぎる。まさか、いや、そんなわけない、でも――。

「心配ないよ。そうだよね、草壁さん？」

「はい。外傷こそ派手ですが、命に別状はありません。すぐにアジトに運んで治療すれば、問題ないでしょう」

「そ、そっか。良かった……」

ツナは2人の傍らにへなへなと座り込み、安堵の息を零す。

そして。一刻も早く2人をアジトに連れ帰らないととの使命感が湧き上がる。

「草壁さん。沢田くんたちへの説明、お願いしていい？」

「はい。お任せください」

「ありがとう。それじゃ、僕は今からちよつと準備してくるよ」

恭華は指にリングを嵌めると、テクテクと並盛神社の石灯籠へと歩を進め。

そのまま、石灯籠の中に吸い込まれるようにして恭華の姿が掻き消えた。

「き、消えた!?」

「隠し扉!? 霧系のリングを使ったカモフラージュか……」

ツナが想定外な恭華の消え方に驚き、ラル・ミルチが即座に恭華の行ったことに推測をつける中。ツナは10年後の草壁哲矢から説明を受ける。並盛神社には我々の地下組織のハッチがあり、ボンゴレアジトとも繋がっているため、獄寺隼人と山本武を速やかにアジトの治療室に運び込める。だが、並盛神社で2人が使用した嵐と雨のボンゴレリングにマモンチェーンをつけると、精製度Aのリング2つの反応



が並盛神社でそろって消失したとの情報をミルフィオーレに与えてしまい、そこからボンゴレアジトの場所がバレる危険性があると。

結局。嵐と雨のボンゴレリングの件はラル・ミルチが、10年後の黒川花の家で待機している京子を迎えに行くついでに並盛神社から離れた地点でマモンチェーンをつけ、ツナと草壁の2人で獄寺と山本をアジトの医療室へと運び込むこととなった。

その後。ラル・ミルチと京子がアジトに帰還し、医療室で獄寺と山本に治療が施された後。ミルフィオーレの情報収集に取り組んでいた10年後のビアンキとフウ太もアジトへ帰還。応接室でビアンキ、フウ太、草壁から様々な情報を得ることとなった。

ツナが現状目的としている入江正一はミルフィオーレ日本支部に滞在しており、日本支部は並盛駅地下のショッピングモールにあること。雲雀恭弥が並盛中学風紀委員を母体とした秘密地下財団：風紀財団の委員長に君臨し、匣の研究や調査のために世界を飛び回っていること。雲雀恭華が風紀財団の副委員長として、各地の風紀財団の運営を担当していること。雲雀恭弥が雲雀恭華と入れ替わりで10日後にアジトへ来る予定とのこと、などなど。数多くの情報とツナは対面した。

そして。応接室を訪れた京子、ハル、ランボ、イーピンが10年後のビアンキとフウ太との邂逅を楽しんでいると。応接室にさらなる来訪者が現れた。恭華だ。

「話は終わったかな?」

「はひ!? え、え!?! もしかして——10年後の恭華ちゃん!?!」

「正解!・ それなりに見た目変わったつもりんだけど、即座に見破るとはさすがはハル」

「えへへえ」

「えっと、恭華ちゃん? 恭華、さん?」

「呼び方は今まで通りでお願い、京子ちゃん。いきなり京子ちゃんにさん付けされたり他人行儀に話されると何か距離取られたみたいで悲しくなるから」

「は、はい。じゃなくて、うん。わかった、恭華ちゃん」

ハルが恭華へと駆け寄り、半ば確信をもつて恭華の名を呼びかける。対する恭華はニコニコ笑顔でハルの頭を撫で、ハルは素直に照れ顔を浮かべる。一方。京子がツナと同様に恭華の呼び方に迷っていると、恭華が先手を打って『恭華ちゃん』呼びを要請する。京子は大らかな女性と化した恭華に今まで通りの話し方を維持することへの違和感を抱きつつも、恭華の頼みを了承した。

「さて。いきなり物騒な未来に飛ばされて不安もいっぱいだろうけど、ま、そんな時は遠慮なく僕たち大人組に頼ってよ。僕もしばらくここにいるからさ、君たちより10年先輩で大人な僕の女性的包容力で君たちに安心と希望をプレゼントしちゃうから」

「恭華……」

「ということ。早速だけど、僕についてきてよ。良い物、見せるから。目的地は地下12階の視聴覚室だよ」

恭華は10年前の過去からやってきたツナたちを見渡しながら心強い言葉を放つ。そんな恭華をツナが頼もしく感じていると、恭華はおもむろに応接室の入り口まで移動し、皆の同行を促す。この時の恭華の得意げな表情がツナには非常に印象的に感じられた。

### 風紀34. †希望を見せて風紀を守ろう†

僕の巧み(?)な話術により、了平くんを日本5周ルートへと誘導した、その30分後。

僕は相変わらず、この時代の並盛町にいるはずのない、行方不明のツナくんたちの捜索を行う体で、並盛町を巡回している。そして、並盛駅前広場に差し掛かった時。僕の背後から非常に聞きなれた声が届いた。

「よお、恭弥！ 久しぶりだな、元気にしてるか？」

僕が背後を振り向くと、デイーノさんが爽やかな表情で手を振ってくる。おお！ デイーノさん！ デイーノさんじゃないか！ ボンゴレファミリーの同盟ファミリーの1つ、キャバツローネファミリーの10代目ボスにして、原作の中で一番、イタリアー日本間を往復していると言われている暇人のデイーノさん！ 部下が近くに付き従ってないと極度の運動音痴を発症して、食事中にご飯をボロボロ零しまくるデイーノさんじゃないか！ 当然のようにデイーノさんの背後に控えている菩薩のロマーリオさんも元氣そうですね。

(しっかし、会えて嬉しいは嬉しいけど……久しぶり、かな？ 前にデイーノさんと会ったのはほんの3日前だし、全然久しぶり感ないなあ)

「いつにも増して締まらない顔してるね、跳ね馬」

「そうか？ キリツとした、凛々しさ全開の顔つきのつもりなんだがなあ。じゃあ、俺はどうしたら恭弥みたいなクールな表情を浮かべられると思う？ 教えてくれよ」

「知らないよ、そんなの」

内心ではデイーノさんとのエンカウントを喜びつつも表では雲雀恭弥ロールゆえに、僕はさらっとデイーノさんに険のある言葉を投げかけるが、あのデイーノさんは僕の発言を軽く流し、次の話題の一部

に組み込んでいく。こういう寛容な所が調和の大空の炎をリングに灯せるボスの器って感じだよねえ。

「で、何の用だい、跳ね馬？ まさか何もないのに僕に話しかけたわけじゃないよね？」

「もしそうだったらどうする？」

「――咬み殺す」

「わ、待て待て！ 冗談だって！ だから速攻で俺の顔を殴ろうとすんなって！」

僕が本題を催促すると、対するディーノさんが話すのを渋ってきいた。ニコニコ笑顔で本題を先延ばしにしようとしている様子から僕を軽くからかっているものと理解した僕は、雲雀恭弥らしく、戦意を一言に凝縮して放ちつつ、懐のトンファーを速やかに装備してディーノさんの顔を穿とうとする。が、しかし。ロマーリオさんの加護を受けて身体能力が跳ね上がっているディーノさんは間一髪、その場にしゃがんで僕のトンファーを回避しつつ、慌てて僕の凶行の阻止に走った。

「チツ」

「つたく、恭弥には冗談通じねえなあ。ま、そこがかわいくもあるんだけど」

僕が舌打ちとともにトンファーを仕舞う一方、ディーノさんはホツと胸を撫で下ろしつつその場に立ち上がる。僕を見据えるディーノさんは、さつきまでとは打って変わって、しっかりと引き締まった顔つきをしている。

「聞いたぜ、恭弥。ここ数日でツナたちが並盛から一斉にいなくなつたんだってな。……今、キャバッローネファミリーが総力を上げて皆の行方を探してる。本気を出したキャバッローネの搜索網から逃れられる奴なんていない。すぐに皆を見つけてやるから、安心しろ」

「別に心配してない。むしろ、うるさい連中がいなくなつたおかげで

僕の生活は快適だよ。……彼らが一気に行方不明になったことによる、並盛町の風紀の乱れは心配だけど」

「そっかそっか。恭弥は素直じゃねえなあ」

「……で、それを僕に言うためだけにわざわざ日本へ来たのかい？」

マフィアのボスを名乗る割には随分と時間を持て余しているみたいだね」

「ツナたちがいない分、暇なのは確かだが……話はまだあるぜ。というか、今からが本題だ」

「ふうん？」

僕はディーノさんの含みのある物言いに興味を示す。当然だ。なぜなら、今からディーノさんが話す内容はおそらく、10年後の戦闘に欠かせない、リングの炎についてだからだ。原作では、雲雀さんがディーノさんからリングの炎について教えてもらった具体的なタイミングは言及されてなかったが、ディーノさんの得意げな表情からして、ここで僕にリングの炎の情報をプレゼントしてくれるつもりなのだろう。

「この前のボンゴレリング争奪戦の大空戦で、ヴァリアーのマーモンがボンゴレリングに炎を灯した件、あつただろ？」

「寝てたから知らない」

「あ、そういえばそうだったな。あつたんだよ、そんな非現実的な出来事が。で、色々調べたんだが、どうやらマフィアのリングには人知を超えた力が宿ってるみたいだな。その力の1つの形として、リングに死ぬ気の炎を灯せることがわかったんだ」

「へえ。どうすればリングに死ぬ気の炎とやらを灯せるの？」

「リングを装備した奴の覚悟だな。他にも信念や、こだわり……：そういった、これだけは譲れないっていう強固な意思が必要って見解が今んとこ有力だな」

「覚悟？……ムカツキじゃないの？」

「ムカツキ？ 何だそれ？ まあ必要なのは強い意思だから、人によつてはムカツキでリングに炎を灯せるだろうが、恭弥は普通に覚悟

で炎を灯せるはずだぜ。例えば、そうだな。並盛の風紀を守り抜く覚悟、とかでさ」

デイーノさんがリングの炎について簡潔に説明し、僕のピントのズレた問いにもきちんとは応答する中。僕は内心で首を傾げていた。

（あれ？ デイーノさんがリングの炎を大きくするのはムカツキだつてアドバイスしてこないけど、どゆこと？ 僕が憑依した影響で、ムカツキじゃなくて普通に覚悟を抱かないとリングに炎を灯せなくなつてたりするのかな？）

「ま、百聞は一見に如かずだよな。ちよつと見てくれ」

頭の中に疑問符を浮かべる僕の様子に特に気づくことなく、デイーノさんはポケットから取り出したリングを右手の中指に通し、ギョツと拳を握る。すると。ボウツと、リングから炎が灯された。橙色の、透き通った炎が灯された。デイーノさんの、ボスとして、兄貴分として、部下やツナくんたちを守るといふ覚悟が炎に反映されているのだろう。

「で、これが何の役に立つの？」

「……さあ？」

「ふざけてるの？」

「いやいや、真剣だつて！ 使い道はまだわかってないんだ。その辺は調査中だから、今はただこうしてリングに炎を灯せるだけ、なんだが。……これは俺の直感だが、このリングの炎は未来の戦いに革命を起こす。そんな気がしてな。だから、今の内に恭弥にリングの炎のことを知っておいてほしかったんだ」

「……そう」

僕がリングの炎の活用法を尋ねると、デイーノさんはコミカルに首を傾げる。僕がさも不機嫌ですと言わんばかりにデイーノさんを睨みつけると、デイーノさんは慌てて弁明する。そして、デイーノさんはわざわざ僕に直接リングの炎の情報を伝えた胸の内を明かした。

「用事はそれだけだ。じゃあな、今度暇な時にまた模擬戦でもしようぜ！」

伝えたいことを全て伝えたディーノさんは軽快に手を振りながら、颯爽と並盛駅前広場から去っていく。ディーノさんから『ムカツキ』とのキーワードが出なかつたのは意外だけど、これで僕が雲のボンゴレリングに炎を灯す練習をできるようになったわけだし、早速今夜から練習しよつと。あああ、早く生の雲ハリネズミ（ロー）に会いたいなあ。



ボンゴレアジトにて。10年後の雲雀恭華の提案により、ツナたちは地下12階の視聴覚室へと向かつていた。今、エレベーターに乗って地下12階へと降下しているのは、ツナ、リボン、京子、ハル、ランボ、イーピン、恭華の7人。恭華が10年前の世界からやってきたツナたち6人に見せたいと希望したがゆえのメンバーだ。

「はひ、地下12階には行ったことないです」

「な、何か緊張してきたね。ハルちゃん」

「ま、普通に生活する分には、地下5〜7階の行き来で済むっほいしねえ」

ハルと京子が、エレベーターの表示がB8、B9、B10と切り替わる様を緊張の面持ちでじいっと見つめる中。恭華は両手を頭の後ろに組んだゆるゆるな態度で、京子とハルの反応を微笑ましそうに見守る。

「ガハハハ！ ランボさん、1番乗りだもんね！」

「ランボ！ ——！」

（訳：ランボ！ 走るの危ない！）

「視聴覚室は右に曲がってまっすぐ進んだ突き当たりにあるからね」

「右！ 右！ シュツシュツポッポー！」

エレベーターが地下12階に到着し、扉が自動で開かれるや否や、

ランボが元気よくエレベーターの密室から飛び出し、慌ててイーピンがランボの後を追う。ランボの勝手な行動を戒めるため、ランボが転んで怪我をするのを阻止するため、イーピンは中国語でランボに注意喚起をするも、ランボは聞く耳を持っていなさそうだ。が、恭華の呼びかけを受けて、ランボは汽車になりきって遊びつつも、恭華の案内通りに右へと方向転換した。

その後、先行したランボとイーピンの後を辿る形で恭華、ツナ、リボン、京子、ハルが視聴覚室へと到着する。落ち着いた青色のカーペット。部屋の中央には白の広々としたテーブル。部屋の四隅には数多くのパソコンが設置された机と椅子の群。部屋の奥には大きなスクリーン。視聴覚室を構成する1つ1つに、ツナ、京子、ハルの中学生組は何とも圧倒された。何だか自分たちが場違いなのではないかとの感覚を抱いた。

「皆、真ん中のテーブルの所に座ってよ。座る場所はどこでもいいから」

そんなツナたちの感情に気づいているのか否か、恭華は皆を部屋の中央の大きい白テーブルに誘導しつつ、白テーブルの一角にポツンと置かれていたノートパソコンを立ち上げ、操作を始める。同時に付近のプロジェクトターの電源を入れ、スクリーンに物を映し出せる状態にスタンバイする。

「恭華」

「わかってるよ、リボン。あんまり皆に未来のことを教えるな、って言いたいでしょ？ でも、これぐらいは許してほしいな。でない」と、心が耐えきれなくなる子が出てくるかもだし」

「……ほどほどにしとけよ」

「りょーかい」

ここで。恭華の意図を完全に察知したりボンが恭華に呼びかけるも、リボンの言いたいことに察しがついていた恭華はニコリと笑みを浮かべて、リボンの妥協を引き出そうとする。ツナたちに将来



の自分の情報を教えすぎると将来のことを考えなくなる、その懸念を恭華が認識しているなら忠告をしなくてもよさそうだ。そう判断したりボーンは、恭華の行動に口を挟まずに、恭華の意図の行く末を見届けることとした。

「よし、準備完了」

「あれ、恭華？ 目、悪いの？」

「いや全然。これは伊達メガネ。雰囲気出るでしょ？」

「まあ、確かに？」

「それじゃ、始めるよ」

ノートパソコンでの準備を終えた恭華が赤縁のメガネをかけたことにツナが問いかけると、恭華は得意げにメガネのブリッジを人差し指で押し上げる。確かにレディーススーツを着て、メガネをかけた恭華はいつもより知的に見える。だけど、そのことに一体何の意味があるのか。ツナが内心で疑問を浮かべるのをよそに、恭華はノートパソコンのキーボードをタッチする。すると、スクリーンに『ここ1年の思い出スライドショー』との大文字が表示された。

「わっ！ な、何これ？」

「パワポだよ。このタイトル通り、今から皆には、10年後の皆の生活の一部を見ようよ」

恭華の宣言と同時にパワーポイントが次のスライドへと切り替わる。そこには花見の写真が映し出されていた。満面の桜が周囲一帯に咲き誇る中。ブルーシートを敷いた上に10年後の皆が座って、思い思いに花見の一時を楽しんでいる。ツナ、獄寺、山本、了平、恭華、クローム、ランボ、イーピン、京子、ハル、奈々、ビアンキ、フウ太、デイーノなどなど。ツナたちの知ってる面々から面識のない人たちまでが集い、ハチャメチャに花見を楽しんでいる。

「ねえねえ、これ未来の写真なんだよね？ ランボさんはどこ？ ランボさんが全然映ってないよっ！」

「未来のランボくんはこの頭に角をつけた、背の高いこの子だよ。未来のイーピンちゃんはこの三つ編みの子だよ」

「えー、こいつダサイ！　こんなんじゃないで、ランボさんはもつとカッコいい大人になるもんねー」

「はひ!?　い、今まで何度か会ったあのエロい人が未来のランボちゃんだったんですか!?　……あまりに衝撃の事実すぎて思考が追いつかないです」

「京子——、ハル——、——!」

(訳：京子さん、ハルさん、凄くきれい!)

「ありがとう、イーピンちゃん。イーピンちゃんも凄くかわいくなってるよ」

ランボが10年後の写真から己の姿を探していると、恭華が10年後のランボとイーピンを指で指し示す。すると、ランボは10年後の己がカッコ悪いと切り捨て、10年後のランボと面識のあるハルは、良い意味でも悪い意味でも自由気ままに純粋無垢なランボが10年の月日を経て、己の嫌うエロい男性に育ったことにショックを覚える。ハルの頭が真っ白に染まる中、イーピンは京子とハルの10年後の姿に感嘆を覚え、京子もまたイーピンが10年の時を超えて美人に育っているとの感想をしかとイーピンに伝える。

「これが、10年後の俺……」

京子たちの反応を受けて、ツナもまた、まじまじと写真の中の自分を凝視する。背も幾分か高くなり。写真越しからもわかる。全てを受け入れ、包み込むかのようなオーラを放つ。そんな泰然自若とした10年後の己の姿をしっかりと脳裏に焼きつける。

(ダメツナの俺でも、10年後はこんなにカッコよくなれるんだ……)  
「じゃ、次の写真に移るよ」

ツナが内心で感動している中、恭華はパウポのスライドを切り替え、別の写真をスクリーンに表示させる。そうして、恭華は色々な写真を見せてきた。夏祭り。海水浴。バーベキュー。初詣。雪合戦。

遊覧船。リゾート観光。紅葉狩り。ピクニック。様々なイベントを全力で謳歌する、10年後のツナたちの様子を切り取った写真を、恭華は1枚1枚、丁寧にツナたちに紹介していく。

ツナは10年後の写真を食い入るように見つめていた。10年後になっても。皆、楽しそうだ。京子ちゃんも、ハルも。ランボも。イーピンも。ビアンキも。フウ太も。獄寺くんも。山本も。お兄さんも。クロームも。ディーノさんも。リボンも。皆、皆。笑顔だ。楽しそうだ。……写真には見覚えのない人もたくさんいる。きつとこれから10年間の間に新たにできた友達なんだ。ダメツナでも、あんなに一杯、友達を作れるんだ。

いつの間にか、ツナはきらきらとした眼差しで1枚1枚の写真を見つめていた。

未来の自分が、充実した生活を全力で楽しみ尽くしている様を、ツナは両眼に焼きつけていく。

「子供から大人になって、大体が社会人になったから、10年前みたく、そう簡単には皆で集まれなくなっただけ。それでも都合のついた日は集合して、昔の思い出を語り合ったり、新たに思い出を作ったり。充実した日々を過ごしていたわけさ、未来の僕たちはね」

スクリーンに次々と10年後の世界で充実した人生を歩むツナたちの写真を写しながら、恭華は言葉を紡ぐ。一言一言に万感の思いを込めて、言葉を綴る。

「今は異常事態に巻き込まれてるから、未来の残酷さばかりが目につくけど……今が異常なだけで、本当は、君たちの未来はこんなにも輝いているんだよ。本来の君たちの未来はこんなにも明るいんだよ」

恭華の発言が、ツナの、京子の、ハルの心に沁み込んでいく。10年後の物騒な未来と向き合わずにはいられなくなって、知らず知らずのうちにすり減っていた年相応の心に、恭華の慈愛に満ちた発言が、中学生たちの心に段々と浸透していく。

「だから今、皆で踏ん張ろう。大変だけど、乗り越えられない試練はないって気持ちでさ。大丈夫、僕も協力するから。今はないけど、恭弥兄だつて力になるから。止まない雨はないし、明けない夜はない。明るい未来を信じて、がむしゃらに頑張ってみようよ。ね？」

「……そう、ですね。恭華ちゃんの言う通りです。ハル、頑張ります！頑張つて、平和で楽しい、ハルたちの未来を、きつと取り戻してみせます！」

「私も。未来は危険じゃないんだつて。希望でいっぱいなんだつて。そう、信じたいから」

「お、俺も。頑張るよ。絶対に、あの楽しかった時間を、未来を。取り戻してみせる！」

恭華の呼びかけに感化したハルと京子はそれぞれ、ギュツと拳を握つて、己の心の内をはつきりと吐露する。そんな京子とハルにつられて、ツナもまた己の内に秘めておくつもりだった決意を声高らかに表明した。その後。ツナはふと思いついたように恭華に尋ねる。

「あ、そうだ。あのさ、恭華。今、スクリーンに映してくれた写真、貸してくれないかな？ 治療中で、ベッドから動けない獄寺くんと山本にも見せたいんだ」

「そう言うと思つて、今回見せた写真を収めたアルバムを作成済みなのだよ。はい、プレゼント」

「あ、ありがとう！」

10年後の写真の鑑賞を通して、自身の胸の内に渦巻く高揚を獄寺と山本とも共有したい一心でツナがお願いすると、恭華は待つてましたと言わんばかりに、どこから取り出したのか、分厚いアルバムを懐から取り出し、ツナに配布した。

「僕、気合いのままにアルバムいっぱい作っちゃったからさ。ハルと京子ちゃんももらつてよ」

「はひ!? いいんですか!?!」

「本当にいいの？ 恭華ちゃん？」

「もちろん」

「ありがとうございます！ 恭華ちゃん！」

その後、恭華は気さくな笑みを浮かべながら、京子とハルにもツナに渡した物と同じアルバムを手渡す。対する京子とハルは、感極まつた末に、恭華に頭を下げた。

かくして。未来の絶望的な部分しか知らないツナたちに、明るい未来も存在していることを伝える恭華の目論見は成功に終わった。結果、ツナは修行に、京子とハルはツナたちのサポートに、より一層真剣に、心を込めて、取り組むようになったのだった。

### 風紀35. †先は長くても風紀を守ろう†

ディーノさんから死ぬ気の炎とリングの話聞いてから、10日後。

自室にて。僕は今、正座をしている。キュツと目を瞑り、精神を集中させている。

脳裏には、雲雀さんの体に憑依してから、知り合った面々の顔を次々と浮かべる。

原作で既に大体の性格を知っている知り合いから、原作ではモブか、そもそも登場してなかったが、こうしてリボーンの世界に僕が入り込んだことで初めて知り合った面々の姿を思い浮かべる。

そして、僕が力を持つ者として。彼らを。彼らとの日々を守りたい。そう、強く念じる。

雲雀さんを取り巻く、並盛町を舞台とした、波瀾万丈とした時間を守りたい。守り抜きたい。

強く、強く、念じる。心の中で想いをどんどん増幅させていく。

「……」

頃合いを見計らい、僕は徐々に目を開け、右手を持ち上げる。僕の右手の中指に装着した雲のボンゴレリングからは紫の、透き通った綺麗な雲の炎がボウツと揺らめいていた。

「ふう」

(んー、今日もダメか。全然上手くいかないなあ……)

僕は無意識にため息を零す。無理もない。これほどまでに精神を研ぎ澄ませているのに。強い信念を、並々ならぬ覚悟を実装しているつもりなのに。それでも。原作の雲雀さんみたく、己の体の軽く2倍以上のサイズの膨大な雲の炎を、一向にボンゴレリングから生み出せないからだ。

(やっぱり原作のようにムカツキでボンゴレリングに死ぬ気の炎を灯さない、雲雀さんボデイはあれだけ大きな死ぬ気の炎を生み出せないのかなあ？ でも、僕がムカついたことなんて全然ないし……) そう。デイーノさんからリングに死ぬ気の炎を灯せるとの話聞いた当初、僕はデイーノさんのアドバイスを無視してムカツキで死ぬ気の炎を灯そうとした。しかし、僕の目論見は失敗した。原作雲雀さんと違い、僕が日常生活を送る中でムカつく機会がまるでないからだ。

原作雲雀さんなら、群れること、草食動物に助けられること、快適な眠りを妨げられることなどで心底ムカつくのだろうが、僕はその程度では全然ムカつかない。加えて、原作の出来事や、主要人物のキャラを知っているがゆえに、ツナくんたちを取り巻くハチャメチャな流れに巻き込まれても、僕は全然ムカムカしない。僕がどんなことにムカつくのか、僕のムカツキポイントはどこなのか。その答えがわからないために、ムカツキで死ぬ気の炎を灯せないのだ。

となると、僕は普通の覚悟でボンゴレリングから膨大な雲の炎を放出させないといけない。でないと、僕は未来編前半のラスボスポジションの幻騎士を真正面から撃退しないといけない。幸い、僕には<sup>イマジネブレイカー</sup>幻想殺し<sup>†</sup>があるから幻騎士の幻術は通じないけど、両手足に剣を装備する幻騎士の奥義・四剣との真つ向勝負とか勝ち目がなさすぎるし、もし万が一、幻騎士の四剣を攻略できたとしても、その先に待つのは大戦装備により大幅にパワーアップした幻騎士第二形態に、ヘルリングに己の精神を喰わせてさらに強大な力を得た幻騎士第三形態だ。雲雀さんの眼光がユニちゃんに似てるとか、んなことあり得ないだろうから、幻騎士が本来の実力を出し切れなくなるなんて展開は望めない。僕がフルボッコだドン！な目に遭うルートは避けられないだろう。だからこそ。どうかして、膨大なサイズの死ぬ気の炎を生み出す手段を見出さなければならぬのだけだ――。

まあ、簡単にはいかないよね。そりゃそうだよ。だって、ボンゴレ10代目の右腕としてツナくんの役に立ちたいとの獄寺くんの意思でも、皆を守りたいとのツナくんの意思でも、創出された死ぬ気の

炎のサイズは普通だったんだ。そう簡単に、膨大な炎は灯せない。並大抵の覚悟では、雲雀さんのようにバカでかい死ぬ気の炎を生み出せないのだ。うん、先は長そうだ。

というわけで、今日も膨大な死ぬ気の炎を召喚できなかった僕は気分転換と行方不明者をちゃんと探しているというアリバイ作りを兼ねて、男装の上で並盛町を巡回している。不幸にも僕とエンカウントしてしまったひったくり犯や暴走族をトンファーで軽くボコりつつ、並盛町の見回りを続けていると、公園のブランコに寂しげに座る少年：フウ太の姿が目に入った。

「あ、お兄さん」

「……貸すよ」

「いいの!? ありがとうー!」

フウ太もまた僕の存在に気づき、パタパタと近寄ってくる。そういえば、フウ太と再会した時、ヒバードとフウ太とを遊ばせる約束をしていたことを思い出し、僕の頭の上を安住の地としていたヒバードを右手の甲に乗せてフウ太に差し出すと、フウ太はさっきまでの寂しそうな雰囲気はどこへやら、パアアと晴れやかな表情を浮かべて僕に感謝した。

僕の手の甲からフウ太の手のひらへと飛び乗ったヒバードを、最初こそフウ太は慎重に触っていた。だが、ヒバードがフウ太を拒絶せず、フウ太の指に体を擦りつけてくる様子を前に、フウ太もまた積極的にヒバードを指で撫でるようになった。

「こんなに楽しい気分になったの、久しぶり」

「？」

「……ツナ兄たちがいなくなっただんだ。急に姿を消して、もう2週間も経っちゃった。ママンは、パパンが社会見学のために皆をイタリヤに連れて行ったから大丈夫だって言葉を信じてるみたいだけど……ツナ兄たちが僕に何も言わずに並盛からずつといなくなるなんて思



えない。きつと、前に黒曜中の人たちと戦ったみたいなのに、何かマフィア絡みの事件に巻き込まれたのかもしれないし、心配だよ。皆、どこにいるんだろう。僕、寂しいよ……」

内心ではフウ太とヒバードとが戯れるという癒し風景を存分に楽しみつつ、表では表情一つ変えないように心掛けていると、フウ太がポツリポツリと胸の内を打ち明け始める。そっか。未来編に入ったことで、沢田家から一気にツナくん、リボン、ランボ、イーピンがいなくなっただもんね。ムードメーカーが一気に姿を消したんだ、そりゃあさすがに寂しいよね。

「そういえば僕、お兄さんの名前を知らない。僕はフータ・デツレ・ステツレ。皆はフウ太って呼んでるよ。お兄さんは？」

「僕は——」

「フウ太！ 今すぐその男から離れなさい！」

フウ太のふとした言葉から互いに自己紹介をする流れになったため、僕が名乗ろうとした時。険しい女性の声が公園に響いた。声の元に目を向けると、ビアンキがフウ太と僕との間に入り、両手にポイズンクッキングを装備し、臨戦態勢を構築していた。ビアンキは、明らかにやる気だ。あつるえー（・3・）？ 僕、そこまでビアンキに敵視されるようなこと、したかな？

「え、ビアンキ姉？」

「フウ太。今すぐ逃げなさい。時間は稼ぐから」

「え、どうして怖い顔してるの、ビアンキ姉？ お兄さんは、いい人だよ？」

「そんなわけないわ。彼は雲雀恭弥。この並盛町を統べる、底知れない男よ。そして、マフィアのことにも造詣が深い。ボンゴレの雲の守護者ではあるけれど、彼は危険だわ」

「で、でも、お兄さんは悪い人じゃないよ？ この小鳥も救ってくれたし……」

「騙されてるだけだわ。きつと六道骸みたいなのに、フウ太をいいように

利用するつもりなのよ」

緊迫した雰囲気醸成するビアンキ。ビアンキの放つシリアスな雰囲気についていけないフウ太。そんな2名を前にして、ビアンキの僕に対する心証が悪い理由に思い至った。そういえば、ビアンキとの初邂逅は、ビアンキを脅してポイズンクッキングを毎日配達してもらう契約を取りつけた一件だったね。そりゃあこれだけビアンキに警戒されるのも当たり前前だね。うむ。

「誰かと思えば、毒サソリか。僕の目の前で、これ見よがしに群れないよね。僕は群れる草食動物を見るのが大嫌いなんだ」

「……」

「けど、僕は今、君に構っているほど暇じゃない。失踪者を見つけ出さないといけないからね。だから、今回は特別に、君の目障りな行為に目を瞑ってあげるよ。……あ、そうそう。もう目的は果たしたから、ポイズンクッキングの配達はもうしなくていいよ」

僕としては当然、ビアンキと戦闘するつもりはない。そのため、雲雀恭弥ロールの範疇で違和感のないであろう言葉を選びつつ、臨戦態勢のビアンキの側を通り抜ける形で公園を後にしようとする。ついでに、ビアンキにポイズンクッキング配達の仕事から解放する旨を伝える。もうヴァリアー編は終わって、毒耐性を高める必要性がなくなったからね。1年以上も僕にポイズンクッキングを配達してくれて、本当にありがとね。ビアンキ。

「あ、あの雲雀兄！…この子、忘れてるよっ！」

公園の外へと一直線に歩いてみると、フウ太が僕の前に回り込んで、両手で優しく抱えていたヒバードを差し出してくる。もつとヒバードと戯れたいだろうに、それでも僕のことを考えてヒバードを返しに来るとか、フウ太ってホントに良い子だなあ。

「別に、返さなくていいよ」

「え——」

「僕はヒバードを放し飼いにしているからね。ヒバードは帰りたくなつた時に勝手に僕の元に戻ってくる。だから、今は君がヒバードと交流するといい」

僕は困惑するフウ太に言葉を畳みかけると、足早に公園を後にする。僕の背後に「ありがとう！ 雲雀兄！」とのフウ太の元気いつばいな声が響いたからか、僕の足取りは幾分か軽やかなものになつていった。さすがはチワワのような癒しオーラを常時放出することに定評のあるフウ太だね。今後、精神的に疲れて、癒されなくなつた時はフウ太の元を訪れようかな？

◇◇◇

はろはろ。ツナくんたち目線での、10年後の大人な雲雀さんだよ。

結局、この世界線では雲雀さんの精神が終ぞ戻ってこなかったの  
で、今も凡人憑依者な僕  
の精神は雲雀さんのハイス  
ペックボディの中  
でのびのびしてるよ。

ちなみに、僕はボンゴレ雲の守護者として生きてきた10年の間に男装事情を皆にバラしたよ。さすがにずっと隠したまま墓場まで持ち込むのは無理ゲーだったからね。だから、10年前と入れ替わつていないボンゴレ関係者は大体、『雲雀恭弥は雲雀恭華が男装した姿』だつてことを知つてたりする。それでも、ボンゴレに敵対するマフィアへの抑止力として効果の高い『ボンゴレ最強の守護者：雲雀恭弥』のブランドを守るため、対外的には男装&雲雀恭弥ロールを続けてるけど。そして。ツナくんたちに未来のツナくんたちの写真を見せた一件から10日後。

この10日間で主に京子ちゃんとハルに料理スキルを仕込みまくつていた僕は、別の風紀財団支部へと赴くとの名目でツナくんたちと別れを済ませた後、雲雀恭弥に変装してすぐにボンゴレアジトへと舞い戻つた。本日から開催される、強襲用個別強化プログラムに関わるよう、リボーンに打診されたからだ。このプログラムでは、ツナく

ん、獄寺くん、山本くんの3人に、1人ずつ家庭教師をつけた上での修行が実施される。僕の担当は、ツナくんだ。

というわけで、ボンゴレアジト地下8階にて。僕は原作同様、『気を抜けば死ぬよ。君の才能をこじあける』イベントを盛大に実施した。雲ハリネズミのロールに球針態を作ってもらい、その密閉球体の中にツナくんを閉じ込めて酸欠状態にするというものだ。

今までの出来事から、この世界が原作と全く同じ展開を辿るとは限らないと証明されている。そのため、下手したらツナくんは酸欠の果てに死にかねない。でも、ここで妥協は許されない。ツナくんを死の淵にまで、極限状態にまで追い込んで初めて、ボンゴレの試練が開催され、ツナくんの本当の覚悟がボンゴレリングに試されるからだ。

ツナくんの覚悟がボンゴレリングに認められなければ、ツナくんは新兵器を入手できない。そうなれば、ツナくんは確実にメローネ基地突入時に死ぬ。ツナくんが新兵器を活用した必殺技：Xバーナーイクスを使えないと、幻騎士やアイリス率いる死茎隊に勝てないのはもちろん、キング・モスカを操りツナくんを戦闘不能に追いやるスパナがツナくんのXバーナーに興味を持たずにツナくんを殺してしまうからだ。ツナくんを精神的、肉体的に痛めつけまくるのは胸が締め付けられる思いだけど、ここは心を鬼にしないと。そんな心持ちで、僕はツナくんにボンゴレの試練を課した。

結果、ツナくんはボンゴレリングに認められ、ボンゴレの証を、XグローブVer. V.R. バージョンボンゴレリング という名の新兵器（※通称、剛の炎）を継承した。しっかし、生で見るとますますカッコいいね、その新グローブ。そりやそうだよね。何せ、大空のボンゴレリングの模様をそのままグローブの手の甲に映してるんだもんね。

とはいえ、ツナくんの修行はこれで終わりではない。むしろここからが始まりだ。そのため、僕は相変わらずツナくんを殺す気で、ツナくんととの戦闘を開始した。僕に勝つか、それとも死ぬか。その2つの選択肢のみを僕から突きつけられたツナくんは応戦するも、今まで使っていたノーマルな柔の炎と違い、爆発力や推進力が凄まじい感じじゃ馬な性能を抱える剛の炎を上手く使いこなせず、僕に傷1つ

つけられずにどんどんボロボロになっていく。

そんなツナくんが起死回生の一手として選択したのは、剛の炎を存分に吹かせて僕に急接近し、僕から匣を1つかすめ取って、匣兵器を反撃に使用するというもの。だが、ここで事故が発生した。僕は普通に、雲ハリネズミや雲カバ辺りをツナくんが掴ませるつもりだったが。ツナくんが僕から奪取した匣は、何の装飾もされていない水色の匣。

「あッ」と僕が素の声を漏らす中。超直感で何となく嫌な予感があったのか、ツナくんもわずかに眉を寄せながらも、当初の作戦通り、僕から奪った匣に大空のリングの炎を注入する。すると、匣から出てきたのは、雨金魚だった。

「コイコイコイコイコイコイ……」

コイキングみたく、おっさんのような声質で、ツナくんの目の前の床の上でビタンビタン跳ねている雨金魚。僕が『しゃちほこ』と命名しているコイキング似の雨金魚が、苦しそうに上下に跳ねている様子を見下ろすツナくんの目の絶望っぷりというか、死につぷりが非常にシユールだった。僕とツナくんとの戦いを観戦していたラル・ミルチ、フウ太、草壁さん、そしてリボンまでもが目が点になっていたのが場のシユールさに間違いなく拍車をかけていた。

うん。ごめんね、ツナくん。それ、一時期風紀財団で試作した匣兵器の失敗作なんだ。風紀財団でも匣兵器を量産できたら未来編の難易度が下がるかなと思って、匣兵器の研究の傍らで匣兵器の試作もやってたんだ。でも、生み出せた匣兵器はどれも『しゃちほこ』みたいに戦闘能力に期待できないものばかりだったから、いかに匣兵器が偶然のラッシュの果てに生まれた奇跡的な産物なのかを再認識する形で匣兵器の試作への取り組みは断念したんだ。けど、『しゃちほこ』が健気に跳ねている様はたまに見たくなるから、観賞用として携帯してたんだよ、僕。でも、まさかここでツナくんがよりにもよって『しゃちほこ』の匣を盗み取るとは。他にも匣はたくさんあったのに、ツナくんご愁傷さま。

さすがにこの流れで容赦なくツナくんをボコるのは哀れすぎたので、僕は「興が削がれた、帰る」と言葉を残してトレーニングルームを去り。それから毎日、僕はツナくんの修行に付き合うこととなった。もちろん、ツナくんとの修行の際に、『しゃちほこ』の匣は持ち込んでいない。また場の空気が何とも表現しがたい微妙なものになっちゃうからね。

ツナくんは僕と修行。獄寺くんはビアンキと修行。山本くんはリボンと修行。そんな日々を続けていると、まだ過去の己と入れ替わっていない了平くんが、タイムトラベルのことを知らない10年前のクロームを抱えてボンゴレアジトに推参してきた。ボンゴレと同盟ファミリーが打ち出した、5日後にミルフィオーレ日本支部の主要施設を破壊せよとの指示とともに。

了平くんのボンゴレアジトへの来訪。その情報を草壁さんを介して聞きつけた僕は、早速ボンゴレアジトの医療室へと赴いた。なぜなら、今日は骸くんが白蘭に殺されかける影響で、骸くんが幻覚で形成しているクロームの内臓が消失しちゃう日だからね。クロームが生き残る術を知る僕がクロームの病室を訪れないと、クロームの死は避けられないからね。

そんなわけで。僕は医療室に入る。そして、草壁さんの力を借りて、クロームの容態の悪化にうろたえているツナくんや、クロームの容態を回復させる手段を必死に考えているビアンキを、医療室から退出させた後。僕はその場にしゃがみ込み、ベッド上で苦しむクロームと視線を合わせる。

「あ、あなたは……雲の人……?」

「六道骸が君に与えていた臓器の感覚を、温かさを。君はよく知っているはずだ。六道骸の生み出した臓器は君の体の中で休むことなく機能していたのだから」

「……え?」

「再現するんだ。六道骸の、沢田綱吉の力になりたいのなら。ボンゴレリングの力を借りて、君の内臓を幻術で再構築するんだ。できるね

？」

「は、い……」

僕の話した内容から、自力で自分の内臓を形成する以外に生き残る道はないと悟ったクロームは、いつ死んでもおかしくない容態の中で、それでも己の心の中に明確な覚悟を宿して霧のボンゴリングに炎を宿し、自分の内臓を作り出す。骸くんの作った内臓と比べれば、はるかに稚拙な幻術の内臓だが。それでもクロームが生命維持を果たすには十分だった。

「何とか一命を取り留めたみたいだね」

「あり、がとう。雲の人……」

「僕は何もしてないよ。君が勝手に自力で救われただけだ」

もうクロームに命の危険はないとわかってからだ。その後、主作戦室にて。ツナくんは予定通り、5日後にミルフィオーレ日本支部への強襲することを決意し、皆に己の心境を表明した。確かに、ツナくんとたちの修行の成果は芳しくなく、5日後までにミルフィオーレ日本支部を壊滅させられるほどの戦力が整う見込みには期待できない。でも、それでも。無駄に強襲時期を遅らせれば、何もかもが手遅れになる可能性を危惧したがゆえのツナくんの決断なのだろう。

あと5日、ね。クロームのカバンから、グロ・キシニアが何気に忍ばせていた発信器をちやっかり回収したことだし、僕の方も少し用意をしようかな。何せ、秋田くんがキャッチしてくれた情報から察するに。これから先に待ち受けるメローネ基地突入編は、原作よりも少々難易度が上がってるっぽいからね。ただ漫然と5日後を待つわけにはいかないのさ。

さーて。10年前の僕。しっかり備えていてよね。

じゃないと。大した活躍もできずにうっかり死んじゃうかもよ？

### 風紀36・†アドバイスを受けて風紀を守ろう†

Q. フウ太&ビアンキと接触してから4日経ったけど、あれから死ぬ気の炎のサイズを大きくすることはできましたか？

A. 毎日欠かさずボンゴレリングに雲の炎を灯す特訓を続けていますが、その、お察しください。

Q. と、言いますと？

A. 何の成果も得られませんでしたあああツツツ！

というわけで、今日も今日とて。僕は膨大なサイズの死ぬ気の炎をボンゴレリング上に灯せずにいる。うん。マズいよね、この状況。そろそろXデーが近いって。次、どこかで僕が（ ⊠ω⊠ ）スヤアとお昼寝したら最後、葉が落ちる音でも目が覚める雲雀さんスペックにも悟られずにスタンバってる一般人（？）の入江くんがここぞとばかりに10年バズーカ飛ばしてくるって、絶対。

うー。これ、本気で幻騎士との正面衝突も想定してシミュレーションしないとだよね。

勝てるのかな？ いや、無理だよね。まず負けが見えてるよね。純粹な近接戦で、10年後の雲雀さんと同レベルだった幻騎士に10年前の雲雀さん（+中身が凡人）が普通に戦って勝てるわけがない。

それでも、膨大なサイズの死ぬ気の炎を生み出せない以上、僕が直接幻騎士と戦って時間を稼がないと、獄寺くんが。山本くんが。了平くんが。クロームが。ラル・ミルチが。草壁さんが。ランボが。イーピングが。死んでしまう。幻騎士に殺されてしまう。ゆえに。例え敗戦濃厚でも、僕に幻騎士との戦闘を避けるわけにはいかないのだ。

………仕方ない。やるしかないか。仲を深めた面々が次々と死んだことに絶望するツナくんなんて見たくないし、どうにか幻騎士の猛攻を凌ぎきってみせようか。

大丈夫。ある程度時間稼ぎさえできれば、きつと幻騎士が第二形態に至る前に、10年後の入江くんが匣に炎を注入して、僕と幻騎士とを分断するようにメローネ基地を動かしてくれるよ。きつと。僕信



じてる。だから、お願い。いくらお腹が痛くなろうが、空気を読んでね、入江くん？

そんなことをつらつらと考えつつ、僕は並盛中の屋上から並盛町の光景を眺める。雲雀さんの体に憑依してからというものの、応接室や屋上からこうして並盛町の景色を見るのが心地いいって感覚があるんだよね。実際、風も気持ちいいし、普段の並盛町はギャグ時空ゆえに、原作と関わりのない並中生徒が時折校庭で常識に囚われない、若者の人間離れな挙動を取る様を観察するのも楽しいし、並盛中の屋上はかなりの快適スポットなんだよね。雲雀さんの実年齢が15歳を超えても未だに並盛中に留まっているのは、こうした理由もあるのかもしれない。

「おや。何やら悩み事がありそうな顔をしていますね。雲雀恭華さん？」

などと、気晴らしに原作の雲雀さんの考察を深めていると、背後から声がかかる。幼い男の声。なのに、やたらと理性的で、年を取っていきそうな口調。そして、今は雲雀恭弥に変装中にもかかわらず、『雲雀恭華』とのフルネームでの呼びかけ。

（あ、これ骸くんだね。間違いない）

声の正体を察した僕が振り返ると、小学校低学年程度とおぼしき男の子が悠然と立っていた。男の子の顔の右半分がひび割れており、右目に六の数字が刻まれていることが、男の子に骸くんが憑依している最中であることを声高に主張している。

「あれ？ 今日クロームの体じゃないんだね、骸くん。どうしたの？ 前に、僕にクロームを紹介したのは、今後もクロームを介して僕と接触するって意図じゃなかったの？」

「そのことについて、貴女に聞きたいことがありました」

今の僕は男装中だが、既に性別がバレている骸くん相手に口調を取

り繕う必要はない。そのため、僕は割とフランクな口調で、骸くんに率直な疑問を投げかける。すると、骸くんは僕の反応をあらかじめ予測していたのか、スムーズに話を運びにかかる。

「クローム髑髏がいなくなりました。もう何日も経過しています。犬や千種にも探させていますが、まるで手掛かりがありません。彼女が僕たちに何も言わずに姿を消すなど、あり得ないのですが……恭華さん、何か心当たりはありますか？」

まあ、そうだよな。このタイミングでわざわざ僕に接触する理由の筆頭はクロームの行方だよな、どう考えても。だって今、クロームは10年後の世界にいるんだから。クロームが10年後の黒曜ランドでミルフィオーレの雨の6吊花ことグロ・キシニア主催の『クローム髑髏の試食(笑)』をぶち壊した後、ボンゴレアジトのツナくんたちと合流した以上、今の黒曜ランドにクロームがいるはずがないわけだ。

さて、どうしようか。現状、僕は原作キャラに原作知識を明かさないうように立ち回っている。ならば当然、今回も『知らない』とウソをつくべきだ。けど、骸くんにウソについても見破られそう……とか、骸くんのことだから、僕がクロームの行方を知っているとの確信を得た上で、敢えて尋ねてきてるような、そんな気がする。

もしそうなら、ここでウソをついて、下手に骸くんの僕への心証を悪くすれば、そのまま戦闘に突入する可能性も否めない。もうそろそろ僕が10年後の戦場へ飛ばされそうな現時点で、無駄に消耗はしたくない。なら、ウソをつかずに言及を避けるしかない、か。

「ない、といったらウソになるね」

「やはり知っていましたか。それで、彼女はどこに？」

「悪いけど、今は言えないんだ。察してほしい」  
「……」

今、10年後の世界のことを話したら、怪しいなんてレベルじゃないしね。

だから僕を無言で凝視するのはやめてほしい。プレッシャーをか

けても僕からさらなる情報は引き出せないよ、骸くん！

「まあ、あと1月もすればわかるよ。きつとクロームは無事だから、そう心配しなくていいんじゃないかな？」

未来編が終われば、未来で戦ったマフィア関係者一同に、未来での激闘の記憶が伝えられる手はずとなっている。その対象に当然ながら、骸くんも入っている。骸くんの知りたいことはその時に『聞こえますか…今…あなたの…心に…直接…呼びかけています』といったノリでアルコバレーノたちが伝授してくれるはずだから、今は情報お預けでどうか我慢してほしい。

「ほう、そうですか。なら、クロームの搜索は取りやめましょうか」

「……ええつと。僕の言うこと、そう易々と信じて大丈夫なのかな？」  
「ええ。懐中時計やモスカの件から貴女は大局が見える人だとわかっていますし、僕と貴女が敵対関係でない以上、貴女がクロームの心配はいらないと言ったのなら、その通りなのだろうと判断したままでですよ」

「そっか」

もつと骸くんから追及されると想定していただけに、あっさり骸くんが引き下がったことに、僕は困惑ながらも骸くんの真意を探る。すると、骸くんはニコリと笑みを浮かべて僕の主張を受け入れる理由を告げる。

う、ぐぐ。骸くんを騙している罪悪感が凄い。僕は大局的な視野に優れた人じゃないからね。中身はただの凡人だからね。『×大局が見える ↓ ○未来を原作でカンペしている』なのが実態だからね。ホント、ごめんね。骸くん。

「……」

閑話休題。それにしても、今骸くんと会えたのは巡り合わせがよかったかもしれない。

何せ、僕は今、リングの炎のサイズを増大させられないことで悩ん

でいたのだ。

骸くんは相談すれば、何か実りになる良いアドバイスをくれるかもしれない。

「骸くん。今、暇かな？」

「ええ。時間はありますよ」

「なら、ちよつと僕の悩みを聞いてほしいな。大事なことなんだ」

「恭華さんの悩みですか。クフフ、興味深いですね。場所は変えますか？」

「いや、ここでいいよ」

骸くんから許可をもらったため、僕は悩みを話し始める。もちろん、マファイアのリングに死ぬ気の炎を灯せること、リングを装備した人の覚悟がないとリングに炎を灯せないこと、リングの炎は未来の戦いに革命を起こしうることといった、以前ディーノさんから聞いた内容を骸くんに教えた上でだ。

「クフフ、これが死ぬ気の炎ですか。幽玄で、落ち着きのある藍色の炎ですね」

僕の話聞いた骸くんが物は試しと、偶然所持していたマファイアのリングを装備し、早速霧の炎を灯す。どうやら今骸くんが憑依中の男の子には霧の波動が流れているようだ。

「僕の死ぬ気の炎はこんな感じ」

「ほう、恭華さんの炎は紫ですか。細やかに分裂する様が何ともかわいらしいですね」

「かわいい、かなあ？ まあいいや。で、僕はもつと大きな死ぬ気の炎を灯したいんだけど……何かいいアイデア、ある？」

「……」

続いて僕がボンゴレリングから雲の炎を灯してみせると、骸くんが独特な感性から雲の炎を評価してくる。そんな骸くんの感想を適当に流した後、僕は本題に入った。対する骸くんは目を瞑ってしばし沈

黙した後、スツと開眼する。あ、これは期待できるかも。

「確認ですが、覚悟の強さが、死ぬ気の炎の大きさと比例するのですよね？」

「うん。そうだよ」

「なら、今の貴女に足りないものは必死さでしょうね」

「……必死さ？」

「ええ。恭華さん、貴女は面白い人です。僕と戦った時、三叉槍の穂先で傷つけられないように気を付けていたのは、三叉槍で切り傷をつけることが、僕が他者に憑依する条件だと知っていたからですよ？」

他にも、モスカを使ったザンザスの謀略を見抜いたり、手掛かり一つ見つけられないクロームの行方を知っていたりと、貴女は大局的な視野に優れ、洞察力が鋭く、底知れない人です。だからこそ、貴女には必死さが欠如していると僕は考えます」

「……えつと、つまり？」

「そうですね。犬のやつてるアドベンチャーゲームで例えましょうか。ゲームには負けイベントというものがありますよね？」

「うん。戦闘で全滅してもゲームオーバーにならずにストーリーが進む奴だよね？」

「ええ、それです。しかし、そのゲームを初見で楽しむプレイヤーは、攻略本などで情報を仕入れない限り、どの戦闘が負けイベントかわかりません。だから、ゲームオーバーにならないよう、必死に知恵を絞って負けイベントな戦闘に勝とうとします。……ですが、事前に負けイベントだと知っているプレイヤーは真剣に戦闘に挑まずにさつさと負けることでしょう」

「まあ、時間の無駄になっちゃうからね」

「では、ここでこの現実世界をゲームだと考えてみましょう。現実世界では誰もが初見のプレイヤーで、未来の展開を的確に示し、プレイヤーに最善の選択を教える攻略本は存在しません。そのため、プレイヤーは次々と差し迫る展開に、わけがわからないながらも、己の持つ少ない情報を駆使して、必死になって対処します。ですが、恭華さん。

「貴女は違います」

「えッ？」

「貴女は非常に洞察力に長けています。まるで、現実世界というゲームには存在しないはずの攻略本の情報を入力しているのではないかと思えるほどに、物事を、今後発生する展開を見抜く力を持っています。そうになると、貴女は目の前の展開に、初見のプレイヤーほど必死になる必要がありません。どう対処すれば最善の未来が待ち受けているのか、貴女は既に見抜いてますから」

「……」

「覚悟とは、必死さだと僕は考えます。先が見えない、追い詰められている、だけど諦めたくない、どうしても成し遂げたいことがある。そんな時に、人は心に強い覚悟を宿し、窮地を全力で突破しようとしま。ですが、貴女は物事を知りすぎているために差し迫る展開を前に必死になりきれません。それゆえに、死ぬ気の炎を大きくできないのではありませんか？」

「……なるほど、ね。未来視でもやってるんじゃないかってほどに僕が色々見える人だから、現実世界というゲームに必死になりきれないし、のめり込めない。だから、死ぬ気の炎を大きくできるほどの真に迫った覚悟を抱けない……ってことだよな？」

骸くんの考察を一通り傾聴した僕は自分なりに解釈して骸くんに問いかける。

要は、原作を、未来に起こる出来事を知っている僕は、ボンゴレ側に属した上で行動していれば、最終的に何とかなると知っている。ゆえに、原作を知らないツナくんたちと比べて、必死さが欠けている。雲雀恭華という当事者として『家庭教師ヒットマンREBORN!』という物語に関与しているはずなのに、物語の展開や裏事情を色々と知っているせいで当事者になりきれず、傍観者意識を抱いている節がある。骸くんの主張は、そういうことだろう。

言われてみればその通りだ。今まで僕が本当に必死になったのは精々、大空戦でデスヒーターを解除できなかった時ぐらいだ。そもそも、僕はいつか雲雀さんの意識がこの体に戻ってきた際に、雲雀さ

んに体を返すことを前提に動いている。そういう観点からも、僕が傍観者意識を抱いているというのは、正鵠を射た指摘と言えよう。……原作知識の存在を知らないのに、こういう的確なアドバイスができる辺り、骸くんクオリティはやっぱり凄まじい。

「そういうことです。死ぬ気弾を喰らって、視野が狭い中でがむしやらに何かを達成する、なんてことでも体験すれば、必死になる感覚を掴めて、死ぬ気の炎を大きくできるかもしれません……せつかくですし、死ぬ気になってみます?」

「え? 僕が死ぬ気に? んー、死ぬ気モードになったら沢田くんみたくなるんだよね? さすがに人前でパンツ一丁になるのはちよつと……」

「女性が死ぬ気になった際はトップレスとはならないそうですよ?」

「そうなの? というか、なんでそんなこと骸くんが知ってるの?」

「以前、ランキングフウ太のランキングブックを全ページ閲覧した時に、『死ぬ気モードで下着のみになり、並盛町を徘徊した回数が多い女性ランキング』というものが凝ったイラスト付きでありましたから」  
「どうしよう、ツツコミ所が多すぎるッ!」

ランキングになるほど並盛町で女性が死ぬ気になったケースがあったのかとか。そもそも何の使い道のなさそうなランキングがなんでランキングブックに記録されたのかとか。なんでこのランキングにフウ太が気合いを入れてイラストまで付けたのかとか。

「クフフ、そもそも死ぬ気弾は持ってませんので、周りから痴女扱いされる心配はいりませんよ?」

「あ、なんだ。持ってなかったんだ。ホツとしたよ」

「僕の幻術が貴女に通じるのなら、例えば貴女よりずっと強い強敵が沢田綱吉たちを拷問している光景でも貴女の脳に焼きつけて、貴女の死に物狂いの覚悟を無理やり引きずり出すという感覚を体験させることもできるのですが」

「そ、それは全力で遠慮するよ」

「そうですか。残念です」

「残念がらないでほしいな、怖いからさ」

骸くんの発想に僕は思わずブルリと肩を震わせる。一方の骸くんは相変わらぬニコニコ笑顔だ。よく見ると、口角がプルプルしている気がする。笑いをこらえているかのような口の結び方だ。

「ねえ、さっきから僕で遊んでない?」

「何のことでしょう? さて。僕から言えるのはこのぐらいですが、参考になりましたか?」

「あ、うん、凄く参考になった。ありがとう」

「どういたしまして。それでは」

骸くんは僕の質問を軽く流し、別れの言葉とともに足早にその場を去る。

からかわれた僕が怒る可能性でも考慮してさっさと退散した辺り、きっと骸くんはあの男の子に憑依した状態では大して戦えなかった、ということなのだろう。

(さて、骸くんから興味深い話を聞けたけど……原作知識の記憶だけ器用に消すとか、封印するとか、そんなことはできない以上、どうやって覚悟の炎を大きくしたのか……)

再び静寂が戻った並盛中屋上にて。僕はため息を吐き、空を見上げる。雲一つない青空は、僕の悩みなんて関係ないと言わんばかりの爽やかな様相を醸成しているのだった。



## 風紀37. †誰がための罫で風紀を守ろう†

10年後の並盛。ミルフィオーレ日本支部への強襲を控えた前夜。10年前から未来へとやってきたツナたちがボンゴレアジトでパーティーを楽しむ中。

10年後の雲雀恭華、笹川了平、草壁哲矢。そしてラル・ミルチ、リボーンの5名は風紀財団の和室に集結していた。

「いよいよだな。雲雀、明日は我ら年長組、いい所を見せんとな！」

「そうだね。せっかくの機会だ、派手に暴れないとね」

「おお！ 極限にその意気だ！ さすがは雲雀ツ！」

「どういたしまして」

明日の決戦を前に、戦意をみなぎらせている了平の意気込みに、恭華もまた同調する。ちなみに、今の恭華は特に雲雀恭弥に変装せず、紫を基調とし、所々に白の花が装飾された女性らしい着物に身を包んでいる。

「ラル・ミルチ。貴女は明日、どうするのですか？」

「無論、出る。戦力は多いに越したことはないからな」

草壁の問いかけに、ラル・ミルチは平然と返答する。現状、ラル・ミルチはアルコバレーノに有害な非<sup>ノン・トゥリニセツテ</sup>7〜3線を浴びすぎたせいで、ロボロの体になっている。それでもなお、ラル・ミルチは明日のミルフィオーレ日本支部強襲に加わることを心から望む。己の身を危険に晒してでも、ミルフィオーレを倒すことに価値を見いだしているのだ。

「……それにしても、まさか雲雀恭弥の正体が女だったとはな」

あまり己の体調に関わる話題を続けてほしくないラル・ミルチは話の矛先を恭華の性別へと向け、まじまじと恭華の全身を見つめる。雲雀恭華は普通に女性らしい見た目をしているのに、どうして彼女の男

装を見抜けなかったのかを不思議に思いつつ、恭華を眺める。

「隠すつもりはなかったんだけどね。大人組にはもう大体バラしてるし」

「そうなのか。……了平。いつ頃、恭華は秘密をバラしたんだ？」

「ああ！ あれはいつのことだったか——」

「——話さなくていいよ。その時になってのお楽しみさ」

一方の恭華がラル・ミルチに仲間外れの意図はなかったことを伝える中、リボーンは純粋な興味からの問いを了平に投げかける。了平が過去に思いをはせるも、即座に恭華が話を遮った。

「僕の話はさておき。皆に集まってもらったのはただ和気あいあいとお茶を飲んで戯れるためじゃないよ。本題に入ろっか。草壁さん」

「はい。明日の作戦の成功率をハイパーコンピューターで試算しました。敵施設の規模から人数を割り出し、ミルフィオーレ構成員の平均戦闘力を入力し、他の要素をかけた結果——成功率、わずか0.0024%。これはラル・ミルチの戦力も含めて高く見積もった数字です。他の要因による補正も考えられるが、どれもこちらに旗色の悪いものばかりだ」

「ま、そんなもんだらうな」

「だね。何せ、数が違う。ボンゴレ側の強襲部隊に対し、ミルフィオーレの人員は圧倒的に多い。数の暴力に1人1人の質で対抗して打ち勝つのは、存外難しいからね」

「奇跡でも起きなければ成功しない数字か。……沢田たちには黙っておけ。士気に関わるぞ」

「今さらショックを与えても、他の選択肢はないのだしな……」

恭華に促された草壁は明日のミルフィオーレ日本支部強襲作戦のシミュレーション結果を公表する。結果をまだ知らなかったリボーン、恭華、ラル・ミルチ、了平はまるで動揺しない。元々、明日の作戦の成功率の低さを想定済みだったようだ。

「つてより、無意味な数字だな」

「「ツ！」」

「ヴァリアーのように完成されたプロなら戦闘力や可能性を数値化することに意味があるだろう。だが、伸び盛りのあいつらを計算に当てはめるなんてバカげてると思うぞ。数値化できねえ所にあいつらの強さはあるからな」

シミュレーション結果に対するリボーンの見解に一時は意外そうに目を見開くラル・ミルチ、了平、草壁だったが、すぐにリボーン的主張は最もなものだとして各々うなづく。

そう。リボーンの言う通りだ。雲雀恭華は考える。このシミュレーション結果にはツナくん、獄寺くん、山本くんの修行の成果もある程度は見込まれている。だが、ツナくんの必殺技：Xイクスバーナーや、獄寺くんのSスイIスイSステTテEエMマAアCシー・AエーIアイの完成、スクアアローの戦いの映像を収めた「剣帝への道」から戦闘技術をどんどん吸収した山本くんの進化まではシミュレーションに反映しきれていないからね。

(それに……)

恭華は思いを馳せる。今の時代のツナくんは、ミルフィオーレに撃たれ仮死状態となる前日にこう言っていた。『もうすぐ一番可能性を保持していた頃の、俺が来る』と。

僕も全面的に同意する。10年前のあの頃こそ。成長期であり。思春期であり。世界に対し何かと多感だったあの頃こそ。僕たちは無限の可能性を秘めていた。試練を乗り越え成長することで、僕たちは何者にでも昇華できた。何者にでも到達できる素養を持っていた。今の僕たちが失ってしまったものを、10年前の僕たちはきちんとして持っている。

ボンゴレリングもなければ、成長する余地・可能性が10年前と比べて乏しい今の僕たちでは白蘭を倒せない。だからこそ。10年前の自分たちに、ミルフィオーレ日本支部の強襲作戦という名の厳しい試練を課し、大いに成長してもらう。その成長の対象には、当然ながら10年前の僕も入っている。中身の精神年齢が大学生だとか、そん

なことは些末事だ。明日の作戦で、10年前の僕にもまた、大いに進化したもらわなければ困るのだ。

（10年前の僕。この世界は原作じゃないよ。創作でもない。原作と類似点が多いだけの、1つのれっきとした、息づいた世界だ。その世界の裏社会に所属する以上、舐めていたら、死ぬ。ボンゴレだから大丈夫とか、主人公サイドだから何とかかなるとか、そんなわけはない。なんて、もう頭ではとづくに理解してるんだろうけど、まだ認識が甘い。……だからこそ僕は、今から君を当事者の座に引きずり下ろすよ。くれぐれも覚悟してよね）

恭華は内心で10年前の己に語りかけ、こっさり笑みを零すのだった。

◇◇◇

恭華、了平、草壁、ラル・ミルチ、リボーン。以上、5名による大人の会合の終了後。真夜中にて。ミルフィオーレ日本支部は、6弔花こと入江正一の指揮の元、ボンゴレアジトへの夜襲を始めていた。グロ・キシニアがクローム髑髏との交戦時に彼女のカバンに発信器を仕掛けた機転により、ミルフィオーレ日本支部と同様に、ボンゴレアジトが並盛に存在することが発覚したからだ。

ホワイトスペルとブラックスペルの混合部隊がボンゴレアジトへと迫る。ミルフィオーレ日本支部のほぼCランク以上の戦士で構成されたボンゴレ強襲部隊の動きは迅速だ。ボンゴレ側の仕掛けた監視カメラを、雨コウモリの超音波で。雷ホタルの電気で。雲蛾の鱗粉で。ボンゴレ側に気づかれないよう隠密に、かつ速やかに破壊していく。

その後、強襲部隊は発信器の真上のポイントまで到達する。強襲部隊は空き地を嵐モグラで掘削を始める。嵐の分解の炎を活用した嵐モグラの掘削スピードは凄まじく、みるみるうちに穴が掘られていく。結果、嵐モグラはあつという間に、空き地の土に隠れていた、見るからに頑丈そうな装甲を掘り当てた。装甲を目の当たりにした強

襲部隊はこの下にボンゴレアジトが存在するとの確信を深め、装甲に爆弾を設置し、起爆させる。

『全隊突入！』

ミルファイオーレ日本支部の司令室からの入江の号令により、強襲部隊は次々と爆弾でこじ開けられた風穴の中へと跳び込んでいく。

『ボンゴレリングの回収を優先せよ。守護者は生け捕りだ』

「抵抗する場合はいかなさいますか？」

『……殺せ』

「了解」<sup>ラジャ</sup>

強襲部隊が全員アジト内に突入し終えた頃合いを見計らい、入江がさらなる指示を飛ばす。命の危機が、ボンゴレの面々に刻一刻と迫っているのは確実。そのはずだった。

「何だここは……？」

「大広間か？」

強襲部隊が降り立った場所は無駄に広々とした、殺風景な空間だった。ボンゴレの人間やマフィアのアジトらしき装置が存在しないことに強襲部隊は首をかしげる。

「な、何だ!？」

「出口が!？」

と、ここで。強襲部隊が突入の際に使用した風穴にて突如、格子が組み上げられ、風穴が次々と塞がれる。格子は己の頑丈さを誇るように紫の仄かな光を放っており、壊すには骨が折れそうだった。そんな中、未だ塞ぎきれていない風穴から大広間へと、1人の影が飛び降りる。長身瘦躯を黒スーツで着飾った、ボサボサの黒髪に不敵な表情が特徴的な人物だ。

「弱いばかりに群れをなし。咬み殺される、袋の鼠」

「ひ、雲雀恭弥!？」

「わ、罨だ!」

強襲部隊の前に姿を現したのは男装済みの雲雀恭華だった。そう、これはミルファイオーレ日本支部の猛者で構成された強襲部隊をアジト外におびき寄せ、身動きを封じるために恭華が仕掛けた罨である。グロ・キシニアがクロームに仕掛けた発信器を、危篤状態のクロームを救うついでに回収していた恭華は、ボンゴレアジトから離れた倉庫予定地に発信器を移動させていたのだ。ミルファイオーレの強襲部隊を一手に引きつけ、恭華が相手をする。もちろん、恭華は和室にてリボンたち大人組に事前にこの作戦を明かした上で、囮役に臨んでいる。

「草食動物が肉食動物の血肉となるように、君たちには僕のエサになってもらう」

「くそッ!」

「——さあ、始めようか」

恭華は凶悪そうに口角を吊り上げつつ、所持している匣兵器と一枚の小さな紙を、手首のスナップを利用して真上に放り投げる。と、その時。恭華の周囲を唐突に濃密な煙がボフツと包み込んだ。恭華の雲ケムリの煙幕ではない。ピンク色の、ファンシーな煙だ。何とも現状の雰囲気にとぐわない奇妙な煙が恭華を覆い隠す。そして、煙が晴れた時。スーツ姿の恭華は消失していた。代わりに現れたのは、スーツ姿の恭華よりも一回り小さい人物だった。ムスツとした顔に、ボサボサの黒髪。肩に羽織った学ランに『風紀』と書かれた左腕の腕章。以上の特徴を兼ね備えた人物——もとい、10年前の男装中の恭華だった。

「……」

過去から未来の並盛へと時をかけた恭華は現状を飲み込めず、その場に立ち尽くす。

恭華の視線は白づくめと黒づくめなミルファイオーレの強襲部隊に

固定されている。

そんな恭華の足元に、先ほど大人恭華が投げていた匣兵器が音を立てて次々と落ちていく。

ここで。これ見よがしに恭華の目の前をひらひらと舞いながら床に落ちようとしている紙を恭華はつい掴み取る。その紙には、こう記されていた。

『後は任せたよ ㄣ、(\*、▽、\*)ノ 10年前の僕ww』

「……………」

恭華の体がフルフルと震え。紙がグシャツと握りつぶされる。

(はかったなああああああ!? 10年後の僕ううううううううう!?)

ミルフィオーレの強襲部隊が恭華を取り囲む中。原作と全く違うタイミングで未来編に突入させられた恭華は思わず、内心で絶叫した。この時、恭華の脳裏では「てへぺろ☆(・ω<)」する10年後の恭華の姿が鮮明に映し出されているのだった。

風紀38。　　心慌ただしく意乱れても風紀を守ろう

†

「雲雀恭弥が10年前と入れ替わった!？」

「雲のボンゴレリングを所持しているぞ!　間違いない!」

「入江隊長のタイムトラベル技術、目の前で見られるとは……!」

「さすがは入江隊長。ボンゴレの罨すらも見越してこのような援護射撃をなさるとは!」

「これは好機だ!　いくらボンゴレ最強の守護者・雲雀恭弥といえど、この時代の戦い方を知らない、10年前の奴になら勝てる……!　恐れることはない!」

グロ・キシニアがクローム髑髏に仕掛けた発信器に誘導されるがまさに、ボンゴレアジトから離れた倉庫予定地へとこのこ誘い出されてしまった、ミルフィオーレのボンゴレ強襲部隊は歓喜していた。倉庫予定地で待ち受けていた雲雀恭弥との戦闘直前で10年前の雲雀と入れ替わったからだ。リングの炎と匣兵器を駆使して戦う新時代のスタイルを知らない10年前の雲雀相手であれば、負けることはまづありえない。強襲部隊は心から安堵していた。

「……」

(はかったなああああああ!　10年後の僕うううううううう!?)

一方。ミルフィオーレの強襲部隊に取り囲まれている恭華(男装中)は、表向きは平静を装っているものの、内心では混乱の渦中だった。無理もない。リングから巨大な死ぬ気の炎を生み出す方法について、六道骸からアドバイスを受けた恭華が物思いにふけていた夕イミングで、入江正一から不意打ちの10年バズーカを喰らった時、恭華はついに幻騎士戦が始まるのかと身構えていた。なのに。10年バズーカのピンク色の煙が晴れた時。恭華の視界に入ったのは、幻



騎士ではなく、大人数のミルファイオーレ構成員。加えて、これ見よがしに恭華の目の前を舞っていた紙に記されていた、10年後の僕からのメツセージ。

『後は任せたよ ー、（\*、▽、\*）ノー 10年前の僕ww』

明らかに、幻騎士戦の前に10年前の僕と入れ替わる気満々のメツセージに、恭華はとにかく困惑していた。

なにやってんの!?! なにやってるのさ、10年後の僕!?!

なんで幻騎士と戦う前の、ミルファイオーレのボンゴレ強襲部隊との戦闘前のこのタイミングで僕を10年後に呼び寄せたの!?! ヤバいつて。この状況はかなりヤバい。この強襲部隊はミルファイオーレ日本支部のほぼCランク以上の戦士で構成されてるわけで。10年後の原作雲雀さんだからこそ強襲部隊を無傷で撃破できたけど、それと同じことを今の凡人の、それも未来に来たばかりの僕にもできると思うのはあまりに楽観的だ。

……とはいえ、賽はもう投げられた。10年後の僕の意図はわからない。だけど、嘆いていたって意味はない。ただ殺されるだけ。だったら、僕は僕のベストを尽くすしかない。どうにかしてこの強襲部隊を全滅させて、さっさとメローネ基地に行かないと、山本くんとラル・ミルチさんが幻騎士に殺されてしまうのだから。

「10年前、ね。なるほど、君たち視点の僕がそう見えるのなら、僕からすればここは10年後の未来、ということかな?」

ひとまず僕は状況の飲み込みが凄く早い風を装って発言する。

10年後の未来にやってきたばかりの僕がいきなり、足元に転がっている、10年後の僕が使っていたっぽい匣兵器を拾い上げて使用したら、怪しいなんてレベルじゃないからね。

「ツッ! 雲雀恭弥に学習させるな! 一斉に攻撃するぞ!」

僕の状況把握の早さを危険視したミルファイオーレ構成員の号令を契機に、強襲部隊は各々リングに炎を灯して匣に注入し、動物を模し

た匣兵器を展開する。よし、その一連の動作を僕に見せてくれたのはありがたい。これで僕も匣兵器を使つて戦える。

「ふうん。何やら面白い玩具を使うみたいだね。僕も試しにやってみようか。跳ね馬の発言の真偽を確かめられるし、たまには草食動物の戦い方を取り入れるのも趣があるしね」

「なに!? 雲雀恭弥がボンゴリングに炎を灯したぞ?!」

「バカな!? なぜ10年前からやってきたばかりの奴がリングの炎の灯し方を!」

僕は強襲部隊に見せつけるように右手中指にはめているボンゴリングに雲の炎を灯す。続いて、僕が当然のようにリングに死ぬ気の炎を灯したことへの強襲部隊の動揺が冷めやらぬ内に、足元に転がる複数の匣を一気に拾い上げ、その内の1つに雲の炎を注ぎ込んだ。

ん? 雲雀さんってこんなにたくさん匣兵器持ってたっけ。まあいいけど。

それよりまずは強襲部隊の数を減らすべきだ。連中が動く前に速攻で仕掛けるのが最上だろう。

つてことで——頼んだよ、ロール! やっちゃってくださいよ、ロール大先生!

僕が雲の炎を注入した匣を強襲部隊に向けると、匣から匣兵器が飛び出してくる。10年後の雲雀さんの匣兵器こと雲ハリネズミのロールは優秀な匣兵器だ。雲の炎の属性『増殖』を活かして、球状に膨らむ攻撃は、敵を串刺しにもできるし、球体の内側に敵を閉じ込めることができる。このあまり広くない倉庫予定地において、雲ハリネズミの効果は絶大だ。

ロールへの期待を胸に抱いていた僕は眼前に出現した匣兵器を見る。やる。

が、そこに「きゅー!」と可愛らしく鳴く、小柄な雲ハリネズミはいなかった。

代わりに、「ヴォー!」と野太く唸り声を上げる、灰褐色のカバが

ずっしりと鎮座していた。全身に雲の炎をしかと纏う雲カバは、見るからに迫力がある。

……………あれ。ロール、さん？ 何か、太った？

「ヴオオオオオオオオ!!」

「ぐわあッ!」

「がふッ!」

「くそ、何て重い攻撃だ！ 止められない！」

思わず思考停止する僕をよそに、雲カバは咆哮とともに強襲部隊に突っ込み、己の重さを十全に活かした突進で強襲部隊を次々蹴散らしていく。一部の強襲部隊は雲カバを倒すべく死ぬ気の炎を纏わせた曲刀や槍で雲カバに攻撃するも、雲の炎の増殖効果でどんどん己の皮膚や体重を増やしていく雲カバに傷1つつけられない。

ハリネズミじゃない、カバだこれー!!! あれ、あれあれあれ？

僕の足元に転がっていた匣だからってつきり10年後の僕が使ってた匣兵器だと思ってたんだけど、間違つて敵の匣兵器を使っちゃったかな。ハハハ、僕のうっかりさん☆（・ωく）…………でもこの雲のマークで装飾されてる匣、10年後の僕のつぼいんだよなあ。

「今だッ！」

「喰らえええええ！」

「——おっと」

僕が雲カバを凝視している今を好機と見て、背後から強襲部隊が死ぬ気の炎を纏わせた武器を振るおうとしてくる。雷ホタルを、雲蛾を、雨コウモリをけしかけて攻撃してくる。死ぬ気の炎を纏った武器に、今の僕の持っただけのトンファーでは分が悪い。僕は雲カバが突進で切り開いた安全地帯へと駆ける形で強襲部隊の攻撃を回避しつつ、次の匣に雲の炎を灯したボンゴレリングを差し込み、匣から飛び出したトンファーを装備し、ボンゴレリング経由でトンファーに雲の炎を

纏わせる。そして、雷剣を振るうミルファイオーレ構成員の顔をトンファーで殴って気絶させ、彼の服を片手で握ると、強襲部隊の匣兵器による攻撃の盾として利用する。

「ぐぎやあああああ!!」

僕の肉壁となった構成員が、仲間の攻撃を喰らって悲鳴を轟かせる中。僕は次の匣に雲の炎を注入し、開匣する。次こそはロールが現れてくれるはず。そう期待した僕の目の前に出現したのは、全長70センチほどの、やけに大きく黒光りする昆虫だった。その昆虫こと雲アリは素早い動きで雨コウモリへと跳躍し、思いつきり咬みついていく。

あるえ？ ロールってハリネズミだよ？ 哺乳類だよ？

昆虫だったっけ？ あんなに鋭い顎、持ってたっけ？ 仮面ライ

ダーみたいな顔してたっけ？

……うん。アリだねこれ。どう見てもアリだ。少なくともハリネズミじゃない。

え、待って。嫌な予感がしてきたんだけど。まさか10年後の僕って雲ハリネズミを持つてないって前提で幻騎士戦の立ち回りを考えてたのに、この展開は想定外すぎるってば！

って、違う。問題はそれだけじゃない。10年後の僕が雲ハリネズミを持つていないってことは、ツナくんがボンゴレの試練を受けてない可能性すらある、これが一番ヤバイ。だって、10年後の雲雀さんはツナくんをロールの球針態の中に閉じ込めて酸欠に追い込む形で初めてボンゴレの試練が始まったのだから。ボンゴレの試練を通して、ツナくんはXグロブVer. V.R. バージョンボンゴレリングを手に入れて、そこから必殺技のXバーナー イクスを生み出すのだから。

Xバーナー イクスを使えないとなると、ツナくんの命も一気に危うくなる。

うううう。10年後の僕は一体何を考えてるのさ。わけがわから

ないよ。

10年後の僕が雲ハリネズミを所持していない可能性の戦慄しつつも、僕は肉壁のミルファイオーレ構成員がまだ機能している内に次の匣に雲の炎を注入する。結果、開匣とともにドシユウウとの音を引き連れる形で、匣から白色の煙幕が噴出し、倉庫予定地の景色を白一色に塗り潰した。

「な、何だ!? 何が起きた!?!」

「ちいッ、これでは何も見えやしない!」

「雲雀恭弥め、煙に紛れて我らを奇襲するつもりか!?!」

(まーた原作の雲雀さんが持つてなかった匣兵器だよ……。でも、煙幕は都合がいいね。いつまでも敵を盾にはできないし、今の内に残りの匣も全部開けちゃおうっと)

僕は速やかに開匣されていない匣に次々と雲の炎を注入する。だが、2つの匣は雲の炎を入れても何も反応を見せない。怪訝に思いつつも、次の匣に雲の炎を注入すると、匣から匣兵器が飛び出した。煙幕で視界が不明瞭な中でも、何かと優秀な雲雀さんボディは匣兵器の姿形を捉えた。その匣兵器は、背中に大量の針を抱えるその匣兵器は、間違いなく雲ハリネズミだった。

ロール! ロールじゃないか!

良かった! ロールがいたよ! 安心した。凄くホッとした。

これなら、僕の影響で原作が悪い方に大幅に変化している説は考えなくて良さそうだ。

雲ハリネズミが敵へと突撃する中、段々と煙幕が晴れていく。すると、僕の視界に入ったのは——二回りほど大きくなって、強襲部隊に攻撃されまくっている割には無傷のまま暴れる雲カバ。増殖属性を活かして巨大な球針態を作り出し、敵を串刺しにする雲ハリネズミ。そして、何気に40匹くらいに増殖して強襲部隊やその匣兵器を襲撃する雲アリたち。

え。なに、この地獄絵図。僕はいつの間にも地球防衛軍の世界に落ちちゃったの？ 大きいアリに蹂躪される人間って絵面が凄くホラーなんだけど。……雲アリが味方で本当に良かったよ、うん。

「何てことだ、このままでは全滅してしまう！」

「ぐう、どうしたら奴の匣兵器を止められるんだ……！」

僕は改めて周囲を一瞥し、状況を確認する。強襲部隊の面々は4割ほどが既に倒れ、残りは僕の繰り出した雲ハリネズミ、雲カバ、雲アリの対処で手一杯のようで、僕の元までたどり着く猛者は存在しない。急場は乗り切ったと判断していいだろう。この様子なら、ミルファイオーレの増援が来ない限りは、もはや僕が直接戦わずとも問題ない。

僕は一旦、強襲部隊の相手を頼もしい匣兵器たちに任せ、先ほど開匣できなかった2つの匣を見やる。その2つの匣は何の装飾もされていない、藍色と水色の匣だった。

この色、もしかして匣を開けられる炎の種類を示してるのかな？

ということは、藍色は霧の炎。水色は雨の炎になるんだけど……え、雲雀さんって雨の炎は使えなかったよね？ 雲雀さんの体を流れる波動の種類は雲と霧だけだったはずだし。……いや、もしかして。

僕は試しに付近に転がるミルファイオーレ兵の指から目的の指輪を抜き取って己の指に装着し、死ぬ気の炎を灯そうとする。すると、指輪から小さいながらも澄んだ水色の炎が灯しだされた。

おおおおお!! 雨の炎だ！ 雲雀さんボデイから雨の炎が出せてる！ なんか新鮮だ！

これはきつと、僕が雲雀さんに憑依したことで、雲雀さんの体内の波動の性質に変化が発生した結果だろう。僕に幻術が通じない、イマジンプレイカー†幻想殺し†と同じ原理だ。さてさて、10年後の僕は一体どんな雨の匣兵器を……？ き、気になる。ワクワクドキドキ（〇（△（〇））

僕は強襲部隊と戦闘中という今の状況を半ば忘れて、期待を胸に小さな雨の炎を水色の匣に注ぎ込む。結果、現れたのは、僕の期待を裏切る代物だった。それはコイキングみたく、おっさんのような声質で、床の上でビタンビタン跳ねる雨金魚。

「コイコイコイコイコイ……」

「……」

（アイエエエ!? コイキング!? コイキング、ナンデ!? いや、なんでこんな持ってるの、10年後の僕!? 10年間でどんな心境の変化があれば、こんな役に立たない匣兵器を携帯するようになるの!? 心の病気だったりするの!? コワイ! 見てはいけない闇を覗いちやった感があつて凄く怖いんだけど! 見なかったことにしたいんだけど!?)

しばし絶句状態で雨金魚を眺めていた僕は、最終的に雨金魚をそつとしておくことに決めた。僕は雨金魚が視界に入らないように、雨金魚のことを一切考えずに済むように、トンファーに雲の炎を纏わせ、僕の匣兵器に苦戦している強襲部隊へと積極的に攻撃を仕掛けていく。

強襲部隊の全滅には今しばらく時間がかかりそうだった。

風紀39・イメローネ基地に乗り込んで風紀を守ろう†

雲雀恭華が倉庫予定地にてミルフィオーレファミリーの精鋭で結成されたボンゴレ強襲部隊相手に無双し。沢田綱吉、獄寺隼人、山本武、笹川了平、ラル・ミルチの5名が、白くて丸い装置を目指して、ミルフィオーレファミリーのひしめくメローネ基地に突入し、各々戦闘を繰り広げる中。草壁哲矢はこの時代の雲雀恭華の指示の下、恭華とともにメローネ基地へと向かうメンバーを引き連れた上で、恭華のいるであろう倉庫予定地へと向かっていた。

「ねえねえ草餅？　これからどこに行くの？」

「ランボ。草餅違う、草壁さん！」

「沢田さんや獄寺さんたちの所ですよ。彼らは今、ボンゴレの敵対マフィアの基地に乗り込んで戦っています。我々も助太刀に行きましよう」

「あららのら。ツナの奴、ランボさんに黙ってそんな楽しそうなことしてたんだ。さては宇宙一のヒットマンのランボさんの強さを知らないな？　じゃあ、ランボさんも遊ぶ！　早く連れてけ、草大福！」

「草大福も違う、草壁さん！」

恭華に指定されたメンバーの内の2人は、今草壁が背負っているリュックサックの中に体を潜らせ、顔だけをリュックサックから出しているランボとイーピンだ。両者とほとんど交流がなく、加えて高身長かつ強面リーゼントな草壁に連れられることを嫌がるのではないかと内心不安であったが、結局は草壁の杞憂に終わった。ランボもイーピンも子供らしく好奇心の強い性格なためか、草壁の誘いに即決で応じてくれたのが幸いした。

「……………んッ」



と、ここで。草壁の後をトテトテと追っていた、髑髏マークの眼帯で片目を隠す少女が立ちくらみからその場に倒れそうになるも、三叉槍を杖代わりにしてどうにか踏みとどまった。

「大丈夫ですか、クロームさん？ やっぱり、私が背負った方が良いでしょう……」

「それは、ダメ。私は、皆の足を引っ張りたくない。置いていかれたくない、から……頑張る」

「そ、そうですか……」

そして、恭華が指定した最後のメンバーがクローム髑髏だ。彼女はこの時代の六道骸が幻術で構成していた内臓を失い、死の淵に追い込まれていた所を、恭華のアドバイスのままに自分の幻術で内臓を補い、命を取り留めたばかり。ゆえに、未だ本調子とは程遠く、あまり戦力としては期待できない。クローム髑髏の口調や眼差しからは強固な意志を感じるが、三叉槍という名の杖がなければ体を支えられないほどに彼女は弱っている。

「……」

だからこそ、草壁にはわからない。どうして恭華が子供2名とまだ医療室で安静にしているべきクローム髑髏を連れて、リボンたちに気づかれないよう細心の注意を払いつつ、メローネ基地へ行こうとしているかがわからない。普通に考えれば、この3名は足手まといになる可能性が高い。下手にミルフィオーレに、人質として捕まってしまう、ただでさえ成功確率の低い、沢田綱吉たちのメローネ基地強襲の失敗の決定打にされてしまう。

しかし、それでも草壁は恭華の命に忠実に従う。思考停止しているわけではない。草壁は恭華を信じているのだ。恭華の見ている世界は草壁の見る世界とは圧倒的に別物だ。そして、草壁とは別次元の領域を見据えた上で通達される恭華の指示に従った結果、事態が悪化したことなど一度もない。今回だって、メローネ基地にランボ・イーピン・クローム髑髏を連れていっても、きつと悪いようにはならないは

ずだ。

「あれ？ あれあれあれ？ ランボさんの飴ちゃん、どこにもない！と、思ったらあった！ がははは、いっただっきまーす！」

「ランボ、人騒がせ」

草壁の背中でランボとイーピンがやいのやいのとはしゃぐ中、草壁は恭華が待っているであろう倉庫予定地へと向かう。草壁はミルフィオーレのボンゴレ強襲部隊を一人で相手取る恭華の心配など欠片もしていない。強襲部隊がどれほど大人数だろうと恭華の勝利を確信して揺るがない。ゆえに、そろそろ強襲部隊を全滅させている頃合いだろうかと予測しつつ、倉庫予定地へと足を踏み入れた。中の光景は概ね草壁の想定通りだった。床に転がるミルフィオーレの構成員たちに、死屍累々のミルフィオーレ兵の中心にたたずむ、無傷の恭華（男装中）の姿。ここまでは良い。

だが、だがー

「なあッ!？」

（バカな、恭さんが10年前と入れ替わっている!?)

ー当の恭華の姿が、長身瘦躯を黒スーツで着飾った姿ではなく、『風紀』と書かれた左腕の腕章が特徴的な並盛中の学ランを肩に羽織った、10年前の姿になっていることは、草壁の想定外だった。

「あ。雲の人が小さくなってる……」

草壁に続いて恭華の姿を認識したクローム髑髏がポツリと呟く中。草壁は驚愕に目を見開き、恭華を凝視する。

この可能性を考えなかつたわけではない。むしろ、沢田、獄寺、山本、ランボ、クロームと、ボンゴレ10代目ボスとその守護者たちが次々と10年前と入れ替わっている以上、恭華や平もいずれはそうなるのではないかとは思っていた。だけど、だけど。何も今、これからメローネ基地に行こうというタイミングじゃなくてもいいじゃないか。草壁は世の理不尽さを痛切に感じた。

「来たね、草壁哲矢」

「恭、さん……」

「へえ、10年後の君は僕をそう呼ぶんだね。興味深いな」

「恭さん!? その言い方をするといいことはー」

「君の想像通りさ。今の僕の状況は理解している。10年後の僕が事細かにメッセージを残していたからね。……僕は今から君たちとメローネ基地とやらに行けばいいんだろう? 自ら群れるなんて虫唾が走るけど、10年後の僕たつての頼みだ。さあ。草壁哲矢、道案内は任せたよ」

「……」

（これでは、この状況では、メローネ基地に向かうのは無謀すぎる……！）

この時代の恭華が機転を利かせたおかげで、現状をしつかり把握しているらしい10年前の恭華が、草壁にメローネ基地への道案内を要請する。が、草壁は恭華の指示に首肯できない。草壁がランボ・イーピン・クローム鬮を連れて、メローネ基地に行くことに大して抵抗がなかったのは、この時代の恭華がいてくれる心強さがあったからだ。ボンゴレ10代目が誇る、最強の雲の守護者の側がどれだけ安全かを草壁はよく知っているからだ。

だが、当のボンゴレ雲の守護者が10年前の姿とあつては話は別だ。いかに恭華といえど、さすがに心もとない。10年間の経験の差はそれだけ大きいのだ。ゆえに、草壁は迷っていた。10年前の恭華を、メローネ基地に導いていいものか、悩んでいた。

「……草壁哲矢。まさかとは思うけど、10年後と比べて弱い僕をメローネ基地に案内するわけにはいかないとか、考えてないかい?」

「そんな! 滅相ありません!」

「その認識は誤りだ。……僕はそこらに転がるミルフィオーレの雑兵どもを全員倒した。当然、この時代の戦い方も熟知している」

「な、なんと……!」

「これでもまだ不足かい？」

恭華からの頼み事に応じずに沈黙する草壁の様子を受けて、恭華は右手中指にはめている雲のボンゴレリングに炎を灯しつつ、草壁の誤解を解きにかかる。結果、てつきりこの時代の恭華がミルフィオーレのボンゴレ強襲部隊を一掃した後、10年前の恭華と入れ替わったものと思ひ込んでいた草壁は強い衝撃を受けた。

（未来に来たばかりで。右も左もわからない状況だというのに。10年前の恭さんは、この時代の戦い方をすぐさま把握し、ミルフィオーレの精鋭たちを難なく倒したというのか。……やはり、やはり。恭さんは別格だ。天才だ！）

「異論はなくなったようだね。なら、早くメローネ基地に案内しなよ。我が物顔で並盛町を支配して王様気取りなミルフィオーレの連中を1人残らず咬み殺して、並盛の風紀を取り戻す」

「はッー」

恭華への凄まじく高い評価をより一段引き上げ、より恭華を心から信奉することにした今の草壁に、もはや迷いはない。草壁は恭華の催促に従い、恭華たちをメローネ基地に案内するべく、軽やかな足取りで先行するのだった。



時は少しさかのぼる。

ふいい。よ、ようやくミルフィオーレの強襲部隊を全員ばたんきゅくさせられたよ。まるでエンドレス組み手にでも挑んだ感じだったね。途中、ニコラ隊長率いる偵察部隊がやってきたり、援軍としてゾンビっぽい挙動をする特殊部隊ファントマ（笑）がやってきたりしたけど、所詮僕の匣兵器たちの相手じゃなく、いとも簡単に蹴散すことができた。うん。雲<sup>ロー</sup>ハリネズミ、雲<sup>メルカバ</sup>カバ、雲<sup>メルエム</sup>アリのトリオが強すぎる。これは次世代のポケモンの御三家決定ですね！……明らかに人気

がロールに偏りそうな面子だね。これはロールのスマブラ参戦ルートかな？

「お。これは良さそうなりリングだね」

といった、とりとめのない思考をダラダラと垂れ流しつつも、僕は死屍累々なミルフィオーレの面々からなるべく精製度の高い雲と霧と雨のリングを直感で見定めて、いくつか回収する。ちなみに、せっかくだからと嵐、雷、晴のリングにも炎を灯せないか試してみたが、失敗に終わっていたりする。やっぱり5種類の属性のリングの炎を使いこなすのは獄寺くんの特権だね。

ところで、リングこそいくつかゲットするけれど、雲・霧・雨の匣兵器は奪わないこととした。僕は凡人だからね。あんまりにも匣兵器が多いと、僕は判断ミスが許されない戦闘中にうっかり間違った匣を開こうとしてしまいかねないからね。獄寺くんみたいに5種類の属性のリングの炎と16もの匣兵器を使いこなすとか無理だって。僕は身の程をわきまえられる凡人なのさ。

……それにしても。一時はどうなるかと思ったけど、終わってしまった、このミルフィオーレのボンゴレ強襲部隊との戦闘は、幻騎士の前哨戦として非常にいい機会だった。きつと、10年後の僕は、幻騎士と戦う前に一回練習してほしかったのだろう。原作とは違い、10年後の僕は雲ハリネズミ以外にも多くの匣兵器を持っていた。それらの情報を知らないまま、幻騎士とアドリブで戦わせたくなかっただろう。その考えは正解だ。おかげで、どうやって僕の匣兵器を運用すれば幻騎士と戦えそうか、作戦を組み立てるができたからね。10年後の僕、様様だね。

「ん？」

と、ここで。僕は足元に、10年後の僕が所持していた匣兵器と同じ装飾を施された雲の匣があることに気づいた。10年後の僕は本当にたくさん匣を持っているなあとしみじみ思いつつ、僕はボンゴレリングに雲の炎を灯し、炎を匣に注入する。すると、匣はまばゆい光

と共に粉々に砕け散り、匣の中から丁寧に折りたたまれた紙が現れた。

（これは、保存用の匣？ 確か、ラル・ミルチさんも持ってたよね？）  
匣の装飾。匣に入っていた紙。これらから察するに、この紙は、10年後の雲雀恭華から僕に向けての手紙なのだろう。わざわざ保存用の匣兵器に入れてまで残したんだ。きっと重要な情報が書かれているのだろう。僕はゴクリと唾を飲みつつ、折りたたまれた紙を開いた。

『雲ハリネズミのロール、雲カバのメルカバ、雲アリのメルエム、霧シラスのスイミー、雨金魚のしゃちほこ。そして、雲ケムリ。これが僕の持つ匣兵器だよ。上手く使って、生き残ることだね。雲雀恭華らしく、凡人らしく、ね？』

達筆でしたためられた手紙の内容は、以上だった。

……え、これだけ？ 10年後の僕からのメッセージ、これで終わりなの？ いや、匣兵器につけられた愛称を僕に伝えるのも重要といえば重要だけどき。もつと色々伝えることあるよね？ 特に、原作とこの世界とでどんな差異が発生してるのか、とか。ううう。10年後とはいえ僕のことなのに、10年後の僕の考えがさっぱりわからないう。僕を困らせて楽しむ愉快犯ムーブをしてるわけじゃないんだよね？ 本当に10年後の僕は何を考えているんだろう。

僕が心から困惑していると、僕のいる倉庫予定地に草壁さんが姿を現してきた。しかも、きちんとランボ・イーピン・クロームを連れてきてくれている。これはありがたい。僕が皆を集める手間が省けた。入江正一の所にボンゴレリング7つを集めないと、白蘭が仕掛けてくる超炎リング転送システムに対抗できないからね。きっと、10年後の僕が草壁さんに指示を出していたのだろう。……こういう所はしっかりしているのに、どうして10年後の僕は、僕にちゃんと情報を残してくれないのだろうか。謎は深まるばかりだ。

ひとまず、僕は草壁さんを説得して、草壁さんにメローネ基地へと案内してもらおう。そこから先は、クロームの幻術により、ボンゴレ強襲部隊の様子を見にきて僕に速攻で咬み殺されたニコラ隊長と素敵な仲間たちに扮して、メローネ基地に潜入した。そして、ほどなくしてエンカウントした見張りのミルフィオーレ兵3名を瞬殺で気絶させ、彼らから端末を奪った。入江正一がメローネ基地自体を匣兵器として活用し、己の思うがままに各部屋の配置を変えまくっている以上、最新のメローネ基地のマップ情報を得るには、ミルフィオーレ構成員から端末を奪うのが手っ取り早いからね。僕たちに出会ってしまったミルフィオーレ構成員よ、南無南無。

その後、僕たちは入江正一にボンゴレ強襲部隊が雲雀恭弥を殺すのも時間の問題だとの虚偽の報告をするべく司令室へと向かい、司令室から獄寺くん、了平くん、山本くん、ラル・ミルチさんが二手に分断され、それぞれ強敵と戦っているとの情報を入手した。そして、一刻も早く獄寺くんたちと合流することが第一との共通認識の下、僕たちも二手に分かれ、僕が山本くんとラル・ミルチさんの元へと向かい、草壁さんたちが獄寺くんと了平くんの元へと向かう手はずとなった。後は、僕が匣兵器実験場へとたどり着けば、幻騎士との決戦が始まるわけだ。

さて。端末のマップを見るに、この辺かな？ 多分、この壁の先に匣兵器実験場がある。うーん。扉まで回り込んでもいいのだけど、マップを見る限り少々遠回りだ。そんな悠長なことをしていたら、幻騎士に山本くんとラル・ミルチさんが殺されかねない。それなら、やることは一つ。

ノックしてもしもおくくし！

僕は雲の炎を匣に注ぎ込んで雲ハリネズミを呼び出し、眼前の壁を盛大に破壊してもらおう。

粉々に砕け散る壁の破碎音が僕の鼓膜を震わせる中。僕の視界に

飛び込んできたのは、顔に酷い傷を負って、その場に倒れる山本くんと、そんな戦闘不能な山本くんの目の前に悠然とたたずむ幻騎士。山本くんと協力して幻騎士と戦うルートも割と本気で考えてたんだけど、さすがに都合が良すぎたかな？ まあ、今は。山本くとラル・ミルチさんが殺される前に幻騎士の前に登場できたことに安心するのでしょうか。後は、僕が頑張れば、2人を救えるわけだしね。

「ああ君……ちようどいい。白く丸い装置は、この先だったかな？」  
僕は幻騎士に対し、不敵に微笑みかけた。



## 風紀40・†術士を嵌めて風紀を守ろう†

幻騎士はミルフィオーレファミリーに属する、霧のマーレリンググ保持者にして、ミルフィオーレのボスたる白蘭の懐刀である。白蘭の奇跡の御業により、己の不治の病を治してもらったからというもの、幻騎士は白蘭を神と崇め、白蘭の命は何だって遂行した。

いや、厳密には遂行できなかった命もある。ジツリヨネロファミリーを裏切り、ファミリーを皆殺しにしてマーレリンググを回収し、白蘭に献上する。その命だけは、ジツリヨネロファミリーのボスことユニに、己の翻意を見抜かれた動揺から失敗してしまった。

しかし、だからこそ幻騎士は二度とそのような失態を犯してなるものかと、より徹底して白蘭の啓示に忠実であろうとする。それが幻騎士の存在意義であり、生きる理由なのだ。

今回、幻騎士が白蘭から授かった命令は『入江正一に歯向かう輩は誰であろうと斬れ』というもの。ゆえに、幻騎士は全力で命令を遂行する。メローネ基地に潜入した1人である、ボンゴレ雨の守護者の山本武を、幻術を用いた罠に嵌めて勝利した幻騎士は、その場に気絶して倒れる山本の首を落とすべく、剣を上段から振り下ろそうとする。

「……！」

が、その時。幻騎士と山本武のいる匣兵器実験場の側壁が粉々に打ち砕かれた。幻騎士は遙か想定の外に思わず山本へのトドメの一撃を中止し、派手に破壊された壁を凝視する。壁の破壊時に発生した粉塵が徐々に晴れる中、現れたのはーボサボサの黒髪に、肩に羽織った学ランに、『風紀』と書かれた左腕の腕章が特徴的な人物だった。その背後には、匣兵器実験場の壁をいともたやすく破壊したのであろう、無数の針を携えた巨大な球体型の匣兵器が存在感を放っている。

「ああ君……ちようどいい。白く丸い装置は、この先だったかな？」

「貴様は……ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥か？」

幻騎士に不敵に微笑みかける闖入者に対し、幻騎士はその正体を推測して問いかける。幻騎士は雲雀恭弥の姿を知っている。だが。今現在、幻騎士の眼前にたえずむ雲雀恭弥は、幻騎士の知る雲雀恭弥の面影こそあれど、随分と幼い。ゆえに、目の前の人物が雲雀恭弥であると確信しきれないのだ。

「先に聞いたのは僕だよ。質問に質問で返すのは感心しないな」（いや、愚問だったか。この男は10年前の雲雀恭弥で間違いない……）

闖入者は背後の匣兵器を一旦匣に仕舞いつつ、しかし幻騎士の問いには答えない。が、一方。幻騎士は目の前の闖入者を雲雀恭弥だと断定した。闖入者の右手の中指に嵌められた雲のボンゴレリングこそが10年前の雲雀恭弥の証だからだ。

「まあいいさ。君は白くて丸い装置のことを知っているようだから、さっさと咬み殺して、嫌でも僕の問いに答えてもらおうとするよ」

「ボンゴレ最強の守護者だとの噂は聞いているが……10年前の小童では話にならない。貴様もすぐにその山本武と同様に屠つてやろう」

「……山本武を倒して調子に乗っているようだけど、その程度で舞い上がってるなんて、底が知れるね」

「むっ」

「いい機会だ。己の身の程を忘れて驕り高ぶる草食動物に、肉食動物の恐ろしさを刻み込んであげるよ」

雲雀は匣に雲のボンゴレリングの炎を注入し、放出されたトンファーを装備する。対する幻騎士も匣に霧のマーレリングの炎を注いで幻海牛を起動させ、幻海牛に幻術を構築させる。無数の幻海牛は四方八方に飛び、元々の無機質な匣兵器実験場を幻騎士の戦いやすい、木々の生い茂る世界へと塗り替える。白蘭の命を完璧に全うするため、雲雀を完膚なきまでに倒すための措置だ。

「ふうん、君は幻術使いなんだ。けど、残念だったね。僕に幻術は通用しない」

「なに？」

幻騎士の幻術を目の当たりにした雲雀の言い放った内容に、幻騎士はつい動揺の声を漏らす。そのような情報は聞いていないからだ。本当なのか、ただのハツタリなのか。わからないが、雲雀の発言の真偽は、戦闘の中で自ずと明らかになるだろう。幻騎士は一部の幻海牛を透明状態のまま雲雀へと飛ばす。幻海牛はそれ単体が破壊力を持った誘導兵器であるため、命中すれば雲雀であろうとただでは済まないだろう。

「ー行くよ」

が、当の雲雀は前方へと駆け出す形で幻海牛の突撃を回避する。幻海牛が地面と激突して発生した爆発のことなど気にもせず、そのまま前方へと、雲雀を迎撃するべく剣を構える幻騎士に攻撃するべく駆ける。が、ここで。雲雀は立ち止まり、新たに雲の炎を注入した匣を真上に向ける。雲雀が匣を向ける先には、両手にそれぞれ剣を持ち、真上から雲雀を襲撃する予定だった、本物の幻騎士の姿。

(まさか、本当に俺の幻術を見破っているのか!?)

幻術で透明になった幻海牛の攻撃も、幻術で作られた匣の幻騎士も、当然のように看破し対応してくる雲雀の様子から、先の雲雀の発言が真実だと判断した幻騎士は驚愕に目を見開く。そんな幻騎士目にかけて雲雀の匣兵器が襲いかかる。雲ハリネズミの球針態の突撃に、幻騎士はとっさに両手の剣で防ぐのが精一杯だ。だが、防いだはいいものの、球針態の勢いを殺すことはできず、天井まで吹っ飛ばされる。雲ハリネズミはそんな幻騎士を球針態で潰すべく追撃を駆けるも、両手の剣に霧の炎を纏わせた幻騎士の強烈な斬撃により、球針態は消し飛ばされた。

「へえ、今ので無傷なんだ」

「なるほど。確かに貴様には幻術を見破る能力があるようだ。ならば、こうだ」

幻術で構築された蔓を天井から生やし、己の両足をぐるぐる巻きにさせることで、己を天井にとどめさせた幻騎士は、ここで無数の幻海牛を一齐に雲雀へと突撃させる。四方八方から迫り、雲雀の逃げ場を消し去る幻海牛の群れ。雲雀は匣に雲の炎を注いで2匹の雲ハリネズミを召喚し、2つの球針態を雲雀の周囲にグルグル展開させる。幻海牛が雲雀に接触する前に球針態をぶつけて爆発させる。結果、雲雀の周囲は激しい爆発によって形成された白煙で支配される。

（匣兵器はいつまでも展開し続けられるものではない。事前に注入した炎エネルギーの分しか活動できないからだ。幻海牛の突撃がいつ途切れるかを雲雀恭弥が知り得ない以上、奴は防戦一方に終わらずに、必ずどこかで幻海牛の包囲網を突破しにかかるはず。そこを叩く！）

幻騎士は雲雀がどの方面から幻海牛の猛攻を突破してきても瞬殺できるように、眼下に展開される白煙をじっと凝視する。そして、10秒後。幻騎士の狙っていた瞬間が訪れた。厚い白煙をかき切るようにして、雲雀が空中へと飛び出したからだ。

（身動きの利かない空中へ逃れるとは、愚かな）

「これで終いだ」

幻騎士は幻海牛の突撃をやめつつ、両足に巻きつく蔓を断ち切り、天井を足場にして一気に地上へと飛び込む。そうして、幻騎士は一息に雲雀との距離を詰め、両手の剣でX斬りにする。雲雀は幻騎士の斬撃への防御が間に合わず、為すすべもなく両断された。が、この瞬間。幻騎士は強い違和感を覚えた。剣に、雲雀を斬った感触を欠片も感じなかったからだ。今しがた斬った雲雀から霧の炎の気配を感じたからだ。

(これは、匣兵器で作られた雲雀恭弥の偽物か!?)

「騙すのは君だけの特権じゃないよ」

雲雀の偽物にまんまと釣られてしまったことに気づいた幻騎士が地上に着地した刹那。幻騎士の背後から本物の雲雀が声をかける。弾かれたように振り返った幻騎士が目撃した光景は。未だ白煙が立ち込める中、雲雀が左手の中指と薬指に計3つの雲のリングを嵌めて炎を灯し、匣に無理やり炎をねじ込んでいる姿。

「……何をしている?」

「君の作った戦場に飽きたからね。場所を変えるよ」

(場所を、変える?)

雲雀が何を画策しているかが全く読めず、幻騎士が雲雀への警戒心をググンと跳ね上げる中。3つの雲のリングの炎を一齐に注がれた際にヒビの入った匣から、紫の膜に包まれて白く輝く雲ハリネズミが現れる。雲ハリネズミは見る見るうちに球状のドームを形成する。雲雀と幻騎士のみをドーム内に取り込み、2人以外的一切をドーム外に弾き出す。雲雀の匣兵器も、幻騎士の匣兵器も、戦闘不能の山本武もドーム外へと追いやり、雲ハリネズミはドーム状の戦場を完成させた。

「……」

「無駄だよ。密閉度の高い雲の炎で作られたこのドームは頑丈にできているからね。君の匣兵器の力ごとくじや、外側からは絶対に壊せない」

「ほう?」

「ここは、裏・球針態。戦う人間以外は匣兵器だろうと全て排除する、絶対遮断空間。僕に背を向けてドームに攻撃を加えない限り、君は決してここから脱出できないよ。そして、裏・球針態の生成と維持のために、内部の酸素は急速に減り続ける。この空間から酸素がなくなるまで、数分とかからないだろうね」

無数のトゲがびっしりと敷き詰められたドームの内側に閉じ込め

られた幻騎士は、ドームの外側の幻海牛を操作してドームの破壊を試みるも、まるで効果がない。そんな中、雲雀は幻騎士の疑問を氷解させるべく、懇切丁寧に裏・球針態のことを説明する。確かに。雲雀恭弥が話している間にも、ドーム内部の酸素の濃度が薄まっているように幻騎士は感じた。

「……貴様、何が目的だ。ここで俺と心中するつもりなのか？」

「まさか。強者を道連れにして一緒に死ぬだなんて、そんな弱者の戦いの真似事を僕がするとも？ ……僕はね。君と匣兵器なしの、純粹な勝負がしたいんだ。何せ君は、草食動物の中ではかなり咬み殺し甲斐があるようだからね」

雲雀は改めて両手のトンファーを構え直し、極上の獲物を決して逃さないと言わんばかりに獯猛な笑みを貼りつける。だが、幻騎士にはわかった。いくら隠そうとしても、詐術に長けた幻騎士の目はごまかせない。雲雀恭弥は明確に何かを企んでいる。その企みの委細まではわからない。が、『純粹な勝負がしたい』などという雲雀恭弥の物言いを素直に受け入れるのは危険だ。

「制限時間ありのデスマッチということか。いいだろう。奥義・四剣<sup>しけん</sup>」  
ゆえに、一刻も早く雲雀恭弥を殺すべきだ。己の剣技を十全に発揮して雲雀を殺す方針を固めた幻騎士は、ここで新たに両足にも剣を装備した。両手に装備した剣と、足の親指と人差し指で挟んだ両足の剣による圧倒的な手数で、敵を容赦なく切り刻む。これが幻騎士の、剣士としての本気の戦闘スタイルだ。

「俺を本気にさせたことを後悔しながら死んでいけ、雲雀恭弥！」

「へえ、面白い曲芸だね」

幻騎士は両足の剣で地面に穴を開けながら雲雀へと迫り、右足を振り上げる。右足の動作に付随して振り上げられる剣を、雲雀はその場にしゃがんで回避する。雲雀の眼前には、右足を思いつきり上げたがために、無防備な体勢を晒す幻騎士。だが、雲雀は反撃できない。幻

騎士の右足に装備した剣のリーチは雲雀のトンファーよりも圧倒的に長く、それゆえに幻騎士に隙があらうと、幻騎士の懐に入り込むだけの猶予を得られないのだ。

幻騎士は振り上げた右足を戻しつつ、上段にて交差させた両手の剣を雲雀へと振り下ろす。幻騎士が両足に剣を装備しているがゆえに、雲雀の遙か上空から振るわれた幻騎士の二剣。雲雀は右手のトンファーを頭の上へ掲げて幻騎士の二剣を止めようとして、とっさに左手のトンファーも頭部へと動かし、トンファー二本で幻騎士の二剣を受け止めた。この時、幻騎士は悟った。10年前の雲雀恭弥と幻騎士とは筋力の面で明確に差があり、匣兵器の使えない裏・球針態の戦いは、むしろ幻騎士に有利に働いていることを。

「くっ……」

(だからこそわからない。なぜ雲雀恭弥はわざわざ己を逆境に追い込む真似をした?)

「この程度か、雲雀恭弥?」

幻騎士の二剣を歯を食いしばって必死に受け止める雲雀の様子に幻騎士は内心で困惑しつつも、左足の剣を雲雀に振るう。両手の使えない雲雀の胴体を横薙ぎに断つための剣。が、それよりも早く。雲雀は学ランの内側に隠し持っていた、10年前から持ち込んでいた愛用のトンファーを敢えて足元に落とし、蹴り飛ばす。瞬間、嫌な予感が幻騎士の全身を駆け巡り、幻騎士は左足の剣による雲雀への攻撃をキャンセルし後方へと跳んだ。

「ッ!」

「次は僕の番だよ」

直後。トンファーから号砲が轟き、幻騎士の頬を銃弾が掠める。どうやら今しがた雲雀が蹴り飛ばしたトンファーには特殊な仕込みが施されていたようだ。標的を失ったトンファーがあらぬ方向へと吹っ飛んでいく中。今度は雲雀から幻騎士に攻撃せんと距離を詰めていく。幻騎士はどこまでも油断ならない雲雀を凝視する。どのよ

うな攻撃をするつもりなのか。どう迎撃するのが正解か。それらの最適解を導き出すため、幻騎士の心は瞬時に研ぎ澄まされる。が、その時。幻騎士の体が唐突にガクリと揺らいだ。慌てて幻騎士が右足を見やると、右足の指で挟んでいた剣が、剣先から剣身の半ばにかけて消失していることに気づいた。

何が起こったのか。答えは簡単だ。雲雀はトンファーを蹴り飛ばし発砲させるという奇を衒った攻撃により、幻騎士の意識を雲雀自身へと引きつけた上で、幻騎士の右足の剣へところりムチを振るつたのだ。そのムチの先端に取り付けられていた溶解さくらもちが、雲雀のムチごと巻き込んで、瞬時に幻騎士の剣を溶かしたがために、四剣モードの幻騎士はバランスを崩したのだ。

「貴様、どうやって我が剣を折った!?!」

「これでお得意の四剣は使えないね」

「ッ——」

まさか裏・球針態では匣兵器は使えないとうそぶき、何らかの匣兵器を使って攻撃しているのではないか。幻騎士が狼狽のままに雲雀に問いを投げかけるも、対する雲雀は意味深に微笑みを貼りつけ、今が好機だとトンファーを振るってくるのみだ。雲雀恭弥に踊らされている。それも、10年前の小童のはずの雲雀恭弥に踊らされ、バカにされている。そのことに幻騎士は怒りを募らせ、しかし戦い方に一切精彩を欠くことはない。幻騎士は左足の指で握っていた剣を足場にして雲雀の背後へと跳躍する形で、雲雀のトンファーを回避する。

「貴様など、わざわざ奥義・四剣しけんを使わずとも、二本で十分だ」

「君は一々吠えないと気が済まないのかい？ 弱い人間は苦勞するね」

「——舐めるなあ!」

幻騎士は双剣の状態で雲雀と切り結ぶ。幻騎士の鋭い斬撃は時折雲雀の体をかすめ、雲雀の体に切り傷を刻んでいく。対する雲雀の攻撃は幻騎士に命中しない。雲雀のトンファーが幻騎士の体を貫く前



に、幻騎士はトンファーを防ぎ、かわし、雲雀から一度も有効打を喰らうことなく立ち回る。剣を1本失ったとはいえ、戦局は幻騎士優勢だ。2本の剣を用いた正面からの戦いでも、十分に雲雀を圧倒できている。しかし、幻騎士は焦っていた。まだまだ大して戦っていないはずなのにもがくように荒々しい呼吸を繰り返していることが、幻騎士の焦りの理由だった。

「ふう。……そろそろ、タイムリミットが、近いね」

「……なぜだ。なぜ、そうも余裕でいられる。このままだと、貴様も、死ぬのだぞ!」

「面白いことを、言うね。君と違って、酸欠ごときじゃ、僕は死なないよ」

裏・球針態から今にも酸素が消失しようとする中。幻騎士と同じくらいに荒く呼吸を行っていたながらも平静を保ったままの雲雀に、幻騎士はたまらず半ば叫び声に近い口調で問いかける。が、雲雀の答えは相変わらず幻騎士を小馬鹿にするものだった。

狂っている。この男は狂っている。こんな狂人と一緒に死んでたまるか。ここで死んでしまったら、俺はもう、白蘭様の命を果たせなくなってしまう。白蘭様の啓示を耳にする幸福を失ってしまう。白蘭様の目指す世界を共に見つめる機会を逸してしまう。ダメだ、そんなことはあつてはならない。この俺が、白蘭様の懐刀が、こんなところで終わるわけにはいかない。幻騎士の内奥で猛き覚悟の炎が燃え上がった。

「おおおおおおッ!!」

幻騎士は雄叫びとともに、霧の炎を纏わせた双剣で渾身の一撃を雲雀に放つ。今までとは明らかに速さの次元の違う幻騎士の神速の一撃を、雲雀は間一髪、真横に跳躍することで回避する。が、雲雀の跳んだ先を読んだ幻騎士は、雲雀の腹部に蹴りを叩き込んだ。

「ふぐッ!」

「おおおおおおおおおおおおおッ!!」

幻騎士の強烈な蹴撃に雲雀の体は軽々と吹っ飛び、転がり。雲雀の体は裏・球針態の壁に張り巡らされているトゲの1つに突き刺さりそうになるも、雲雀はすんでのところでトンファーを振るってトゲを壊すことで、どうにかトゲに体を貫かれずに済んだ。そんな雲雀へと幻騎士は瞬時に迫り、双剣を振り下ろす。対する雲雀は幻騎士の両腕をトンファーで殴り、幻騎士の双剣の軌道をそらす。結果、雲雀を真つ二つに両断するはずだった幻騎士の双剣は、雲雀の代わりに裏・球針態を斬りつけ、そのまま裏・球針態を破壊した。

(息が、できてる……!?)

ドームを構成していた裏・球針態の残骸が粉塵と化して幻騎士に降り注ぐ中。幻騎士は息を整えるべく激しく呼吸を行う。戦闘中に無防備なことこの上ないが、酸欠状態だったのは雲雀恭弥とて同じ。ゆえに、少しだけならば呼吸に集中しても何も問題ないと幻騎士は判断した。

——その判断こそが、雲雀の待ち望んだ瞬間だった。

「があッ!」

刹那、幻騎士は唐突に潰された。裏・球針態の残骸に紛れて降ってきた巨体に、幻騎士はのしかかられた。

(何が、起きている……!?)

意識が混濁している幻騎士が吐血する中。巨体が床に着地した影響で、匣兵器実験場が大きく揺れる。そして、さも当然のように。巨体を中心として半径2メートルの空間の地面が抜けて、幻騎士は己の上に乗る巨体とともに穴へと落下していく。この時。幻騎士の視線の先に、穴の底にいたのは、無数の雲アリ。次いで、幻騎士が上を見上げた時、己を見下ろしていたのは、雲カバ。ここまでの情報を得た

のを最後に、幻騎士の体は穴の底に衝突し、無数の雲アリに襲われるのだった。



一方その頃。

「ぜえ、ぜえ……上手くいったっばい、かな」

酸欠状態の雲雀は仰向けに倒れた体勢で、数体の雲アリに運ばれる形で、幻騎士の落ちた穴から離れている最中だった。

雲雀の対幻騎士戦の作戦は、単純明快。雲ハリネズミの裏・球針態で時間を稼ぎ、その間に雲カバと雲アリに幻騎士を倒す準備をしてもらうというものだった。そのために、幻騎士がけしかけた無数の幻海牛を雲ハリネズミの球針態で防いだタイミングで雲ケムリを用いてさらっと煙幕の量を増やし、煙に紛れて雲雀は一気に行動した。雲アリと雲カバを召喚して一旦幻騎士の視界外に退避してもらいつつ、霧シラスで己の分身を作って幻騎士へと突撃させる。そして、幻騎士が霧シラスを攻撃したタイミングで、これ見よがしに3つの雲のリングを使って裏・球針態を作ろうとする光景をさらす。これにより、雲雀は自分が雲アリと雲カバの匣兵器を開匣したことを幻騎士に気づかせないまま、裏・球針態へと幻騎士を誘ったのだ。

その後、裏・球針態にて雲雀が幻騎士と戦って時間稼ぎをしている間。裏・球針態の外側で雲カバと雲アリはそれぞれの役目を果たすべく動いた。雲カバは裏・球針態の外壁を登って幻騎士の真上にスタンバイする。雲アリは、雲カバから随時雲の炎をもらって増殖しつつ、裏・球針態の床部分を掘り、落とし穴を用意する。そして、十分なサイズの落とし穴が完成したら、雲アリは雲雀運搬用の数匹以外は皆、落とし穴の底で待機する。

そうして、裏・球針態が壊れた直後。裏・球針態の残骸がまき散らす粉塵に紛れて数匹の雲アリが雲雀を回収して幻騎士から逃げ。雲

カバは重力のなすがままに落下して幻騎士を踏み潰し。その衝撃で落とし穴を起動させ、幻騎士を落とし穴の底に控える無数の雲アリの餌食にさせる。これが、雲雀に憑依した凡人が平凡な頭を必死に絞つて考えた、幻騎士を倒す方法だった。

(雲カバに思いつきり踏み潰されて、無数の雲アりに一斉に咬まれる。普通ならこれでオーバーキルになるはずだ。でも、相手はあの幻騎士。これだけやっても幻騎士を戦闘不能にできたとは思えないから、今の内に山本くんとラル・ミルチさんを拾ってさっさとここから離れよう)

呼吸を整え終えた雲雀は、雲アりに背中を預けて運ばれていた状態からその場に立ち上がる。そして、裏・球針態生成の際に弾かれた己の匣を回収して、雲カバたちを匣兵器の中にしまうと、付近に転がる山本とラル・ミルチの両名を担いで、いそいそと匣兵器実験場を後にするのだった。

風紀41. †原作知識のない相手でも風紀を守ろう  
†

ミルファイオーレファミリーの6弔花の1人にして、晴のマーレリング保持者にして、ただいまミルファイオーレ日本支部たるメローネ基地の指揮系統の頂点に君臨する入江正一は、彼の側近である、チェルベツロ機関に属する女性2名とともに、コントロールルームにいた。

メローネ基地という名の匣兵器に入江の晴の炎を注入し、己の都合のいいようにメローネ基地の各区画の配置を変更するためのコントロールルーム。入江とチェルベツロはそのコントロールルームから、メローネ基地各所で発生するミルファイオーレとボンゴレとの戦闘を、監視カメラを通して一方的に観察できる立場にいた。

「あ、あの幻騎士が10年前の雲雀恭弥に敗れた……?」

「まさか、幻騎士は死んでしまったのでしょうか?」

ゆえに。チェルベツロ2名は驚愕していた。幻騎士と雲雀恭弥との戦闘の一部始終を視聴していたチェルベツロたちは、幻騎士が10年前の雲雀恭弥などに敗北するわけがないとの己の想定を覆されたことに驚きを隠せない。

「まさか。あの程度で幻騎士は死なないよ。……けれど、このまま幻騎士を雲雀恭弥と戦わせるのは得策ではなさそうだ。雲雀恭弥には本当に幻術が効かないようだからな。敢えて相性の悪い相手と戦わせることはないだろう。彼には雲雀恭弥の代わりにボンゴレ10代目と戦ってもらおうか」

「しかし入江様。幻騎士に雲雀恭弥の相手をさせないとすると、誰を雲雀恭弥と戦わせるつもりですか?」

「今のメローネ基地に、あの雲雀恭弥を止められる可能性がある者は幻騎士以外にいません。たとえば雲雀恭弥との相性が悪くとも、幻騎士

に雲雀恭弥を倒してもらおう他はないのでは——」

「……本当にそう思うかい？」

「と、申しますと？」

幻騎士が死んでしまったのではないかとのチエルベツ口2名の推測を入江はあつさりとは否定する。その上で、幻騎士と沢田綱吉とを戦わせる方針を定める入江に、チエルベツ口2名は異を唱える。雲雀恭弥を止められるとすれば、それは幻騎士しかいない。そのような考えに基づいたチエルベツ口の意見は、入江の意味深な問いかけにより遮られた。

「レシア・アルノルがいるだろう。彼女は今、どこにいる？」

「第9ジラソーレ隊のレシア・アルノルですか。……端末の情報によると、第四格納庫にいるようですね。入江様の研究室とも非常に近いです」

「よし、運がいいな」

「しかし、レシア・アルノルはボンゴレ強襲部隊に選抜されていたはず。その彼女がなぜ第四格納庫にいるのでしょうか？」

「どうせ夜は起きられないだとか、今日は人に命令されて従う日じゃないだとか、そんなふざけた理由でボンゴレアジトへの強襲をサボったのだろう。人の命令に気分次第で従う、めんどくさがり屋。レシアらしい行動だな。しかし……本来なら処分もののレシアの行動が今、雲雀恭弥を倒す切り札へと繋がるとは……全く。世の中、何がどう転がるかわかったものではないな」

入江からレシア・アルノルの現在位置の探知を求められたチエルベツ口はミルフィオーレ隊員に携帯を義務付けている端末情報からレシアの居場所を割り出す。レシアの現在位置たる第四格納庫が匣兵器実験場とほど近いことに入江は口角を吊り上げる。その後、チエルベツ口の素朴な疑問に、入江はレシアの性格からボンゴレ強襲に参加しなかったのだろうとの見解を示した。

「しかし入江様。レシア・アルノルはCランク戦士です。幻騎士すら

も手玉に取ってしまうような雲雀恭弥の相手としてはあまりにも力不足ではないでしょうか」

「いいや、彼女以上の適役はいないさ」

「そうなのですか？」

「ああ。戦闘には相性がある。相性さえ良ければ、多少の実力差なんて簡単にひっくり返すことができる。さっきの幻騎士と雲雀恭弥との戦いのようにね。……僕は幻騎士と雲雀恭弥との戦闘を見たからこそ、Regalia da sogno 夢 現 のレシアなら確実に雲雀恭弥に勝てる」と判断した。

……沢田綱吉と雲雀恭弥以外の侵入者は既に催眠ガスで無力化し、全員捕えることに成功している。あとは、沢田綱吉に幻騎士を、雲雀恭弥にレシアを引き合わせる。——これで、ボンゴレは詰みだよ」

入江は暗く揺蕩う笑顔を浮かべる。彼の両眼には、コントロールルームの空間に投影された、幻騎士を倒したばかりの雲雀恭弥と、アイリス・ヘプバーンとジンジャーブレッドを倒し、入江の研究室へと直行する沢田綱吉の映像が、映し出されていた。



僕こと雲雀恭弥は今、両肩にそれぞれ山本くんとラル・ミルチさんを担ぎながら、匣兵器実験場から離れつつ入江くんの研究室へと向かっている。

今はメローネ基地に潜入し、クロームの幻術でミルファイオーレ隊員に化けていた時に奪取した端末の地図が頼りになるけど、いざれ入江くんがメローネ基地の配置を変えてしまえばこの地図も役立たずとなり、研究室へたどり着くのは難しくなってしまう。

さて。そんな現状を踏まえて、ここからどうしたものか。考えられるルートは2つ。1つはどこかで草壁さんたちと合流した後、メローネ基地の配置換えの際に入江くんの策略により、逃げ道を失いあわや迫る壁に押しつぶされそうになる、からの睡眠ガス噴射で(☒)(☒)すやあと眠りについちゃう、原作寄りのルート。もう1つはこのまま特に何も問題なく、研究室に到着するルート。

どっちがいいかと言われれば断然、後者のルートだ。入江さんに僕たちを壁で圧死させる気がないとはいえ、迫る壁に押し潰されるかもしれない恐怖を好き好んで味わいたいとは思えない。なら、ここは。今頃はもう戦闘不能の獄寺さんと了平さんを回収し終えているであろう草壁さんたちには悪いけど、僕は草壁さんたちとの合流は目指さず、このまま研究室へと向かってしまおう。……黒曜中の件といい、僕って草壁さんを見捨ててばかりだなあ。いつか埋め合わせしないと。

「ッ!」

と、ここで。突如、床がガコンと大きく揺れたかと思うと、僕を中心とした一帯が地響きとともにどんどん上へと上昇していく。まるでエレベーターにでも乗ったかのような感覚だ。僕は床が揺れた衝撃でつい落としそうになった山本くんを担ぎ直し、体勢を整える。

ちようど今、入江くんがメローネ基地を動かしているようだね。結局は草壁さんたちと合流しようがしまいが僕もまた催眠ガスでぐっすり熟睡ルートは避けられないのか、などと考えて、ふと僕は違和感を覚えた。僕のいる区画の動かし方から、入江くんが僕を催眠ガスで戦闘不能にするのではなく、どこか別の場所へと連れていき、誰かと戦わせようとしているように感じられたからだ。

誰か、誰か。入江くんには、僕と戦わせたい相手がいるのだろうか。幻騎士以外にも、まだ強敵が残っているのだろうか。でも、原作にはそんな描写はなかったはずだけど……。ハッ!? まさか、雲の6弔花!? 原作では全く示唆されてなかった雲の6弔花がこの先に待ち受けてたりする!? どうだろう、ありえるかな?

僕がむむむと唸っていると、上昇していた足場が動きを止め、前方の扉が自動で開かれる。

その先にあったのは、広々とした空間と、所々をコンテナで埋められた大部屋。ツナくんがデンドロ・キラムと戦った第二格納庫とよく



似た場所である。さしずめ、第〇格納庫といったところか。そして、その格納庫の中にやる気のなさそうな面持ちでたたずむ、黒のミルフィオーレ隊服に身を包んだ、紫髪の女性がいた。

「あふ……うー、寝みい」

当の女性は雲のリングが嵌められた右手で隠しながら大あくびをしていて、眠気を一切隠そうとしない。原作では見なかった人だ。いや、小説版やゲームには登場しているのかもしれないけれど、少なくとも漫画やアニメには登場していなかったはずの女性だ。しかし、初対面の時点で個性の強い女性だということはよくわかる。

「ねえねえ。あんたが雲雀恭弥で合ってる?」

「だったら、何だい?」

「ああ、それは良かった。入江隊長には雲雀恭弥と戦えって言われているのに、別の侵入者と戦うハメになったんじゃ、骨折り損もいところだからねえ」

（ん? これ、もしかして『いや、人違いだよ』って答えてたら戦闘を回避できたパターン? いや、入江くんがわざわざ僕をこの人とエンカウントさせた以上、入江くんにこの人が戦闘不能じゃないと都合が悪いってことだろうから、戦わないなんて選択肢はないけどさ）

「しかし、入江隊長も酷い人だね。ニゲラ隊長がいつの間にか死んじゃって、あたしはただいま絶賛傷心中だったのに、入江隊長ってばここで雲雀恭弥と戦わなければあたしをクビにするだなんて宣告してきちゃってさあ。あたしのようなただのＣランク戦士がボンゴレ雲の守護者なんぞに勝てるわけがないのに、勝てない戦いを強いるとか、マジあいつ鬼畜メガネの中の鬼畜メガネだわ。弱々しそうな見た目で油断させておいて鬼畜行為に走るなんて、ホント酷い人だよ。ねえ、あんたもそう思わなあーい?」

「知らないよ、そんなこと。僕は君の長話に付き合うつもりはない。僕の行く先を阻むのなら、咬み殺すまでさ」

ブラックスペルの女性が抑揚の乏しい声色でつらつらと言葉を紡

ぎ続ける中。僕は担いでいた山本くんとラル・ミルチさんをそつと下ろし、匣に雲の炎を注入してトンファーを取り出して両手に構え、戦闘態勢を整える。先ほど、幻騎士を相手に時間稼ぎという戦法を選んだ僕からすると、眼前のブラックスペルの女性もまた、僕という強敵を前に時間を稼ぎ、その間に何かを仕掛けているように思えてならないからだ。

「せつかちだねえ。まあいいけどさ。……あたしは第9ジラソーレ隊のCランク戦士：レシア・アルノル。まあどう考えても負けるのはあたしだろうから、あたしを殺さない程度に、お手柔らかに頼むよ。あたしはまだ死にたくないんだ」

「君の生死がどうなるかなんて、僕の知ったことじゃない」  
「ま、そうだろうね。知ってたあー」

戦闘前にも関わらず、相変わらずレシアは間の伸びた口調で、あくび交じりに言葉を紡ぐ。僕は少々毒気を抜かれつつも、雲のボンゴレリングを通してトンファーに雲の炎を纏わせ、レシアに攻撃するべくレシアへと駆ける。と、その時。

「P<sup>ポ</sup>CCO<sup>コ</sup> (少し)」

「ッー」

唐突に。なんの前触れもなく。僕の頬に切り傷が生じた。不意に頬に痛みを感じた僕は思わず後方へとジャンプしてレシアと距離を取る。

(今、僕は攻撃されたのか？ いつ、どうやって?)

「P<sup>ポ</sup>CCO<sup>コ</sup> A<sup>ア</sup> P<sup>ポ</sup>CCO<sup>コ</sup> (少しずつ)」

動揺冷めやらぬまま、僕が頬の切り傷に手の甲をあてがう中。レシアは歌うように一言、呟く。直後、僕の左足に次々と切り傷が刻まれる。

(え、待って!? 何これ、何これ!?)

レシアは何もしていない。いかにもやる気のなさそうな棒立ちのまままで、ただ僕を見つめて、短い言葉を呟いているだけだ。なのになぜ、僕は傷ついているのか。レシアが放っているであろう、この見えない斬撃の正体は一体何だというのか？ 幻術ではないことは確かだ。だって、僕の†イマジングブレイカー幻想殺し†は幻騎士の幻術だって完璧に見破ったのだ。たかがCランク戦士でしかなく、霧のリングを指に嵌めていないレシアが、幻騎士をも超えるほどに高度な幻術を使えるわけがない以上、幻術説は考えなくていい。

「SLARGANDOスラルガンド（徐々に幅広く）」

——でも、じゃあ何なんだ。幻術じゃないというのなら、今僕の体を斬り刻んでいる、この見えない、幻術でもない謎の攻撃は一体何なんだ!?

僕がレシアの攻撃を一切掴めない間も、僕の全身には次々と切り傷が刻まれていく。レシアの近くに匣兵器は存在しない。彼女は匣兵器を使っていない。ただ演奏記号らしき言葉を発しているだけだ。そのはずなのに、どうして僕の体は傷ついているんだ!? 全くもって、わけがわからない。けれど、今は謎の攻撃の正体を看破することが最優先ではない。正体不明だけど、レシアが何かをやっているのは間違いないんだから、彼女を止める。これが最善だ。

「メルカバ雲カバ！」

「ヴオオオオオ!!」

「うわあ、迫力あるなあ。んじゃあ——トラクイッロTRACQUILO（静かに）」

僕は匣に炎を注入して雲カバを召喚する。僕の意思を汲み取った雲カバは雄叫びとともにレシア目がけて突撃する。対するレシアは雲カバのインパクトに棒読みで感想を零しつつ、雲カバに優しく語りかける。刹那、雲カバはピタリとその場に立ち止まり、そのまま床に座り込み、目を瞑り、いびきをかき始める。

（なん、だと……!?!）

まさか、注入した雲の炎が足りなかった？ だから雲カバは眠ってしまった？ いや、いやいやいや。そんなわけがない。仮に雲の炎の量が足りないのなら、雲カバはその場で眠るのではなく、匣の中に戻ろうとするはず。なのに、どうして。

「ねえ、まさかあんたはこの程度の実力者なの？」

「……何が、言いたいなの？」

「あたしはねえ。あんたが幻騎士を倒したって入江隊長から聞いたから、割と覚悟決めてただけど。ここがあたしの墓場かって思ってた所なんだけど。今の時点であたしに傷一つつけられないとか、これじゃあ拍子抜けだよ。……ねえ、あんた。本当に、雲雀恭弥なの？」

嘘ついてない？ 雲雀恭弥じゃないって、嘘を白状して命乞いをするなら今の内だよ？ あたしにや、弱い者いじめの趣味はないからさ。

あんたが雲雀恭弥じゃないのなら、見逃すよ？」

「……僕は真正正銘の雲雀恭弥だよ」

「ふうん。ま、あんたがそう思うんならそうなんだろうね。あたしはもう、あんたは雲雀恭弥の偽物だって決め打つことにしたけどお」

雲カバが熟睡し、僕の匣の中に戻る気配を一切見せない中。レシアは胡乱げな眼差しを僕に注ぐ。レシアの言葉は僕に突き刺さった。僕の体は雲雀さんで間違いない。だけど、その雲雀さんの中身は偽物だ。そして今、僕のせいで。凡人な僕が敵の良いように踊らされているせいで。僕が貶められている。雲雀さんごと、僕が貶められている。……とても、とても悔しい。僕はギリリと歯噛みをする。

「アツチエレランド  
ACCCEL」（次第に早める）」

レシアの言葉に呼応して放たれる、正体不明の见えない攻撃は止まらない。僕は、レシアの不可視の攻撃を止められない。どういう因果関係の元、この见えない攻撃が生じているのかはわからない。けど、このまま突っ立っていただけじゃ、良い的だ。だから、ここは守勢に打って出る。少しでも時間を稼ぐんだ。そのための手段を、僕は持っているのだから。

「雲ハリネズミ！」

「キューイ！」

僕の炎で匣から召喚された雲ハリネズミは、その場に球針態を構築し始める。僕はその球針態の中に一旦入り込み、直後。球針態は完成した。雲の炎で構築された球針態は、内外問わず、攻撃に対して頑丈だ。ここならば正体不明のレシアの攻撃だつて防げる。今の内に考えるんだ、僕！ レシアの謎の攻撃には必ずタネがある。仕掛けがある。それを見抜くんだ。レシアの攻撃で、雲ハリネズミの球針態が壊されてしまう前に！

「ざあーんねん。moviendō（変化して）」

レシアの攻撃が届く時は、雲ハリネズミの球針態が壊された時。そのことを前提に、必死にレシアの攻撃手段について考えを巡らせていた僕は直後、腹部を深く斬られた。球針態は壊されていないのに。僕は今、球針態の中に籠っているはずなのに。レシアの斬撃は当然のように球針態をすり抜けて、僕を斬ってきた。

（なん、で……!?!）

腹部からダラダラと血が溢れ出る中。僕は狼狽を隠せなかった。僕は、何をされた？ 球針態の中に籠っているはずなのに、僕はどうしてレシアの攻撃を喰らっている？ わからない。わけがわからない。わからないことがこんなにも脅威だったなんて。これは、マズい。このままじゃ僕は、レシアに殺されてしまうんじゃないか。……どうして。どうして僕はこうも劣勢に立たされている？ Cランクの相手なんて、ミルフィオーレのボンゴレ強襲部隊と戦った時に大量に相手取ったじゃないか。なのに、どうして。

「これで、おしまい。Fine（終わり）」

「か、ふ」

僕は雲ハリネズミの球針態の中に隠れることで、レシアの攻撃を防

げるものだと思ひ込んでいた。だが、実際にはロシアの攻撃は全く防げていない。ならば、このまま球針態の中に居座り続けることは自殺行為に他ならない。ゆえに、球針態を解除しようとした、その時。僕の胸部に容赦なく斬撃が刻まれた。僕は胸から血を噴出させ、両手のトンファーを取り落とし、ガクリと両膝をつき、うつぶせに倒れた。僕が覚えていたのは、ここまでだった。

◇◇◇

雲雀恭華は敗北した。ただのCランク戦士に過ぎないはずの相手に、雲雀恭華は敗れた。

恭華の敗因は2つある。1つは、ロシアが恭華の戦い方を入江正一を通して知っていて。逆に恭華が、原作やアニメに一切登場しないロシアの戦い方を一切知らなかったこと。そして、もう1つは——  
イマジンプレイカー  
†幻想殺し†を過信したこと。

恭華は失念していた。今まで、恭華の†イマジンプレイカー幻想殺し†は彼女に強力に味方をしていた。六道骸や幻騎士の繰り出す幻術を完全に無効化し、恭華をしつかり守ってみせた。だからこそ、恭華は失念していた。僕に幻術の類いは一切通じないのだと、慢心していた。

人が幻覚を。ありもしない、現実と食い違う光景を見る時、その原因は何も幻術だけとは限らないというのに。古今東西、人を欺き騙し、現実には存在しない虚構の光景を見せる手段なんてものは、幻術以外にも枚挙に暇がないというのに。

「入江隊長から聞いたよ。あんたは幻術が効かない体質なんだってね。その話を聞いた時、あたしは勝利を確信したよ。だって、幻術が効かないってことは、幻術を経験してないってことだ。幻術に騙された体験を持たないってことだ。それが、あんたの致命的な弱点。だから、所詮Cランクのあたしでも、幻騎士を倒したあんたに勝てるって思った」

雲カバに続き。雲ハリネズミもまた、ロシアの手によりぐつつすり眠

らされる中。

当のレシアは、血まみれで床に倒れ伏す恭華の元へと、ゆっくりと。テクテクと足音を響かせながら、独り流暢に呟く。

「リングの炎が発見され、リングの炎を練りこまれた幻術がますます精巧になればなるほど、戦士は幻術を警戒し、幻術以外の、人を狂わせる手段には目を向けなくなる。だから、今の環境はあたしにとって最適。幻術が効かないチート体質持ちなんて、術士涙目な奴は、あたしにとっては最高のカモ。……年々幻術が高度になり、幻術の躍進が目立つばかりな今だからこそ、幻術以外で人を欺くあたしのやり方が刺さる。つまりはそういうこと」

レシアはブラックスペルの隊服の内に隠していた日本刀を取り出し、鞘を抜く。抜き身の日本刀は鈍い光を放ち、その刀身には恭華の首筋が映し出される。

「――雲雀恭弥、敗れたりい」

レシアは恭華の首を落とすべく、日本刀を振るうのだった。

## 風紀42. †REBORN†

「……………ここは、どこだろう？」

気づけば、僕は謎の場所に立ち尽くしていた。見渡す限り、ただただ黒い空間だ。上下左右前後が闇に塗り潰されていて、光源がない。だけど、なぜか自分の体はよく見える。かといって、自分の体が光っているわけでもない。さっきのレシアとの戦いで僕は相当血まみれになったはずなのに、今の僕の体には傷一つないし、服すら無事だし、でもいつの間にもやら並盛中の制服とは違う服装に変わってるし……うん。何とも不思議空間だ。

——って、そうだよ。僕は、レシア・アルノルに負けたんだ。どう考えても幻騎士よりは弱いはずの、あのブラックスペルのCランク戦士の女性に。

僕は、どうなったのかな。レシアに胸を斬られて、倒れて、意識を失って、気づけば僕以外真っ暗な世界にいて。……この状況。僕は死んだ、そう考えるのが普通だ。たとえばあの胸の斬撃で僕が死んでいないとしても、レシアがトドメを刺さないとは思えないし。戦闘不能な山本くんやラル・ミルチさんが窮地の僕を救えるとも思えない。ここはさしずめ、死後の世界なのだろう。

(そっか。……ここが僕の限界か……)

僕は真っ暗な上空をぼんやりと見上げて、心の中でポツリとひとりごちた。何が原因か、雲雀さんの体に憑依してしまっただけからというもの、今まで僕は雲雀恭弥として敵と戦ってきた。その中に黒星なんてなかった。僕は今までの敵との戦いを全て、勝利か引き分けかで終わらせてきた。

それは、原作の雲雀さんよりも優秀な戦績だ。原作の雲雀さんは黒曜編で骸くんに敗北したし、未来編での幻騎士との戦闘に決着はつかなかったけど、10年後でない原作の雲雀さんに、幻騎士との戦闘を勝利に収めることはできなかっただろう。対して、僕は骸くんとは引



き分けに持ち込んだし、幻騎士を撃退することができた。

「——ワオ、面白いね。まさか君と直接顔を合わせる時が来るなんて、思わなかったよ」

「だけど、それは僕に原作知識という強力なカンニングペーパーがあつたからだ。加えて。1の努力で10の結果が伴う、高スペックの極みな雲雀さんボディや、僕が雲雀さんに憑依することによって生じたイマジネーションプレイヤー<sup>イマジネーションプレイヤー</sup>†幻想殺し†という頼もしいスキルがあつたから、今までは強敵相手でも負けずに済んだ。」

「ねえ。君、聞いている?」

「だけど、原作知識がなければ。敵との間に情報の優位性がなければ。所詮、僕はこんなもの。それが今回、証明された。僕は所詮、凡人でしかなくて。だから情報が全くないレシアのトリッキーな戦い方にただただ翻弄されて、負けた。そして多分、死んでしまった。」

「へえ。僕が話しかけているのに、無視するんだ」

「原作の雲雀さんならこんな結末にはならなかっただろう。多少怪我は負うだろうけど、きっと。雲雀さんの天才的なセンスの為すがままに、半ばゴリ押しでレシアを倒せたことだろう。」

「いい度胸だね。じゃあ——」

「ごめん、ごめんね。雲雀さん。いつかこの体を返すその時まで、頑張って生きるつもりだったけど。悲しいまでに凡人な僕には、パワーインフレ激しいリボーンの世界は荷が重かったみたいだ。……僕はもう助からないとして、山本くんやラル・ミルチさんはどうなったのだろうか。僕が負けたせいで、2人もレシアに殺されてしまうのだろうか。僕のせいで。僕の、せいで——!？」

「かはッ!？」

「刹那。僕の思考を遮断する強烈な殴打が僕の腹部を襲った。たま



中性的な声じゃなくなっていることに。そして。今の僕の体が、雲雀さんの姿じゃなくなっていることに、雲雀さんの鋭い瞳の反射を通して気づいた。この姿は、雲雀さんに憑依する前の、本来の僕の体だ。

(……………うん、何これ。本当に、何が起こってるの?)

「さつき、君は『ここはどこか?』と言っていたね。その問いに答えよう。……………ここは生と死の狭間だよ。死にかけた人間は皆、ここに来ることになっている。レシア・アルノルの攻撃で深手を負った君も、例外じゃない」

「……………んん?!」

雲雀さんの発言を受けて、僕は困惑具合を深める。己の中で疑問が一気に噴出したからだ。生と死の狭間とは一体何なのか。どうしてここが生と死の狭間だと雲雀さんは知っているのか。どうしてその生と死の狭間とやりに雲雀さんがいるのか。どうして——。

「どうして僕とレシアの戦いのことを知ってるのさ!?!」

「君のことを見ていたからね」

「ええ!?! 僕を見てたってどこで!?! どうやって!?!」

「情報源は『家庭教師ヒットマンREBORN!』だよ、井伊春白虎いいはるびやっこ」

「んんんんツ!?!」

雲雀さんの口から『家庭教師ヒットマンREBORN!』や、僕が雲雀さんに憑依する前の名前である『井伊春白虎』なんて言葉が飛び出してきたことに、僕はますます混乱する。そんな、頭から大量のクエスチョンマークを放出する僕を前に、雲雀さんは僕の疑問を氷解させるべく言葉を紡ぐ。

「僕はね。ある日突然、僕の元いた世界とは違う世界に住む井伊春白虎の体に、君の体に精神だけ憑依した。何の前触れもなく、唐突に世界を飛び越えてしまった僕は、元の世界に戻るために情報を集めた。並盛町が存在しない、君の世界に興味はなかったからね。そうして、原因不明の世界跳躍の秘密を探る中で、僕は『家庭教師ヒットマンR

「EBORN!」という漫画を見つけたんだ」  
「ッ！」

「その漫画では主に並盛町が物語の舞台となっていた。草壁哲矢や笹川了平といった、見覚えのある草食動物が漫画のキャラクターとして描写されていた。そして、僕のことでもまた描かれていた。急に料理を始めた、武器としてトンファー以外にムチやポイズンクッキングを採用して使い始める、そんなあまりに僕らしくない僕のが描かれていた。だから。僕に漫画を読む趣味なんてなかったけれど、元の世界のことを知る手がかりとして、リボーンの展開を追うことを習慣にしたんだ。君がロシアに敗れたことを別世界に生きる僕が知っていたのは、最新の週刊少年誌を通じて君がロシアに負けたとの情報を得ていたからだよ」

「は、はえー」

雲雀さんは語る。雲雀さんの発言内容には、僕が雲雀さんに憑依した当初こそ気になっていたものの結局は考えることをやめていた疑問ごと『本来の僕の体はどうなってしまったのか』や『本来の体の持ち主たる雲雀さんの意識はどこへ行ってしまったのか』についての答えが詰まっていた。そんな衝撃の事実を受けて、僕は驚愕に満ち満ちた、情けない声を漏らすことしかできない。

僕が雲雀さんの体に憑依したように、雲雀さんも僕の体に憑依している。僕の元の世界にて連載されている『家庭教師ヒットマンREBORN!』の展開から雲雀さんは僕の現状を知った。けどそれは、僕の知る『家庭教師ヒットマンREBORN!』とは違う。だって、僕がハマったりリボンでは雲雀さんは男で。僕の体に憑依した雲雀さんが読んだりリボンでは雲雀さんは女&中身が僕だ。加えて、僕が知ってるリボーンは原作もアニメも既に未来編が終了しているのに対し、雲雀さんが読んだりリボンでは原作がまだメローネ基地突入編の真っ最中のようなのだから。

(僕が雲雀さんに憑依した影響で、リボン原作が再構成されてるっていうのは気になる所だけど、ここはちよつと置いておこう。それよ

り——」

「ねえ雲雀さん。さつき雲雀さん、ここは生と死の狭間だって言ったよね?」

「うん」

「僕がここにいるのはロシアに負けたからだけど、じゃあ雲雀さんはなんでここにいるの?」

「僕も今、死にかけているからね」

「え。死にかけてたって、どうして?」

「敵との戦いで少し無茶をしたからね」

僕は現状で一番気になり始めていた、雲雀さんが生と死の狭間にいる理由を尋ねると、雲雀さんは意味深に笑みを濃くしながら、さらつと返答する。しかし、雲雀さんには肝心の死にかけて内容について語るつもりはないようだ。

（いやいや、待とうか。僕の元の世界は平和だよ? リボーンの世界に比べて平和な現代社会だよ? その世界に、その辺によくいる凡人で一般人な僕の体に憑依した状態で、何をどうしたら『敵と戦って無茶をして死にかける』なんて状況になるのさ、雲雀さん!）

「本来、この世界で他人と会うことはないのだけど……こうして僕たちが邂逅したのは、雲雀恭華の体を借りる井伊春白虎と、井伊春白虎の体を借りる雲雀恭華とが、ちょうど同時に死にかけてたから、という所かな?」

「……」

「生と死の狭間を訪れた人間は必ず生還する。この領域を訪れる者の条件が『本来死ぬ運命でない者が死にかけること』だからね。当然、君も死の間際から一命を取りとめる。その時、この生と死の狭間にいた間の記憶を覚えている者はほんの一握りだけだ」

「……え、えっと。雲雀さんって、どうしてそんなに生と死の狭間について詳しいの?」

「井伊春白虎の体に憑依してからはよく訪れるからね。昼寝をするのに……まで快適な場所はそうそうないよ」

「そんなに何回もここに来たことあるの!？」

「数えるのをやめたくらいにはね」

「えええ……」

(本当に僕の体でどんな人生を送ってるの、雲雀さん!? 凄く気になるんだけどツ！)

雲雀さんはやけに、僕と雲雀さん以外が闇に閉ざされた生と死の狭間について詳しい。そのことについて僕が素直に疑問を投げかけてみると、雲雀さんはこれまた事も無げな口調で、井伊春白虎ほくの体に憑依した後にも何度も死にかけているカミングアウトを行う。あまりに想定外極まりない雲雀さんの爆弾発言に、僕は言葉を失うばかりだ。

「だから、ここで君に何を言っても君はすぐに忘れてしまうかもしれないけど、せつかくだから少し言わせてもらおうよ」

「ツー」

そんな僕の心境など知ったことかと雲雀さんは続けて言葉を綴る。テクテクと僕との距離を詰めてくる。徐々に近づいてくる雲雀さんを前に、僕は思わず身構える。ついに審判の時がやってきたと悟ったからだ。

(ど、どどどどどどうか、半殺し程度で終わりますように！ 甘噛みレベルの咬み殺しっぷりで済みますように！)

僕は雲雀さんに憑依してからというもの、僕にできる範囲で雲雀さんロールに努めてきた。だが、同時に僕は結構好き勝手にやってきた。ポイズンクッキングの一種：溶解さくらもちを自分の攻撃手段に加えたり、男装してない時は普通にツナくんたちと群れて仲良くしたりといった行為は、雲雀さん的には看過できない許されざる所業だろう。だから、ここで。このタイミングで。僕は雲雀さんに制裁される。そう思った。

「井伊春白虎。君は——無理に僕を真似して生きなくていい」

「……………へ?」

生と死の狭間で雲雀さんにボコボコにされたらどうなるのだろうか。そんな疑問が僕の脳の隅でちらつき、戦々恐々としている中。いつでも僕を攻撃できる圏内まで歩み寄ってきた雲雀さんは、凜とした眼差しで僕を見つめて、一言。心底意外な一言を放った。

「僕は群れるのは大嫌いだ。群れている連中を見ているだけでもイライラする。ムカつく奴はとりあえず咬み殺して黙らせたくなる。並盛には強く思い入れがあるし、だからこそ並盛の風紀を守ることを誇りとしている。日頃男装していたのは、譲れない理由があるからだ。これが僕だ。……でも、君は違う。草食動物が肉食動物を無理して模倣する必要はない。草食動物には草食動物の強さがある。それを活かして、君らしく生きていけばいい。僕が君の体で好きに生きてるように、君も僕の体で好きに生きればいい。僕が元の体に戻ることなんて想定しなくていい。雲雀恭華の体はもう、井伊春白虎の物だから」

「え。いや、でも……雲雀さんは元の世界に戻りたいんだよね？」

「それは君の体に憑依した当初の話さ。今は元の体に、元の世界に戻りたいとは思っていない」

「そう、なの？　だけど、僕の世界に並盛町はないのに、どうして？」

「もう君の世界に並盛町を作ったからね」

「へあ!？」

「手頃な地域一帯を武力制圧して、並盛町として作り変えたんだ。今の僕は新しく作った並盛町のことでも忙の身だからね、帰る気はないんだ。……君の世界に並盛町がないのなら、作ればいい。簡単な話だろう？」

「……」

心なしか上手いこと言った感に満ちあふれた顔という、凄く貴重な表情をした雲雀さんをよそに、僕は今度こそ絶句していた。雲雀さんが僕の世界で、僕の体でとんでもないことを平然とやっていたからだ。きつと、井伊春白虎の体に憑依した雲雀さんが何度も死にかけたことがあるのも、この雲雀さんの型破りな行動が関連しているのだろ

う。

「もう一度言うよ。君は、僕の真似をしなくていい。男装が嫌ならやめればいいし、並盛の風紀を守ることにこだわらなくていい。咬み殺したいほどにイライラする奴がいないのにトンファーを振るう必要はないし、本当は群れたいのに孤高を気取ることはない。マフィアを続けるもやめるも君次第だ。とにかく君は僕のことなんて知ったことかと、君らしく最期まで生き続ければいい」

雲雀さんは少々脱線しかけた話を戻すようにして、改めて僕に自分らしく生きるようアドバイスをしてくる。何だろう。今、僕の目の前にいるのは本当にあの雲雀さんなのだろうか。群れることを嫌い。ほんの些細なことでも苛立ち。すぐに手を出し、咬み殺す。そんな傍若無人で、狂犬的なあの雲雀さんなのだろうか。それにしても随分と優しすぎやしないだろうか。……僕の知る雲雀さんは男の雲雀恭弥さんで。今日の前にいるのは女の雲雀恭華さんだ。その性別の差から生まれた結果が、この優しめな雲雀さんなのだろうか。それにしても違和感があるけれど。

「……！」

と。そこまで考えて。

僕は今まで気づかなかった部分にふと思ひ至り。直後、衝撃に心から打ち震えた。

きつと。雲雀さんは変わったのだろう。ある日突然、別世界に生きる、別人の体に憑依して。僕という、1の努力で0.5の結果しか得られない、凡人の体に憑依して。今まで1の努力で10の結果を得られた雲雀さんの天才的なボディを使って当たり前前にできていたことが全然できなくなったせいで。大なり小なり変わらざるを得なかったのだろう。

でも、それでも。雲雀さんの根幹は今もなお変わっていない。雲雀さんボディと比べて色々と劣化しまくっているはずの僕の体に憑依するという特大級の悲劇に見舞われても腐ることなく、止まることな



く。たとえ何度死にかけるような目に遭おうとも、自分の感情にどこまでも忠実で。自分のやりたいことを決して妥協しない。そんな、何者にも囚われることのない、孤高の浮き雲な生き方を今日まで貫いてきた。だからこそ今、僕と雲雀さんはこの生と死の狭間で会っている。

(凄い、やっぱり雲雀さんは凄い……！)

僕は心から、雲雀さんに感激していた。この時、僕の脳裏にはリボーンにハマった当時の心境がフラッシュバックしていた。

僕はリボーンのキャラの中で一番雲雀さんが好きだった。雲雀さんの大胆不敵さに、孤高さに、そしてどこまでも自由に生きる雲雀さんに憧れたからだ。だから。僕も雲雀さんを模倣しようとした。でも、僕は所詮凡人だから、超人である雲雀さんの生き様の模倣はできなかった。精々一人称と口調、それと髪型くらいしか、雲雀さんに寄せられなかった。そのせいか、いつしか僕は自分のことを『凡人』と称する頻度が増えていた。僕はあくまで凡人だから、雲雀さんのようになれないのは仕方ないと、諦める理由を『凡人』の言葉に求めていた。

だけど。僕は今、知った。雲雀さんが僕の凡人な体に憑依して、それでも憑依前と変わらずに自分のやりたいことをやりたいようにやって人生を謳歌している事実を知った。それは、たとえば体のスペックが凡人レベルでも、意志さえあれば、その意志を貫く強固な覚悟さえあれば。この世の中、できないことはないという証明だった。

雲雀さんが凡人スペックな僕の体でできたことを、天才スペックの雲雀さんボディに憑依した僕にできないなんてウソだ。僕も。僕も。雲雀さんみたいになりたい。雲雀さんへの憧れを、憧れに終わらせたくはない。だから。

「ありがとう、雲雀さん。でも、雲雀さんの気持ちは嬉しいけど……僕はこれからも自分なりに雲雀さんを模倣して生きることにするよ。だって、雲雀さんは僕の憧れだから。強くて、気高くて、カッコいい。

そんな雲雀さんみたいに、僕もなりたいから」

僕はあくまで雲雀さんを模倣して今後も生きていく旨を雲雀さんに宣言した。そんな僕の物言いに雲雀さんは意外そうに目を見開く。今まではずっと僕の方が雲雀さんに驚かされてばっかりだったから、新鮮に感じた。

「そう。なら、勝手にしなよ」

「うん、勝手にする」

「……ふふッ。いいね、僕好みの眼だよ、井伊春白虎。君が僕らしく生きるといふのなら、まずはあの思い上がったレシア・アルノルに手負いの肉食動物の恐ろしさを刻み込むことからだね」

「そうだね。まずはレシアにリベンジしないとだ。僕の憧れる雲雀さんは、あんな無様な負け方で終わったりしないしね」

僕と雲雀さんはお互い、口角を吊り上げて微笑み合う。擬態語をつけるなら、僕はニコリで、雲雀さんはニイイイといった感じ。やっぱり雲雀さんの笑顔は野性的で、様になっている。

と、ここで。闇に覆われた生と死の狭間全体にビシリと盛大にヒビが入り、所々に白の光が差し込んでくる。そろそろ生と死の狭間に留まることのできるタイムリミットが迫っていると、僕は容易に推察できた。

「精々僕の体を賢く使って生きあがくことだね、井伊春白虎。その様を、これからも見ているよ」

「うん、精いっぱい頑張るよ。雲雀さんはあんまり無茶しすぎないでね。僕の体は雲雀さんのと違って脆いんだからさ」

だから。僕と雲雀さんは最後に、互いに健闘の言葉を残す。直後、生と死の狭間に盛大にガラスが破碎したかのような衝撃音が響き渡り、闇の世界が白の光一色に染まっていく。

……僕は今まで、雲雀さんの体に憑依してからというもの、ずっと罪の意識を感じていた。何の前触れもなく唐突に、雲雀さんの意識を

体から追い出し、僕のような凡人風情が乗っ取ってしまったと、心のどこかで罪悪感を抱いていた。だからこそ、僕はいつか雲雀さんの精神が戻ってきた時に雲雀さんの体を返すつもりでいた。

だけど、当の雲雀さん本人が認めてくれた。僕がリボーンの世界で、雲雀さんとして、自由に生きること承認してくれた。

雲雀さんが良いって言うてくれるのなら。この体で、この恵まれた雲雀さんボディで、僕も好きなように生きてみせる。

雲雀さんが漫画を通して僕の行く末を見ていてくれるのなら。雲雀さんに恥じない生き方を、戦い方をしてみせる。雲雀さんに誇れる僕になってみせる。

そこまで考えたのを最後に、僕の視界は完全に白一色に塗り潰され。

そして、僕の意識は再び途絶えるのだった。

◇◇◇

生と死の狭間で。本物の雲雀恭華との偶然の邂逅を通して。

この時。この瞬間。凡人は心から覚悟を決めた。

雲雀恭華として、『家庭教師ヒットマンREBORN!』の世界で生涯を全うし、骨を埋める覚悟を決めた。

『凡人』を逃げる言い訳に使わないで、憧れの『†ボンゴレ雲の守護者†雲雀さん』を本気で目指す覚悟を決めた。

気持ちを一新し、新生した凡人の覚悟に——雲のボンゴレリングは応えた。

◇◇◇

「——雲雀恭弥、敗れたりい」

メローネ基地の第四格納庫にて。第9ジラソーレ隊のCランク戦士：レシア・アルノルは、胸部と腹部から血を流し倒れる雲雀恭弥の

首を落とすべく、手に持つ日本刀を振り下ろそうとする。が、ここで。レシアはあることに気づいた。気づいてしまった。

「……え？ 女？」

レシアは思わず日本刀の振り下ろしをキャンセルする。彼女の両眼は、先ほど雲雀の胸に斬撃を浴びせた際にバツサリと断ち切った制服のその先を凝視していた。彼女の視線の先には、切断されじんわりと赤に染まるサラシがあった。男にはありえないはずの小ぶりな胸部の膨らみがあった。ゆえに。レシアは動揺し、思わず硬直する。

（え、待ってえ。本当にこの子、偽物の雲雀恭弥なの!? どうゆうことお!? いやいやいや、そりやあさつきは『雲雀恭弥の偽物だつて決め打つ』とかキメ顔で言っただけだお、でもまさか本当に偽物説が真実味を帯びてくるなんて思わないじゃん、普通！ え、でも。でもだよ？ 入江隊長がわざわざ基地を動かしてまで連れてきたのに、偽物なわけではないよねえ!? じゃあ、雲雀恭弥の本当の性別は女だったってことお？ いくら何でもそんなこと……あ、そうだ。そういえば確か、雲雀恭弥には妹がいるって話があったような？ ボンゴレ狩りの対象になつてるんだっけえ？ じゃあ、この子がその妹さん？ でもその妹さんがなんで兄の変装をしてまでメローネ基地に襲撃をかける必要があるの？ ……ううう、こんがらがってきた。もういいや。考えるのは後にして、今はさっさとこの雲雀恭弥(?)を殺してしまおう。そして寝よう、そうしよう)

雲雀恭弥は男だとの認識を根本から覆すような事態に半ばパニックになっていたレシアだったが、段々と考えることが面倒になったため、今しがた気づいてしまったことを一旦無視する方針を固めた上で、雲雀にトドメを刺すべく再び日本刀を振り上げた。

「なッ!？」

刹那。雲雀の右手の中指にはめられた雲のボンゴレリングから、勢いよく炎が噴出した。思わぬ事態に、レシアは反射的に後方に跳躍し

て雲雀と距離を取る。一方、歓喜に打ち震えるように強大に沸き上がる、どこまでも純度の高い&雲雀の体の2倍以上のサイズの雲の炎に包まれながら、雲雀はゆらりと立ち上がった。

雲雀に視線を向けられたレシアはこの時、気圧された。大型の肉食動物に為すすべもなく捕食される無力な自分の姿を幻視してしまった。それほどの圧倒感を、今の雲雀は放っていた。

(何よこれ、さっきまでとはまるで別人なんだけとお。雲雀恭弥に一体何が……?)

「――遊びは終わりだよ、レシア・アルノル。君はここで、咬み殺す」

レシアが内心で冷や汗を流す中。雲雀は標的を定めた猛獣のように、目を細めてニヤリと口角を吊り上げるのだった。

### 風紀43・†憧れへの第一歩で風紀を守ろう†

「――遊びは終わりだよ、ロシア・アルノル。君はここで、咬み殺す」  
ミルファイオーレの日本支部ことメローネ基地。その格納庫にて。

意識を取り戻した僕は足元のトンファアを拾い上げ、何やら動揺冷めやらぬ様子のロシアをジツと見据えつつ、不敵に笑う。今まで僕の前で終始余裕を見せていたロシアの焦りようから察するにきつと、さつき胸に深い斬撃を浴びせたはずの僕がまだ生きていて、さも当然のように立ち上がったことがロシアにとって相当に想定外なのだろう。

「……」

僕はトンファアを握った右手を持ち上げ、右手の中指を見つめる。そこには、雲のボンゴリングが嵌められていて。僕の体を軽く超えるほどに膨大なサイズの雲の炎が湧き出している。10年後の世界に行く前の僕が散々出そうと頑張つて、でもまるで出せなかった覚悟の炎。何だかとても、感慨深い。

この雲の炎は、僕がこの世界の当事者になった証だ。僕がこの世界で、雲雀恭華として、最期の最期まで生き抜く覚悟を決めた証だ。

雲雀さんが僕を認めてくれたから。僕がこの世界で生きることを承認してくれたから。僕は今、これほどの覚悟の炎を生み出せている。

(雲雀さん……)

生と死の狭間にいた間の記憶を覚えている人はほんの一握りしかない。そう雲雀さんは言っていたけれど。大丈夫、僕は忘れてない。あの生と死の狭間で雲雀さんが僕に言ってくれたこと、僕に残してくれた言葉、全部覚えてる。

(覚えていることができてる、本当によかった。そこだけがどうしても

不安だったんだ。……雲雀さんがくれた言葉は一言一句、忘れやしない。全部胸に刻み込んで、僕の人生を歩んでいこう)

——精々僕の体を賢く使って生きあがくことだね、井伊春白虎。その様を、これからも見ているよ。

(うん、見ていてよ。雲雀さん。憧れの雲雀さんに至るための、僕の第一歩を！)

僕はゆったりとした動作でトンファーを構え、レシアの出方を静観する。さっきまではレシアの攻撃方法がまるでわからずに焦って、守勢に打って出たりしたけど、そんな戦い方は雲雀さんらしくない。この場面、雲雀さんなら堂々と構えている。そして相手の一挙手一投足を注視し、草食動物たる敵の小賢しい知恵を看破して、圧倒的な力でぶち破ってこそその雲雀さんだ。だからこそ、僕も雲雀さんを模倣する。雲雀さんらしく、泰然とした様子でレシアに鋭い眼光を送りつける。

「……ね、ねえ、もう一度聞くけどさ。あんたって本当に、雲雀恭弥なの？ 嘘ついてない？」

「僕は僕だよ。それ以上でもそれ以下でもない」

僕の威圧がある程度の効果を発しているのか、レシアは半ば震え声で僕に問いかける。さっきはレシアのこの問いに随分と心を揺さぶられて、僕はあくまで自分は本物の雲雀恭弥だと言い張った。僕という凡人が憑依しているせいで、雲雀さんまでもが貶められていることに悔しさを感じたからだ。でも、今は。特にどうとも感じない。誰に何と言われようと、自分の思うがままに、好きなように生きる。そんな雲雀さんの生き様を再び希求し始めた今の僕にとって、僕を貶める言葉なんてほんの欠片も気にならない。そよ風にしか感じない。

「起きなよ、君たち」

「ヴァッ!」

「キュッ!」

未だに狼狽したまま、僕に攻撃を仕掛けてこないレシアをよそに、

僕は足元でぐっすりと眠る雲カバと雲ハリネズミを、軽く靴先で蹴る。たったそれだけの刺激を与えただけで案外すぐに目覚めた雲ハリネズミと雲カバを一旦、匣の中に仕舞う。

「君はいつまでそこで突っ立っているんだい？ 待つのはもう飽きたから、僕から行くよ」

「ッ！ え、待って、タンマ。待ってってばあ!？」

僕はトンファーに雲の炎を纏わせながら、レシアとの距離を一息に詰めてトンファーを振るう。対するレシアは右手に持つ日本刀で僕に反撃する気配をまるで見せず、しゃがんだり、後方に跳躍したりといった形でひたすら僕の攻撃の回避に徹する。

（やっぱり雲雀さんボディは凄いな。雲雀さんの体だから、この大怪我でも普通に戦えてるんだろうけど……）

僕がレシアへ攻撃を仕掛けている間も、僕の腹部から、胸部からは途切れることなく血があふれ出ている。悠長に時間を使って戦うわけにはいかないし、もうこれ以上、一撃だつてレシアの攻撃を喰らうわけにはいかない。だからこそ。僕はレシアの見えない斬撃を警戒する。レシアが技名らしき演奏記号を口にする瞬間を警戒しながら、レシアを狩るべくトンファーを振るい続ける。

「トラクイッロ（静かに）」

「——う!？」

と、ここで。レシアが一言呟いた瞬間、唐突に眠気が膨れ上がり、僕を襲う。睡魔の不意打ちに僕の意識は為すすべもなく闇へと閉ざされ——

「ッ！」

——そうになる寸前、僕はとっさに匣に雲の炎を注入し、雲ケムリを噴出させた。僕の膨大な雲の炎により開匣させられた雲ケムリはあつという間に格納庫中を白一色に染めていく。直後、あれだけ強烈



に感じていた眠気が一瞬にして吹き飛んだ。

(なるほどね。レシアは演奏記号を呟いたタイミングで僕に睡眠ガスの類いを使ってきたのか)

だからこそ。ついさつき僕は唐突に眠りたくなってしまった。雲ケムリを僕を起点に充満させることで睡眠ガスを僕の元から押し出した結果、僕の眠気が解除された。さつき雲ハリネズミや雲カバが眠ってしまったのも、この睡眠ガスのせいだろう。

「うー、惜しいなあ。あと少しだったのに」

「随分と小賢しい真似をするんだね」

「いや、だってえ。楽しんで勝てるならそれに越したことはないでしょ？ だからさ、あんたもそんなダラダラ血を流したまま、いつまでも無理して戦ってないでさ、そろそろ倒れてくれないかなあ？ あたしが精神的ストレスで健康を害してニゲラ隊長みたいにハゲちゃわない内にさ」

「嫌だね。思い上がった草食動物を野放しにする趣味はないんだ。それに、もう健康を気にする必要はないよ」

「？」

「君には、僕に咬み殺される未来しか残されていない」

雲ケムリによる濃密な白煙で塞がれていた視界が徐々に晴れゆく中。僕との戦闘が再開されたことで狼狽状態から平静を取り戻したらしいレシアのため息混じりの発言に、僕は軽く言葉を返ししながら、右手に持っていたトンファーを床に投げ捨て、空いた右手に10年前から持ち込んだ方のトンファーを1本構え、銃弾を放つ。

不用意にレシアに近づいては、再びレシアに睡眠ガスを放たれてしまう。さつきはどうかか睡眠魔に抵抗できたが、今のズタボロな雲雀さんボディで次も睡眠魔に抗えるかはわからない。ならば、レシアに近づかない形で攻撃するべきだ。そのような考えに基づいた、僕の銃撃である。ちなみに、もう1本のトンファーは幻騎士との戦いの中で蹴り飛ばして以降、行方不明だったりする。

「ちよッ!? そんな攻撃聞いてないってえ!」

僕のトンファーから銃弾が飛び出したことにレシアは盛大に驚愕しつつもとつさに真横に跳び、銃弾を間一髪で回避する。

(そうだ。そういえば、レシアは僕の戦い方を入江くんから聞いたって言っていた。入江くんが見ていたのは、僕と幻騎士との戦いだ。でも、入江くんが観戦できたのは、あくまで僕と幻騎士の戦場が裏・球針態という名の密閉空間に変わるまでの話。だから、僕のトンファーに銃機能があることをレシアは知らないわけか)

「このッー・ALLアレEGレROロ(快速に)ー!」

レシア目がけてトンファーから銃弾をばらまきつつ、僕はレシアが僕の戦い方をどこまで把握しているかの情報収集に取りかかる。一方のレシアは銃の標的にされている現状を打破するために、技名な演奏記号を叫んだ。

レシアの見えない斬撃が来る。未だ、レシアの攻撃手段はわからない。だけど、対策方法には1つ、当てがある。それをさつき、本物の雲雀さんとの対話を通して、僕は思い出した。

「もうその攻撃は通じないよ」

「ええッ!? ウソ、見えないはずのあたしの攻撃を!」

ENEエRGネICルCOジ(力強く)ー!」

「何度やっても同じことだよ」

「マジ、で……!?!」

僕はレシアへの銃撃を一旦やめて、左手の雲の炎を纏ったトンファーで眼前の一見何もない空間を殴りつける。刹那、ガキンとの金属の衝突音が響き渡り、僕の足元に斬撃痕が刻まれる。本来僕の体を斬るはずの見えない斬撃をあつさり防がれたことに、レシアは驚きながらも偶然だと思い込み、再度見えない斬撃を放つ。が、これも僕が軽くトンファーを振るって見えない斬撃を払いのけると、レシアは今度こそ愕然とした表情を浮かべた。

(よし、やっぱりこの方法ならレシアの見えない斬撃を攻略できる)

僕がどうやって迫りくる見えない斬撃を攻略したのか。答えは簡単だ。原作の10年後雲雀さんのように、雲のボンゴリングに灯した雲の炎を周囲一帯に薄く照射し、レーザー代わりにしたのだ。その結果、周囲に放射された雲の炎の揺らぎから、見えない斬撃がどこから来るのかを把握したのだ。見えない斬撃の仕組みを暴こうと躍起にならないで、見えない斬撃の回避手段を見つけて対処する。それだけで良かったのだ。レシアの見えない斬撃は、たったそれだけのことで攻略できる程度の攻撃でしかなかったのだ。

(こんな簡単なことに気づけなかったなんて、僕はいつの間にか、イマジンプレイカー↑幻想殺し↑に頼りすぎてたようだね。後で反省しないと。まあそれはさておき、レシアの攻撃のタネが見えてきた。もしも演奏記号を呟くだけで見えない斬撃を放てるのなら、演奏記号を連呼すればいいはずだ。演奏記号をひたすら言いくまくって、見えない斬撃を生み出して、それで銃弾を防げばよかったはずだ。けどレシアはわざわざ体を動かして回避した。さっきも、僕の振るうトンファーを必死に躲すだけで、見えない斬撃を放とうとはしなかった。……ここから察するに、レシアは見えない斬撃をそう立て続けには放てないんだ。それと、あの見えない斬撃はレシア自身が生み出していない可能性が高い。きつと、レシアの匣兵器だろうね。この10年後の世界で、匣兵器を一切使わずに戦うミルフイオーレ兵なんて少数派も少数派だ。レシアが匣兵器を使う素振りを見せないことに、まずはそこに疑問を持つべきだったんだ。ああもう反省点が多いなあ、僕って奴は!)

「そろそろ君の匣兵器にご登場願おうか」

「……ん? 何のことかなあ? あたしは匣兵器なんて持ってないけど?」

僕は自然と笑みを浮かべながら、レシアの発言内容を無視して匣に膨大な雲の炎を注ぎ込む。どこかに隠れ潜んでいるレシアの匣兵器を見つけ出すために、僕の匣兵器を暴走状態で召喚して全力で暴れて

もらおうとの魂胆である。

選んだのは、雲カバだ。少なくとも、雲ハリネズミだけは暴走状態で呼び出してはならないからだ。この場所は入江くんの研究室と近いはず。雲ハリネズミの暴走の結果、研究室の白くて丸い装置を万が一にも壊してしまつたら大惨事だからね。雲アリも、暴走状態にさせたらこの格納庫を埋め尽くす勢いで増殖しかねない。そんなトラウマ不可避な光景を見たくはない以上、選ぶは雲カバ一択だ。それに雲カバなら例え暴走したとしてもそう広範囲にメローネ基地を破壊する結果にはならないだろうしね。

「ヴオオオオオオオオオ!!」

僕の生み出した膨大な雲の炎を受け取って、匣の外に飛び出してきた灰褐色の雲カバ。僕の目の前で咆哮を轟かせる雲カバは、テキトーに見積もっても体長20メートル級の、いつもの雲カバの軽く5倍以上の巨体になっていた。

「デカアアアアアッ! 説明不要!!」

というか、メルカバさんデカすぎいいいいいいいいいい!!  
こ、これが僕の膨大な雲の炎を取り込んで、暴走したメルカバかあ。  
なんか、アイリスの死茎隊みたいになってるじゃんか。その内、『プハア!』とか『プア!』とか叫んだりしないよね? 信じてるからね、メルカバ。僕の期待を裏切らないでね?」

「な、ななななななななこれ!? 何なのこれ!? なんであのカバがあるなにでかくなつて!? さつきと全然サイズが違——」

「ヴアアアアアアアアアアア!!」

「ひいいいいいい!!」

あまりに巨大な雲カバを目の当たりにして激しく動揺しているレシアへと、雲カバは容赦なく突進する。雲カバの攻撃を喰らってしまったら明らかに即死するため、レシアは悲鳴とともに、雲カバの突進先から全力で逃げ始める。対する雲カバはレシアの逃げ先へと方向転換することなくまっすぐ突進を続け、格納庫の壁へと体当たりをかま

し、格納庫の壁を思いつきりぶち壊した。

「あ。やっば……！」

壊された格納庫の壁へと視線を移し、青ざめた顔でレシアがポツリと焦燥の声色で呟く。一方の雲カバは攻撃対象のレシアを見失つてもなお、暴れることをやめない。格納庫付近の壁を、天井を、床を次々と破壊し続けていく。

「——ッ!？」

と、その時。僕の両眼が捉えていた光景は一瞬にして様変わりした。『漫画やアニメには登場していなかった』と僕が判断できるほどに顔を晒していたはずのレシアがガスマスクを装備して顔を隠している光景に変化した。格納庫の片隅の何も無い空間に雲の炎を纏うラフレッシュアらしき巨大な花がどっしりと鎮座する光景に変貌した。僕の前方と背後の空間に、雲の炎を纏った刃の尻尾を持つカマイタチらしき動物が存在する光景に切り替わった。その全てが、刹那にも満たない一瞬で発生した変化だった。

「そういう、ことか」

僕は理解した。僕の頭の中で、全てが繋がった。

(なるほど、ね。レシアは僕が格納庫に来る前に、毒ガスの類いをあらかじめこの格納庫に充満させていたんだ。その毒ガスのせいで、僕の五感が、認識が狂わされていたんだ。この格納庫に入った時点で、僕はレシアの罠にかかっていたんだ)

僕には<sup>イマジネーション</sup>幻想殺し<sup>レイカー</sup>があるから幻術は通じない。でも、毒は普通に通じる。ポイズンクッキングを毎朝食することで毒への抵抗力をつけてきたけれど、デスヒーターにだって普通に苦しめられた。だから、レシアの毒ガスだって僕には通じてしまうのだ。

今ならわかる。格納庫に毒ガスを散布したのは、あのラフレッシュアっぽい匣兵器だろう。ついでに、僕や僕の匣兵器に睡眠ガスを散布した

のもあのラフレシアの匣兵器だろう。一方で、僕に見えない斬撃を飛ばしていたのは、あのカマイタチっぽい匣兵器2匹だろう。きつと、あの斬撃は見えないわけじゃなくて、僕の視覚が毒で狂わされていて、本当なら見えるはずの斬撃を見えないものと思ひ込まされていたんだ。それと、ロールの球針態の中に隠れたはずなのに斬撃を喰らったのは、僕が球針態の中に入ったと勘違いしていて、実際は球針態の中に逃げ込んでいなかったからだ。そして今、僕を蝕み認識を狂わせていた毒が解除されたのは、雲カバの破壊活動により格納庫と他の部屋とが繋がった影響で、格納庫内の毒ガスの濃度が弱まったからだ。

(レシアの匣兵器を炙り出すつもりで雲カバを暴れさせたことが、レシアの戦い方の種明かしになるとは意外だったけど、わかってしまえばもう、レシアは脅威じゃない)

「ヴアアアアアアッ！」

「ねえ、どこに行くつもりだい？」

大暴れ中の雲カバが格納庫の隅の雲ラフレシアを意図せずブチャリと踏み潰す中。さりげなく雲カバが壊した壁の向こうへと去ろうとしていたレシアを僕はギンと睨みつけ、ドスの利いた声を放つ。レシアは「ぴい!？」との情けない悲鳴とともに肩をビクリと震わせる。きつと今頃、まるでこの世の終わりで目も当たりにしたかのような絶望に満ち満ちた表情を、ガスマスクの内側で浮かべているのだろう。

「こ、こ、こ来ないでえ！ APRESSADO (急いで)！」

レシアの叫びに呼応して2匹の雲カマイタチが僕に立ち塞がり、尻尾に雲の炎を溜め込んだ後に斬撃として飛ばす。今や僕を蝕み、認識を狂わせる毒ガスがないため、紫色&三日月の形状をした雲カマイタチの斬撃が僕へと迫ってくる。僕は雲の炎を纏ったトンファーで斬撃を殴りつけ、雲カマイタチ2匹に向けて斬撃を弾き飛ばす。すると、まさか己の飛ばした斬撃に逆襲されるだなんて欠片も考えていなかった雲カマイタチ2匹は斬撃をまともに喰らい、力なく床に倒れ伏

した。

「そんな!? タッチちゃんとチッチちゃんが一瞬で!」

「逃がさないよ?」

「ひに、ヤッ!」

雲カマイタチに逃げる時間を稼いでもらうつもりだったらしいレシアは、僕に雲カマイタチを瞬殺された光景が視界に入ってしまったがために、ついその場に立ち止まる。その隙にレシアの元へと一息に距離を詰めた僕はレシアの顔面をトンファーで殴った。結果、レシアのガスマスクが粉々に砕け、鼻血を流すレシアの素顔が露わになる。

「うあああああああ!」

レシアは涙目で、破れかぶれの状態で、装備している日本刀で僕に反撃の横薙ぎを振るうも、僕は軽くジャンプしてレシアの日本刀を回避しつつ、レシアの手に蹴りを放った。その衝撃で、レシアの手から日本刀が離れ、あらぬ方向へとふっ飛んでいく。

「ああ!」

「さて。さっきの君の質問に真面目に答えようか」

「へ?」

「僕は偽物だよ。雲雀恭弥じゃない、これは事実だ。……でも、いつか。いつか、僕は本物になる。雲雀さんに誇れる人間になってみせる。だから、レシア・アルノル。——君には、僕の踏み台になってもらう」

「いいいいいいやあああああああッ!」

匣兵器と武器を失い万事休すなレシアの前に着地した僕は、先ほどのレシアの『あんたって本当に、雲雀恭弥なの? 嘘ついてない?』との問いに改めて返答する。その上で、僕はレシアの腹部にトンファーの強烈な殴打を叩き込んだ。僕の攻撃で遙か後方へと吹っ飛ばされたレシアの体は勢いよく格納庫の床を転がり、そして、雲カバがぶち抜いていた床の穴の中へと落ちていった。

かくして。生と死の狭間での本物の雲雀さんとの邂逅を通して。覚悟を決めて新生した僕の初陣は、勝利で飾られるのだった。



## 風紀44・↑気力を振り絞って風紀を守ろう↑

ミルファイオーレの日本支部ことメローネ基地。その格納庫にて。

第9ジラソーレ隊のCランク戦士のレシア・アルノルに強烈なトンファアの一撃を喰らわせた僕は、レシアが為すすべもなく落ちていった穴をじつと見つめる。僕が生み出した膨大な雲の炎により暴走した雲カバが生み出した穴に視線を注ぐ。

(レシアにトドメを刺しに行くべきだろうか……?)

ただいま僕は頭を悩ませていた。先のレシアに喰らわせたトンファアの殴打は確かな手応えがあった。あれを喰らったレシアが未だピンピンしている、なんてことはないだろう。だけど、仮にもミルファイオーレのCランク戦士だ。今のでレシアが死んだと判断するのはあまりに都合のよい考えだ。だったら、レシアがまた僕に何かを仕掛けてくる前に、確実に彼女にトドメを刺すべく、僕もレシアの落ちた穴の中に向かうべきではないだろうか。

「……」

(やめよっか)

僕はしばし黙考した結果、レシアを追わないとの方針を定めた。レシアがまだ生きているのなら、深追いこそ避けるべきだからだ。それに、雲雀さんなら。僕の憧れる雲雀さんなら。敵を結果的に殺すことはあるかもしれないが、戦闘不能になった敵にわざわざトドメを刺すに向かったりはしないだろう。だって。雲雀さんにとっての敵は、肉食動物に狩られるだけの、ただの草食動物でしかないのだから。草食動物からの反撃が怖いからと草食動物の息の根を確実に止めようとするなんて、カツコ悪い真似なんて、雲雀さんはしない。まあ、レシアがブラックスペルな以上、もしかしたらレシアが後々ユニちゃんの方に力になってくれるかもという理由もあるしね。レシアは殺さなくていいだろう。

「ヴオオオオ……」

「お疲れ、メルカバ」

僕の与えた雲の炎が尽きかけようとしているのか、体長20メートルクラスの暴走モードから体長4メートルクラスの通常モードへと戻った雲カバを匣の中に戻すと、格納庫の入口付近に寝かせていた山本くんとラル・ミルチさんを担ぎ直して、入江くんの研究室へと向かう。といっても、入江くんの研究室がどこかだなんてわかるわけがない。己の勘だけが頼りだ。

「……はあ、ふう……」

（あー。これ、きつついなあ……この感じ、デスヒーターの猛毒に抗って歩き回った時のことを思い出すなあ……）

レシアとの戦いを経て、僕はもう随分と血を失っている。レシアとの戦闘中は最高にハイな気分になっていたせいか、普通に動けたけど。今はただ歩くだけでかなりきつい。少しでも気を抜くとその場に倒れて気絶してしまいそうだ。

でも、ダメだ。ここで倒れることは許されない。この状況で、どこにあるかわからない入江くんの研究室を目指すなんて無茶だけど。でも、この無茶は何が何でも通さないと、じやないと白蘭がメローネ基地に仕込んだ、超炎リング転送装置が発動してしまう。ツナくんたちごとメローネ基地を並盛町から遠く離れた彼方へと飛ばされてしまえば、今後控える白蘭と真6弔花との戦いの準備もおぼつかない。だからこそ、僕は一刻も早く入江くんの研究室に辿り着かなければならない。僕と山本くんのボンゴレリングを、入江くんの研究室まで運ばなければならない。

「ヒバリ、ヒバリ」

と、ここで。血まみれでポロポロな学ランのポケットからひよこつと顔を出したヒバードがパタパタと可愛らしく飛翔し、僕の頭にフアサつと着地する。

え、あ。そういえば全然意識してなかったけど、ヒバードも僕と一緒に歩いてきてたんだね。てつきり、10年バズーカを喰らった時に、10年前の世界に置いてきぢやったものと思ひ込んでいたよ。しっかし、ずっと僕の学ランのポケットに隠れていたのかな？ ミルファイオーレのボンゴレ強襲部隊戦、幻騎士戦、レシア戦と、今まで立て続けに激しい戦闘があったのに、よく怪我せずに済んだものだね。きつとこのヒバードはラック値を厳選された、運極振りのステータスに違いない。

「~~~~~♪」

ヒバードは並盛中の校歌を歌いながら、僕の頭から飛び立ち、僕の前方を飛んでいく。どうやらヒバードは僕を入江くんの研究室まで案内してくれるらしい。いや、ヒバードにそんな意思があるかはわからないし、仮にヒバードが僕を道案内する気だったとしても、そもそもこのヒバードは僕と一緒に10年前からタイムスリップしたヒバードである以上、ヒバードは入江くんの研究室を知らない。ヒバードの後についていったとしても、それで入江くんの研究室までの最短ルートを進めるだなんて考えるのは、あまりに楽観的だ。

「よろしく頼むよ、ヒバード」

だが、もうここは。ヒバードを信じて進むしかないだろう。もう、頭で色々考えている余裕すら僕にはない。ヒバードを信じよう。ラック値極振りのヒバードなら、僕が力尽きる前に、僕を入江くんの研究室まで導いてくれるはず。

「ぜえ、ひゅー……」

ヒバードが美声を振るわせて並盛中の校歌を呑気に歌っている中、僕は脂汗を流しながら、肩で荒い呼吸を繰り返しながら、それでも一歩。一歩。着実に歩を進める。意識が段々と朦朧とし、視界が大幅に狭まり、いよいよ自分がどこをどう歩いているかも定かではなくなるも。それでも僕は視線をヒバードに固定したまま決して、前に踏み出

す足を止めることはなかった。

◆◆

この日。ボンゴレは全世界のミルフィオーレに総攻撃を仕掛ける大作戦に打って出た。その作戦に合わせるように、沢田綱吉は心強い仲間とともにメローネ基地に乗り込んだ。全ては、物騒で残酷で絶望的な未来から、平和な10年前の過去へと、皆と一緒に帰るため。

そのために、ツナはここまで数多くの敵と戦った。デンドロ・キラム、スパナが操作するストウラオ・モスカ&キング・モスカ、アイリス・ヘプバーンと死荖隊、ジンジャー・ブレット、幻騎士。デンドロを除き強敵揃いの面子に対して、幾多もの傷を負いながらも、死力を尽くして戦い抜いたツナは、ついに目的地として定めていた白くて丸い装置へと到着した。

その白くて丸い装置の鎮座する研究室にて、ツナは入江正一と対面した。そこで知らされた事実は、敵だと思っていた入江はむしろ味方だということ。入江の目的は、ツナたちのメローネ基地突入を利用してツナたちを鍛えることで、白蘭を倒せるレベルにまで強くなってもらうことだということ。この作戦は、入江と10年後の雲雀と、10年後の自分だけの秘密だったこと。などなど。

入江の話を受けて、ツナはまるで、フルマラソンのゴール目前でゴール地点をズラされてしまったかのような心境に陥った。ゆえに、ツナは次々と押し寄せてきた衝撃の事実のラッシュを受け止めきるのに、時間を要した。幸い、入江の研究室にて再会した仲間たち（獄寺、10年後の笹川了平、クローム、ランボ、イーピン、10年後の草壁）の内、酷く傷つき気絶していた了平を担架に乗せて応急手当に取り組むことで、ツナは現状をどうにか飲み下すことができた。そして。イタリアを舞台とした、ボンゴレ（ヴァリアー）とミルフィオーレとの激戦を、ボンゴレ側が征したとの知らせを受けて、ツナがホッと安堵した、その時。

「——いいや、ただの小休止だよ。イタリアの主力戦も、日本のメロー

ネ基地も。すんごい楽しかった」

ミルファイオーレ構成員の誰もが携帯する端末から自身の立体映像ホログラムを投影させる形で、白蘭がツナたちに接触を図ったことで、事態は急変した。白蘭は得意げな口調で、『チョイス』を用いてボンゴレとミルファイオーレとの正式な力比べを行う旨を宣言した。その際、白蘭は入江に隠してちやつかり組織していた、6弔花とは次元の違う強さを備える真6弔花を軽く紹介した後、力比べの詳細は10日後に発表するとして話を打ち切り、超炎リング転送装置を発動させてメローネ基地を丸ごとどこかへと移動させようとする。

「い、一体なにが!？」

「テレポーテーションだ! この基地はどこかへ飛ばされる!」

「そんな、どうすればいいの!？」

「大丈夫だ、何かに掴ま——あッ」

「入江さん?」

「……まずい、やらかした。あ、あああああああ! ヤバい、最悪だ、僕はなんて致命的なミスを犯してしまったんだ! これじゃあ10年後の綱吉さんと雲雀さんに顔向けできない! あ、うう。お腹痛い……」

「入江さん!？」

白蘭の立体映像を起点として白く激しいドーム状の光が展開される中。どのようにして対処すれば良いのかをツナが入江に尋ねるも、当の入江はハッと何かに思い至るとともに髪をグシヤグシヤにかき乱して目に見えて狼狽し始める。さらには入江は腹痛を訴えその場に膝をつく。とても頼れる状況ではなかった。どうすれば、どうすればいい。ツナは判断に迷い、直後。暴力的な白光の奔流がツナたちを飲み込み、研究室に激しい揺れと衝撃が襲いかかる。ツナは抵抗できずに「うわあッ!？」との悲鳴を引き連れてその場に倒れ、意識を失った。

「大丈夫ですか、10代目!？」

「う、うん。俺は平気。みんなは大丈夫、そうだね。よかった……つて、えええええ!!」 基地が、メローネ基地が消えた!」

どのくらい、倒れていたのだろうか。ツナは獄寺の声で意識を取り戻し、ゆっくりと立ち上がる。周囲を見渡し、他の仲間が今の超炎リング転送装置によって怪我をしていないことに安堵の息を吐く。と、その時。ツナは、白くて丸い装置付近を除いたメローネ基地が丸ごと消失し、眼前に広大な空洞と化した光景が広がっていることに気づき、驚愕する。メローネ基地が超炎リング転送装置で本当にテレポトさせられたという事実にとただただ愕然とする。

「でもなんで、俺たちだけ残れたんだろう……」

「……そうか。良かった、間に合ったんだね。えっと、我々が移動しなかったのはこの場にボンゴレリングが全て揃ったからだ。7つのボンゴレリングが作り出した結界が超炎リング転送装置から、我々と装置を守ってくれたんだ」

「え、7つのボンゴレリング?」

「極限にここはどこだあああああああ!!」

「10年前のお兄さん!!」

入江の発言にツナは困惑する。今、ここにあるボンゴレリングは、大空・嵐・雷・霧のみだからだ。そんなツナの困惑を吹き飛ばすようにして、担架から了平が飛び起きた。どうやらこのタイミングで10年前の入江が了平に10年バズーカを命中させていたようだ。

「ここに来たのは了平だけじゃねーぞ、ツナ」

「へ?」

と、ここで。立体映像状態のリボーンから意味深な言葉を投げかけられたツナは、リボーンの見つめる方向へと視線を移す。その先には、ボサボサの黒髪、肩に羽織った学ラン、『風紀』と書かれた左腕の腕章が特徴的な、10年前の雲雀恭弥がたたずんでいた。研究室の出入り口付近の壁に背中を預けて腕を組む雲雀の足元には、山本とラル・ミルチが横たわっている。

「10年前の雲雀さん！ それに、山本！ ラル・ミルチも！ 良かった。みんな、生きて——ツ!」

ツナは歓喜の感情の赴くままに雲雀たちの元に駆け寄ろうとして、気づいた。雲雀の服が、学ランが血に染まっていることに。雲雀が明らかに深手を負っていることに。

「……これで、10年後の僕への義理は果たした」

それなのに。当の雲雀はクルリとツナたちに背を向けて、ふらついた足取りで研究室を去ろうとする。

「ひ、雲雀さん!?! 待ってください！ そんな酷い怪我でどこへ行くつもりですか!?!」

「ここは、騒々しいからね。僕は、群れるのは嫌い、なんだ」

「そんなこと言っている場合じゃあ——」

「恭さんッ!」

「草壁、哲矢か……」

ツナは慌てて雲雀へと駆け寄り、呼び止める。それでも雲雀さんは立ち止まってくれない。今すぐここで応急手当をしないと命が危ういかもしれない。ツナは雲雀の手を掴んでも雲雀の歩みを止めようとして。そんなツナの行動よりも先に、草壁が雲雀の手を掴んだ。対する雲雀は力なく振り返り、草壁の顔を見上げたのを最後に、そこで限界だったのか、意識を闇へと閉ざした。あたかも糸の切れた人形のように、ガクリと膝をつく雲雀を、草壁は速やかに背負うと、入江に問いかける。

「入江正一！ 我々はここから離れるが、問題ないな!?!」

「あ、うん。大丈夫だよ。白蘭サンも、今はさすがに、あれだけ啖呵を切った後に僕たちを不意打ちで襲うような真似はしないだろうしね。それに、さっきの超炎リング転送装置のせいで僕の研究室以外は根こそぎ持っていかれたからね。ここじゃあもう満足な治療はできない。

だから、雲雀さんのことはお願いするよ」

「ああ！ では、我々はこれで失礼する！」

「え、ちよつ、待つてくだささい草壁さん!？」

「ツナ、行かせてやれ」

「リボーン！ なんてだよ!? 雲雀さん、あんなに酷い怪我してるんだぞ！ 絶対ここで治療した方がいいって！」

「落ち着け、ツナ。ヴァリアーとの大空戦の時、10年バズーカを使つて10年後に行つた雲雀は、たった5分でデスヒーターの解毒や怪我の治療を終えた状態で帰つてきた。……草壁には雲雀の怪我を治す心当たりがあるんだろう。雲雀のことは草壁に任せておけ」

「ツ。雲雀さん……」

入江の回答を聞くや否や研究室から走り去る草壁をツナは追いかけようとして、リボーンに言葉で制される。去りゆく草壁さんをリボーンが容認したことに納得のいかないツナはリボーンに食つてかかるも、リボーンの主張を受けて、反論を失い言葉を継げなくなったツナは、目を伏せて不安げに雲雀の名をポツリと呟いた。

◇◇◇

それから。ツナは入江からボンゴレ匣を渡された後、一旦研究室を後にすることとなった。そして、快晴の並盛町の空の下。ボンゴレアジト待機組だった京子やハルたちと再会する。

(雲雀さん。大丈夫かな……?)

そんな中でも。脳裏では雲雀の安否が気になって仕方ないツナは、純粹に再会を喜べないのだった。



## 風紀45・†風紀財団のアジトで風紀を守ろう†

「……ん」

気が付いた時、僕の視界にまず最初に入ったのは、見知らぬ天井だった。

僕はゆっくりと起き上がり、今まで体を預けていたベッドから立ち上がる。

その後、身にまとう病衣を見て。病衣の隙間から覗き見た、胸元に残る傷跡を見て。僕の眠っていたベッドを中心に、周囲に置かれた様々な医療器具を見て。状況を察した。

（ああ。これ、僕がメローネ基地で意識を失ってから3日くらい経ってる奴だ）

あの時、僕は入江くんの研究室まで戦闘不能状態の山本くんトラル・ミルチさんを運び切った後に力尽き、草壁さんの前で倒れた。白蘭が発動させた超炎リング転送装置によってメローネ基地のほぼ全域が消失した、あの状況だ。草壁さんはきつと慌てながらも、僕の治療に最善な環境まで僕を運び込み、僕を治療してくれたのだろう。とすると、ここは多分、並盛の風紀財団アジトだろうか。次点でボンゴレアジトもあり得るかな。

「……」

しっかし。なんだか僕っていつも医療施設のお世話になっているような気がする。

骸くんと戦った後も並盛中央病院で治療してもらったし、ヴァリアーとの大空戦の時も途中で力尽きて気がつけば中山外科医院の病室のベッドの上だったし、今回もアジトの病室送りである。僕の憧れはあくまで雲雀さんであって、上条さんではないんだけどな。これからは病院送りにならない程度の怪我にとどめる努力も必要だね。

さて。体は少しだるいけど、怪我はもう完治しているし、動く分に

は問題ない。

だから。まずはお礼を言いに行こうか。僕を治療してくれたであろう、あの子に。

「へッ!？」

と、ここで。外に出ようとしていた僕の視線の先の扉が開かれ、その先にいたスーツ姿の男性が僕の姿に驚きの声をもらす。この人物のことを僕は知っていた。僕が雲雀さんに憑依してから出会ったがために憑依前の雲雀さんの恐ろしさを知らず、それゆえに純粹に僕を慕って風紀委員活動を実践してくれていた、秋田勝くんである。

僕は前にもこの10年後の秋田くんに助けられていた。大空戦の時、デスヒーターを解除できないまま戦うことを強いられた僕が、デスヒーターやレヴィアさんの電撃による怪我を治す手段を求めて10年バズーカを使った際、10年後の世界で、秋田くんが匣兵器を用いて僕を迅速に治療してくれたあの日の出来事は、未だ記憶に新しい。

「雲雀先輩！ よかった、目が覚めたんですね！」

「おかげさまでね。僕を治療したのは君だね？ 助かったよ」

「そ、そそそそそんな滅相もない！ 俺はただ風紀財団の一員として、当たり前前のごときをただけですから！ お、俺、草壁先輩を呼んでできますねッ！」

「あ」

僕が感謝の念を込めてニコリと微笑むと、対する秋田くんはドギマギとした様子で返事をする。その後、秋田くんは草壁さんと呼ぶことを理由に、逃げるようにして僕の前から去っていった。

んー。男装していない今の僕に対する秋田くんの態度からして、秋田くんは既に僕の性別のことを知っているようだったし、せっかくだから雲雀恭華として、お茶でも飲みながら秋田くんとゆっくり話してみたいと思っていたのだが、残念ながらお預けとなったようだ。

「恭さん！ お目覚めになられたのですね！」

「君や秋田くんのおかげだね。それで、今の状況を教えてくれるかな？」

「はッ！」

秋田くんが去ってから数分後。僕の方に速やかに駆け寄ってきた草壁さんから僕は情報を得るべく質問する。草壁さんは息を整えた後、僕に現状をわかりやすく伝え始める。

ここは10年後の僕が設立した風紀財団のアジトであること。僕がああの時気を失ってから丸3日経過していること。白蘭率いるミルフィオーレファミリーとツナくん率いるボンゴレファミリーとの力比べとして開催される『チョイス』まで残り7日の猶予があること。などなど。

「報告は以上です」

「なるほどね」

「それで、恭さん……申し訳ありませんでした！」

「？」

僕に伝えることを一通り伝え終えた草壁さんが唐突に土下座の体勢をとり、渾身の謝罪の言葉を放つ。何事かと思ひ、ひとまず草壁さんの言葉を待つ僕を前に、草壁さんは床に頭を叩きつける勢いで謝罪を続ける。

「我々風紀財団一同、最善を尽くしました。しかしそれでも、恭さんのお体に傷跡が残ってしまう結果になってしまいました！ 誠に申し訳ありませんッ！」

「ああ、何だ。そのことか。別に、気にしなくていいよ。マフィアの世界に足を踏み入れた以上、この程度は覚悟の上さ。むしろあれだけ深手だったのに、後遺症もなしに僕を治せたことをもって誇っていいんじゃないかな。だからほら、立った立った」

「恭、さん……」

結果、草壁さんの謝罪内容を聞き、何か原作では描写されていない

類いの深刻な事態が起こったのではないかと警戒していただけに肩透かしを食らった僕は、ホツとため息を吐きつつ、気に病むことはない旨を口にした。そして中々土下座状態を解除しない草壁に立つことを促した。

（実際、あの胸の傷跡があるおかげで——僕はいつでも、僕が雲雀恭華として生きることが雲雀さんに承認されたあの出来事を思い出せるからね）

「ところで、さつき話していたチヨイスってなにかな？」

「それは……」

「正」と白蘭が学生時代に遊んでいた自作ゲームだって話だ。2つの陣営に分かれた後、戦場、戦闘員、基地、戦後の報酬。あらゆる要素を選択して戦う戦争ゲーム……白蘭はこのチヨイスを、現実世界で再現する気みてえだな」

とはいえ。いくら僕が気にするなどと言っても、草壁さんの性格からして、きつと僕の傷跡のことを気にせずにはいられないだろう。そのことを踏まえ、僕は話題逸らしのためにチヨイスについて草壁さんに尋ねる。未だチヨイスの詳細を把握していないらしい草壁さんが答えに窮した時、不意に僕の足元から第三者の声割って入ってきた。視線を下に向けると、そこにはいつの間にかスーツ姿のリボーンが姿を現していた。相変わらずの気配の読めなさである。

「リ、リボーンさん!？」

「ちやおツス。元気そうだな、恭華」

「ま、僕の部下が優秀だったからね。それで、わざわざ風紀財団のアジトまで来て、一体何の用かな？」

「お前にこれを渡しにきたんだ」

草壁さんが神出鬼没なりボーンに驚愕する中。いつもの挨拶を繰り出すリボーンに僕が用件を尋ねると、リボーンが僕に何かを放り投げってくる。空中でキャッチしたそれを見た所、紫色をベースにボンゴレの紋章が刻まれた、ボンゴレ匣だった。

「これは、匣？」

「この時代のツナが用意したボンゴレ匣だ。あの時、メローネ基地でお前が正一からもらうはずだった物を、オレが持ってきたんだ。白蘭との戦いまでにそいつをものにしておけ」

「へえ、ボンゴレ匣ね。……どんな匣兵器なのか、楽しみだね」

き、きききキター♪——○(≡▽≡)○——♪

よ、待ってました！ 雲雀さんのボンゴレ匣う！

これで晴れて、ボンゴレ匣のロールを形態変化で手錠カンビオ・フォルマに変化させてからの『校舎を壊した罪で、君を逮捕する』という、メチャクチャカッコいいあの雲雀さんの名言が解禁されるんだね！ ふいい、すつごくワクワクしてきた！ 噛まずにちゃんと見えるように今の内から練習しとかないと！ いやあ、修行が捗るなあ！、(。▽。 )ノ……まあ尤も、原作通りに真6弔花のデイジーが並盛中の校舎を壊してくるとは限らないのだけでも。

「ところで、恭華。お前は一体、誰と戦ったんだ？」

「ん？」

リボンからボンゴレ匣を受け取った僕が内心で浮かれに浮かれていると、リボンがジツと僕を見上げて問いかけてくる。どうやらリボンにとっては、僕にボンゴレ匣を渡すことはあくまでもものついででしかなく、これからが本題だったようだ。

「ツナが幻騎士と戦った時に、幻騎士が言っていたぞ。ツナを殺した後に、今度こそお前を殺してみせる。あの時お前にハメられた借りを何百倍にして返してやるって。……お前は大した怪我を負うことなく幻騎士を撃退できたはずだ。そのお前が一体誰と戦ったら、あんな深手を負うことになるんだ？」

「あれ、入江くんには聞かなかったんだ？」

「今、正一はチョイスの準備で手一杯だからな。で、どうしてお前はあそこまで深手を負ったんだ？ メローネ基地には幻騎士以外にもま

だ、強敵がいたのか？」

「恭さん。その件、是非私にもお聞かせください」

「どうやらリボーンは僕とレシア・アルノルの戦いのことを聞き出したらしい。僕としてはミルフィオーレのCランク兵士にうっかり殺されかけた失態は秘密にしたい所なのだが、話題を逸らそうとしてモリボーンが即座に軌道修正してくるため、逃げられそうにない。加えて、草壁さんもリボーンに乗っかってきた以上、ここは諦めて白状するしかなさそうだ。」

「ん、と。別に、幻騎士クラスの強敵と戦ったわけじゃないよ。レシア・アルノルという、ミルフィオーレのCランク兵士の仕掛けた罠に見事なまでに引つかかったままでさ。……入江くんは僕の弱点を的確に突く罠を用意できるレシア・アルノルに、僕の情報を教えた上で僕と戦わせたのさ。僕を成長させるためにね」

「恭さんの弱点、ですか？」

「何なのか気になるな」

「それは内緒。で、レシアと対峙した当時の僕は、10年バズーカでこの時代に来てから早速、ミルフィオーレのボンゴレ強襲部隊との戦いを征し、幻騎士を撃退した直後だった。だから、レシアが自分をCランク兵士だと明かした時、僕は油断したのさ。レシア相手に僕が負けることなんて万に一つもあり得ないってね。その結果がレシアの罠に思いつきりかかって危うく死にかけて無様な僕、というわけさ」

「僕は己の幻覚無効化能力こと<sup>イマジンプレイカー</sup>幻想殺し<sup>†</sup>やレシアの詳しい戦い方についての言及を避けつつ、レシア相手に深手を負った理由を語る。ここで、僕はふと目を瞑る。脳裏に想起されるは、僕の背中を押してくれた、本物の雲雀さんのかっこいい姿。」

「……でも、あの戦いは僕にとって良いきっかけになったよ。おかげで僕は初心を思い出すことができたし、覚悟を決めることもできた。もう、あんな無様は晒さないから安心していいよ。草壁さん、リボーン」

「恭さん……」

「……ふッ。地に足のついた、良い女になったじゃねーか。恭華」

僕は目を開き、これからの戦いではロシア戦のような失態を犯さないことを宣言する。すると、草壁さんは僕のまとう雰囲気ガラリと変化したことに思わず息を呑み、リボーンは帽子を目深に被り直して口角を吊り上げながら、僕に高評価を与えてきた。

「そう言ってくれると嬉しいよ。ありがとう、リボーン。……さて、僕からの話は以上だけど、こんな感じの答えで満足できたかな？」

「ああ。用は済んだし、オレはボンゴレアジトに戻るぞ。恭華も後で、ツナたちに顔を見せに来い。特にツナはお前のことを心配していたからな」

（おっと、ツナくんたちにも余計な心配をさせちゃってたんだね。なら早く安心させた方がいいか。……ただ、群れるのを嫌う雲雀恭弥がツナくんに積極的に会いに行くのは違和感凄いから、ここは特に変装しないで会おうとしよっかな）

「オツケー。わかったよ」

「それに今、おもしれーことになってるからな。ツナたちに会うなら早めがオススメだぞ」

「え、面白いこと？」

「じゃあな」

「!?」

リボーンは僕にボンゴレアジトに来るよう指示した後、最後に意味深い言葉を残してテクテクと歩き去っていく。結果、この場に残された僕と草壁さんはそろって首を傾げるのだった。